

根室市

ほにおい
穂香 竪穴群(2)

— 一般国道44号根室道路建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

根室市

ほにおい
穂香竪穴群(2)

—一般国道44号根室道路建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1 遺跡遠景（東から空撮）平成14年9月5日撮影 撮影者(財)北海道埋蔵文化財センター



2 遺跡の全景（空撮 上が北）

カラー図版 2



1 地表面確認状況（南から）



2 擦文住居調査状況（手前H-26 奥H-25・西から）



1 JH-1 調査状況（東から）



2 JH-1 炭化材検出状況（北から）



1 JH-2 炭化材検出状況（北西から）



2 JH-4 完掘状況（西から）



1 JH-5 完掘 (北から)



2 JP-17ベンガラ検出状況 (北東から)



1 JM-1 南側検出状況 (東から)



2 JM-1 土層 (北西から)



3 JM-4 土層 (西から)



1 JM-2 土層 (南西から)



2 JM-5 炭化材検出状況 (北から)



1 擦文土器集合



2 北筒式土器集合

第 I 章 調査の概要

1 調査要項

事業名：一般国道44号根室市根室道路工事に伴う穂香竪穴群遺跡発掘調査
 委託者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部
 受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター
 遺跡名：穂香竪穴群（N-01-34）
 所在地：根室市穂香175番地ほか
 調査面積：7,150㎡
 調査期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日（現地調査5月7日～10月28日）

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター 理事長 大沢 満（6月30日まで）
 森重権一（7月1日から）
 専務理事 宮崎 勝 常務理事 畑 宏明（6月1日から）
 総務部長 下村一久 第1調査部長 畑 宏明（兼務）
 第1調査部第3調査課長 長沼 孝
 同 主査 越田雅司（発掘担当者）
 同 主任 愛場和人（発掘担当者）
 同 文化財保護主事 広田良成（発掘担当者）

3 調査に至る経過

一般国道44号根室道路は、釧路市を起点とし、根室市に至る延長124kmの一般国道44号のバイパスとして、根室市温根沼より穂香に至る延長約7kmの区間に計画された自動車専用道路である。工事計画の具体化に伴い平成10年10月19日付けで埋蔵文化財保護のための事前協議書が北海道開発局釧路開発建設部より北海道教育委員会（以下道教委）あてに提出された。

平成12年9月に道教委は根室市教育委員会の協力を得て、所在確認調査を実施した。遺跡の一部は平成5年に個人住宅建設に伴い根室市教育委員会によって発掘調査が行われ、5軒の竪穴住居跡が発見された。さらに周辺の測量調査によって、竪穴住居跡と考えられる62カ所の凹みが確認された。道教委はそのような状況と現地調査によって計画路線内に約30カ所の凹みが含まれることを確認し、路線変更が困難な場合は発掘調査が必要な旨を、平成12年11月に釧路開発建設部あてに回答した。その後関係者による協議が行われ、最終的に平成13年度から財団法人北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

平成13年6・10月には凹みのみられない沢の奥部分の試掘調査が実施され、路線内の遺跡範囲がほぼ確定し（約18,250㎡）、平成13年度は東側8,000㎡、本年度は平成13年度調査区西側の7,150㎡について調査を行った。残る3,100㎡は平成15年度に調査する予定である。（越田・長沼）

例言

1. 本書は平成14年度に一般国道44号根室市根室道路工事用地において、財団法人北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した根室市穂香壑穴群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 報告書の編集は、第1調査部第3調査課が行なった。
3. 遺構の原稿は、調査を担当した調査員がそれぞれ執筆し、各遺構の文末に文責者名を記している。その他の各章・節の原稿についても、文末に文責者名を記している。
4. 遺構図は、調査を担当した調査員がそれぞれ整理し第2原因を作成した。トレースは藤野戸美身が行い、愛場和人が取りまとめた。
5. 遺物等の現場での一次整理および取り上げデータの管理は越田雅司が行なった。
6. 発掘調査での写真撮影は調査員が行い、遺物の写真撮影・焼付けなどは越田および第1調査部第2調査課の菊地慈人、第1調査部第4調査課の笠原 興、第2調査部第3調査課の村田 大が行なった。
7. 土器の接合、復元、拓本、断面実測には山本敬子・平沼房恵が従事し、広田良成が統括した。
8. 石器の計測には山崎佳子が従事し、愛場が統括した。
9. 土器・石器の実測・トレースは木下はるみが行い、愛場と広田がとりまとめた。また、一部石器の実測・トレースを㈱シン技術コンサルに依頼した。
10. 金属製品の保存処理は、第1調査部第1調査課田口尚が行った。
11. フローテーション資料については、調査現場での水洗作業を黒瀬朋子が行い、選別作業は加藤量子が行い、広田が統括した。
12. V章の各種分析、同定はつぎの方々と機関に依頼した。
放射性年代測定(㈱地球科学研究所)、炭化材樹種同定(北海道浅井学園大学 三野紀雄)、黒曜石製石器の原材産地分析(京都大学原子炉実験所 藁科哲男)、炭化植物種子同定(札幌国際大学 吉崎昌一・椿坂恭代)、赤色細粒のX線回折分析(㈱パリーノ・サーヴェイ)
13. 遺跡検出の火山灰の同定と石器石材の肉眼鑑定は、第1調査部第1調査課花岡正光が行った。
14. 出土資料は、根室市教育委員会で保存・活用される。
15. 調査にあたっては、下記の機関または人々の指導ならびに協力を得た(順不同、敬称略)。
根室市教育委員会 川上 淳・小藪昌典、釧路市埋蔵文化財調査センター 西 幸隆・松田 猛・石川 朗、ところ埋蔵文化財センター 武田 修、斜里町立知床博物館 松田 功、東京大学 宇田川 洋、熊木俊朗、羅臼町教育委員会 涌坂 周一、標津町教育委員会 楢田光明、厚岸町教育委員会 熊崎農夫博、標茶町郷土館 坪岡 始、苫小牧市勇払資料館長 佐藤一夫、北海道浅井学園大学 三野紀雄、札幌国際大学 吉崎昌一・椿坂恭代、苫小牧市埋蔵文化財調査センター 赤石慎三、北構保男、野村口崇、竹田輝雄、水野正好

凡 例

1. 遺構は、以下の記号でもってあらわし、原則として調査順に番号を付けた。擦文時代の住居跡・焼土・集石、縄文時代の土坑の番号については、当センターが平成13年度に付けた番号に連続している。

擦文時代 H：竪穴住居 P：土坑 F：焼土 S：集石

縄文時代 JH：竪穴住居 JP：土坑 JM：盛土 JF：焼土

2. 挿図中では以下の網点を用いた。例外については凡例を付して示した。

：カマドなどの粘土（黄褐色粘土） ：カマドなどの粘土（灰白色粘土）

：擦文時代住居跡の掘揚げ土・縄文時代盛土 ：炭化物・炭化材

：焼土 ：ベンガラ範囲

3. 遺物分布図では以下の記号を用いた。

●：土器、▽：剥片石器、▲：礫石器、◆：フレイク、◇：有孔礫、★：鉄製品

4. 遺構の規模は「確認面での長軸長×短軸長/床（底）面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深（単位はm）」の順で記した。一部破壊されているものは現在長を()で示し、不明のものは一で示した。

5. 実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。

遺構	1：40	復元土器	1：3
土器拓本	1：2	剥片石器	1：2
石斧	1：2	礫石器	1：3
鉄製品	1：2		

6. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の層位についてはアラビア数字で示した。

7. 土層の色調は『新版標準土色帖19版』（小山・竹原1997）に従った。

8. 火山灰の略号は、『北海道の火山灰』（北海道火山灰命名委員会1982）による。

9. 土器、石器、鉄製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大厚を採用した。

目 次

例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
カラー図版目次	
図版目次	
カラー図版	

I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	
(1) 発掘区の設定	4
(2) 地形・地質の概要	4
(3) 基本土層	5
(4) 調査の方法	10
(5) 整理の方法	12
(6) 遺物の分類	12
(7) 調査結果の概要	13

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と周辺の遺跡	15
2 周辺の遺跡	19

III 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構	
(1) 竪穴住居	21
(2) 土坑	84
(3) 焼土	86
(4) 集石	89
2 縄文時代の遺物	
(1) 竪穴住居	91
(2) 土坑	134
(3) 盛土遺構	160
(4) 焼土	202

IV 包含層の遺物	
1 土器	203
2 石器等	207
V 自然科学的分析等	
1 放射性炭素年代測定結果 (隣地球科学研究所)	213
2 竪穴住居址・盛土出土の炭化木材樹種同定 (北海道浅井学園大学 三野紀雄)	218
3 穂香竪穴群出土の黒曜石製石器の原材料分析 (京都大学原子炉実験所 藁科哲男)	233
4 北海道根室市穂香竪穴群から出土した炭化植物種子 (札幌国際大学 吉崎昌一・椿坂恭代)	245
5 穂香竪穴群から出土した赤色細粒の X 線回折分析 (隣バリノサーヴェイ)	251
IV 成果と課題	253
一覧表	257
引用・参考文献	269

写真図版(モノクロ)

報告書抄録

挿図目次

図 I-1	遺跡の位置……………2	図 III-24	H-25掘り揚げ土平面図……………52
図 I-2	道路工事予定範囲と調査区の設定……………3	図 III-25	H-25掘り揚げ土の土層……………53
図 I-3	発掘区の設定……………4	図 III-26	H-25平面図と土層……………54
図 I-4	表層地質と発掘基本土層図……………6	図 III-27	H-25カマド、HF、HP……………55
図 I-5	土層断面 (1)……………7	図 III-28	H-25遺物分布図……………56
図 I-6	土層断面 (2)……………8	図 III-29	H-25遺物 (1)……………57
図 I-7	土層断面 (3)……………9	図 III-30	H-25遺物 (2)、棒状礫グラフ……………58
図 I-8	調査の方法……………11	図 III-31	H-26掘り揚げ土平面図……………60
図 I-9	年度別調査範囲と平成13・14年度の遺物分布図・遺構位置図……………13	図 III-32	H-26平面図と土層……………61
図 II-1	周辺の遺跡 (1)……………16	図 III-33	H-26掘り揚げ土の土層、HF、HP……………62
図 II-2	周辺の遺跡 (2)……………18	図 III-34	H-26カマド、遺物分布図……………63
図 II-3	遺跡周辺の地形と整穴分布図……………20	図 III-35	H-27掘り揚げ土と土層……………65
図 III-1	捺文時代の遺構位置図……………22	図 III-36	H-27平面図と土層……………66
図 III-2	H-19掘り揚げ土と土層……………24	図 III-37	H-27カマド、HF、HP、遺物分布図、遺物……………67
図 III-3	H-19平面図と土層……………25	図 III-38	H-27棒状礫グラフ……………68
図 III-4	H-19カマド、HF、HP……………26	図 III-39	H-28平面図と土層、HF……………70
図 III-5	H-19遺物分布図、遺物、棒状礫グラフ……………27	図 III-40	H-28遺物分布図、棒状礫グラフ……………71
図 III-6	H-20平面図と土層、掘り揚げ土と土層、HF……………29	図 III-41	H-29平面図、カマド……………73
図 III-7	H-20遺物分布図……………30	図 III-42	H-29土層、HF、HP……………74
図 III-8	H-20遺物、棒状礫グラフ……………31	図 III-43	H-29遺物分布図……………75
図 III-9	H-21掘り揚げ土平面図……………33	図 III-44	H-29遺物、棒状礫グラフ……………76
図 III-10	H-21平面図と土層……………34	図 III-45	H-30平面図と土層、HF、HP……………78
図 III-11	H-21掘り揚げ土の土層、カマド……………35	図 III-46	H-30遺物分布図、遺物……………79
図 III-12	H-21遺物分布図……………36	図 III-47	H-30棒状礫グラフ……………80
図 III-13	H-21遺物、棒状礫グラフ……………37	図 III-48	H-31平面図と土層、HF……………82
図 III-14	H-22掘り揚げ土と土層……………39	図 III-49	H-31遺物分布図、遺物、棒状礫グラフ……………83
図 III-15	H-22平面図と土層、HF、HP……………40	図 III-50	P-1平面図と土層……………85
図 III-16	H-22遺物分布図、棒状礫グラフ……………41	図 III-51	F-5～8平面図と土層……………87
図 III-17	H-23掘り揚げ土と土層……………43	図 III-52	S-2平面図と棒状礫グラフ……………88
図 III-18	H-23平面図と土層、HF……………44	図 III-53	縄文時代の遺構位置図……………90
図 III-19	H-23HP、遺物分布図……………45	図 III-54	JH-1平面図……………92
図 III-20	H-23遺物、棒状礫グラフ……………46	図 III-55	JH-1土層、HP、炭化材出土状況図……………93
図 III-21	H-24掘り揚げ土と土層……………48	図 III-56	JH-1遺物分布図、遺物 (1)……………94
図 III-22	H-24平面図と土層、HF……………49	図 III-57	JH-1遺物 (2)、礫グラフ……………95
図 III-23	H-24カマド、遺物分布図、遺物、棒状礫グラフ……………50	図 III-58	JH-2平面図……………97
		図 III-59	JH-2土層、HF、HP……………98

図Ⅲ-60	JH-2炭化材出土状況図……………100	図Ⅲ-94	JP-15平面図と土層……………148
図Ⅲ-61	JH-2遺物分布図……………102	図Ⅲ-95	JP-15遺物、遺物分布図、JP-16 平面図と土層……………149
図Ⅲ-62	JH-2遺物(1)……………103	図Ⅲ-96	JP-17平面図と土層……………150
図Ⅲ-63	JH-2遺物(2)……………104	図Ⅲ-97	JP-17遺物分布図、遺物接合状況 図……………151
図Ⅲ-64	JH-2遺物(3)……………105	図Ⅲ-98	JP-17遺物……………152
図Ⅲ-65	JH-2遺物(4)……………106	図Ⅲ-99	JP-18平面図と土層、遺物……………154
図Ⅲ-66	JH-3平面図、HF……………108	図Ⅲ-100	JP-19平面図と土層、遺物分布 図、遺物……………156
図Ⅲ-67	JH-3土層、遺物分布図、遺物…109	図Ⅲ-101	JP-20・21平面図と土層、遺物 ……………157
図Ⅲ-68	JH-4平面図(1)、遺物分布図、 HF……………110	図Ⅲ-102	JP-22平面図と土層、遺物分布 図、遺物……………158
図Ⅲ-69	JH-4平面図(2)と土層、HP、 遺物……………111	図Ⅲ-103	JM-1平面図と土層、MF……………161
図Ⅲ-70	JH-5平面図と土層……………112	図Ⅲ-104	JM-1MP、遺物分布図……………162
図Ⅲ-71	JH-5HF、HP、遺物分布図…114	図Ⅲ-105	JM-1遺物(1)……………163
図Ⅲ-72	JH-5遺物、礫グラフ……………115	図Ⅲ-106	JM-1遺物(2)……………164
図Ⅲ-73	JH-6平面図と土層……………116	図Ⅲ-107	JM-1遺物(3)……………165
図Ⅲ-74	JH-6遺物分布図……………118	図Ⅲ-108	JM-1遺物(4)……………166
図Ⅲ-75	JH-6遺物……………119	図Ⅲ-109	JM-2平面図、MF……………168
図Ⅲ-76	JH-7平面図と土層、HF……………120	図Ⅲ-110	JM-2土層……………169
図Ⅲ-77	JH-7遺物分布図、遺物……………122	図Ⅲ-111	JM-2遺物出土状況図……………170
図Ⅲ-78	JH-8平面図と土層、HF、HP…124	図Ⅲ-112	JM-2遺構間遺物接合状況図 ……………171
図Ⅲ-79	JH-8遺物分布図、遺物……………125	図Ⅲ-113	JM-2遺物(1)……………173
図Ⅲ-80	JH-9平面図と土層、HF、遺物 ……………126	図Ⅲ-114	JM-2遺物(2)……………174
図Ⅲ-81	JH-10平面図と土層、HF、HP…128	図Ⅲ-115	JM-2遺物(3)……………175
図Ⅲ-82	JH-10HP、炭化材出土状況図、 遺物分布図……………129	図Ⅲ-116	JM-2遺物(4)……………176
図Ⅲ-83	JH-10遺物……………130	図Ⅲ-117	JM-3平面図、MF……………178
図Ⅲ-84	JH-11平面図と土層、HF……………132	図Ⅲ-118	JM-3遺物分布図……………179
図Ⅲ-85	JH-11HP、遺物分布図、遺物…133	図Ⅲ-119	JM-3土層、遺物……………180
図Ⅲ-86	JP-3・4・5平面図と土層、 遺物……………135	図Ⅲ-120	JM-4平面図、土層……………182
図Ⅲ-87	JP-6平面図と土層……………136	図Ⅲ-121	JM-4遺物分布図……………183
図Ⅲ-88	JP-7平面図と土層……………138	図Ⅲ-122	JM-4遺物……………184
図Ⅲ-89	JP-8平面図と土層、礫出土状況 図、遺物、礫グラフ……………139	図Ⅲ-123	JM-5平面図、MF……………186
図Ⅲ-90	JP-9・10平面図と土層、遺物 ……………141	図Ⅲ-124	JM-5土層、炭化材出土状況図 (1)……………187
図Ⅲ-91	JP-11平面図と土層……………142	図Ⅲ-125	JM-5炭化材出土状況図(2) ……………188
図Ⅲ-92	JP-12平面図と土層、遺物分布図、 遺物……………144	図Ⅲ-126	JM-5遺物分布図……………189
図Ⅲ-93	JP-13・14平面図と土層、遺物…146	図Ⅲ-127	JM-5遺物(1)……………190

図Ⅱ-128	JM-5遺物(2)	191
図Ⅲ-129	JM-6平面図と土層、炭化材出土状況図	193
図Ⅲ-130	JM-6遺物分布図、遺物	194
図Ⅲ-131	JM-7平面図と土層	196
図Ⅲ-132	JM-8平面図と土層、遺物	198
図Ⅲ-133	JM-9平面図と土層、MF	199
図Ⅲ-134	JM-9遺物分布図、遺物	200
図Ⅲ-135	JM-10平面図と土層	201
図Ⅲ-136	JF-1平面図と土層	202
図Ⅳ-1	包含層の土器(1)	204
図Ⅳ-2	包含層の土器(2)	205
図Ⅳ-3	土器分布図	206
図Ⅳ-4	包含層の石器(1)	208
図Ⅳ-5	包含層の石器(2)	209
図Ⅳ-6	石器分布図(1)	210
図Ⅳ-7	石器分布図(2)	211
図Ⅴ-1	JH-10炭化材出土状況図	221
図Ⅴ-2	JH-1炭化材出土状況図	222
図Ⅴ-3	JH-2炭化材出土状況図	224
図Ⅴ-4	JM-3・6炭化材出土状況図	226
図Ⅴ-5	JM-5炭化材出土状況図①	228
図Ⅴ-6	JM-5炭化材出土状況図②	229
図Ⅴ-7	黒曜石原産地	244
図Ⅴ-8	赤色細粒のX線回折図とサンプル採取地点	252

表目次

表1	出土遺物一覧	14
表2	周辺の遺跡一覧	17
表3	放射性炭素年代測定試料一覧	214
表4	JH-10の炭化木材の樹種同定結果	221
表5	JH-1の炭化木材の樹種同定結果	223
表6	JH-2の炭化木材の樹種同定結果	225
表7	JM-3の炭化木材の樹種同定結果	227
表8	JM-5の炭化木材の樹種同定結果	227
表9	JM-6の炭化木材の樹種同定結果	227
表10	炭化木材の樹種構成	227
表11-1	各黒曜石原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	239
表11-2	各黒曜石原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	240

表11-3	黒曜石製遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	241
表12	湧別川河口域の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果	242
表13	常呂川(中ノ島～北見大橋)から採取した37個の黒曜石円礫の分類結果	242
表14	穂香整穴群出土黒曜石製剥片の元素比分析結果	242
表15	平成14年度穂香整穴群出土黒曜石製遺物の原産地分析結果	243
表16	穂香整穴群炭化植物種子出土一覧(1)(平成13年度分)	248
表17	穂香整穴群炭化植物種子出土一覧(2)(平成14年度分)	249
表18	遺構一覧	257
表19	遺構別出土遺物一覧	258
表20	遺構出土掲載復元土器一覧	259
表21	遺構出土掲載拓本土器一覧	262
表22	遺構出土掲載石器等一覧	263
表23	遺構出土掲載鉄製品一覧	266
表24	包含層出土掲載復元土器一覧	267
表25	包含層出土掲載拓本土器一覧	267
表26	包含層出土掲載石器等一覧	268

カラー図版

- 1 遺跡遠景(東から空撮)
- 2 遺跡の全景

カラー図版2

- 1 調査前状況(南から)
- 2 撤文住居跡調査状況(手前H-26 奥H-25西から)

カラー図版3

- 1 JH-1調査状況(東から)
- 2 JH-1炭化材検出状況(北から)

カラー図版4

- 1 JH-2炭化材検出状況(北西から)
- 2 JH-4完掘状況(西から)

カラー図版5

- 1 JH-5完掘(北から)
- 2 JP-17ベンガラ検出状況(北東から)

カラー図版6

- 1 JM-1検出状況(東から)

2 JM-1土層(北西から)

3 JM-4土層(西から)

カラー図版7

1 JM-2土層(南西から)

2 JM-5炭化材検出状況(北から)

カラー図版8

1 縄文土器集合

2 縄文土器集合

写真図版

図版1

1 H-19・22・25調査前状況(北から)

2 H-19カマド、HF-1検出状況(西から)

図版2

1 H-19南北土層断面(西から)

2 H-19東西土層断面(北から)

3 H-19遺物出土状況(西から)

図版3

1 H-19カマド土層断面①(北西から)

2 H-19カマド土層断面②(西から)

3 H-19・HF-1土層断面(南東から)

4 H-19北西隅礎出土状況(東から)

5 H-19集石1検出状況(西から)

6 H-19集石2検出状況(西から)

図版4

1 H-19完掘(北西から)

2 H-19床面杭列検出状況(南から)

3 H-19掘り揚げ土層断面(南から)

図版5

1 H-20調査前状況(北から)

2 H-20完掘(南東から)

図版6

1 H-20掘り揚げ土検出状況(南東から)

2 H-20遺物出土状況(南東から)

図版7

1 H-20南北土層断面(南西から)

2 H-20東西土層断面(南東から)

3 H-20集石1検出状況(南東から)

4 H-20土器出土状況(南東から)

図版8

1 H-21調査前状況(南東から)

2 H-21全景(北西から)

図版9

1 H-21東西土層断面(南から)

2 H-21南北土層断面(東から)

3 H-21カマド検出状況(北西から)

4 H-21カマド袖石検出状況(北西から)

図版10

1 H-21床面炭化物検出状況(北から)

2 H-21床面遺物出土状況(西から)

3 H-21集石1検出状況(西から)

4 H-21集石2検出状況(東から)

5 H-21覆土炭化物検出状況(東から)

図版11

1 H-19・22・25調査前状況(北から)

2 H-22南北土層断面(東から)

図版12

1 H-22遺物出土状況(西から)

2 H-22集石1・2、HF-2・3検出状況
(北東から)

図版13

1 H-22・HF-2土層断面(南から)

2 H-22貝出土状況(南から)

3 H-22完掘(西から)

図版14

1 H-23調査前状況(北から)

2 H-23南北土層断面(西から)

図版15

1 H-23集石1検出状況(南西から)

2 H-23貼床・周溝土層断面(西から)

図版16

1 H-23・HF-1土層断面(西から)

2 H-23周溝検出状況(南西から)

3 H-23・HP-3土層断面(西から)

4 H-23周溝調査状況(西から)

5 H-23完掘(西から)

図版17

1 H-24調査前状況(南から)

2 H-24完掘(西から)

図版18

1 H-24調査状況(西から)

2 H-24床面遺物出土状況(南東から)

図版19

1 H-24南北土層断面(南西から)

- 2 H-24東西土層断面 (南東から)
- 3 H-24掘り揚げ土土層断面南側 (南西から)
- 4 H-24掘り揚げ土土層断面西側 (南東から)

図版20

- 1 H-24カマド袖石検出状況 (南西から)
- 2 H-24カマド土層断面 (西から)
- 3 H-24カマド燃焼部土層断面 (北から)
- 4 H-24・HF-1 検出状況 (南から)
- 5 H-24・HF-1 土層断面 (南から)
- 6 H-24集石1 検出状況 (西から)

図版21

- 1 H-25調査前状況 (南から)
- 2 H-25南北土層断面 (西から)

図版22

- 1 H-25床面遺物出土状況 (南から)
- 2 H-25カマド検出状況 (南西から)

図版23

- 1 H-25・HF-1 検出状況 (西から)
- 2 H-25・HF-1 土層断面 (南から)
- 3 H-25集石1・遺物出土状況 (南東から)
- 4 H-25集石2 検出状況 (東から)
- 5 H-25カマド周辺の土器底部出土状況 (西から)
- 6 H-25粘土検出状況 (北西から)

図版24

- 1 H-25完掘 (北西から)
- 2 H-22・25間掘り揚げ土土層断面 (北西から)
- 3 H-25掘り揚げ土土層断面北側 (北西から)

図版25

- 1 H-26調査前状況 (南から)
- 2 H-26掘り揚げ土検出状況 (西から)

図版26

- 1 H-26完掘 (西から)
- 2 H-26調査状況 (西から)

図版27

- 1 H-26東西土層断面 (北から)
- 2 H-26南北土層断面 (西から)
- 3 H-25・26間掘り揚げ土土層断面 (西から)

ら)

- 4 H-26掘り揚げ土土層断面北側 (西から)
- 図版28

- 1 H-26カマド検出状況 (西から)
- 2 H-26カマド袖石・焼土検出状況 (西から)
- 3 H-26・HF-1 検出状況 (南東から)
- 4 H-26・HF-1 土層断面 (南東から)
- 5 H-26・HF-2 検出状況 (西から)
- 6 H-26・HF-2 土層断面 (西から)

図版29

- 1 H-27調査前状況 (北から)
- 2 H-27南北土層断面 (東から)
- 3 H-27東西土層断面 (北から)

図版30

- 1 H-27遺物出土状況 (西から)
- 2 H-27カマド土層断面 (西から)
- 3 H-27集石1 検出状況 (南西から)

図版31

- 1 H-27・HF-1 土層断面 (南から)
- 2 H-27・HF-2 土層断面 (南から)
- 3 H-27完掘 (西から)

図版32

- 1 H-28調査前状況 (東から)
- 2 H-28完掘 (西から)

図版33

- 1 H-28覆土遺物出土状況 (西から)
- 2 H-28東西土層断面 (南から)
- 3 H-28・HF-1 土層断面 (南東から)
- 4 H-28集石1 検出状況 (南西から)

図版34

- 1 H-29調査前状況 (西から)
- 2 H-29全景 (西から)

図版35

- 1 H-29南北土層断面 (西から)
- 2 H-29東西土層断面 (南から)
- 3 H-29床面遺物出土状況 (西から)

図版36

- 1 H-29完掘 (西から)
- 2 H-29調査状況 (西から)

図版37

- 1 H-29カマド検出状況 (西から)
- 2 H-29カマド袖石検出状況 (西から)

- 3 H-29集石1 検出状況 (北から)
- 4 H-29集石2 検出状況 (東から)
- 5 H-29・HF-2 土層断面 (南西から)
- 6 H-29・HF-4 土層断面 (東から)

図版38

- 1 H-30調査前状況 (北西から)
- 2 H-30南北土層断面 (南西から)

図版39

- 1 H-30遺物出土状況 (東から)
- 2 H-30集石2 検出状況 (南から)
- 3 H-30土器出土状況 (南から)
- 4 H-30・HF-1 土層断面 (西から)
- 5 H-30・HF-2 土層断面 (南から)

図版40

- 1 H-31調査前状況 (南西から)
- 2 H-31完掘 (北東から)

図版41

- 1 H-31東西土層断面 (南東から)
- 2 H-31・HF-1 検出状況 (東から)
- 3 H-31・HF-1 土層断面 (南東から)
- 4 H-31覆土遺物出土状況 (南西から)

図版42

- 1 H-31床面遺物出土状況 (南西から)
- 2 H-31集石1 検出状況 (南から)
- 3 H-31土器出土状況 (南から)

図版43

- 1 S-2 検出状況 (南から)
- 2 F-6 検出状況 (北から)
- 3 F-6 土層断面 (南から)
- 4 F-8 検出状況 (南東から)
- 5 F-9 検出状況 (南から)

図版44

- 1 JH-1 生活面検出状況 (南から)
- 2 JH-1 完掘 (東から)

図版45

- 1 JH-1 東西土層断面① (北から)
- 2 JH-1 東西土層断面② (南西から)
- 3 JH-1 南北土層断面① (西から)
- 4 JH-1 南北土層断面② (北西から)

図版46

- 1 JH-1 南北土層断面 (アップ①)
(西から)

- 2 JH-1 南北土層断面 (アップ②)
(西から)

- 3 JH-1 覆土中焼土・炭化材検出状況 (東から)

- 4 JH-1 焼土・土器検出状況 (南東から)
- 5 JH-1 焼土検出状況 (アップ)
(南東から)

図版47

- 1 JH-1・HF-1・2・3 検出状況
(東から)
- 2 JH-1 床面土器出土状況 (北から)
- 3 JH-1 覆土遺物出土状況 (東から)
- 4 JH-1 集石1 検出状況 (南から)
- 5 JH-1 集石1 検出状況 (北から)

図版48

- 1 JH-1 炭化材検出状況 (北から)
- 2 JH-1 炭化材検出状況 (アップ) ①
(北西から)
- 3 JH-1 炭化材検出状況 (アップ) ②
(南西から)
- 4 JH-1 炭化材検出状況 (アップ) ③
(南東から)
- 5 JH-1 炭化材検出状況 (アップ) ④
(北から)

図版49

- 1 JH-2 調査前状況 (北から)
- 2 JH-2 完掘 (北から)

図版50

- 1 JH-2 南北土層断面 (南西から)
- 2 JH-2 東西土層断面 (北東から)
- 3 JH-2 炭化材検出状況 (北から)
- 4 JH-2 調査状況 (北から)

図版51

- 1 JH-2 覆土土器出土状況 (北から)
- 2 JH-2・HP-1 土層断面 (西から)
- 3 JH-2 炭化材検出状況 (アップ) ①
(北西から)
- 4 JH-2 炭化材検出状況 (アップ) ②
(東から)
- 5 JH-2 炭化材検出状況 (アップ) ③
(北から)
- 6 JH-2 炭化材検出状況 (アップ) ④

(北東から)

図版52

- 1 JH-3 調査状況 (北東から)
- 2 JH-3 東西土層断面 (北から)

図版53

- 1 JH-3 焼土検出面 (東から)
- 2 JH-3 完掘 (南東から)

図版54

- 1 JH-4 調査状況 (北東から)
- 2 JH-4 東西土層断面 (南から)

図版55

- 1 JH-4・HF-2・3・4 検出状況 (南東から)
- 2 JH-4 焼土検出面 (西から)
- 3 JH-4・HF-1 土層断面 (南から)
- 4 JH-4・HF-2・3 土層断面 (南から)
- 5 JH-4・HF-4 土層断面 (南から)
- 6 JH-4 遺物出土状況 (西から)

図版56

- 1 JH-4 掘り込み部土層断面 (南西から)
- 2 JH-4・SP-1 土層断面 (南から)
- 3 JH-4 完掘 (西から)

図版57

- 1 JH-5 調査前状況 (北から)
- 2 JH-5 南北土層断面 (東から)

図版58

- 1 JH-5 東西土層断面 (南から)
- 2 JH-5・HF-1、集石1 検出状況 (北から)
- 3 JH-5・HF-1 土層断面 (東から)
- 4 JH-5 集石1・2 検出状況 (北東から)
- 5 JH-5 集石2 検出状況 (北東から)

図版59

- 1 JH-5 完掘 (北から)
- 2 JH-5・HF-1、集石1 検出状況 (アップ) (北から)

図版60

- 1 JH-6 完掘 (南東から)
- 2 JH-6・HF-1 検出状況 (東から)
- 3 JH-6・HF-1 土層断面 (北東から)

図版61

- 1 JH-6 東西土層断面 (南西から)

2 JH-6 南北土層断面 (南東から)

図版62

- 1 JH-6 生活面検出状況 (北東から)
- 2 JH-6 土器出土状況① (南から)
- 3 JH-6 土器出土状況② (北から)

図版63

- 1 JH-7 調査前状況 (南から)
- 2 JH-7 東西土層断面 (南から)
- 3 JH-7 南北土層断面 (東から)

図版64

- 1 JH-7 完掘 (北西から)
- 2 JH-7 遺物・炭化材検出状況 (北西から)
- 3 JH-7・HF-1 検出状況 (北から)
- 4 JH-7・HF-1 土層断面 (西から)

図版65

- 1 JH-8 東西土層断面 (南から)
- 2 JH-8・HF-1 検出状況 (南から)
- 3 JH-8 炭化材検出状況 (北から)
- 4 JH-8 遺物出土状況 (南から)
- 5 JH-8・SP-1 土層断面 (南東から)

図版66

- 1 JH-8 完掘 (北西から)

図版67

- 1 JH-9 南北土層断面北側 (西から)
- 2 JH-9 完掘 (西から)

図版68

- 1 JH-10 炭化材検出状況 (南から)
- 2 JH-10・HF 検出状況 (西から)

図版69

- 1 JH-10 完掘 (南から)
- 2 JH-10・HP-1 土層断面 (西から)
- 3 JH-10・HP-3 土層断面 (西から)

図版70

- 1 JH-11 調査前状況 (北東から)
- 2 JH-11 遺物出土状況 (南東から)
- 3 JH-11 南北土層断面 (南から)

図版71

- 1 JP-3 完掘 (南東から)
- 2 JP-3 土層断面 (東から)
- 3 JP-4 完掘 (北西から)
- 4 JP-4 土層断面 (東から)
- 5 JP-5 完掘 (東から)

6 JP-5 南北土層断面 (南西から)

図版72

- 1 JP-6 調査前状況 (南東から)
- 2 JP-6 南北土層断面 (北東から)
- 3 JP-6 完掘 (南東から)
- 4 JP-7 完掘 (南から)
- 5 JP-8 完掘 (北西から)
- 6 JP-8 南北土層断面 (西から)

図版73

- 1 JP-8 覆土遺物出土状況 (北西から)
- 2 JP-8 礫出土状況 (北西から)
- 3 JP-9 調査前状況 (北西から)
- 4 JP-9 調査状況 (北西から)
- 5 JP-9 土層断面 (南西から)
- 6 JP-9 完掘 (南から)

図版74

- 1 JP-10完掘 (南から)
- 2 JP-10焼土、炭化物検出状況 (北から)

図版75

- 1 JP-10東西土層断面 (南東から)
- 2 JP-10焼土、遺物検出状況 (南から)
- 3 JP-10焼土、炭化物検出状況 (アップ)
(西から)
- 4 JP-10遺物出土状況 (西から)

図版76

- 1 JP-11完掘 (東から)
- 2 JP-11東西土層断面 (北西から)
- 3 JP-14完掘 (北から)
- 4 JP-14東西土層断面 (南東から)
- 5 JP-16完掘 (北から)
- 6 JP-16土層断面 (南西から)

図版77

- 1 JP-12東西土層断面 (南東から)
- 2 JP-12南北土層断面 (西から)
- 3 JP-12遺物出土状況 (南から)

図版78

- 1 JP-13完掘 (西から)
- 2 JP-13東西土層断面 (北西から)

図版79

- 1 JP-15調査前状況 (北から)
- 2 JP-15南北土層断面 (西から)

図版80

1 JP-15完掘 (北から)

2 JP-17東西土層断面 (南から)

図版81

- 1 JP-17焼土面 (西から)
- 2 JP-17焼土土層断面 (東から)
- 3 JP-17土器出土状況 (西から)
- 4 JP-17遺物出土状況 (北東から)

図版82

- 1 JP-17ベンガラ、石斧検出状況
(北東から)
- 2 JP-17完掘 (東から)

図版83

- 1 JP-18遺物出土状況 (北東から)
- 2 JP-18南北土層断面 (南西から)
- 3 JP-19土層断面 (南西から)
- 4 JP-19遺物出土状況 (南西から)

図版84

- 1 JP-20完掘 (北から)
- 2 JP-20土層断面 (西から)
- 3 JP-21遺物出土状況① (南東から)
- 4 JP-21遺物出土状況② (南から)
- 5 JP-22完掘 (南から)
- 6 JP-22土層断面 (南から)

図版85

- 1 JM-1北側検出状況 (東から)
- 2 JM-1南側検出状況 (北東から)

図版86

- 1 JM-1・Jライン土層断面 (北西から)
- 2 JM-1・Jライン土層断面 (アップ)
(北西から)
- 3 JM-1・36ライン土層断面 (南西から)

図版87

- 1 JM-1土器出土状況 (南東から)
- 2 JM-1焼土検出状況 (南東から)
- 3 JM-1土器出土状況 (北西から)
- 4 JM-1・MP-1検出状況 (南から)
- 5 JM-1・MF-1検出状況 (北西から)
- 6 JM-1・MF-1土層断面 (南東から)
- 7 JM-1・MP-2セクション (北西から)

図版88

- 1 JM-2検出状況 (北西から)
- 2 JM-2・45ライン (K~L) 土層断面

(南西から)

- 3 JM-2・45ライン(L~M)土層断面
(南西から)

図版89

- 1 JM-2 遺物出土状況(北から)
2 JM-2 遺物出土状況(アップ)(南から)

図版90

- 1 JM-2・L-45区遺物出土状況
(北西から)
2 JM-2・MF-1、骨出土状況
(北西から)
3 JM-2 骨出土状況(北から)
4 JM-2・MF-1・2・3 検出状況
(東から)
5 JM-2・HF-4 検出状況(東から)

図版91

- 1 JM-3 検出状況(北から)
2 JM-3 遺物出土状況(北東から)

図版92

- 1 JM-3 調査状況(西から)
2 JM-3・37ライン(F~G)土層断面
(北西から)
3 JM-3 炭化材・石器出土状況(西から)
4 JM-3・MF-1 検出状況(北から)

図版93

- 1 JM-4 調査状況(北西から)
2 JM-4 検出状況(北西から)

図版94

- 1 JM-4 南北土層断面(西から)
2 JH-10西壁を埋めるJM-4(南西から)
3 JM-4 フレイク出土状況(西から)
4 JM-4 遺物出土状況(西から)

図版95

- 1 JM-5 検出状況(北東から)
2 JM-5 調査状況(北から)
3 JM-5 遺物出土状況(北から)

図版96

- 1 JM-5・49ライン(I~J)土層断面
(南西から)
2 JM-5・49ライン(J~K)土層断面
(南西から)
3 JM-5・49ライン(K~L)土層断面

(北西から)

図版97

- 1 JM-5 炭化材検出状況(北から)
2 JM-5・MF-3・4 検出状況(南から)
3 JM-5・FC-3 検出状況(西から)
4 JM-5 遺物出土状況(アップ①)
(北から)
5 JM-5 炭化材検出状況(アップ①)
(東から)

図版98

- 1 JM-5 遺物出土状況(アップ②)
(北から)
2 JM-5 遺物出土状況(アップ③)
(北東から)
3 JM-5 炭化材検出状況(アップ②)
(北東から)
4 JM-5 炭化材検出状況(アップ③)
(北から)
5 JM-5 炭化材検出状況(アップ④)
(北から)

図版99

- 1 JM-6 検出状況(西から)
2 JM-6 東西土層断面(南西から)
3 JM-6 南北土層断面(北西から)

図版100

- 1 JM-6 遺物出土状況(西から)
2 JM-6 炭化材検出状況(西から)

図版101

- 1 JM-7 検出状況(北東から)
2 JM-7・Hライン(43~44)土層断面
(北西から)
3 JM-7・44ライン(J~H)土層断面
(南西から)

図版102

- 1 JM-8 検出状況(東から)
2 JM-9 検出状況(西から)

図版103

- 1 JM-9 遺物出土状況(北から)
2 JM-9 土層断面(南西から)
3 JM-9・MF-1・2 検出状況(南から)
4 JM-9・MF-1 土層断面(南から)
5 JM-9・MF-2 土層断面(南から)

図版104

- 1 JF-1 検出状況 (西から)
- 2 JF-1 土層断面 (南から)
- 3 K-35区Ⅱ層 擦文土器出土状況 (南から)
- 4 I-43区Ⅲ層 北筒式土器出土状況
(南東から)
- 5 M-46区Ⅲ層 北筒式土器出土状況
(東から)
- 6 K-43区Ⅲ層 耳栓出土状況 (南東から)

図版105

- 1 H-21出土の土器 (図Ⅲ-13-1)
- 2 H-25出土の土器 (図Ⅲ-29-1)
- 3 H-25出土の土器 (図Ⅲ-29-2)
- 4 H-30出土の土器 (図Ⅲ-46-1)
- 5 H-31出土の土器 (図Ⅲ-49-1)

図版106

- 1 擦文遺構出土の土器
- 2 擦文遺構出土の石器・鉄製品

図版107

- 1 JH-1 出土の土器 (図Ⅲ-56-1)
- 2 JH-1 出土の土器 (図Ⅲ-56-2)
- 3 JH-6 出土の土器 (図Ⅲ-75-1)
- 4 JM-1 出土の土器 (図Ⅲ-105-1)
- 5 JM-1 出土の土器 (図Ⅲ-105-2)

図版108

- 1 JM-2 出土の土器 (図Ⅲ-113-1)
- 2 JM-2 出土の土器 (図Ⅲ-114-2)
- 3 JM-2 出土の土器 (図Ⅲ-114-3)
- 4 JM-2 出土の土器 (図Ⅲ-115-4)

図版109

- 1 JH・JP 出土の土器
- 2 JM-1 出土の土器

図版110

- 1 JM-2～5 出土の土器
- 2 包含層出土の土器 (1) (図Ⅳ-1-1)
- 3 包含層出土の土器 (2) (図Ⅳ-2-18)

図版111

- 1 包含層出土の土器 (3)
- 2 包含層出土の土器 (4)

図版112

- 1 JH 出土の剥片石器

図版113

- 1 JP 出土の剥片石器
- 2 JP-17出土の石器

図版114

- 1 JM-1～4 出土の剥片石器

図版115

- 1 JM-5～9 出土の剥片石器
- 2 JH-1・2 出土の礫石器

図版116

- 1 JH-2 出土の礫石器
- 2 JH-3～11出土の礫石器

図版117

- 1 JH-2 出土の石皿
- 2 JH-5 出土の石皿

図版118

- 1 JP 出土の礫石器
- 2 JM-1 出土の礫石器

図版119

- 1 JM-2 出土の礫石器
- 2 JM-3・4・5①出土の礫石器

図版120

- 1 JM-5②出土の礫石器
- 2 JM-5③・8・9出土の礫石器 (2)

図版121

- 1 包含層出土の剥片石器

図版122

- 1 包含層出土の礫石器・土製品

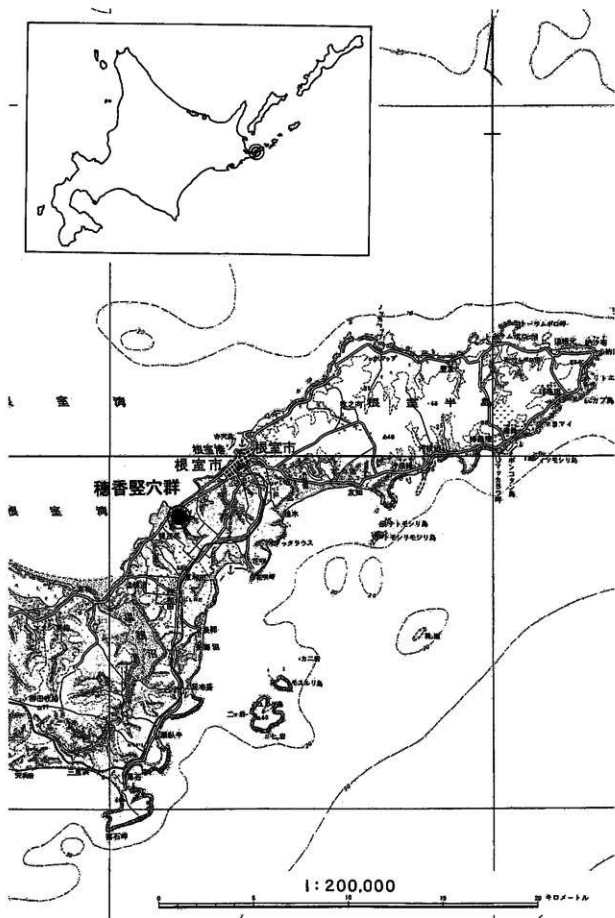


図1-1 遺跡の位置 (この図は国土地理院 昭和49年10月30日発行20万分の1地勢図「根室」・昭和55年11月30日発行20万分の1地勢図「標津」を複製加筆したものである)

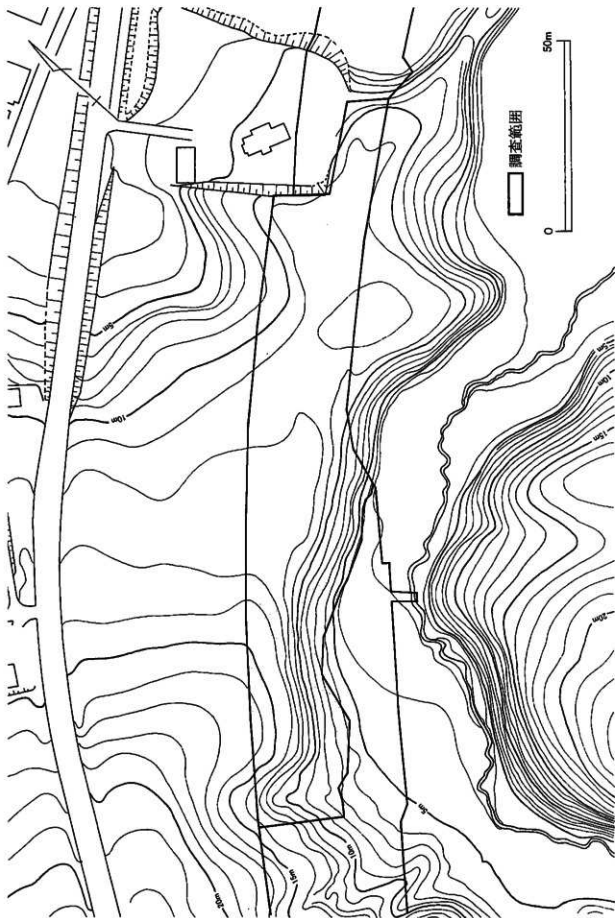


図 1-2 道路工事予定範囲と調査区の設定

4 調査の概要

(1) 発掘区の設定

発掘区はアルファベットの大字と数字の組み合わせで表示し、規格は4×4mとし、本年度も平成13年度に設定したものをを使用した。平成13年度調査区の設定基準は、用地境界杭L13とL14を基準点とし、その2点を通る直線を南北方向の基線、東西方向は基準点を通り、南北方向の基線に直交する直線とした。

ラインの設定は、南北方向をアルファベットの大字とし、基線をBに設定後、南側にC、D、E…、北側はAとした。東西方向は数字で、L13を通る基線を40とし、東側に41、42、43、44…と進行し、西側は逆に39、38、37、36…とした。調査区域は、アルファベットでは、B～Sライン、数字では15ラインの東1mから50ラインまでの範囲で、基準点の測量成果は下記のとおりである。

(越田・長沼)

L13(B40) X=-76289.196 Y=104733.350

L14 X=-76257.858 Y=104773.898

(平面直角座標系 第XⅢ系)

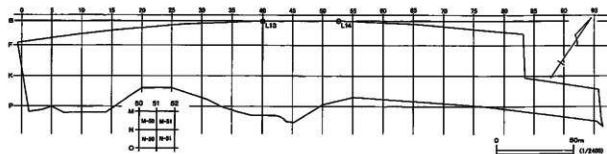


図 I - 3 発掘区の設定

(2) 地形・地質の概要

周辺の地形・地質

根室半島全域には海成段丘の発達が著しい。遺跡周辺でも、半島の中軸に沿って標高40-50m、花咲岬北東方に標高約30m、幌茂尻から根室市街へ標高約10mに段丘面が認められる。三谷ほか(1958)は、根室南部において、標高40m前後の高位面と標高20-30mの低位面に区分している。標高40-50m面は狭長な谷底平野によって開析され、丘陵状地形を呈している。標高30m以下の段丘が海と接する所では、急な海蝕崖を形成している。

三谷ほか(1958)によれば、根室南部地域は根室層群とこれを不整合に覆う段丘堆積物から成り、さらにこれらを不整合に覆って火山灰層が発達している。根室層群は、岩相によって、下部から根室累層、長節累層、落石累層、ユルリ累層に区分される。前の2累層は砂岩と泥岩の互層から成り、後の2累層は礫質岩を主な構成員としている。根室累層の中には2つの型の粗面粗粒玄武岩が進入している。落石累層とユルリ累層には、集塊岩、火山円礫岩、規模の小さな溶岩や岩床を挟んでいる。海蝕崖には粗面粗粒玄武岩の露出が良好である。

佐々木編(1979)によれば、中標津-別海-根室地域には摩周火山起源のテフラが分布している。また、徳井(1989)によれば、駒ヶ岳と樽前山のテフラが道東に分布している。

遺跡の地形・地質

遺跡の主体は標高約10mのやや狭長な段丘面上にある。北側に第二ホニオイ川河口の沖積低地、南

側に谷底平野と面している。谷底平野には泥炭が発達し、谷地坊主が多く見られる。

図1-4に遺跡の表層地質と発掘上の土層区分を示す。平坦面（段丘面）における例として発掘グリッドB-44~B-45、段丘面と谷底平野との間の斜面下方（斜面と谷底平野との境界付近）の例としてP-38、遺構の例としてJP-5を示している。B-44~B-45では、上位から作土、黒褐色粘土質腐植土、摩周火山起源のテフラ、黒色粘土質腐植土、黒褐色粘土質腐植土、褐色ロームが認められる。平坦面では摩周火山のテフラの保存が良好である。このテフラと作土との間の土壌層は、2層に区分できることがある。そのような場所では、それぞれの土壌層から異なる時代の遺物が出土している。

本遺跡の摩周火山のテフラの各ユニットは、北海道火山灰命名委員会（1979）と佐々木編（1979）から、Ma-f~Ma-jに対比することができる。本遺跡での各ユニットの特徴は次のとおりである。

Ma-f：軽石混じりの褐色ローム。層厚5-10cm。軽石粒径2-10mm。軽石表面は褐色、内部は灰~灰黄色。軽石はやや円磨され、見かけの発泡度は悪い。分級が悪いことで、火砕流堆積物またはその二次堆積物である。Ma-fのうち、Ma-f₁に対比される。

Ma-g：黄橙色降下軽石堆積物。層厚5-7cm。軽石は粒径1-4mm、やや風化し、内部は灰黄色、見かけの発泡度は悪い。

Ma-h：降下軽石・岩片堆積物。層厚2cm。粒径1mm±。軽石は橙色、岩片は灰色。

Ma-i：橙色降下軽石堆積物。層厚6-8cm。基底から1cm上方までは比較的細粒（粒径3mm±）、その直上は粗粒（粒径5-10mm、最大粒径15mm）で上方へ細粒化する。軽石はやや風化し、内部は黄橙色、繊維状発泡良好。

Ma-j：3層の降下ユニットに区分される。上部は灰黄色砂質火山灰堆積物で、層厚0.5cm。中部は黄色軽石堆積物で、層厚0.3-0.5cm。軽石粒径0.5mmである。下部は灰色砂質火山灰堆積物で、層厚0.5cm±である。この下部層は含水量が多く、色調からも變層として周辺地域で追跡することができる。

Ma-f中の炭化木から、6,460±130yBP、7,190±230yBPの¹⁴C年代値が得られている（勝井ほか、1986）。

P-38では、泥炭層中に2層の降下テフラが認められる。上位のものは黄色を帯びた白色シルト質火山灰で層厚1.5cm、下位のものは灰白色シルト~砂質火山灰で層厚3cmである。また、縄文時代の遺構の凹地には、白色のシルト質降下火山灰がレンズ状に厚く堆積していることがある。遺構JP-5では、最大層厚10cmで、黄色を帯びた白色のシルト質火山灰が認められる。これらの白色のテフラの給源は今のところ不明であるが、駒ヶ岳及び樽前山の可能性がある。

（花岡）

（3）基本土層

I層：表土、耕作土、攪乱土層。遺跡の大部分の現況は笹地で、笹根下のポロポロした腐植土もこれに含めた。層厚は5~10cm程度である。今年度調査区の北側平坦部は牧草地となっており、III層もしくはIV層まで耕作が行なわれていた。

II層：主に黒色、黒褐色を呈する腐植土層。層厚は5~10cm。統縄文時代から縄文時代の遺物包含層である。

III層：主に黒褐色を呈する腐植土層。層厚は約10~15cm程。II層に比べてやや黄が強く、下位のIV層が混じる傾向にある。斜面などではII層と分層できない。縄文時代の遺物包含層で、主に縄文時代中期末~後期の遺物が出土する。遺跡全域に存在する。

またIII層中の遺構などの窪みにはにぶい黄褐色火山灰が存在し、遺構検出の指標となった。

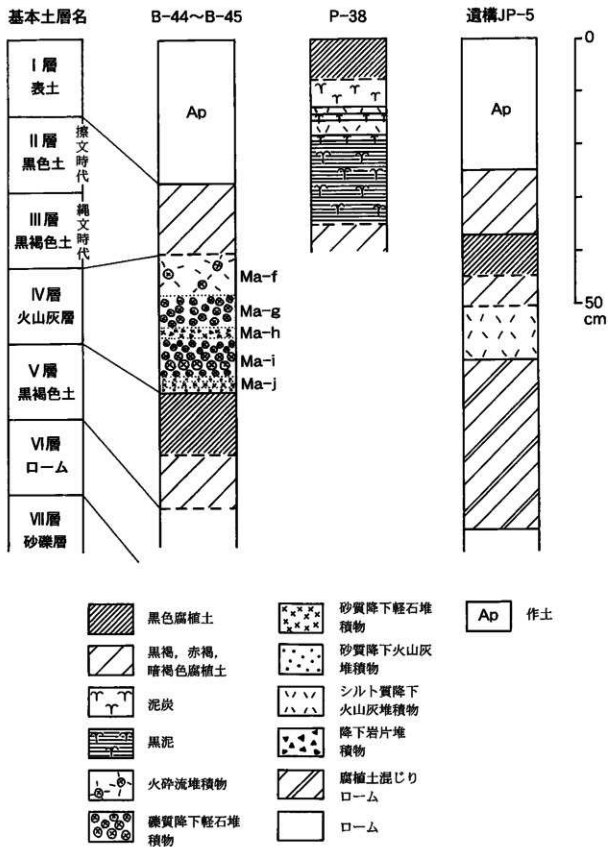


図1-4 表層地質と発掘基本土層図

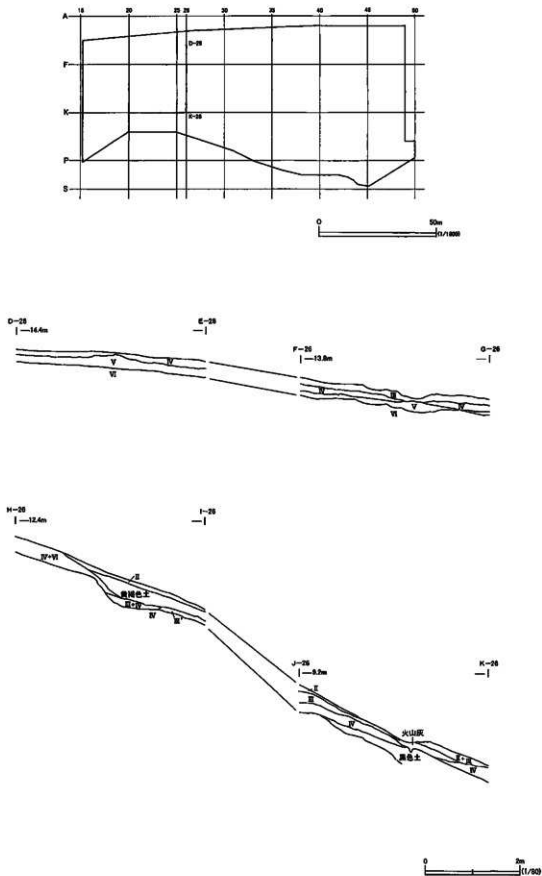


図1-5 土層断面(1)

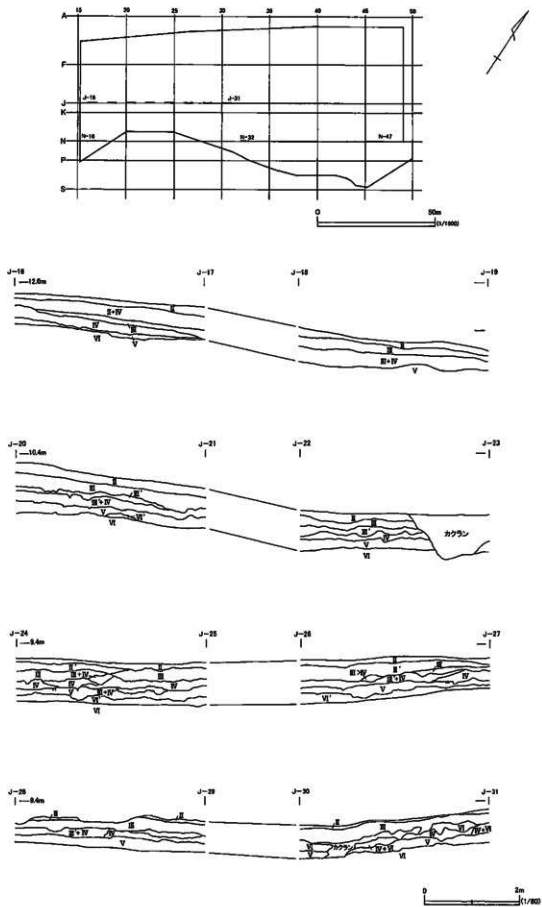
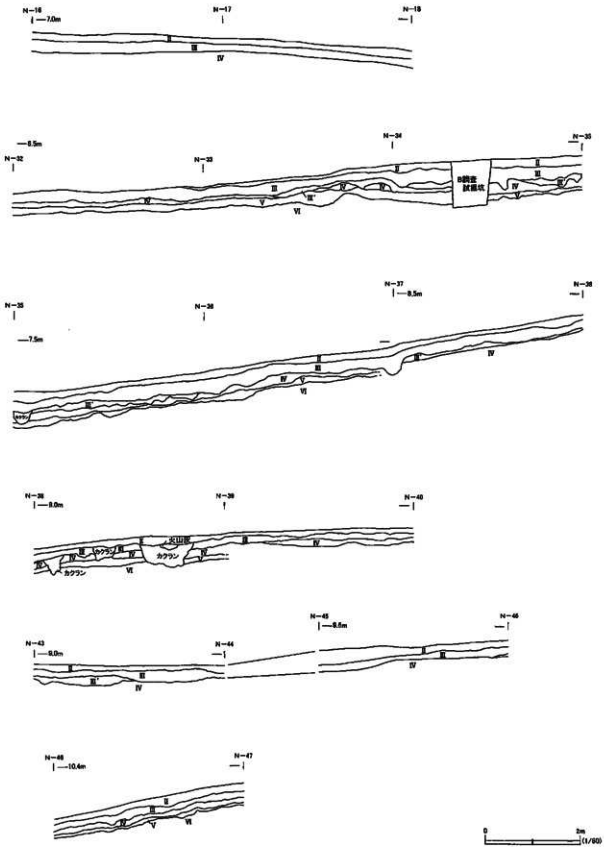


図 I - 6 土層断面(2)



図【-7 土層断面(3)

Ⅳ層：前述のとおり、Ma-f～Ma-jに対比できる火山灰層である。層厚は10～25cm程度。急斜面部では存在しない。

Ⅴ層：主に黒色を呈する腐植土層。層厚は約5～10cm程度。しまり、粘性ともある。縄文時代早期の包含層である。遺跡全域に存在する。

Ⅵ層：黄褐色ローム質土層。層厚は不明だが、50cm程でⅦ層になる場所もあった。遺構のほとんどはこの層まで掘り込まれる。遺跡全域に存在する。

Ⅶ層：砂礫層。遺構の床面や柱穴の調査で部分的に確認できた。黄褐色ローム質土が数枚層状に入る部分もある。層厚は不明。(愛場)

(4) 調査の方法

調査区域の現況は、北側の平坦部が牧草地で、南側の斜面部が笹原であった。調査は表土除去、25%調査、包含層調査、遺構調査の手順で進めた。

表土除去は基本的に重機で行ったが、整穴状の凹み及びその周辺については人力で行った。また、排土場所の確保の関係から全面展開の調査は行えなかったので、いくつかのブロックに分けて調査を進めた。

整穴状の凹みは35ラインより東側の平坦部から斜面にかけての区域で確認できたので、その部分の調査を進めながら、他の部分の表土除去、25%調査を展開した。まず調査を着手したのはGラインより北側、28ラインより東側の平坦部で、次にLラインより南側、31ラインより東側の斜面部、Gラインより北側、28ラインより西側の平坦部、Gラインより南側、31ラインより西側の斜面部という順で進めた。

25%調査、包含層調査

調査はⅡ・Ⅲ層の遺物包含層を発掘区単位で進め、遺物の出土状況や量に応じてスコップ・移植ごて、ジョレンなどの道具を使い分けて行った。火山灰層下のⅤ層調査は、25%調査ではすべて行い、包含層調査では25%調査で遺物が出土した周辺のみ限定して行った。結果的にⅤ層からは2点の黒曜石製石器が出土したのみであった。

遺構確認調査

25%調査の結果、遺構が確認されず、また遺物が出土しないか、極めて希薄な部分については重機による遺構確認調査を行い、調査の省力化を図った。先にブロック分けした28ラインないし31ラインより西側部分がその区域である。

遺構調査

整穴状の凹みの部分では、土層観察用のベルトを基本的に十字に設定し調査を進めた。その部分では表土中からも遺物が出土する可能性が考えられたため、調査は草草や笹根の除去段階から人力で行った。結果的に、凹み部分周辺の表土中からは、時期不明の陶磁器片が1点出土したのみであった。

25%・包含層調査ではⅢ層の上面ないしⅢ層を少し掘り下げた時点で遺構の確認に努めたが、最終的にⅣ層上面で確認されたものもある。基本的に遺構は平面形を確認後、住居跡・土坑は十字に土層観察用のベルトを残し、小型の土坑は2分割して調査を進めた。盛土遺構については発掘区のラインに沿って土層観察用のベルトを残し、状態の良いところを記録した。

遺物の取り上げ

出土遺物はⅠ層出土のものを除いてすべてトータルステーションを利用して出土位置を記録して取り上げ、遺跡・遺物管理システム(例シン技術コンサル)で管理した。また、遺構出土のものに関しては、必要に応じて写真撮影と同時に出土状況図を作成した。

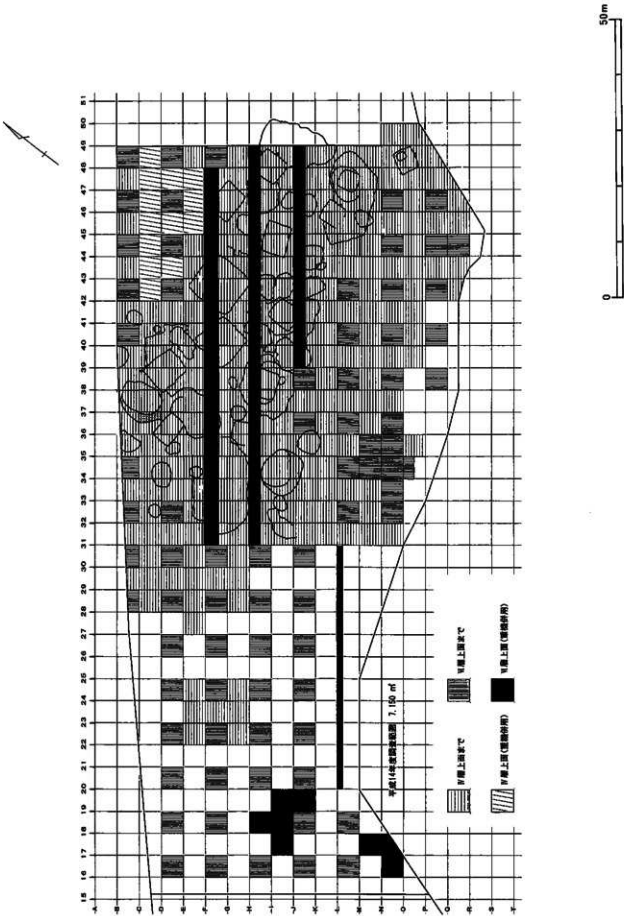


図 I-8 調査の方法

竪穴住居跡のカマドや炉跡、盛土遺構の焼土などについては動植物遺体を検出するために土壌を採取した。 (越田・長沼)

(5) 整理の方法

現地では野外作業と並行して、遺物の水洗・注記と台帳作成、大まかな分類などの基礎的な作業を行った。冬期の整理作業では、土器の接合・復元、石器・礫の接合、土器・石器の実測・計測・集計・写真撮影などを行い、その成果を本報告書に掲載した。採取した土壌は、現地でフローテーション作業を行い、冬期の整理作業で選別・抽出を行い、動植物遺体の鑑定を依頼した。 (越田・長沼)

(6) 遺物の分類

土器の分類

分類にあたっては北海道埋蔵文化財センターの標準的な分類を踏襲した。縄文時代の土器については早期の資料をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。統縄文時代の資料はⅥ群、擦文時代の資料はⅦ群とした。今回の調査で出土した土器には、縄文時代早期(Ⅰ群)、縄文時代中期(Ⅲ群)、後期(Ⅳ群)、統縄文時代(Ⅵ群)、擦文時代(Ⅶ群)の資料がある。ただしⅣ群に分類した北筒式土器の資料に関しては編年的な位置付けが現状では不確定なため、北筒式中期末に位置付けされる可能性がある資料も今回の報告では一括してⅣ群として取り扱う。 (広田)

石器等の分類

石器の分類は大分類にとどめ、記号による細分類は行わず、記述により補足した。

剥片石器は石鏃、石槍、石錐、両面調整石器、つまみ付ナイフ、ナイフ類、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイクがある。

礫石器では石斧類、砥石、石鋸、たたき石、台石、石皿、加工痕のある礫がある。

他にフレイク、石核、原石、礫、礫片がある。礫のうち、集石に含まれるものについて完形のものを中心に計測した。

また土製品では耳栓と考えられるものが1点出土している。擦文住居内を中心に有孔礫を石製品として扱っている。

鉄製品は擦文時代の竪穴を中心に出土している。

(愛場)

(7) 調査結果の概要

今年度の調査において遺構は住居跡24軒、土坑21基、焼土5ヵ所、盛土遺構10ヵ所、遺物は土器4,607点、石器類8,510点、礫10,114点、土製品1点、石製品5点、鉄製品42点、総数23,279点が発見された。それらは大きく分けて擦文時代と縄文時代のものがあり、遺物の詳細は表1を参照願ひ、ここでは遺構についての概要を説明する。

擦文時代の遺構は、住居跡13軒(H-19~31)、土坑1基(P-1)、焼土4ヵ所(F-5~8)で、後期後半の時期と考えられる。住居跡は昨年度の調査分(H-6~18)と平成5年の市教委調査分(H-1~5)を合わせると31軒が調査されたことになる。住居跡は重複せず、遺存状況も良好で、掘り上げ土の堆積状況から大まかな変遷を捉えることができる。13軒のうちカマドのあるものは7軒、平面形は基本的に方形であるが、床面積は12~76㎡と幅がある。カマドはすべて東壁に作られ、原形をとどめていないが、袖石や天井石として使用された玄武岩の偏平礫と灰白色粘土が確認された。カマドのない6軒の平面形は基本的に長方形で、床面積は11~24㎡とカマドのあるものに比べると小型である。住居構造は柱穴のないものも含め、多様であるが、柱穴や周溝のあり方から、4本主柱、8本壁柱、土留め板が通るもの、ベッド状の板敷きなどの存在が想定される。すべての住居跡には1~4ヵ所の炉跡が中央部にあり、浅い掘り込みを伴うものもみられる。カマドや炉跡周辺の土壌からはシ

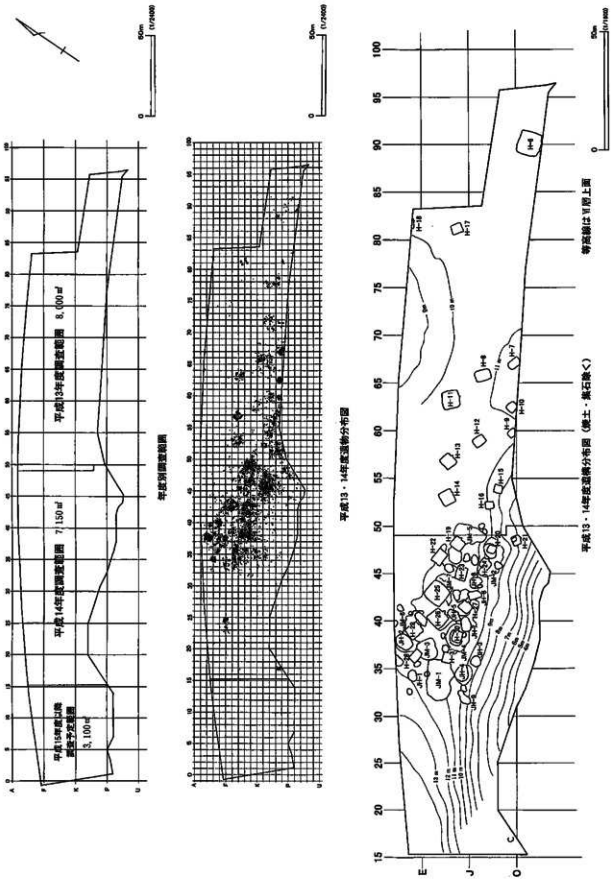


図 I-9 年度別調査範囲と平成13・14年度の遺物分布図・遺構位置図

ソ属、キビ属、アカザ属、ブドウ科の炭化種子や骨片がわずかながら確認できた。また、6軒について採取した炭化物による14C年代測定を行ったところ較正年代でAD1,000~1,200年前後の数値が得られたが、土器などの特徴から年代的には12世紀前後と考えられる。

縄文時代の遺構は、住居跡11軒、土坑20基、焼土1カ所、盛土遺構10カ所所で、大部分が後期初頭の北筒Ⅱ~Ⅲ式の時期と考えられる。住居跡も平面形は楕円形ないし楕円形に近い不整形で、大きさは最小で4.45×3.5m、最大で7.64×5.2mである。構築面と考えられる床面の凹凸が著しく、貼床ないし埋め戻しを行って平坦面を作り生活面としているのが大きな特徴で、11軒のうち8軒で炉跡がみられ、JH-4では5カ所が確認できた。また、JH-1・2・10は覆土・床面の炭化材や焼土の出土状況から火災住居と考えられる。炭化材の樹種同定では7種類が確認でき、多様な樹木の利用が明らかになった。土坑の平面形は楕円形ないし不整形で、最小は1.3×1.23×0.5m、最大は6.3×2.97×0.93mであるが、長軸が2~3m程度のものが多い。原則的に炉跡の有無で住居跡と区別したが、長軸の長さが4mを超えるJP-12・13・15・18などは住居跡の可能性がある。土坑の性格は不明のものが大半であるが、人為的な埋め戻しの覆土、ベンガラの散布、遺物の出土状況などからJP-17は墓と考えられる。10カ所の盛土遺構は、住居跡や土坑と重複して分布し、擦文時代の住居跡で覆されているものもあり、その形態は一様でなく、厚さも0.14~0.57mと幅がある。盛土の供給源は主に住居跡や土坑の掘り上げ土であるが、構築面の焼土、二次堆積の焼土、炭化材、遺物の出土状況さらに柱穴の存在など、単なる廃棄場ではなく構造物の存在の可能性を含め、その性格は単純ではなさそうである。住居跡や盛土遺構から採取された炭化物による14C年代測定では3,860±40 (calBP 4,410to4,150) ~ 3,720±40 (calBP 4,160to 3,960) 年BPという数値が得られた。

(越田・長沼)

表1 出土遺物一覧

分 類		器 器		
		点	数	計
I 群	土 器	1	0	1
Ⅱ 群	土 器	24	0	24
Ⅳ 群	土 器	2565	825	3390
Ⅵ 群	土 器	3	54	57
Ⅷ 群	土 器	410	725	1135
計		3003	1604	4607
石 器 等				
石	鏃	25	20	45
石	槍	29	15	44
両 面 調 整 石	鏃	18	0	18
石	鏃	8	2	10
つまみ付き	ナイフ	14	6	20
ナイフ・スクレイパー		47	18	65
Uフレイク・Rフレイク		36	37	73
石	核	3	1	4
フ レ イ ク		5573	2137	7710
原	石	22	18	40
石	斧	13	3	16
石	鏃	19	2	21
砥	石	141	19	160
た た き	石	42	22	64
台	石・石	215	3	218
加工痕のある	機	2	0	2
	機	8360	1754	10114
土・石	製 品	4	2	6
鉄	製 品	27	15	42
合	計	14598	4074	18672
土 器・石 器	合 計	17601	5678	23279

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と周辺の環境

穂香竪穴群は北海道根室市穂香172番地1にあり、北緯43° 18' 20"、東経145° 32' 40"に位置する。遺跡のある根室市は、北海道東部の根室半島に位置する日本最東端の市である。また、根室支庁の所在地で面積は約513km²、人口は約33,000人である。市の基幹産業は水産業で、夏の花咲ガニ、秋のサンマなどの水産物が全国的にも有名である。また、国後島などの北方領土に近接し、天気の良いよく晴れた日には間近に国後島を望むことができる。

年平均気温は約7℃で、特に夏場の気温が低い。親潮と黒潮の衝突によって生まれる霧が根室沖で発生するため、夏場に霧が発生し、6～8月は霧が出る日が非常に多い。そのため、夏場でも20℃前後しか気温が上がらず、最高気温が30℃を越えるのは数年に一度しかない。9月以降は天候が回復し、秋から冬にかけては比較的安定した気候となる。植生としては、ダケカンバ・カシワモドキなどの広葉樹、アカエゾマツ・トドマツなどの針葉樹がみられる。また、冷涼な気候のため標高の低い場所でも多数の高山植物が生育している。

穂香竪穴群は標高約6～15mの海岸段丘面から第二ホニオイ川側の谷底平野にかけての斜面にかけて広がっている。大部分の竪穴状くぼみは台地南東端から斜面上部にかけて分布しているが、一部は台地北側にもみられる。遺跡の北側約500mには根室湾が広がり、東側と南側の斜面下には第二ホニオイ川とその支流が流れ、海と川で三方を囲まれた台地上に遺跡が形成されている。

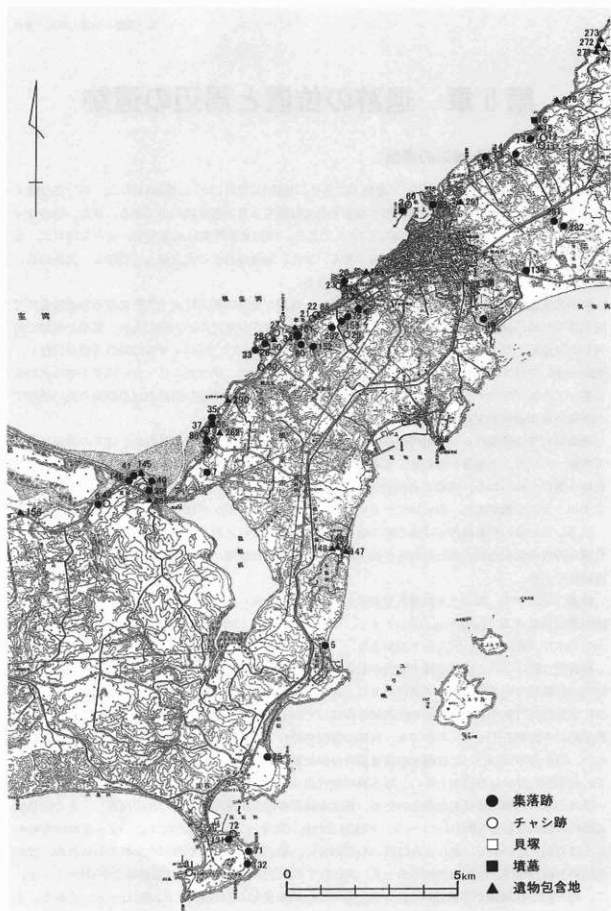
図示していないが遺跡周辺は高さ約1mの近代の土塁により区割りされ、土塁の北東側は耕作により縄文時代の包含層の大部分が削平されていた。南東側の台地端から斜面にかけての土層の遺存状況は良好である。

穂香(ホニオイ)はアイヌ語地名であるが、語源ははっきりしない。解釈としては、永田方正氏や山田秀三氏による「pon-i-oi(ポンイオイ、ポニオイ)小へビ多い所」、「pon-ni-oi(ポンニオイ)小さい木片(寄木)多い所」の2説がある。

穂香竪穴群については伊藤初太郎氏が昭和10年(1935)に『考古学上の根室の遺物と遺跡』の中で竪穴の群集している場所として挙げており、海岸部にあるチャシ(ニランケウシ1～3号チャシ)と共に方形の竪穴状くぼみ10ヵ所の位置図を作成している。また、伊藤氏は昭和13年(1938)にも「根室半島に存在せるチャシ」の中でも、同様の図面を載せている。ただし、竪穴自体の説明はされていない。昭和48年(1973)には根室市教育委員会が北地文化研究会に委託した市内分布調査の一環として、穂香竪穴群の分布調査を行い、38ヵ所の竪穴状くぼみを確認している。

平成5年(1993)には宅地造成のため、根室市教育委員会が遺跡の一部を発掘調査し、その結果縄文時代の竪穴住居跡5軒(H-1～5)が確認された(図Ⅱ-3)。平面形は1辺が4～5mの方形もしくは方形に近い形で、掘り込みは浅いものが多い。縄文時代の包含層が削平されているため、どの住居跡も掘り揚げ土は検出されなかった。5軒のうち、カマドと炉を伴う住居跡は2軒(H-1・4)で、炉を伴う住居跡が2軒(H-2・5)、カマド、炉を伴わない住居跡が1軒(H-3)である。またH-3・5の床面で大型のピットが検出されている。遺物は縄文土器が主体で、若干の石器等が出土している。また、H-5の床面から集石と共にマレックが出土している。

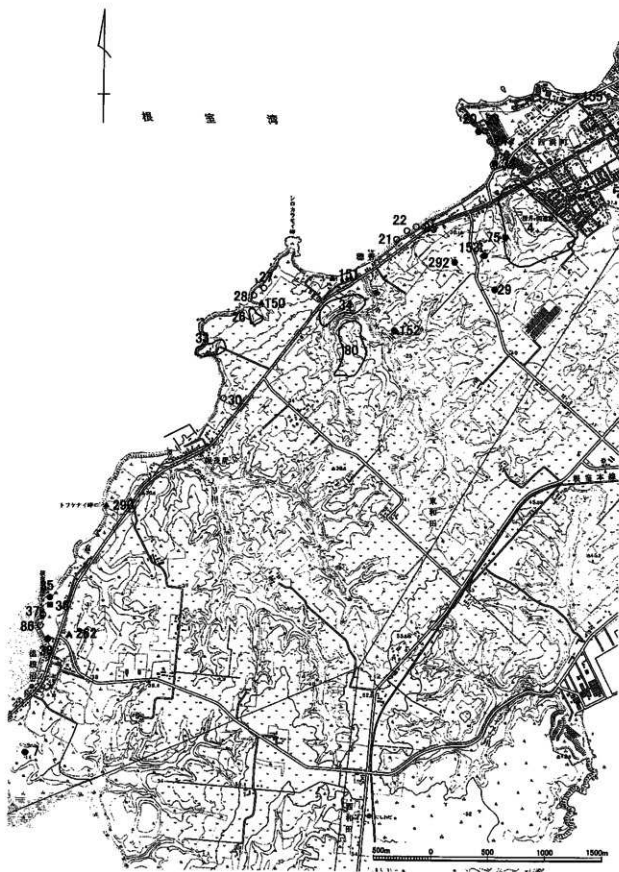
H-1～5の時期は平成13・14年度に調査した竪穴住居跡とほぼ同じで、縄文時代後期後半と考へ



図Ⅱ-1 周辺の遺跡(1) (この図は国土地理院 平成4年12月1日発行5万分の1地形図「根室北部」、平成3年8月1日発行5万分の1地形図「根室南部」、平成4年8月1日発行5万分の1地形図「厚床」を複製加筆したものである)

表2 周辺の遺跡一覧

№	名 称	所 在 地	種 別	時 代	特 徴・その他
3	弁天島貝塚壱六群	弁天島	集落跡	オホーツク	北横保男氏により調査
4	西月ヶ岡壱六群	西浜町6-3、4-1・2地	集落跡	縄文	国指定史跡
5	尾布成壱六群	尾布成25、26-2	集落跡		神社建造の麻破壁
6	東海風雲洞右岸壱六群	東海224-5	集落跡	縄文中期・縄文	壱穴14個
7	岡江谷壱六群	塩根243-1・2	集落跡	縄文早期・縄文・オホーツク	壱穴32個
11	コタンケシ2号チャシ跡	牧の内140-1、210-1	チャシ跡	アイヌ	国指定史跡
12	コタンケシ1号チャシ跡	牧の内252	チャシ跡	アイヌ	国指定史跡
13	コタンケシ川西岸壱六群	牧の内78-2、99-1	集落跡		壱穴3～5個
14	シエナハウシチャシ跡	牧の内75-2、75-2地先	チャシ跡	アイヌ	医館定史跡
15	コタンケシ遺跡	牧の内140-1、252	遺物包含地	縄文早期・中期・縄文・縄文	発掘調査実施
16	コタンケシ壱六群	牧の内101地先	墳 墓	アイヌ	約10基、骨石あり
19	カウラムイ壱六群	榎木106-1	集落跡	縄文・縄文	縄文(榎木式・下田の沢Ⅱ式)
20	キナトイ壱六群	西浜町10-191、192地	集落跡	縄文	続縄文
21	ニランケウシ3号チャシ跡	徳香7、13-5、13-5地先	チャシ跡	アイヌ	国指定史跡
22	ニランケウシ2号チャシ跡	徳香7、7地先	チャシ跡	アイヌ	国指定史跡
23	アツケシエト1号チャシ跡	西浜町10-206地	チャシ跡	アイヌ	保存状態良好
24	アツケシエト2号チャシ跡	西浜町10-206地先	チャシ跡	アイヌ	
25	浜松壱六群	浜松38	集落跡		壱穴3～4個
26	観風風東壱六群	徳香37、43、45、48、63	集落跡	縄文	方形、円形壱穴21基
27	ラーナイ1号チャシ跡	徳香43、43地先	チャシ跡	アイヌ	
28	ラーナイ2号チャシ跡	地帯43、44地先	チャシ跡	アイヌ	
29	東和田1壱六群	東和田7	集落跡		方形壱穴1個
30	ウエンナイチャシ跡	徳香59、59地先	チャシ跡	アイヌ	コの字形の壱穴2基
31	アラモイチャシ跡	落石西340地先	チャシ跡	アイヌ	
32	キナトイ貝塚	西浜町10-200～202	貝 塚		カッピングに貝層が露出
33	横渡尻ポイントマリ壱六群	徳香57、58、60、62	集落跡	縄文・縄文	大形2基、その他4基
35	根根沼チャルコロモイ東壱六群	根根沼2	集落跡		削平
36	根根沼チャルコロモイ東壱六群	根根沼2	墳 墓	アイヌ	10数ヶ所
37	チャルコロフィナ1号チャシ跡	根根沼2、4、4地先	チャシ跡	アイヌ	
38	チャルコロモイ西壱六群	根根沼4	集落跡		
39	東梅1壱六群	東梅4、8、10～12、17地	集落跡	縄文	方形・円形の壱穴?17基
40	東梅2壱六群	東梅103	集落跡	縄文	方形(大形)、楕円形の壱穴49基
41	東梅3壱六群	東梅103	集落跡	縄文	壱穴39基
42	東海風雲洞右岸チャシ跡	東海224-5	チャシ跡	アイヌ	
66	弁天島チャシ跡	弁天島	チャシ跡	アイヌ	現在破壊され不明
67	スナバウス壱六群	北浜町2-10-1、14	集落跡		壱穴8個
68	ベニケムイ壱六群	早町1-5	集落跡	縄文早期・晩期	
71	落石西1壱六群	落石西392-1、392-1地先	集落跡	続縄文	方形大形壱穴16～19個
72	ニノウシチャシ跡	落石西105地先	チャシ跡	アイヌ	丘先式
75	徳香2壱六群	徳香99	集落跡		壱穴3基
80	徳香3壱六群	徳香175	集落跡		方形壱穴住居跡地24基
85	ニランケウシ1号チャシ跡	徳香7、7地先	チャシ跡	アイヌ	直溝式
86	チャルコロフィナ2号チャシ跡	根根沼4、4地先	チャシ跡	アイヌ	直溝式
131	落石西2壱六群	落石西102、103	集落跡		
132	落石西3壱六群	落石西392-1	集落跡		保存状態良好
134	タンネ相違跡	牧の内154-1	集落跡		不明瞭な壱穴状落ち込み
135	スナバウス東壱六群	牧の内78-1	集落跡		浅い落ち込みが散個
144	別当賀川川1壱六群	藤原59-1	集落跡		方形壱穴
145	東梅4遺跡	東梅103	集落跡		
146	東梅5壱六群	東梅103	集落跡		
147	長野1遺跡	長野63、64	遺物包含地	縄文早期(東御路Ⅱ式)	
148	長野2遺跡	長野134、139	遺物包含地		
149	長野3遺跡	長野137-1・2	遺物包含地		
150	徳香4遺跡	徳香37、43	遺物包含地		
151	徳香5遺跡	徳香22、23	遺物包含地		
152	徳香6壱六群	徳香108	集落跡		方形壱穴
153	徳香7壱六群	徳香92-1、93	集落跡		方形壱穴1基
155	西浜町1遺跡	西浜町10-4-2	遺物包含地		壱穴状の落ち込みが崖面に露出
156	根根沼1遺跡	根根沼1-1	遺物包含地		
262	根根沼1遺跡	根根沼127-1	遺物包含地	縄文晩期	
278	コタンケシ東1遺跡	牧の内110-1	包 蔵 地	縄文	
279	五本松川1壱六群	別当賀375	集落跡		円形壱穴約10基
280	五本松川2壱六群	別当賀園有林	集落跡		円形壱穴約3基
281	オンネ沼1壱六群	牧の内146-6	集落跡		円形壱穴約6基
282	オンネ沼2壱六群	牧の内146-17	集落跡		円形壱穴約10基
286	東梅1遺跡	東梅115-1	包 蔵 地	縄文	
289	花吹雪1遺跡	花吹雪3-2	包 蔵 地	縄文晩期?	
290	トフケナイ遺跡	横渡尻70-1	包 蔵 地	縄文晩期?	
291	駒場町遺跡	駒場町3-25-8	包 蔵 地	縄文早期	
292	徳香8壱六群	徳香110-1	集落跡		円形壱穴2基



図Ⅱ-2 周辺の遺跡(2) (この図は国土地理院 平成11年12月1日発行2万5千分の1地形図「横室南部」を複製加筆したものである)

られる。また、この時発掘調査にあわせて、周辺の地形測量と共に遺跡全体の竪穴状くぼみの分布調査を行い、62カ所の竪穴状くぼみを確認している（図Ⅱ-3）。平成13・14年度の調査範囲内には62カ所中35カ所の竪穴状くぼみが入っていた。調査の結果、竪穴状くぼみ35カ所の内遺構は30カ所で、5カ所は自然の落ち込みであることが判明した。30カ所の内訳は、縄文時代の竪穴住居跡24軒、縄文時代の竪穴住居跡4軒、土坑2基である。くぼみの深いものは縄文時代の竪穴住居跡で、浅いものは縄文時代の遺構であることが多く、竪穴状くぼみの多くは縄文時代の遺構だった。ただし、削平を受けている場合、縄文時代の遺構でも浅い場合や耕作土で埋められている状況も認められた。また、竪穴状くぼみ以外の場所でも縄文時代の竪穴住居跡や大形の土坑が確認され、縄文時代より前の古い時代の遺構は大形でもほぼ埋まっていた。

2 周辺の遺跡

根室市内には遺跡が約300カ所あり、北海道内でも遺跡数が非常に多い場所である。遺跡の種類別では集落跡が全遺跡数の3/2以上を占めている。これは、道東地方の冷涼な気候により埋りきらない竪穴が多いため、集落の存在を地表から確認しやすいことが主な原因といえる。遺跡の立地はオホーツク海に面する海岸段丘上もしくはやや内陸の川沿いの場所が多く、根室半島に沿って点々と遺跡が分布する。また、風連湖に注ぐ別当賀川沿いは特に遺跡の分布が密で、根室市の有形文化財に指定されている土偶と墓の副葬品が出土した縄文時代後期の遺跡である初田牛20遺跡も別当賀川沿いに位置する。時期は縄文時代、続縄文時代、縄文時代、オホーツク文化期、アイヌ文化期の各時期があり、比較的縄文時代、アイヌ文化期の遺跡が多い。縄文時代の代表的な遺跡として、穂香竪穴群の北東側約1.5kmに約350個の竪穴群からなる国指定史跡の西月ヶ岡遺跡があり、アイヌ文化期の遺跡としては、国指定史跡の根室半島チャシ跡群（24カ所）がオホーツク海側に点々と分布する。また、根室市内では旧石器時代の遺跡は今のところ見つかっていない。

穂香竪穴群周辺は遺跡が比較的多く分布し、根室湾に面する海岸沿いとやや内陸に入った小河川沿いの場所に遺跡が多い。遺跡の種類別では集落跡が最も多く、チャシ跡がそれに続く。貝塚は穂香竪穴群の北側約2km行ったところにあるキナトイシ貝塚（32）1カ所のみである。

時期別では、縄文時代の遺跡（6・7・15・33・68・147・262・278・286・289～291）が12カ所と最も多い。オホーツク海側にまばらに分布し、太平洋側にも若干（147・289）みられる。海岸沿いの立地が多いが、やや内陸に入る遺跡（6・7・15・262・291）もある。続縄文時代の遺跡は少なく、3カ所のみである。オホーツク海側に1カ所（15）、太平洋側に2カ所（19・71）みられる。立地は15・71が海岸沿いで、19はやや内陸に入る。縄文時代の遺跡（4・15・19・20・26・33・39～41）は9カ所である。方形のくぼみがみられる80・153も縄文時代の可能性が高い。立地は海沿いと内陸に分かれるが、穂香竪穴群や西月ヶ岡遺跡のように比較的規模の大きい遺跡はやや内陸に立地する。オホーツク文化期の遺跡は2カ所（3・7）のみである。3は北構保男氏により継続的に調査され、牙製婦人像等で有名な弁天島貝塚竪穴群である。アイヌ文化期の遺跡（11・12・14・16・21・22～24・27・28・30・31・36・37・42・66・72・85・86）の多くはチャシ跡で、オホーツク海側に多く位置する。チャシ跡は太平洋側の落石岬にも2カ所（31・72）みられる。またアイヌ期の墳墓が2カ所（16・36）確認されている。

（広田）

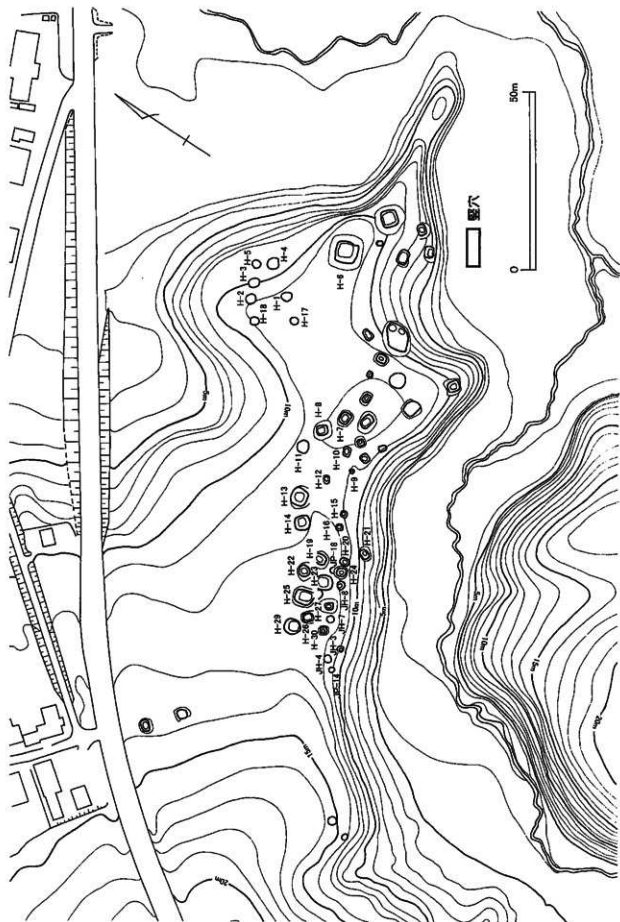


図 Ⅱ-3 遺跡周辺の地形と堅穴分布図 (H-1～5は平成5年度根室市教育委員会調査、H-6～30、JH-3・7・8は平成13・14年度道北考古学文化センター調査。番号の付いていないものは未調査の堅穴)

第Ⅲ章 遺構と遺物

1 擦文時代の遺構

今年度調査した擦文時代の遺構は竪穴住居跡13軒、集石1ヵ所、焼土4ヵ所である。いずれも擦文時代後期後半のものと考えられる。

住居跡は台地の南側に分布し、掘り揚げ土も良好に残存していた。住居の平面形は大きく方形（H-19・20・21・24・25・26・27）と長方形（H-22・23・30・31）に分かれる。方形のものはH-20を除いてカマドがあり、すべて中央に炉がある。H-19・25・27には土留め、あるいはベンチ状施設の杭列があり、H-19・25・26・27には焼土を伴う浅い掘り込みがみられる。長方形のものはH-29以外カマドを持たず、炉が長軸上に存在する。

竪穴は密集しているが重複せず、他の掘り揚げ土がくぼみに堆積しない。床面、覆土中とも遺物は少ないが、集石はH-26以外すべてでみられた。

掘り揚げ土の新旧関係から、平坦部の竪穴はおおむね東から西へ変遷していったと捉えられるが、14C年代とは整合していない。

（1）竪穴住居跡

H-19（図Ⅲ-2～5 図版1～4）

位置 H-47、48、I-47、48

規模 5.28×4.8/4.96×4.49/0.72m

調査

地表面において深い方形のくぼみとして確認された。十字に土層観察用ベルトを設定し、調査を行った。標高約12mの段丘縁辺部平坦面に所在し、平成13年度調査区に隣接する。昨年報告で、くぼみの南東側のⅣ層を主体とした土層から出土した砥石を、仮称H-19掘り揚げ土の遺物として掲載している（北埋調報170集図Ⅳ-9）。しかし土層観察の結果、Ⅳ層主体の土層の大部分は縄文時代の盛土（JM-5）であり、掲載砥石も盛土出土である可能性が高い。

住居跡の東と西側の壁にはⅡ・Ⅲ層間にⅣ層を主体とする黄褐色土（JM-5）が観察され、盛土をきって構築されたことがわかる。

掘り揚げ土

住居跡周辺に分布する。住居近くにⅣ層起源の掘り揚げ土が、その外側に黒色土とⅣ層主体の掘り揚げ土が広がる。層厚は厚い所で25cmである。西側ではH-25の掘り揚げ土に覆われる部分がある。

覆土

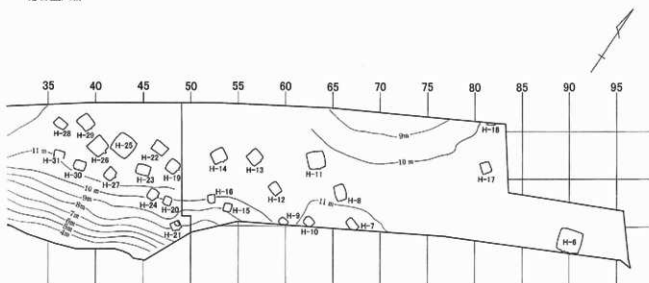
I層を除くと覆土の層厚は中央部で10cmに満たない。主体は黒色土である。壁際には掘り揚げ土流入土、崩落土の三角堆積がみられる。

形態

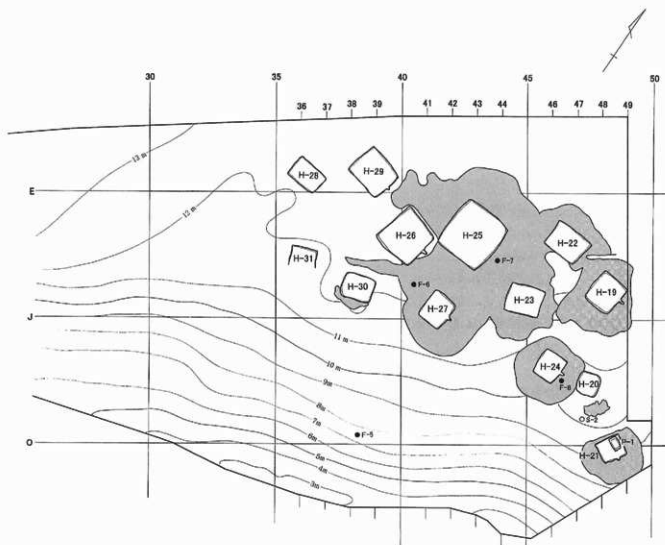
平面形は方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はⅣ層中に形成される。

付属遺構

カマド1ヵ所と炉1ヵ所、焼土を伴うピット、杭列が検出された。カマドは東壁中央部に潰れた状態で検出された。灰白色粘土のみで袖石はみられず、煙道部は斜め上方に比較的長く突き出し、細か



平成13・14年度擦文時代の遺構位置図



今年度調査の擦文時代の遺構位置図

図Ⅲ-1 擦文時代の遺構位置図



く割れた扁平礫が多数出土した。焼土は床面より一段高いV層中に形成され、焼けて固くしまり、細かな骨片が全体に混じる。カマドの南側では浅いくぼみに灰白色粘土が置かれていた。

炉は中央部床面にあり（HF-1）、掘り込みはない。焼土中には細かな骨片がみられたが、同定できる資料はなかった。

焼土を伴うピットが3ヵ所みつまっている（HF-2～4）。いずれも床面から5cm程掘り込まれる。HF-4では明確な焼土はなく、黒褐色の覆土中に焼土粒が全体にみられた。またHF-2・4は後述の杭列の柱穴を切って構築されている。

北、西壁際に約1.5m間隔で杭列とみられる小柱穴があり、それに対になるように約70cm内側にもほぼ等間隔で小柱穴がみられる（HP-1～15）。柱穴の直径は5cm程で、いずれも先端は尖る。壁際70cm程は床面が汚れていないため、板敷きなどのベンチ構造があった可能性がある。主柱穴はみられなかった。

カマドの焼土とHF-1について土壌をサンプリングし、フローテーション作業を行なった。カマド焼土から得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が880±40年BP（較正暦年代1030-1250AD）という結果がでている。

遺物

床面、床直上では礫が散漫に分布する。集石が2ヵ所で確認できた（集石1・2）。集石の礫は長さとの差はあまりないが、いずれも棒状礫の範疇に入るものであろう。集石1では比較的大型のメノウ原石がみられた。また北西角から長さが30cmを超える棒状の礫が検出された。集石1は35点、集石2は25点について計測し、グラフを作成している。

遺物はⅦ群土器1点、礫419点、メノウ原石1点である。

1はⅦ群土器の口縁部片である。覆土出土で横位の短刻線が施される。

時期

遺物から縄文時代後期後半と考えられる。掘り揚げ土の観察によりH-22より古いと考えられる。

（愛場 和人）

H-20（図Ⅱ-6～8、図版5～7）

位置 L-46・47、M-47

規模 3.58×3.38/3.49×3.27/0.5m

調査

台南東側縁辺部、標高約10mの緩斜面上に位置する。発掘前の状態で浅い方形の竪穴として確認した。落ち込みの最も深い部分を基準に十字の土層観察用ベルトを設定して掘り下げた。竪穴周辺の土層の遺存状況は良好で、竪穴の南東側で掘り揚げ土が検出された。西側約3mにはH-24があるが、新旧関係は不明である。また、H-20の下部には縄文時代後期の盛土であるJM-2が存在し、H-20はJM-2の一部を壊して作られている。

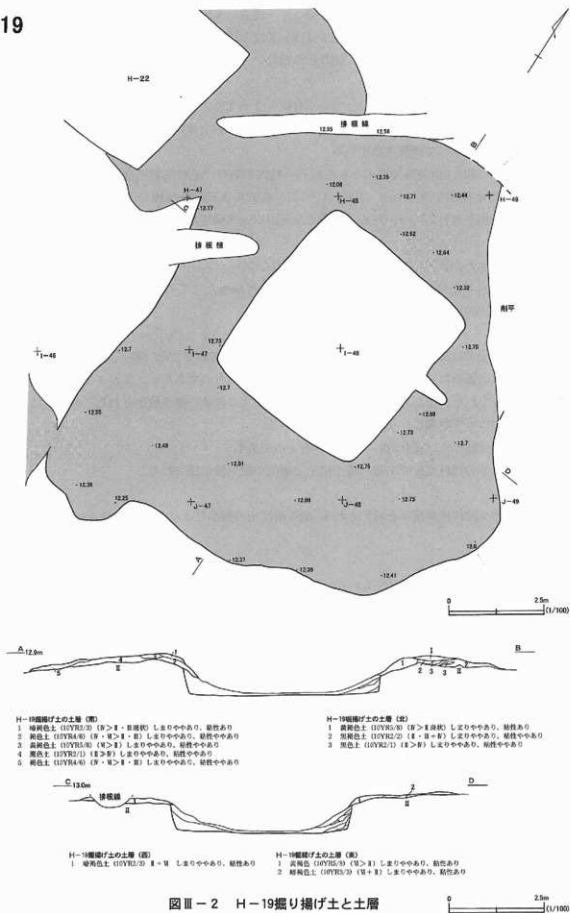
掘り揚げ土

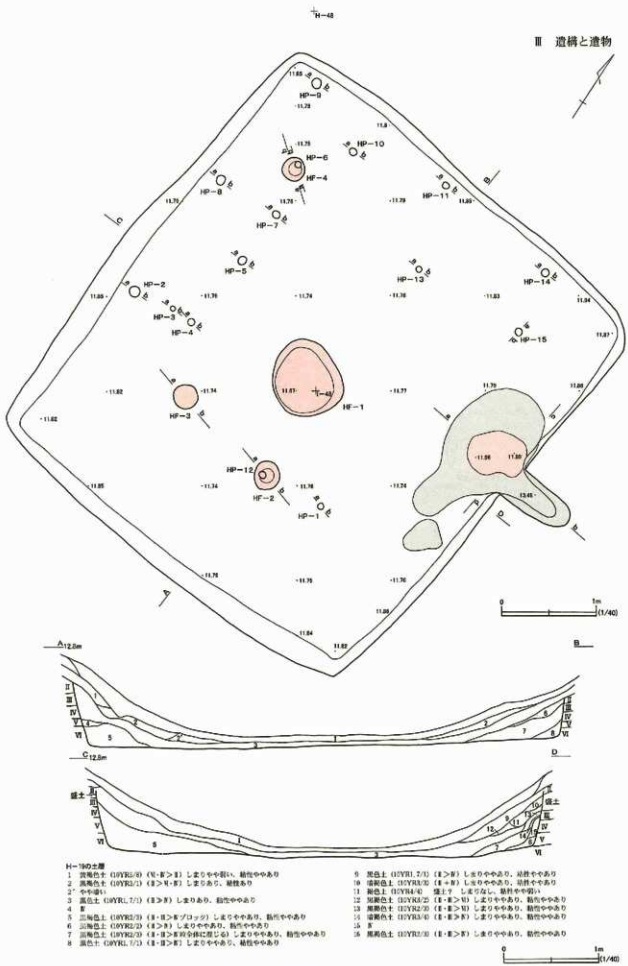
竪穴から南東側約1mの場所で検出された。平面形は不整形で、長さ約4m、幅約2m、厚さは最大で約15cmを測る。Ⅱ層を主体とする黒色の土層である。

覆土

自然堆積で、壁際に比べて中央付近の覆土は浅くなっている。Ⅰ層を除くと中央付近の覆土の厚さは約7cmである。土層は黒褐色を呈し、Ⅱ層が主体でⅢ層が混ざる。またⅣ層を少量含む。

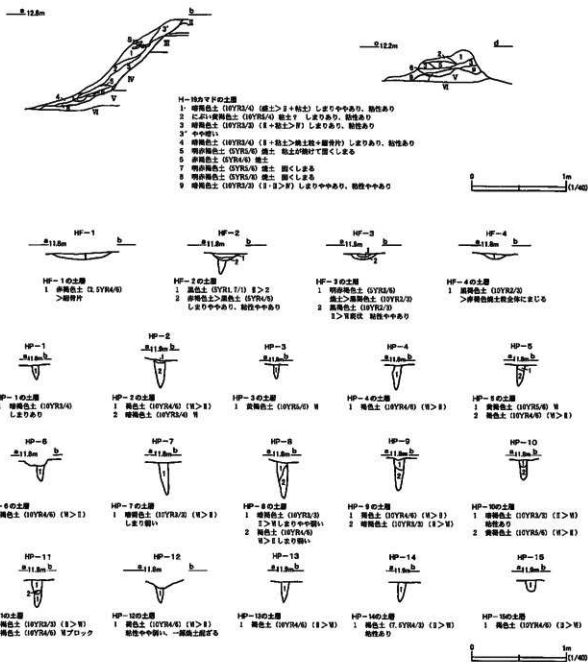
H-19



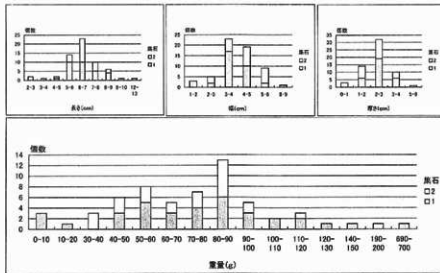
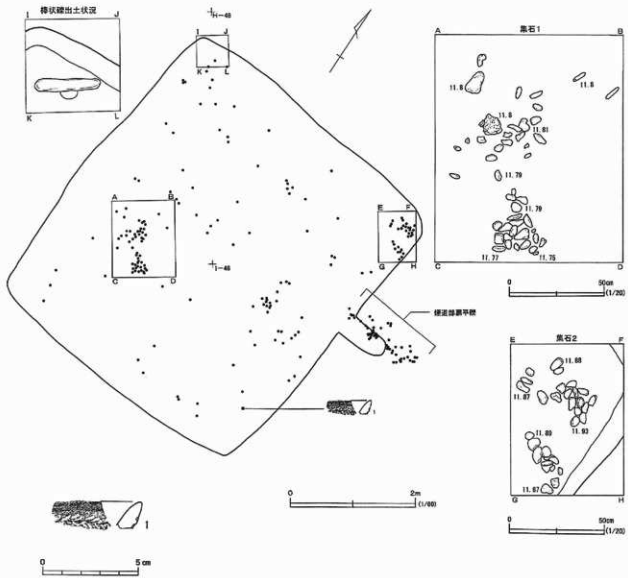


図Ⅲ-3 H-19平面図と土層

穂香壑六群



図Ⅲ-4 H-19カマド、HF、HP



図Ⅱ-5 H-19遺物分布図、遺物、棒状礫グラフ

形態

平面形は隅丸方形で、床面はほぼ平坦である。深さは浅く約50cmである。壁の立ち上がりは、南側以外に急角度で、斜面下部に位置する南壁はやや崩落し緩やかに立ち上がる。掘り込み面はⅡ層上面で、床面はJM-2の盛土中に作られている。

付属遺構

炉が1ヵ所検出された。炉(HF-1)は床面中央よりやや南側に位置し、平面形は不整形である。皿状に掘り込んだ炉で、焼土の残りは悪く、焼土粒が検出された程度である。HF-1上面及び周辺の土壌のサンプリングを行い、フローテーションによる微細遺物の収集を行なったところ、アカザ属とブドウ科の炭化植物種子が検出された。また、フローテーションで検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正C14年代が930±40年BP(校正暦年代1020-1200AD)という結果を得た。

炭化物・炭化材出土状況

炭化材は検出されなかったが、床面東側で薄い炭化物のまとまりが2ヵ所検出された。西側の炭化物集内には薄い骨片の集中部が認められ、北側からは炭化材が検出された。骨片集中部の土壌を採取し、フローテーションにより微細骨片を収集したが、微小のため詳細は不明である。

遺物

Ⅱ群土器、フレイク、原石、礫が207点出土している。量的には礫が194点と出土遺物のほとんどを占める。層別では床面直上出土の遺物が大半で、覆土と床面の遺物は少量である。平面形の分布は竪穴北西部がやや密である。Ⅱ群土器は覆土から1点、床面直上から5点出土し、全て接合した(図Ⅲ-8-1)。フレイクは覆土、床面から4点出土している。原石は床面から1点出土している。床面出土のフレイク、原石はH-20の下部にあるJM-2に伴うものと考えられる。また、床面から有孔礫2点が近接した状態で出土した。集石は床面直上の北西側で2ヵ所検出された(図Ⅲ-7)。集石1は38点、集石2は53点を数え、どちらも棒状礫を主体とする。集石1は西側壁付近の約1mの範囲に分布し、東側にややまとまりが認められる。集石2は竪穴中央より北側の約0.9mの範囲内に分布する。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-8)。計測した礫の点数は集石1が29点、集石2が45点である。棒状礫は、どちらも長さ6~9cm、幅3~5cm、厚さ2~4cm、重さ90~130gのものが主体で構成され、集石による違いはあまりみられない。

1はⅡ群土器で、深鉢の口縁~胴下半部である。口縁はやや外反し、胴下半部で大きくすばむ器形である。文様帯の上端には横位の短刻線が羽状に2段施され、下端には横走沈線が施される。文様帯内には斜位の沈線により菱形と山形が組み合わされた文様が描かれている。表面、裏面共に黒褐色を呈する。2・3は有孔礫。3については自然孔を利用し、人為的に孔があげられている。

時期 床面直上出土の遺物から擦文時代後期後半と考えられる。

(広田)

H-21 (図Ⅲ-9~13、図版8~10)

位置 N-47・48、O-47・48

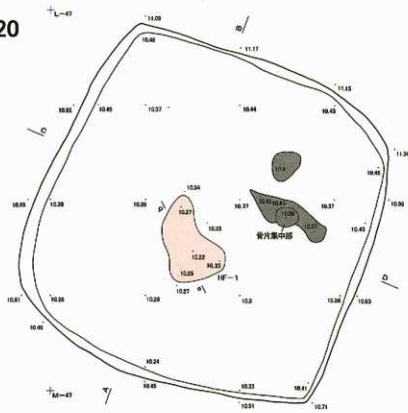
規模 3.93×3.77/3.55×3.36/0.88m

調査

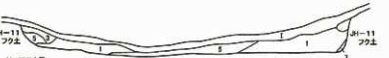
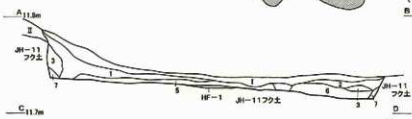
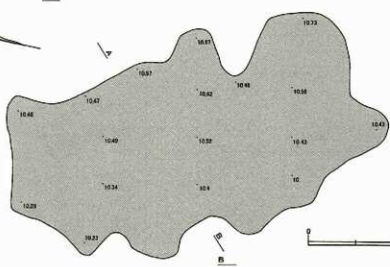
台地南東側縁辺部に位置し、標高約9mの緩斜面に位置する。発掘前の状況で、方形の深い竪穴として確認した。落ち込みの最も深い部分を基準に十字の土層観察用ベルトを設定し、掘り下げた。竪穴周辺の土層の遺存状況は良好で、竪穴の周囲では掘り揚げ土が検出された。また、竪穴内に擦文時代の土坑(P-1)が構築されている。新旧関係はP-1が新しく、H-21の床面を一部壊している。

H-20

III 遺構と遺物



- H-20の掘削が土の上層
- 1 赤褐色土 (OYR2/2) (E+R>F+M)
しまりや中あり 腐敗中やあり
 - 2 赤褐色土 (OYR2/2) (E>R>F)
しまりや中あり 腐敗中やあり
 - 3 赤褐色土 (OYR2/2) (E>R>F+M)
しまりや中あり 腐敗中やあり



- H-20の土層
- 1 赤褐色土 (OYR2/2) (E>R)
 - 2 赤褐色土 (OYR2/2) (E+R>M)
 - 3 赤褐色土 (OYR2/2) (E>R)
 - 4 黄褐色土 (OYR2/2) (E+R>M)
 - 5 黄褐色土 (OYR2/2) (E+M)
 - 6 黄褐色土 (OYR2/2) (E+R>M)



- HF-1の土層
- 1 赤褐色土 (OYR2/2) (E>R) しまりあり 腐敗中やあり



図 III-6 H-20平面図と土層、掘り揚げ土と土層、HF

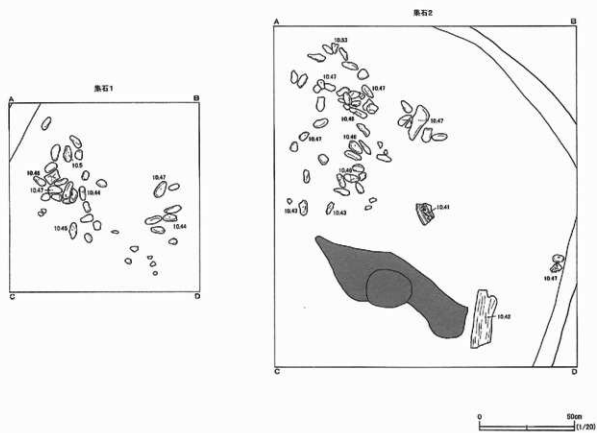
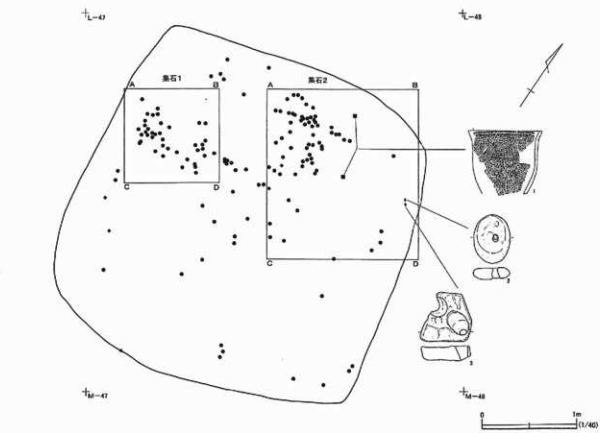
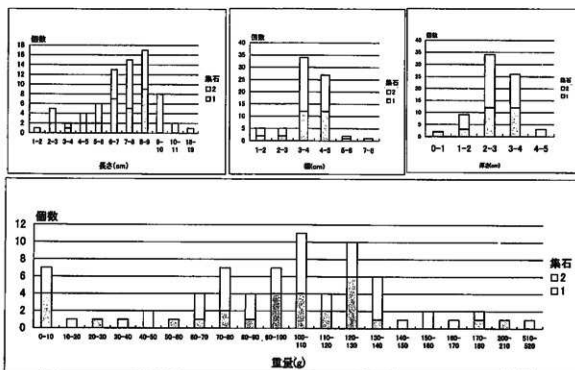
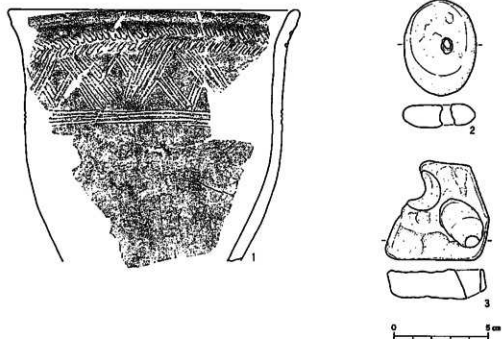


圖 III - 7 H-20遺物分布圖



図Ⅱ-8 H-20遺物、棒状線グラフ

掘り揚げ土

平面形は不整形で竪穴を全周する。地形に沿って分布し、竪穴西側は少なく、斜面下方向の東側に大きく広がっている。また、東側は一部調査範囲外に広がっている。幅は西側が約0.2m、北・南側が約1.6m、東側が約2mである。厚さは北側の斜面上部は約10cmと薄く、南側の斜面下部は約20cmと厚くなり、低い側により多くの土を盛っている。土層はⅡ・Ⅳ・Ⅵ層が主体で、Ⅲ層が少量混ざる。色調は黒褐色、褐色である。また、竪穴壁際に少量の流れ込みが認められる。

覆土

竪穴部分が埋まりきっていないため、壁際に比べて中央付近の覆土は浅くなっている。中央部では、Ⅰ層を除く浅い部分が7～8cmで、場所によってはⅠ層の直下が床面となる部分もある。土層はⅡ・Ⅵ・Ⅳ層が主体で、色調は黒褐色、褐色が多い。また、西壁付近では壁の崩落により、一部Ⅱ・Ⅲ層の流れ込みが認められる。

形態

平面形はほぼ正方形である。床面北側はP-1により壊されている。床面は平坦で、壁の立ち上がりは急角度である。掘り込み面はⅢ層上面で、床面はⅥ～Ⅶ層中に作られている。

付属遺構

カマド1基と炉2カ所が検出された。カマドは東壁中央よりやや北側に構築されている。竪穴周辺の土層の遺存状況は良好で、カマドの構築に使った粘土及び礫が検出された。粘土は黄褐色と灰白色の2種類あり、燃焼部側には黄褐色粘土が多く、煙道部側は灰白色粘土が認められる。燃焼部の粘土内及び直上からは、袖石と考えられる板状の礫が検出された。煙道は長さ約0.4m、幅約0.5mで、幅に比べて長さが短い点の特徴である。煙道の長軸方向は竪穴の長軸方向とほぼ一致し、長軸断面は燃焼部から緩やかに立ち上がる形状である。燃焼部からは不整形のよく焼けた焼土が検出された。中央付近がやや浅く窪み、焼土直下からは黒褐色土が検出されている。焼土直上からは炭化物粒と骨片が検出されている。

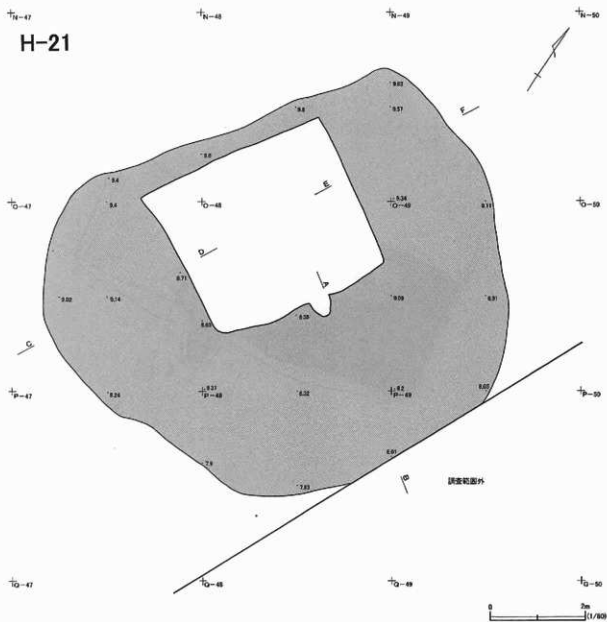
炉は掘り込みをもたない地床炉で、床面のほぼ中央(HF-1)と西側(HF-2)で検出された。平面形は2カ所とも不整形で、厚みがありよく焼けている。HF-2の上部からは多くの炭化物粒が検出された。カマドと炉周辺の土壌に関しては、フローテーションにより微細遺物の収集を行ったが、動植物遺存体は検出されなかった。検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が900±40年BP(較正暦年代1030-1230AD)という結果を得た。

炭化物・炭化材出土状況

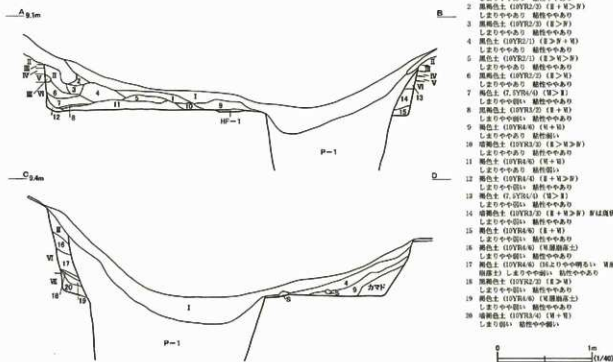
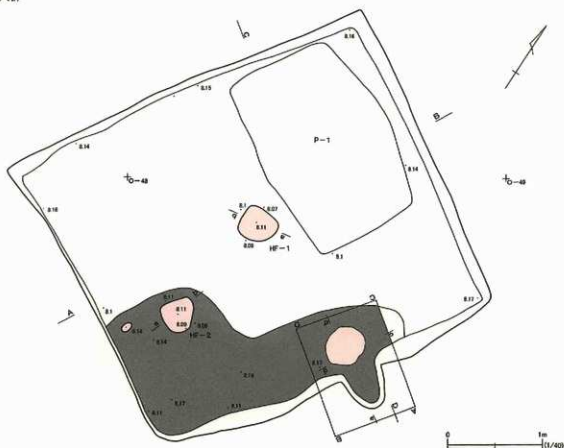
覆土中位から流れ込みと考えられる炭化材が検出された(図版10-5)。また、カマド付近では床面から南壁にかけて薄い炭化物のまとまりが検出された。フローテーションにより微細遺物の収集を行ったが、動植物遺存体は検出されなかった。

遺物

Ⅳ群土器、Ⅶ群土器、フレイク、台石、礫が243点出土している。量的には礫が194点と出土遺物のほとんどを占める。層別では床面出土の遺物が大半で、覆土と床面直上の遺物は少量である。遺物の平面分布は竪穴北西部がやや密である。土器はⅣ群土器1点、Ⅶ群土器32点の計33点が出土している。Ⅳ群土器は流れ込みと考えられる。Ⅶ群土器は20点が床面から出土している。床面、カマド、覆土、掘り揚げ土、周辺包含層出土のものが65点接合した。(図Ⅲ-13-1)。フレイクは覆土から1点、台石は床面直上から2点出土している。集石は竪穴南側で2カ所検出された。検出層位は集石1が床面直上～床面で、集石2は床面である。集石1は49点、集石2は31点を数え、どちらも棒状礫を主体



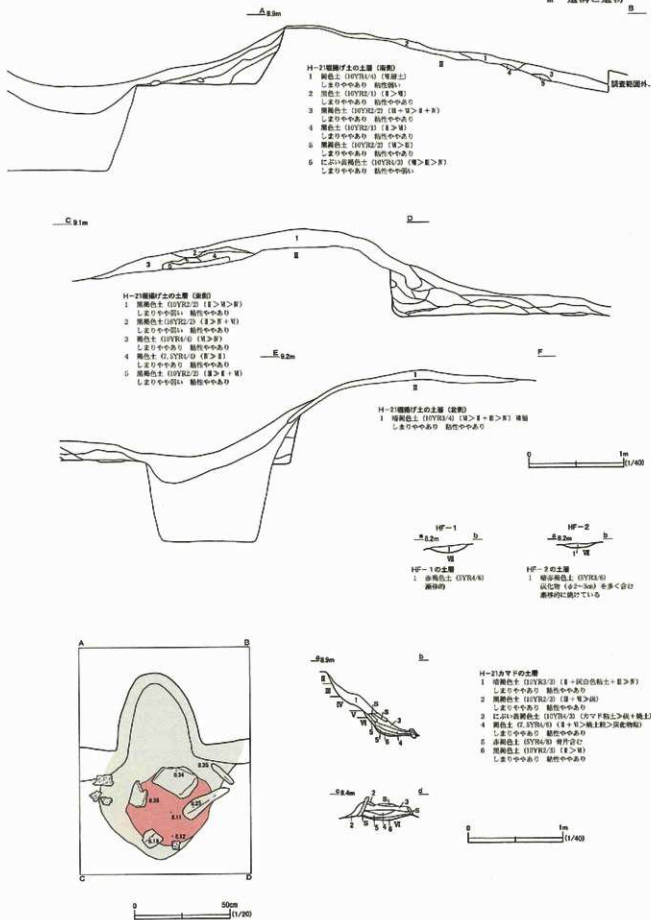
図Ⅲ-9 H-21掘り揚げ土平面図



H-21の土層

- 1 黄褐色土 (IYR2/2) (E>F+H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 2 黄褐色土 (IYR2/2) (E+H>F)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 3 黄褐色土 (IYR2/2) (E>F)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 4 褐色土 (IYR2/1) (E>F+H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 5 褐色土 (IYR2/1) (E>H>F)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 6 黄褐色土 (IYR2/2) (E>H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 7 褐色土 (IYR4/0) (H>E)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 8 黄褐色土 (IYR2/2) (E+H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 9 褐色土 (IYR6/0) (H+H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 10 黄褐色土 (IYR2/2) (E>H>F)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 11 褐色土 (IYR6/0) (H+H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 12 褐色土 (IYR6/0) (E+H>F)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 13 褐色土 (IYR3/0) (H>E)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 14 黄褐色土 (IYR3/2) (E+H>F) 厚は腐敗
しまりや中あり 雑草や中あり
- 15 褐色土 (IYR6/0) (E+H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 16 褐色土 (IYR6/0) (H層腐敗土)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 17 褐色土 (IYR6/0) (H土の中間層) 厚層
腐敗土 しまりや中あり 雑草や中あり
- 18 黄褐色土 (IYR2/2) (E>H)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 19 褐色土 (IYR6/0) (H層腐敗土)
しまりや中あり 雑草や中あり
- 20 黄褐色土 (IYR3/0) (H+H)
しまり強い 雑草や中あり

図 III-10 H-21平面図と土層



図Ⅲ-11 H-21掘り揚げ土の土層、HF、カマド

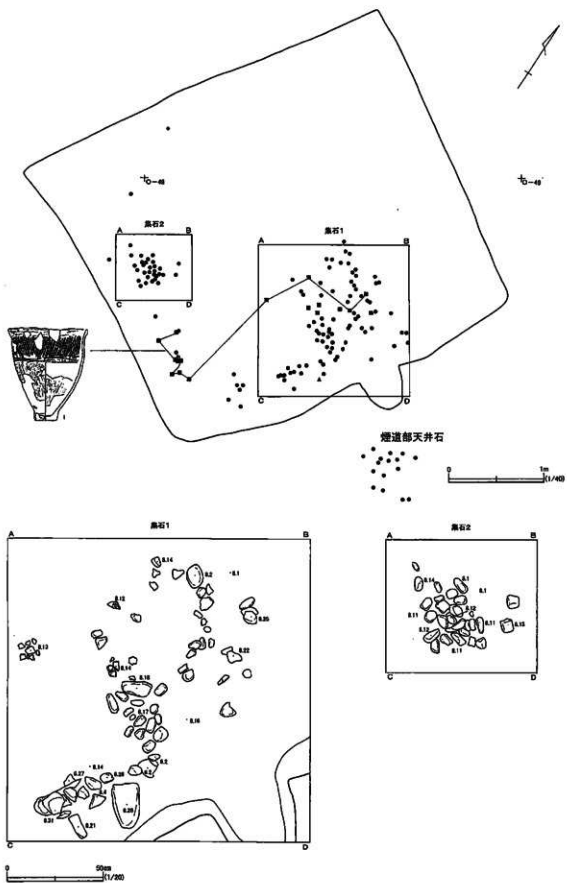
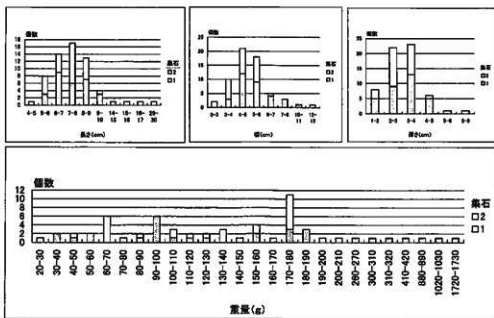
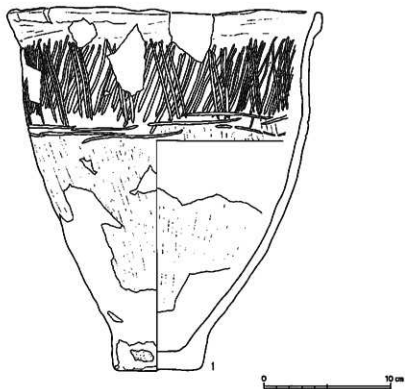


圖 12-12 H-21遺物分布圖



図Ⅱ-13 H-21遺物、棒状職グラフ

とする。集石1はカマド周辺の約1.6mの範囲で分布し、カマド南側にややまとまりが認められる。集石2は床面南側約0.7mの範囲内にまとまった状態で分布している。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-13)。計測した礫の点数は集石1が33点、集石2が28点である。長さは共に5~9cm、幅は集石1が3~6cm、集石2が4~7cm、厚さは集石1が2~4cm、集石2が1~5cm、重さは集石1が20~1730g、集石2が40~180gのものが主体で、重さに関して大きな違いがある。

1はⅡ群土器の復元個体である。口縁部はやや外反し、胴中部からすばまる器形である。口縁~胴上半部に文様帯があり、下端を横走沈線によって区画している。文様帯は右上がりの斜位の沈線を地とし、さらに3本単位の左上がりの沈線が間隔を置いて加えられている。色調は褐色を基調とし、胎土は砂礫を含む。焼成は良い。

時期 床面出土の遺物から擦文時代後期後半と考えられる。(広田)

H-22 (図Ⅲ-14~16 図版11~13)

位置 F-45、46、47、G-45、46、47

規模 5.91×4.5/5.68×4.26/0.59m

調査

標高約12mの段丘縁辺平坦面に所在する。地表面より長方形の住居跡と予想でき、長軸と短軸にベルトを設定し調査を進めた。床面より3~5cm程上の覆土から焼土1カ所(HF-1)、貝集中1カ所が検出された。これらは住居と直接関係しない可能性があるが、住居に伴うものとして扱った。

掘り揚げ土

住居跡周囲に分布する。層厚は厚いところで10cm程度である。ほぼⅡ層上面で床面となるため、掘り揚げ土にはほとんどⅡ層が混じらない。H-25の掘り揚げ土に覆われる部分がある。

覆土

牧草地耕作土起源のⅠ層が30cm程堆積しているが、本来の覆土は中央部で10cm程度である。壁際には崩落土の三角堆積がみられる。

形態

平面形は長方形で、四隅は角張る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はⅡ層をあまり掘り込んでおらず、平坦である。

付属遺構

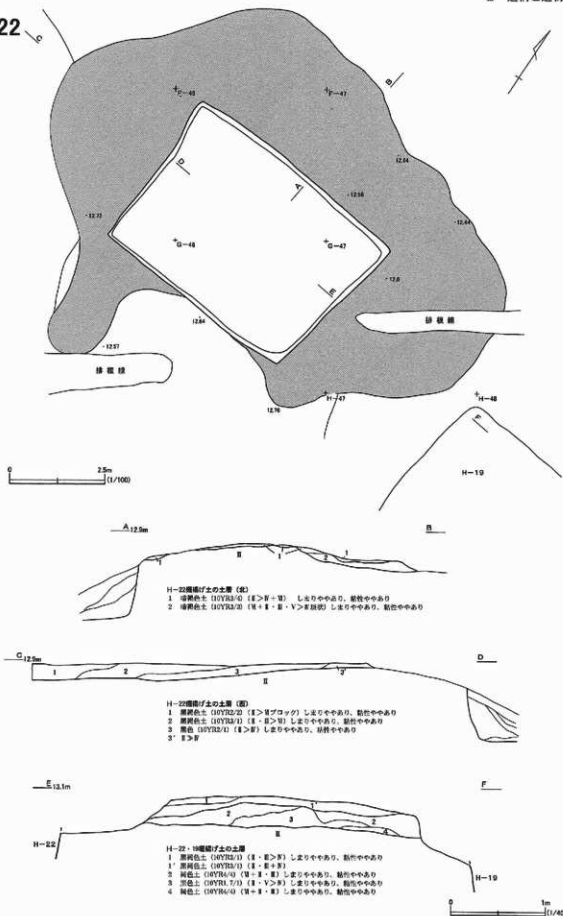
住居跡の長軸上に焼土が2カ所、床面から検出された(HF-2・3)。HF-3では焼土中に細かな骨片、炭化物が混じる。

柱穴は四隅とそれぞれその中間の壁際に8カ所確認された(HP-1~8)。床面からの深さは50~60cm程で、先端が尖っていることから打ち込み杭と考えられる。またHPとはしなかったが、HF-2・3の中間に浅いくぼみがみられた。

覆土中から貝の集中と焼土が検出されたが、これらは住居廃棄後のくぼみを利用したものとも考えられる。貝の集中は大型の扁平礫の近くにみられ、貝の種類はアサリとウバガイである。殻頂部を数えて個体数を算出したところ、アサリは17個(右14、左17)、ウバガイは1個体であった。HF-1周辺には炭化材がみられた。

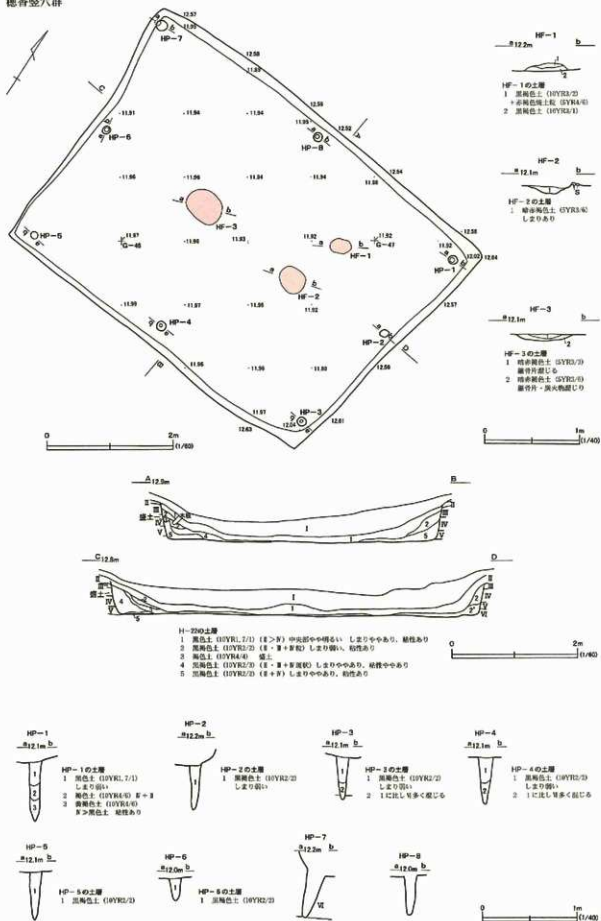
HF-2・3について土壌をサンプリングし、フローテーション作業を行なった。HF-3から得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、1010±40年BP(校正暦年代980-1050、1100-1140AD)という結果がでている。

H-22

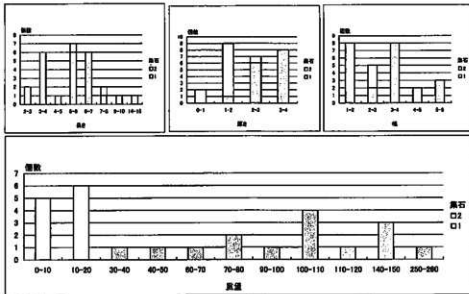
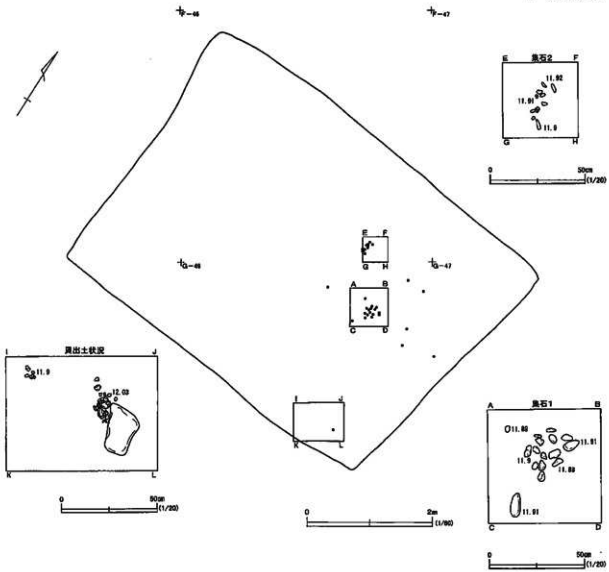


図Ⅲ-14 H-22掘り揚げ土と土層

穂香整穴群



図III-15 H-22平面図と土層、HF、HP



図Ⅲ-16 H-22遺物分布図、棒状圖グラフ

遺物

住居跡東側から礫が34点出土している。

床面直上から集石1・2が確認された。集石1・2はHF-2のすぐ東側で検出され、集石2は、20g以下の小型の細長い礫で構成される。いずれも十数点の少量のまとまりである。集石1は15点、集石2は11点について計測し、グラフを作成している。

時期

縄文時代後期後半で、掘り揚げ土の観察からH-25より古いと考えられる。(愛場)

H-23 (図Ⅲ-17~20 図版14~16)

位置 H-44、45、I-44、45

規模 5.59×4.55/5.43×4.4/0.49m

調査

標高約12mの段丘縁辺平坦部に所在し、地表面において方形のくぼみとして確認された。Ⅵ層中の焼土確認面を床面としたが住居南側はやや色調の暗い褐色の粘質土がⅥ層を覆っていた。これを貼り床としてとらえた。また壁際のほぼ全周に溝状の暗褐色土の落ち込みがみられた。昨年度調査のH-17の周溝と同様のものと考え、調査を進めた。

掘り揚げ土

住居跡周囲に分布する。住居西側角に比較的厚くⅥ層主体の掘り揚げ土がみられるが、その他は薄く、斑状に存在する。

覆土

I層を除くと覆土の層厚は中央部では10cmに満たない。壁際には崩落土の三角堆積がみられる。覆土9・10は貼床と考えられる。

形態

平面形は長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はⅥ層上面まで掘り込まれ、やや南へ傾斜するが、貼床により平坦になっている。

付属遺構

炉1カ所と柱穴、周溝が検出された。

炉は床面ほぼ中央から検出され、掘り込みはない。周溝は壁際を東側を除き全周する。

溝は幅10~35cmで、深さは10~20cmで中央部が深い。土留め板などを埋め込んだ跡と推測される。溝を掘り込んで出た土は南側の貼床として供給されたと考えられる。

柱穴は長軸の壁際に6カ所確認された(HP-1・3~7)。先端が尖っていることから打ち込み杭と考えられる。東壁の2カ所では柱の打ち直しがみられ(HP-1・3)、いずれも柱を抜いた後、粘質土を詰めて、ほぼ同位置に新たに構築されている。また東壁中央部では周溝が切れ、先端が尖る小柱穴がみられた(HP-2・8・9)。

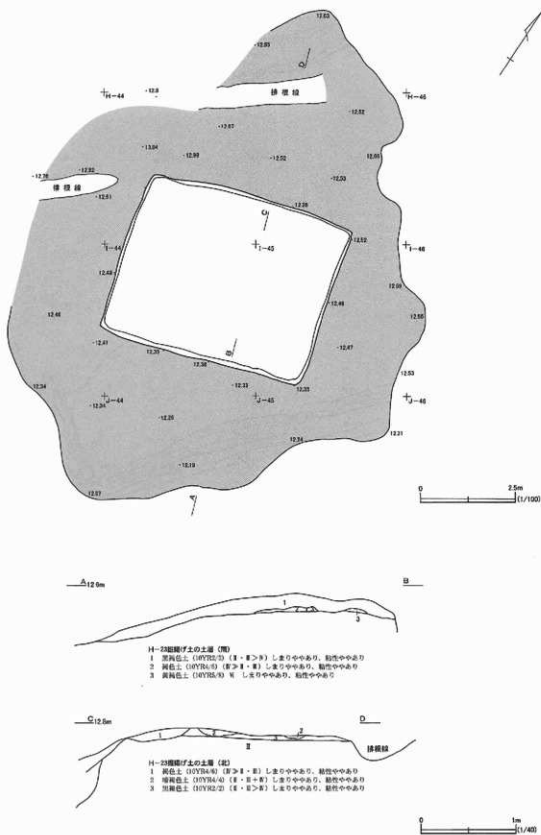
HF-1について土壌をサンプリングし、フローテーション作業を行なった。得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、920±40年BP(校正暦年代1020-1210AD)という結果がでている。

遺物

遺物はⅣ群土器3点、Ⅴ群土器3点、Ⅵ群土器16点、礫135点が出土している。

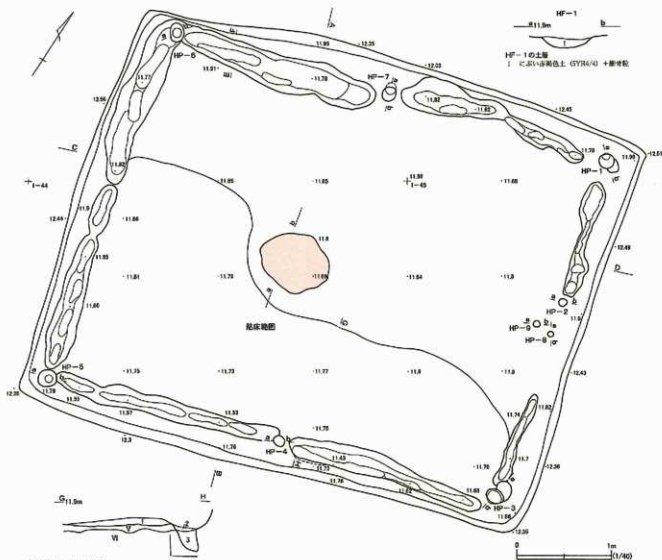
集石が1カ所確認され、礫の一部が溝に流れ込んでいた。50点について計測し、グラフを作成している。1は住居東側床面で出土している。

H-23



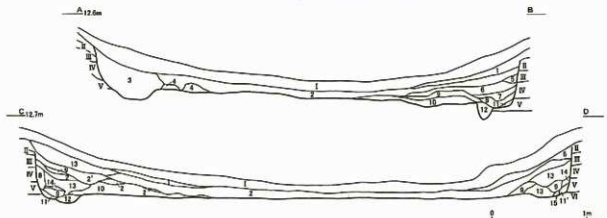
図Ⅲ-17 H-23掘り土と土層

穂香塚穴群



H-23の土層 (南・北横)
 1 黄褐色土 (SYR5/2) (E・V層状構造) しまりあり、粘性あり
 2 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性や中あり
 3 褐色土 (SYR4/2) (E'・E層) しまりや中あり、粘性あり

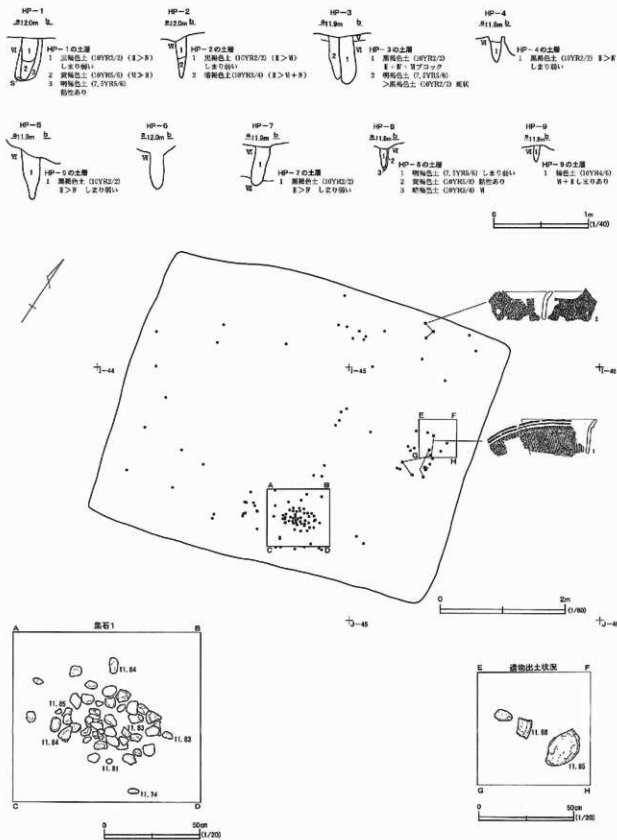
E-H-24の土層 (西)
 1 黄褐色土 (SYR3/2) (E・E'層) 褐色土 (SYR6/2) 混入しまりあり、粘性あり
 2 黄褐色土 (SYR2/2) (E'層) しまりあり、粘性あり
 3 褐色土 (SYR4/2) (E) しまりや中あり、粘性あり



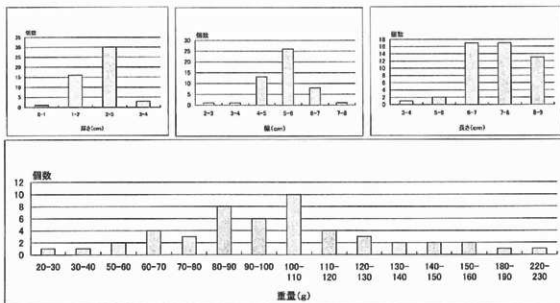
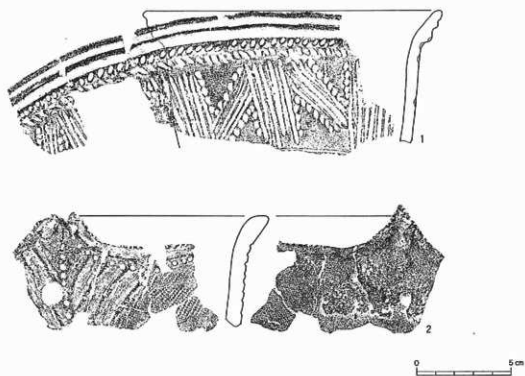
H-23の土層
 1 黄土土 (I, SYR2/2) (E'層) しまりあり、粘性あり
 2 黄褐色土 (II, SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性や中あり
 3 黄褐色土 (SYR2/2) (E'層) しまりや中あり、粘性や中あり
 4 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性や中あり
 5 褐色土 (I, SYR2/2) (E・E'層状構造) しまりや中あり、粘性や中あり
 6 黄褐色土 (I, SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性や中あり
 7 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性や中あり
 8 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性や中あり

9 黄褐色土 (SYR6/2) (E・V層) しまりや中あり、粘性あり
 10 E'に混じりや中あり
 11 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) II' E'層) しまりや中あり、粘性や中あり
 12 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性あり
 13 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性あり
 14 黄褐色土 (SYR2/2) (E・E'層) しまりや中あり、粘性あり
 15 E

図 III-18 H-23平面図と土層、HF



図Ⅲ-19 H-23HP、遺物分布図



図Ⅲ-20 H-23遺物、棒状碟グラフ

1はⅦ群土器である。口縁～胴上半部の破片で、口縁部には横位の深い沈線が2本施され、その下部には2段の刺突列が羽状に運る。口縁部と胴部の間には段を有する。文様帯下部は横走沈線により区画され、文様帯内には5本単位の右上がりの沈線と6本単位の縦位の沈線を組合せることにより幾何学的な文様が描かれている。色調は黒褐色で、焼成は良好である。2はⅦ群土器の口縁部～胴部片である。

時期

捺文時代後期後半で、掘り揚げ土の観察からH-25より古いと考える。

(愛場)

H-24 (図Ⅲ-21～23、図版18～20)

位置 K-45・46、L-45・46

規模 4.53×4.4/3.97×3.30/0.68m

調査

台南東側縁辺部に位置し、標高約10mの緩斜面上に位置する。発掘前の状況で深い方形の落ち込みとして確認した。長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた。竪穴周辺の土層の遺存状況は良好で、竪穴の周囲では掘り揚げ土が検出された。西側約3mにはH-20があるが、新旧関係は不明である。また、H-24の下部には縄文時代後期の盛土であるJM-2が存在し、H-24はJM-2の一部を被して作られている。

掘り揚げ土

平面形は不整の五角形に近く、竪穴を全周している。幅は1～1.7m、厚さは0.05～0.18mで、竪穴西側が厚い。H-20の掘り揚げ土との切り合い関係はないが、H-24の掘り揚げ土はH-20の西壁際まで広がっている。土層の色調は黒褐色、黒色である。Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ層が主体で、Ⅳ層が少量混ざる。

覆土

竪穴部分が埋まりきってないため、壁際に比べて中央付近の覆土は浅くなっている。Ⅰ層を除くと、中央付近は約22cmである。覆土の色調は黒褐色、暗褐色を呈し、土はⅡ・Ⅲ層が主体で、Ⅳ・Ⅵ層が少量混じる。

形態

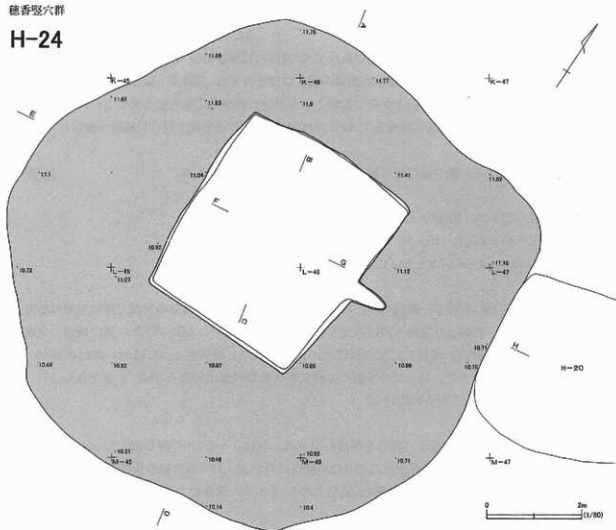
平面形は1辺約4mの隅丸正方形に近い。床はほぼ平坦で、壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。掘り込み面はⅠ層上面で、床はⅥ層中に構築される。

付属遺構

カマド1基と炉1ヵ所が検出された。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、つぶれた状態で検出された。カマドの構築に使った灰白色粘土及び礫が検出され、灰白色粘土は燃焼部周辺及び煙道をほぼ覆い、厚さは約3～8cmである。粘土内及び直上からは、袖石と考えられる板状の礫が折り重なった状態で検出された。煙道は長さ約1.5m、幅約0.9mである。煙道の長軸方向は竪穴の長軸方向とほぼ一致し、長軸断面は燃焼部から緩やかに立ち上がる。燃焼部では不整形のよく焼けた焼土が検出された。焼土の直上からは多量の炭化物粒と少量の骨片が検出された。

炉は床面ほぼ中央に1ヵ所(HF-1)検出された。平面形はほぼ楕円形である。焼土直上及び周辺からは微小な炭化物・骨片が検出された。カマドと炉周辺の土壌に関しては、フローテーションにより微細遺物の収集を行った結果、獣骨と魚骨が検出されたが、細片のため種や部位の同定はできなかった。検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が950±40BP(較正暦年代1010-1080BP)という結果を得た。

H-24



H-24掘削土の土層 (北側)

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) (E > F > M)
しまりややあり 粘性ややあり

H-24掘削土の土層 (南側)

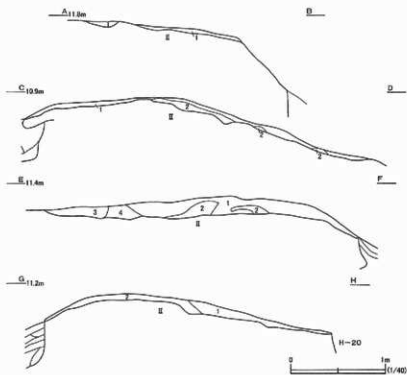
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) (E > M > F > N)
しまりややあり 粘性ややあり
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) (E > M > F > N)
しまりややあり 粘性ややあり

H-24掘削土の土層 (西側)

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) (E > M > F > N)
しまりややあり 粘性ややあり
- 2 黒色土 (10YR2/1) (E > M)
しまりややあり 粘性やや強い
- 3 黒色土 (10YR2/1) (E > M > F > N > M)
しまりやや強い 粘性やや強い
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) (E > F > M > N)

H-24掘削土の土層 (東側)

- 1 黒色土 (10YR2/1) (E > M > N)
しまりややあり 粘性やや強い
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) (E > M > F > N > M)
しまりややあり 粘性やや強い



図Ⅲ-21 H-24掘り揚げ土と土層

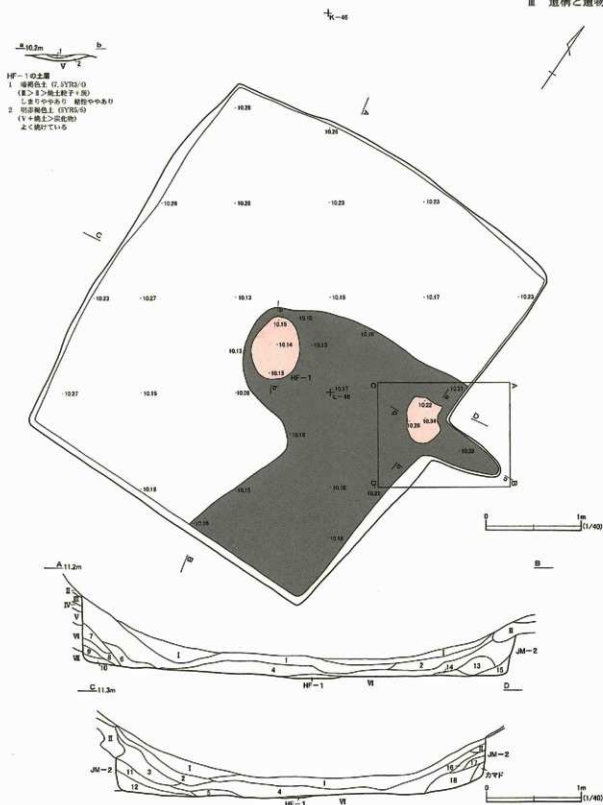
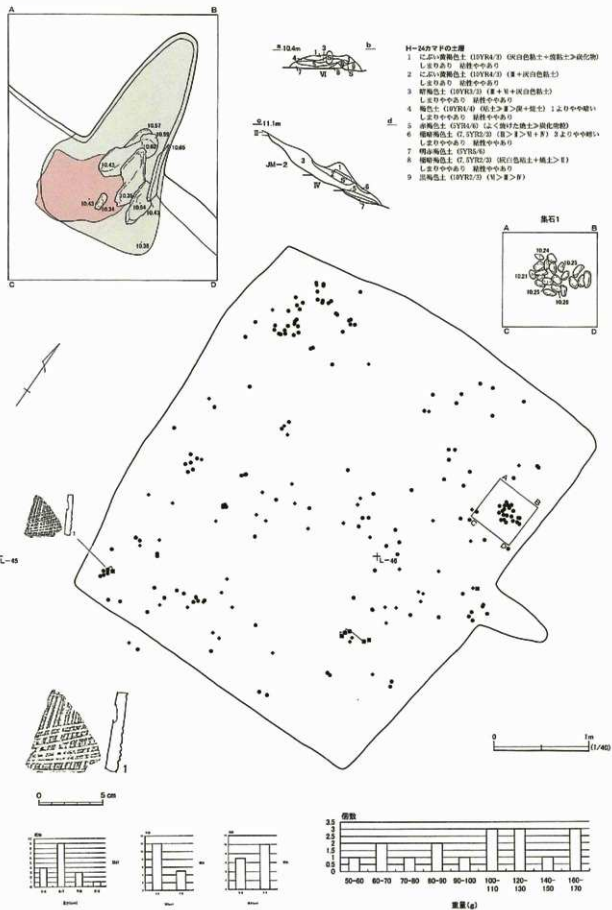


図 III-22 H-24平面図と土層、HF

穂香整穴群



図Ⅲ-23 H-24カマド、遺物分布図、遺物、棒状疎グラフ

炭化物・炭化材出土状況

炭化材は検出されなかったが、カマド、HF-1から南壁付近にかけて薄い炭化物のまとまりが検出された。フローテーションにより微細遺物の収集を行ったところ、炭化植物種子としてシソ属1粒が検出された。

遺物

Ⅳ群土器、Ⅴ群土器、フレイク、原石、礫が354点出土している。量的には礫が289点と出土遺物のほとんどを占める。層位別では覆土と床面出土の遺物が大半で、床面直上の遺物は少量である。平面では特にまとまりはみられず、ほぼ竪穴全体から出土している。土器はⅣ群土器2点、Ⅴ群土器8点の計10点が出土しているが、Ⅳ群土器は覆土出土で流れ込みと考えられる。図示していないが、Ⅴ群土器8点の内、床面直上出土の3点と床面出土の3点の計6点が接合している。フレイクは覆土～床面にかけて出土している。原石はメノウ製で、覆土から1点と床面直上から2点出土している。フレイクと原石は、H-24の下部にJM-2があるため、JM-2に伴うものと考えられる。集石はカマド北側の東壁付近の床面で1ヵ所検出され、約0.4mの範囲内に分布する。点数は20点で、棒状礫を主体とする。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-23)。計測した礫の点数は17点で、長さ5～8cm、幅3～5cm、厚さ2～4cmのものが主体で、重さは50～170gである。

1はⅤ群土器の胴部破片である。間隔の狭い密な沈線の組合せによる文様が施されている。

時期 床面出土の遺物から擦文時代後期後半と考えられる。(広田)

H-25 (図Ⅲ-24～30 図版21～24)

位置 E-42、43、F-41、42、43、44、G-41、42、43

規模 8.86×8.46/8.64×8.08/0.82m

調査

地表面において大きな方形のくぼみとして確認された竪穴である。標高約12mの段丘縁辺の平坦面に位置し、H-26と近接する。今年度調査の住居跡では最大の大きさで、4本の主柱穴がある。掘り揚げ土は周囲に良好に残っており、黄褐色土(Ⅵ層)を主体とする。南壁付近の床面では台石などとともに擦文土器が割られたような状態で出土した。集石は床面直上で3ヵ所出土し、集石2・3ではトンボ玉を想起させる竊模様のある小礫が多くみられる。

掘り揚げ土については周囲の住居跡間に土層観察ベルトを設定し、範囲と新旧の把握につとめた。

掘り揚げ土

住居跡周囲に広く分布するが、北側は削平される。他の擦文竪穴住居の掘り揚げ土と混ざっているため明確な範囲はわからない。層厚は厚いところで約30cm、周堤状に良好に残存していた。住居跡東側では掘り揚げ土中からは廃棄されたと考えられる焼土が数ヵ所確認された。

覆土

覆土はⅠ層を除くと壁際以外は10cm程の堆積である。南側には白色の粘質土が黒色土と混ざった層がみられた。壁際には暗褐色から黄褐色の掘り揚げ土の流入土、崩落土が三角堆積する。一部炭化材が検出されている。大型のH-26に近接するが覆土中にはH-26の掘り揚げ土はみられなかった。

形態

平面形は方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、Ⅵ層中に形成される。一部Ⅵ層の砂礫がみられる部分がある。

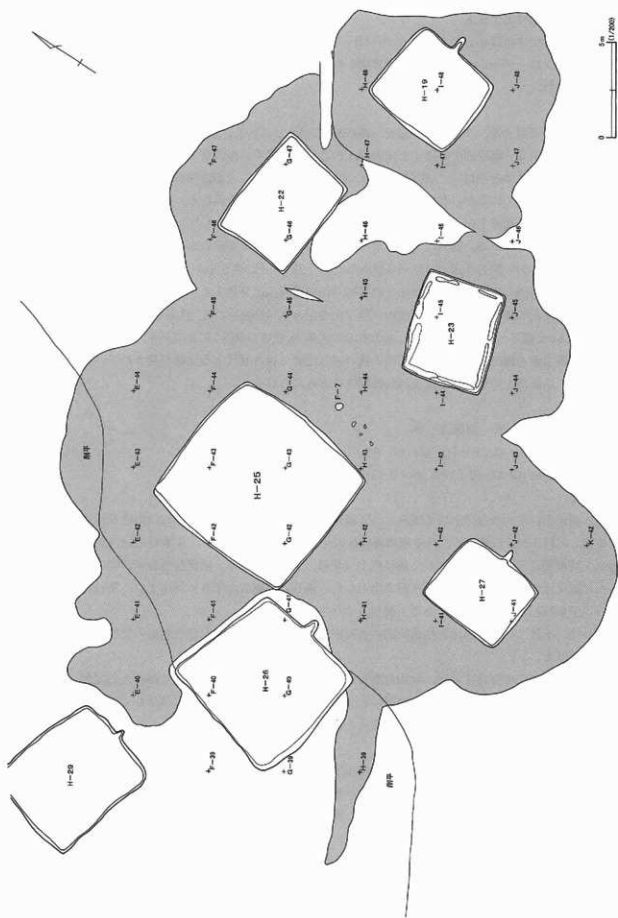
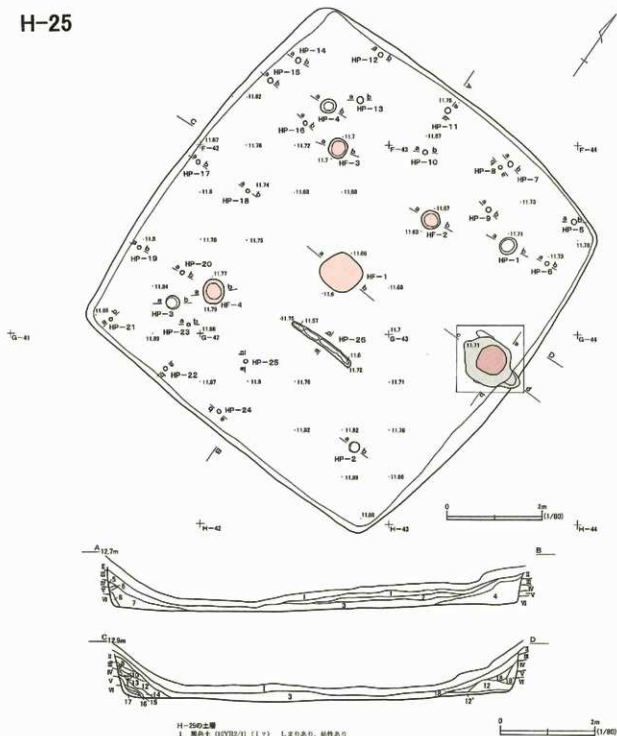


図 24 H-25掘り揃げ土平面図

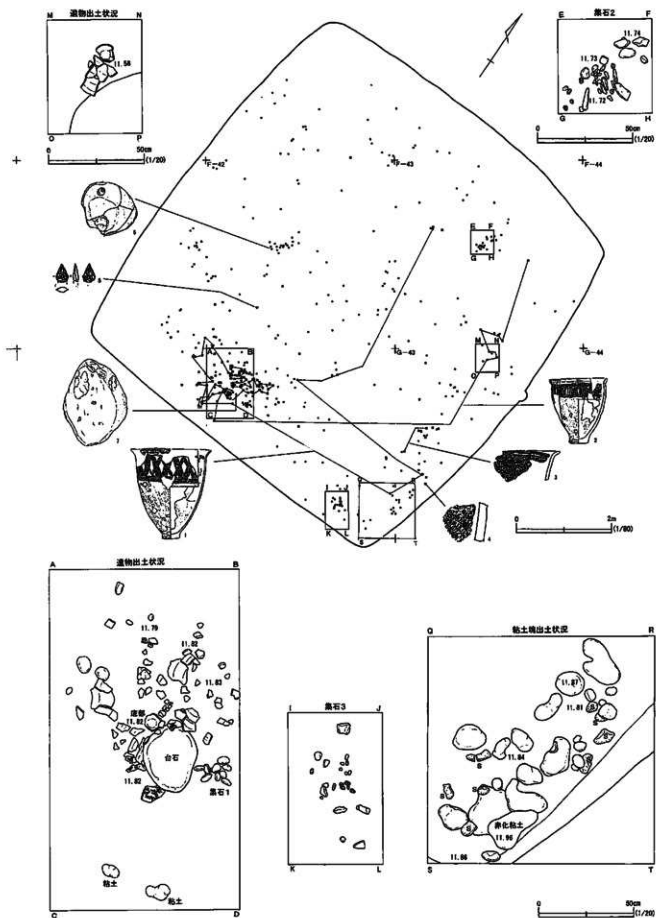
H-25



H-25の土層

- 1 黒色土 (HVR2/1) (I 7) しまりあり、粘性あり
- 2 黒色土 (HVR2/1) (I) 中に深い黒褐色土 (V) しまりあり、粘性あり
- 3 黒色土 (HVR2/1) (I) 中に全体に黒、一部黄ブロック) しまりやあり、粘性やあり
- 4 黄褐色土 (HVR3/4) (I・II) 中に黄ブロック・炭化物) しまりやあり、粘性やあり
- 5 砂
- 6 黄褐色土 (HVR2/2) (I・II) しまりやあり、粘性やあり
- 7 黒色土 (HVR4/4) (II+III) 粘褐色土層区)
- 8 黄褐色土 (HVR3/4) 粘褐色土? しまりやあり、粘性あり
- 9 黒色土 (HVR2/1) (V 7) しまりやあり、粘性やあり
- 10 黒色土 (HVR4/4) (II・III) しまりやあり、粘性やあり
- 11 黒色土 (HVR1/2/3) (I・II) しまりあり、粘性やあり
- 12 黒色土 (HVR4/4) (II・III) しまりやあり、粘性やあり
- 13 粘性強い
- 14 赤土 (HVR2/1) (I) しまりやあり、粘性やあり
- 15 砂
- 16 黄褐色土 (HVR2/2) (I・II) しまりやあり、粘性やあり
- 17 黄褐色土 (HVR2/2) (I・II) しまりやあり、粘性やあり
- 18 黄褐色土 (HVR4/4) (II) 粘褐色土 (HVR3/4) 層区) しまりやあり、粘性あり
- 19 黄褐色土 (HVR4/4) (II+III) しまりやあり、粘性あり

図 26 H-25 平面図と土層



図Ⅲ-28 H-25遺物分布図

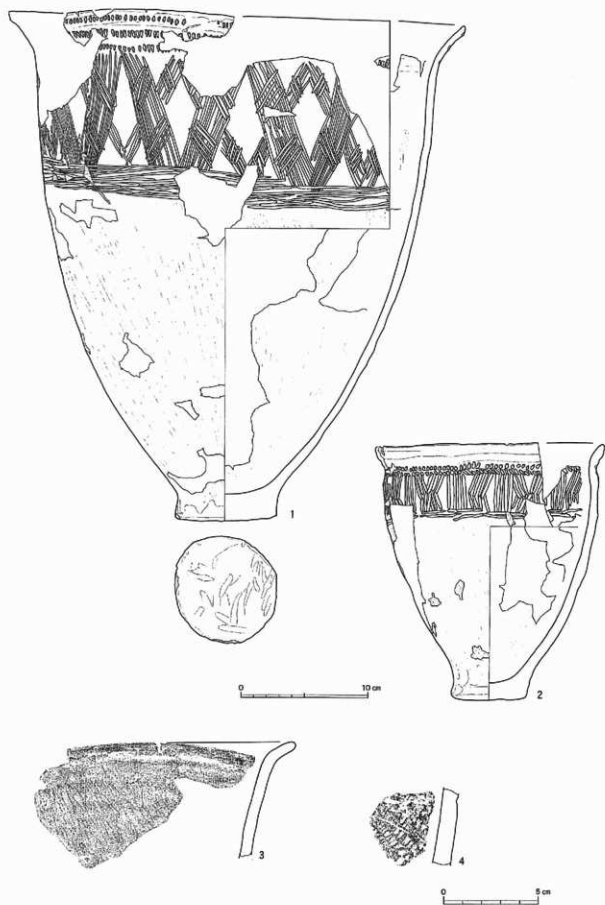
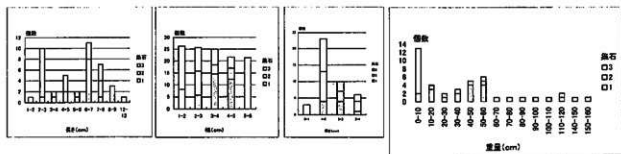
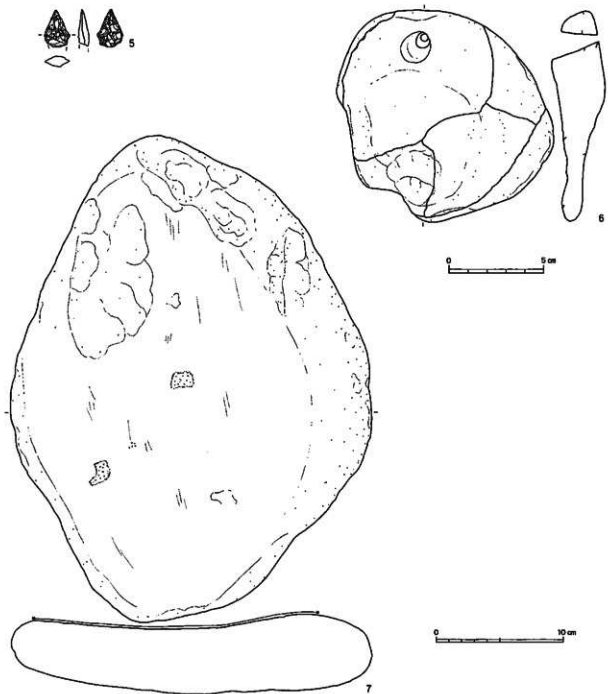


图 III-29 H-25 遺物(1)



図Ⅲ-30 H-25遺物(2)、棒状器グラフ

付属遺構

カマド1カ所、炉1カ所、焼土を伴うピット3カ所、柱穴、杭列などが検出された。

カマドは住居東壁中央部に潰れた状態で検出された。壁際の板状の袖石は、正面からみるとハの字に起立した状態で、また灰白色粘土は袖石内側に崩れた状態で確認された。煙道は45度程度の急角度で立ち上がり、短く、壁からほとんど突出しない。焼土は固くレンガ状になる層、細かな骨片を含む層など数層に分層できる。焚き口付近の倒れた袖石下からは土器(図Ⅲ-29-2)がつぶれた状態で出土している。

炉(HF-1)は住居跡中央部にあり、長方形を呈する。床面をやや掘り込み、Ⅶ層の砂層中に焼土が形成される。周囲には石の抜き取り痕が観察された。焼土中には細かな骨片が全体に混じていたが、微細であったため同定はできなかった。

主柱穴が4カ所(HP-1~4)確認できた。柱穴の直径は20~30cmで、床面からの深さは40~50cmである。焼土を伴う穴(HF-2~4)は主柱穴内側に3カ所確認できた。いずれも床面から10cm掘り込まれ、焼土が覆土中に存在する。HF-4からは土器片(図Ⅲ-29-2)が焼土の下から出土している。

直径5cm程の小柱穴が東壁以外の壁際に約1.4~2m間隔で走り、それぞれ約1m内側にも対になる小柱穴列が確認された(HP-5~25)。いずれも先端が尖ることから打ち込みの杭列とみられ、板敷きなどのベンチ構造があったと考えられる。

溝状遺構(HP-26)がHF-1南側に存在する。長さ約1.3m、幅は約14cm、深さ約15cmである。

カマドの焼土とHF-2・3について土壌をサンプリングし、フローテーション作業を行なった。カマド焼土から得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、900±40BP(較正暦年代1030~1230AD)という結果がでている。

遺物

住居跡南側壁際の床面から集石1、土器片、台石などがまとめて出土した。土器は台石付近で底部を中心に割れた状態で出土し、ほとんどが内側をみせていた。

集石は床面、床直上で3カ所検出された。いずれも少量のまとまりである。集石2・3については棒状礫の他、小型で縞模様のある礫がまとめてみられた。集石1は9点、集石2は15点、集石3は18点について計測し、グラフを作成している。

南東角の壁際に灰白色粘土が集中していた。多くの粘土は丸められており、焼けた粘土もみられた。

1~3はⅦ群土器で、いずれも深鉢で、文様帯の部分以外はミガキが施される。1は大形で、口縁部はやや外反し胴中部から大きくすばまる器形で、底部はやや張り出す。口縁~胴上半部の文様帯は上端の横位に3段巡る列点と、下端の5~9本単位の横走沈線で区画される。文様帯内は5~9本単位の斜位の沈線を山形に施し、さらに区画された三角形内に4~5本単位の斜位の沈線を施している。また、斜位の沈線には交差する3~4本単位の短い沈線を加えている。色調は黒褐色で、外面の胴上半部には煤が付着している。2はやや小形で、器形は口縁部がやや外反し、胴上部から大きくすばまる。底部はやや張り出す。色調は褐色で全体的にやや磨耗している。3は口縁部片で無文である。拓本では不明瞭だが、一部ハケ目が残っている。4はⅣ群土器である。胴部片で、RLの斜縄文が施される。二次焼成のため脆く、全体的に磨耗している。5は黒曜石製石鏃。縄文時代のものである。6は床面から割れた状態で出土した。有孔礫としたが、人工的に穴が形成されている。砂岩製である。7は凝灰質砂岩製の台石。土器(図Ⅲ-29-1)が周囲から出土している。

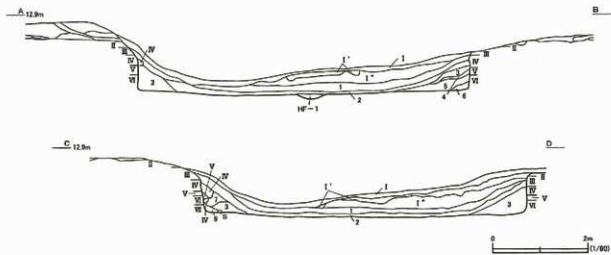
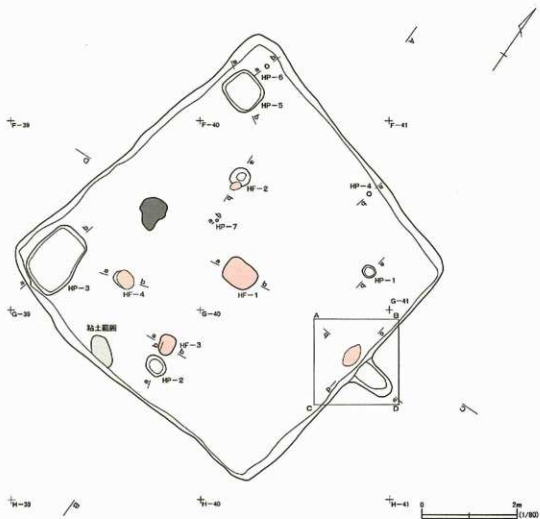
時期

縄文時代後期後半で、H-25周辺の竪穴について掘り揚げ土を観察した結果、H-22・23・(27?) → H-25 → H-26 という変遷が推定される。(愛場)

H-26



図Ⅲ-31 H-26掘り揚げ土平面図



H-26の土層

- 1 黄土層 暗褐色土 (IYR3/2)
- I' 押しわたぬ炭 (炭層付土) 暗褐色土 (GYR3/3)
- I'' 焼土 灰褐色土 (IYR3/1)
- 2 灰褐色土 (IYR2/2) (I > II) 白色向山砂
しより中のみ 粘粒中のみ
- 3 灰褐色土 (IYR2/2) (II + III) > IV + V
しより中のみ 粘粒中のみ
- 4 褐色土 (I, IYR4/2) (IV + V + VI)
しより中のみ 粘粒中のみ
- 5 褐色土 (I, IYR2/1) (VI 層土)
しより中のみ 粘粒中のみ

- 6 褐色土 (I, IYR4/2) (IV + V + VI)
しより中のみ 粘粒中のみ
- 7 褐色土 (I, IYR4/2) (IV + V + VI)
しより中のみ 粘粒中のみ
- 8 褐色土 (I, IYR2/2) (II + III > IV + V)
しより中のみ 粘粒中のみ

図 III-32 H-26平面図と土層

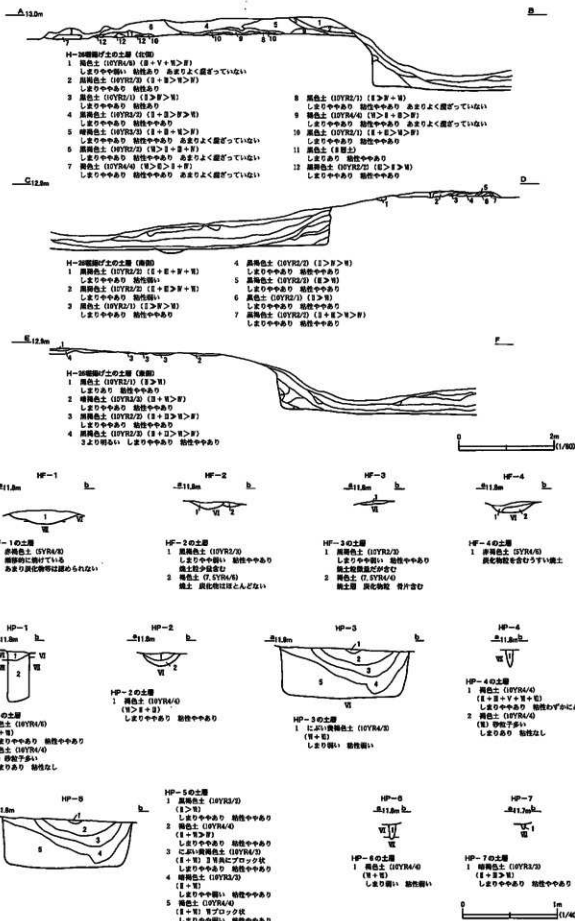
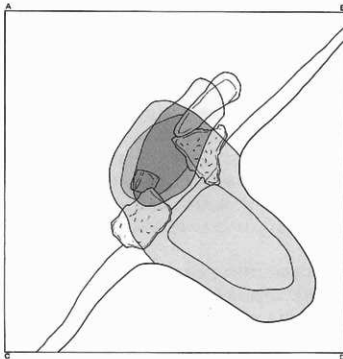


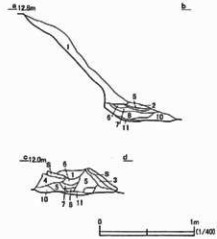
図 III-33 H-26横掘げ土の土層、HF、HP

Ⅲ 遺構と遺物



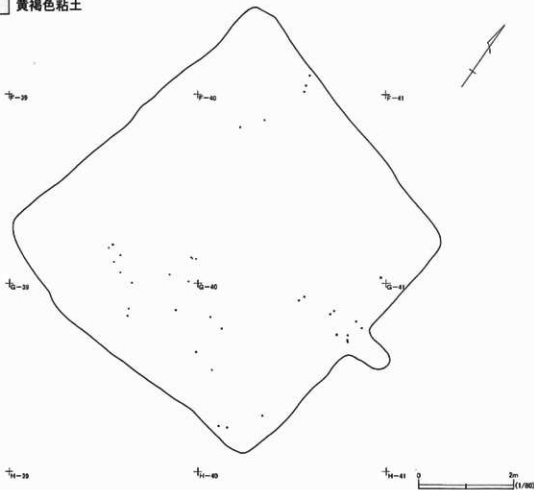
灰白色粘土
 黄褐色粘土

0 50m (1/200)



H-25カマドの土層

- 1 褐色土 (IYR4/6) (黄褐色粘土>焼土粒子+炭化物)
- 2 白色粘土
- 3 緑褐色土 (ZSYR3/3) (I + E>黄褐色粘土+焼土粒子+炭化物)
- 4 Eより黄褐色土 (IYR5/4) (灰白色粘土>黄褐色粘土+焼土粒子+炭化物)
- 5 暗赤褐色土 (IYR5/8) (焼けた灰白色粘土+炭化物)
- 6 暗赤褐色土 (IYR3/10) (I + E + 焼土粒子)
- 7 赤褐色土 (IYR4/6) (焼土粒子+炭化物)
- 8 褐色土 (IYR4/6) (黄褐色粘土+炭化物)
- 9 暗褐色土 (ZSYR3/10) (I + E + M>焼土粒子+炭化物)
- 10 黄褐色土 (IYR3/3) (I + E>R>E)
- 11 赤褐色土 (IYR4/6)



図Ⅲ-34 H-26カマド、遺物分布図

H-26 (図Ⅲ-31~34、図版25~28)

位置 E-39・40、F-39~41、G-39~41

規模 7.04×6.86/6.70×6.46/0.81m

調査

台地南東側、標高約12mの平坦部に位置する。発掘前の状況で周囲に盛り上がり有する深い不整の方形の落ち込みとして確認した。落ち込みの最も深い部分を基準として、十字にベルトを設定し、それに沿ってトレンチ調査を行った結果、竪穴住居跡であることが判明した。竪穴自体の遺存状況は良好で東側では掘り揚げ土が検出された。また、西側部分の掘り揚げ土は削平され、竪穴内に流れ込んでいた。北東側に近接してH-25、東側約3mにH-29、南西側約4mにH-28がある。掘り揚げ土の土層観察からH-26はH-25・H-29より新しい。H-28との新旧関係は不明である。

掘り揚げ土

西側部分は削平のため検出できなかったが、本来的には竪穴を全周していたと考えられる。検出できた部分は厚みがあり、最も厚い場所で40cmを測る。色調は褐色で、Ⅳ・Ⅴ層土を主体としている。また、西側の削平された掘り揚げ土が竪穴内に流れ込んでいた。

覆土

竪穴部分が埋まりきっていないため、壁際に比べて中央付近の覆土は浅い。中央付近の最も薄い部分で約20cmである。また、削平した土で竪穴を埋めているため、Ⅰ層は厚く、Ⅰ層以外は自然堆積である。壁付近の土層はⅣ・Ⅴ層土主体の褐色土でそれ以外はⅡ層土が主体の黒褐色、暗褐色土である。H-25の掘り上げ土は覆土内からは検出されなかった。

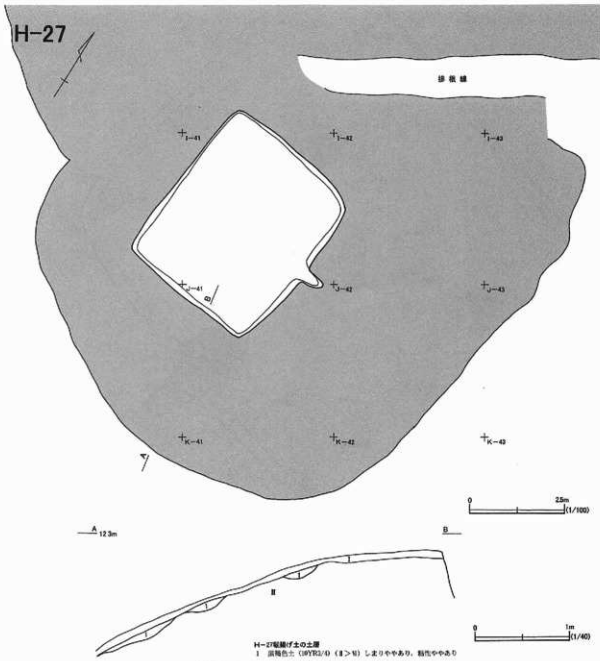
形態

平面形はほぼ正方形である。床は平坦で壁の立ち上がりはほぼ垂直で、掘り込み面はⅡ層上面である。床面はⅤ層下部に構築され、部分的にⅤ層が露出している。また、ピットの配列などで明瞭に確認できないが、壁際に比べ床面中央付近で黒色土による汚れが認められたため、壁際にベンチ状の板敷きが存在した可能性がある。

付属遺構

カマド1基、炉4カ所、ピット7カ所が検出された。カマドは東壁のほぼ中央に構築されている。遺存状況は比較的良好で、カマドの構築に使った灰白色、黄褐色粘土及び礫が検出された。灰白色粘土は燃焼部周辺及び煙道をほぼ覆い、黄褐色粘土は燃焼部でのみ検出された。燃焼部の粘土範囲内と一部外側にかけて、袖石と考えられる扁平の礫が検出された。煙道は長さ約0.8m、幅約0.6mである。煙道の長軸方向は竪穴の長軸方向とほぼ一致し、長軸の断面は燃焼部から緩やかに立ち上がる形状である。燃焼部では不整の楕円形をよく焼けた焼土が検出された。焼土の直上からは多量の炭化物粒と少量の骨片が検出された。

炉は床面ほぼ中央部(HF-1)、北西部(HF-2)、南部(HF-3)、南西部(HF-4)で検出された。HF-1は、平面形が隅丸長方形に近く、よく焼けている大形の焼土である。HF-2~4の平面形はほぼ楕円形である。HF-2・4は浅い掘り込みが伴う。HF-2は掘り込み外にも焼土が一部広がる。HF-4は掘り込みの覆土中に焼土粒を含み、焼土は面的に検出されなかった。いずれも焼土直上及び周辺から炭化物が検出され、HF-1・2からは骨片が検出された。カマドと炉周辺の土壌に関しては、フローテーションにより微細遺物の収集を行ったところ、炭化植物種子としてカマドからシソ属4粒、HF-3からキビ1粒、シソ属19粒、微小な骨片がカマドとHF-1・2から検出された。骨片は微小のため同定できなかった。検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行なった



図Ⅲ-35 H-27掘り揚げ土と土層

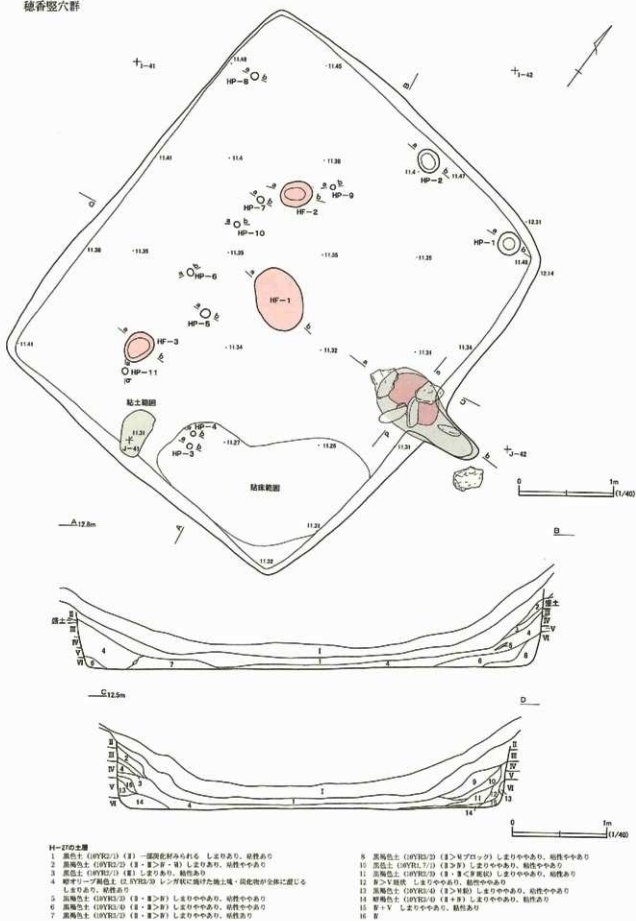


図 III-36 H-27平面図と土層

III 遺構と遺物

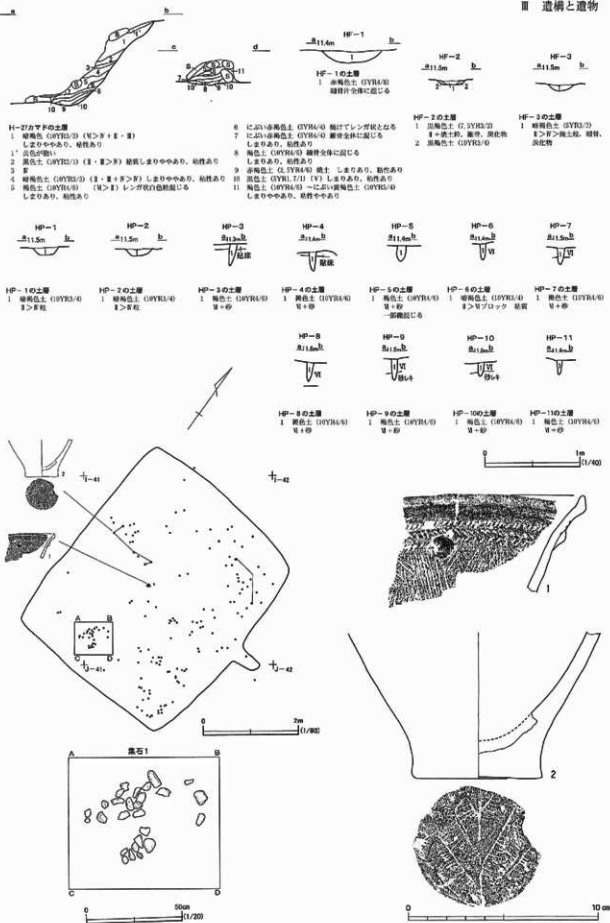
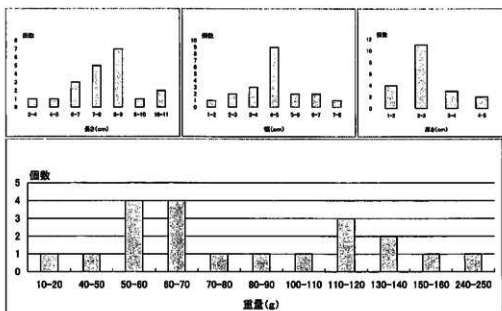


図 III-37 H-27カマド、HF、HP、遺物分布図、遺物



図Ⅲ-38 H-27棒状礫グラフ

ところ、補正 C14年代が 950 ± 40 BP (校正暦年代1010-1180AD) という結果を得た。

ピットは床面で7ヵ所検出された。平面形はいずれもほぼ円形である。配置は壁際のもの、壁よりやや内側のものがある。規模では、大形 (HP-3・5)、中形 (HP-1・2)、小形 (HP-4・6・7) に分けられる。

大形のピットは南西隅 (HP-3) と北西隅 (HP-5) に位置し、掘り込みは深い。性格は不明だがいわゆる「隅穴」の可能性はある。中形のピットは深いもの (HP-1) と浅いもの (HP-2) の2種類があり、深いもの (HP-1) は位置から支柱穴と考えられる。床面の精査を複数回行ったが、他に柱穴と考えられるピットは検出できなかった。HP-2はHP-3のすぐ外側に位置し、性格は不明である。

小形のピットの配置は壁際のもの (HP-4・6) と中央付近のもの (HP-7) に分かれる。壁際のは壁際に作られた板敷きを支える打ち込み杭の可能性が高い。ピットの覆土はⅡ層を主体とした褐色土が多い。

遺物

Ⅳ群土器1点、Ⅴ群土器1点、フレイク1点、礫67点、鉄製品14点の計82点出土している。量的には礫がほとんどを占める。遺物の平面分布は特に片寄りみられず、散漫な傾向にある。層別別では覆土のものが多く、床面の遺物は鉄製品2点のみである。鉄製品は腐食が著しく、詳細は不明である。覆土出土の鉄製品はⅡ層との境から出土したため、現代のものである可能性が高い。また、床面南側で灰白色粘土が検出された。粘土はカマドのものと同質である。

時期 周辺の遺構及び周辺包含層出土の遺物から、據文時代後期後半と考えられる。

(広田)

H-27 (図Ⅲ-35~38 図版29~31)

位置 H-41、I-40、41、42、J-41

規模 4.86×4.12/4.56×3.87/0.71m

調査

標高約12m、段丘縁辺の南への緩斜面上に位置する。地表面において深い方形のくぼみとして確認され、最深部を基準に十字の土層観察用ベルトを設定し掘り下げた。床面はほぼ平坦だが、南側はⅡ層が一部露出する。

掘り揚げ土

住居跡周囲に分布する。北側はH-25掘り揚げ土との分層が難しい。南側は薄く、斑状に堆積する。

覆土

壁際には掘り揚げ土の流入土、崩落土が三角堆積する。その上にはレンガ状粘土塊粒、炭化物を含む粘質の褐色土が存在する。屋根を覆っていた土が崩落したものである可能性が考えられる。覆土1では一部炭化材が検出されている。

形態

平面形は方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦でⅡ層中に形成される。一部Ⅱ層がみられる。南東角床面では黒色土が混じるやや汚れた床面となっていたため貼床と考えた。

付属遺構

カマド1カ所、炉1カ所、焼土を伴う柱穴が検出された。

カマドは住居跡東壁中央部に設置されている。袖石、天井石と考えられる扁平礫、角柱状礫と灰白色粘土がつぶれた状態で検出された。煙道は約45度の角度で斜めに立ち上がる。煙道先端部付近からは、関連すると思われる大型の扁平礫が出土している。焼土はⅡ層中に形成され、数層に分層できる。

炉(HF-1)は住居跡中央部床面で検出され、掘り込みはない。焼土を伴う穴(HF-2・3)は炉と北西角、南西角を結ぶライン上に2カ所確認された。また北側壁際には浅いくぼみが2カ所みられた(HF-1・2)。

西、南壁付近では打ち込み杭の痕跡とみられる小柱穴(HF-3~11)が検出している。

カマドの焼土とHF-1・2・3について土壌をサンプリングし、フローテーション作業を行なった。カマド焼土から得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、890±40年BP(較正暦年代1030-1240AD)という結果がでている。

遺物

遺物はⅡ群土器4点、Ⅲ群土器9点、礫200点、原石1点、フレイク1点である。

集石は床面直上で1カ所検出した。長幅の差はあまりなく、20点について計測し、グラフを作成している。

1・2はⅢ群土器である。1は口縁部~胴上半部の破片で、口縁部はやや屈曲する。口縁部には刺突列が3段交互の向きで施され、胴上半部には縦位の沈線と斜位の沈線により文様が描かれている。沈線は細く、やや浅めである。また、口縁部には補修孔が1個開けられ、内面には煤が付着している。2は胴下半~底部で、表面は二次焼成のため赤化し、やや上げ底で木葉痕を残す。

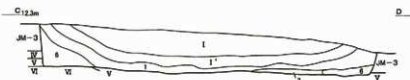
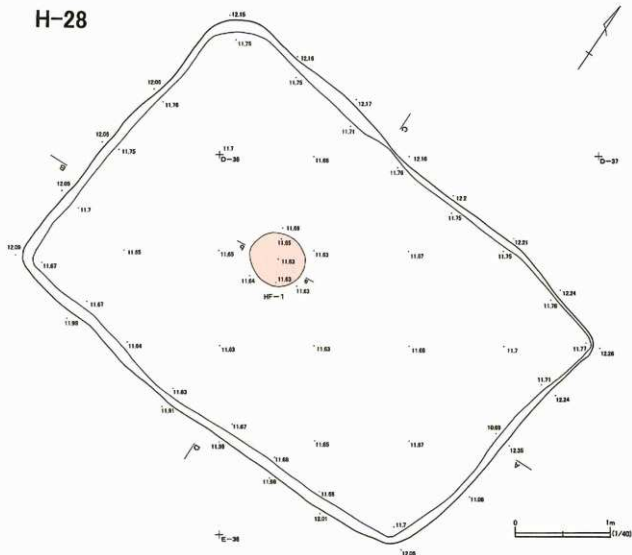
時期 縄文時代後期後半と考えられる。

(愛場)

H-28 (図Ⅲ-39・40、図版32・33)

位置 C-35・36、D-35・36、E-36

H-28



H-28の土層

- 1 押されたI層 礫層土 (HVR2/2)
- 1' 粘土層 礫層土 (HVR2/2)
- 1 褐色土 (G, SVR2/2) (E>E>B)
- しまりややあり 粘性ややあり
- 2 褐色土 (G, SVR2/1) (E>E>B) しまり多い
- しまりややあり 粘性ややあり

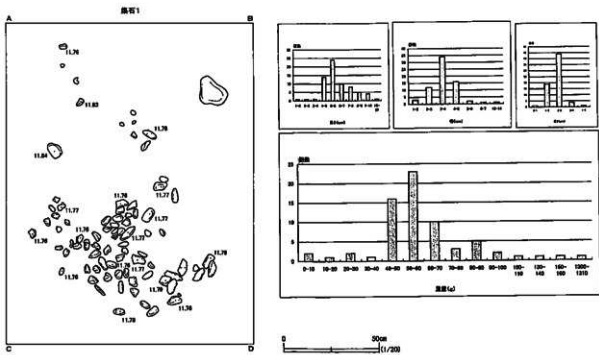
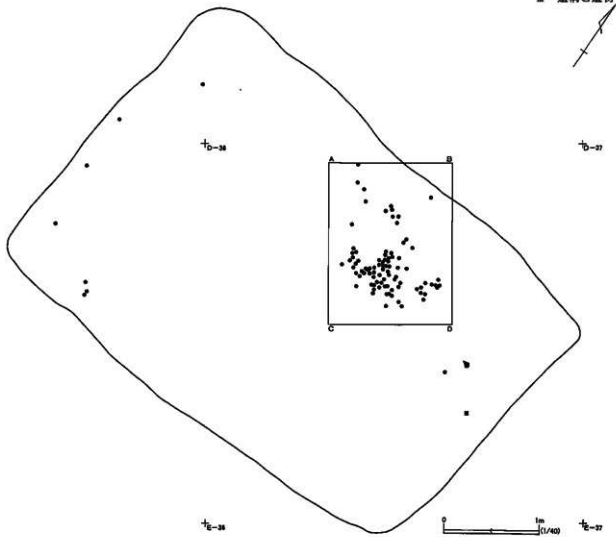
- 3 礫層褐色土 (G, SVR2/2) (E>E>B)
- しまりややあり 粘性ややあり
- 4 褐色土 (G, SVR2/1) (E>E>B) ;と同じだが厚少ない
- 5 褐色土 (HVR2/2) (E>E>B)
- しまりややあり 粘性あり
- 6 礫層褐色土 (G, SVR2/2) (E>E>B) 粘土の混入
- しまりややあり 粘性ややあり

HF-1の土層

- 1 礫層褐色土 (G, SVR2/2) (E>E>B)
- 黄土粒層を含む 砂片層を含む
- しまりややあり 粘性あり
- 2 礫層褐色土 (G, SVR2/2) 粘性強い 塊状の
- 3 礫層褐色土 (G, SVR2/2) (E>E>B)
- しまりややあり 粘性ややあり



図Ⅲ-39 H-28平面図と土層、HF



図Ⅲ-40 H-28遺物分布図、棒状図グラフ

規模 5.23×5.04/3.52×3.38/0.53m

調査

台地南東側、標高約12mの平坦部に位置する。Ⅲ層上面の精査中に黒褐色土の長方形の落ち込みとして確認した。落ち込みの中心を基準に長軸及び短軸方向に十字の土層観察用ベルトを設定して掘り下げた。掘り込み面と考えられるⅡ層は削平されていたため、掘り揚げ土は検出されなかった。北東側約4mにH-29がある。

覆土

自然堆積で覆土上部はレンズ状にⅠ層が厚く堆積している。Ⅰ層を除くと、覆土の堆積は他の據文時代の住居同様浅い。土層はⅡ層主体で、Ⅲ・Ⅳ層土を少量含む黒褐色、暗褐色土が主体である。

形態

平面形は長方形である。床面はほぼ平坦で、壁は全体的に急角度に立ち上がる。掘り込み面はⅡ層上面と考えられ、床面はⅤ層下部～Ⅵ層上面に構築されている。

付属遺構

炉が床面中央よりやや西側で1ヵ所検出された(HF-1)。平面形は不整の円形で、掘り込みは認められない。炉はよく焼けていて、HF-1の直上及び周辺では炭化物、骨片が少量検出された。HF-1周辺の土壌に関しては、フローテーションにより微細遺物の収集を行ったところ、炭化植物種子としてカマドからキビ1粒が検出された。微小な骨片も検出されたが、細片のため同定できなかった。検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が880±40(校正暦年代1030-1250AD)という結果を得た。

遺物

Ⅳ群土器6点、Ⅴ群土器3点、礫96点、鉄製品1点の計106点出土している。大部分は礫で、その中でも集石の礫が大半を占める。層別別では全て覆土出土で、床面出土のものはない。分布は集石以外特に片寄りみられず、散漫な傾向にある。遺物の接合関係は覆土出土のⅤ群土器が6点接合している。Ⅳ群土器は流れ込みと考えられる。鉄製品はⅠ層出土のため、現代のもの可能性がある。集石は竈穴北側の覆土下部で1ヵ所検出された。約1.6mの範囲で分布している。点数は86点で、棒状礫を主体とする。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-40)。計測した礫の点数は69点である。棒状礫は、長さ4～10cm、幅2～5cm、厚さ1～3cm、重さは40～90gのものが主体である。

時期 覆土出土の遺物から據文時代後期後半と考えられる。

(広田)

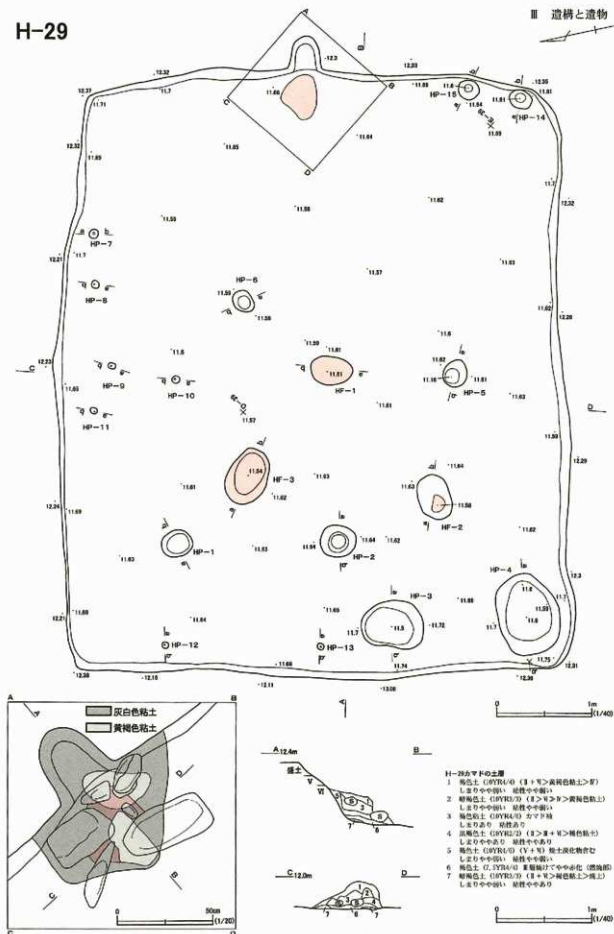
H-29 (図Ⅲ-41～44、図版34～37)

位置 C-37～39、D-37～39、E-38・39

規模 6.42×6.3/5.39×5.2/0.65m

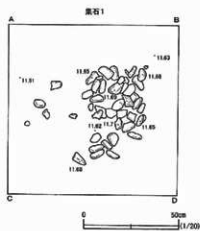
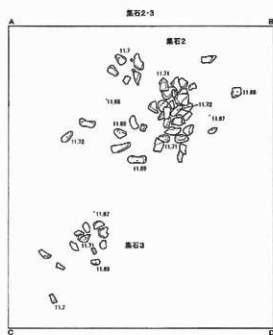
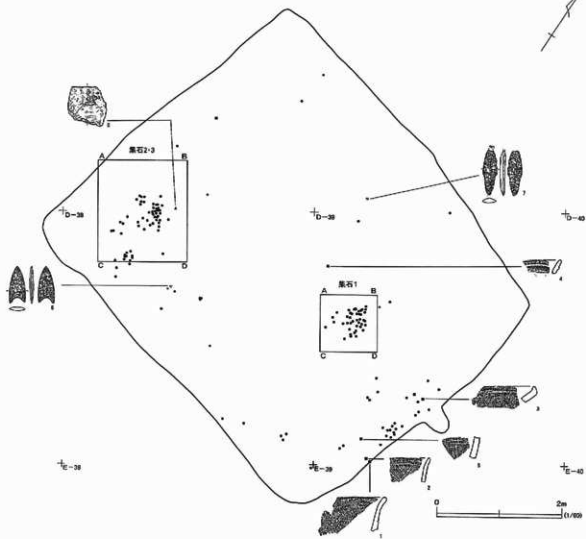
調査

台地南東側、標高約12mの平坦部に位置する。発掘前の状況で浅い円形の落ち込みとして確認した。落ち込みの中心を基準に長軸及び短軸方向に直交する土層観察用のベルトを設定し、掘り下げた。掘り込み面と考えられるⅡ層が削平されていたため、掘り揚げ土は低い部分でわずかに検出された。東側約3mにH-26、南西側約4mにH-28がある。掘り揚げ土の土層観察からH-29はH-26より古い、H-28との新旧関係は不明である。また、H-29の下部には縄文時代後期の盛土であるJM-3・6が存在し、H-29はJM-3・6の一部を壊して作られている。

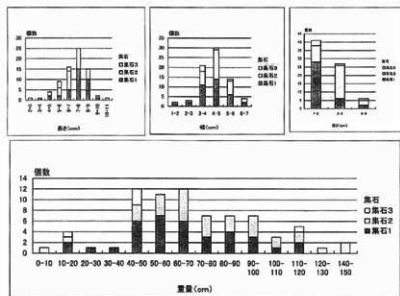
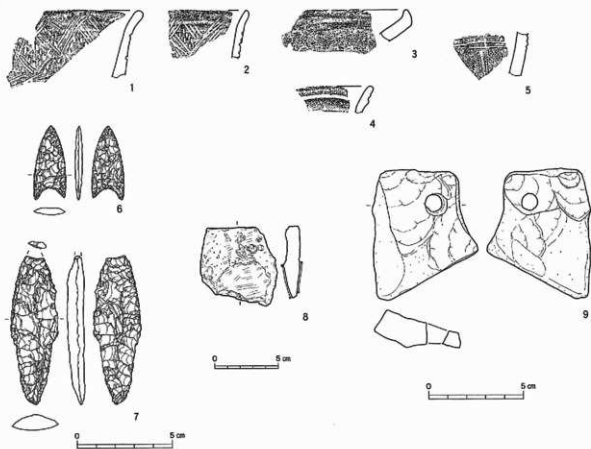


図Ⅲ-41 H-29平面図、カマド

III 遺構と遺物



図III-43 H-29遺物分布図



図Ⅲ-44 H-29遺物、棒状礫グラフ

掘り揚げ土

Ⅱ層が削平されていたため、JP-15のくぼみの部分にのみ残存していた。検出された掘り揚げ土はⅡ・Ⅳ層を主体とする土層である。

覆土

竪穴上部は耕作土によって埋められている。Ⅰ層を除くと、壁際以外の覆土は薄く中央付近の最も浅い部分では3~4cmですぐ床面が検出された。覆土の色調は黒色、黒褐色である。土層はⅡ・Ⅲ層が主体で、Ⅳ・Ⅴ層が少量混じる。また、壁際ではⅡ層及びJM-3の盛土の流れ込みが認められる。

形態

平面形は東西の長軸方向がやや長い、隅丸長方形である。床は平坦で壁の立ち上がりはほぼ垂直である。掘り込み面はⅡ層上面と考えられる。床面はⅤ層下部~Ⅳ層上部に構築される。また、ピットの配列などでは明瞭に確認できないが、壁際に比べ床面中央付近で黒色土による汚れが認められたため、壁際にベンチ状の板敷きが存在した可能性がある。

付属遺構

カマド1基、炉3カ所、ピット15カ所が検出された。カマドは東壁のほぼ中央に構築されている。遺存状況は比較的良好で、カマドの構築に使った灰白色、黄褐色粘土及び礫が検出された。灰白色粘土は燃焼部周辺及び煙道をほぼ覆い、黄褐色粘土は燃焼部のみ検出された。

燃焼部の粘土内及び直上からは、袖石と考えられる扁平の礫が検出された。煙道は長さ約0.6m、幅約0.7mと幅に比べて長さが短い。煙道の長軸方向は竪穴の長軸方向とほぼ一致し、長軸の断面は燃焼部から緩やかに立ち上がる形状である。燃焼部では不整形のよく焼けた焼土がみられ、焼土の直上からは多量の炭化物粒と少量の骨片が検出された。

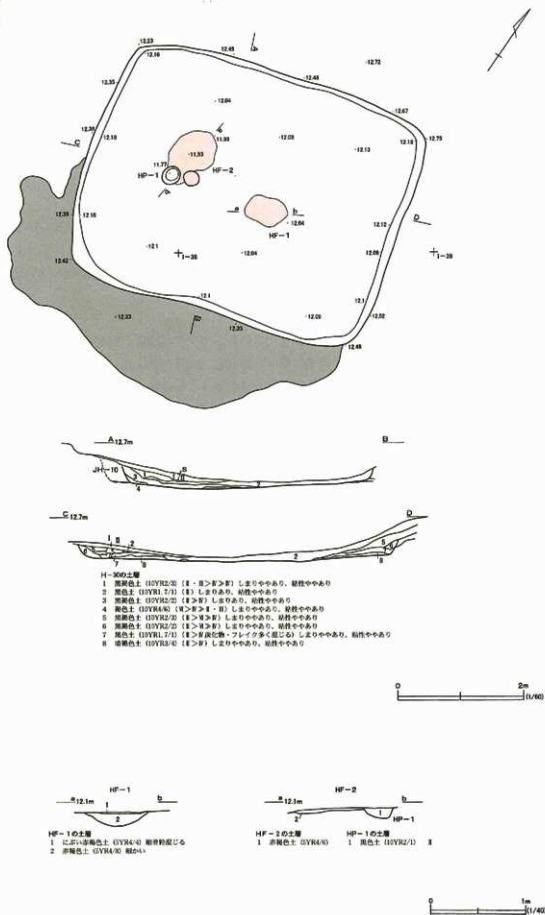
炉は床面中央やや南寄りで1カ所(HF-1)、西側で2カ所(HF-2・3)検出された。平面形はいずれも不整の楕円形を呈する。HF-1は掘り込みを持たず、焼土はよく焼けていた。HF-2・3は浅い掘り込みを伴い、焼土は粒状に混じる程度である。HF-1の焼土直上及び周辺からは炭化物、骨片が検出された。カマドと炉周辺の土壌に関しては、フローテーションにより微細遺物の収集を行ったところ、炭化植物種子としてカマドからシソ属2粒、また微小な骨片がHF-1から検出された。骨片は微小のため同定できなかった。検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が950±40(較正暦年代1010-1180AD)という結果を得た。

ピットは15カ所検出された。配置は壁際のもので、壁から1m程内側にあるものがある。規模は、大形(幅60~80cm、深さ8~16cm)、中形(幅20~30cm、深さ10~60cm)、小形(幅4~10cm、深さ8~20cm)に分けられる。大形のピット(HP-3・4)はやや浅めで、床面南西側に位置する。性格は不明であるがいわゆる「隅穴」の可能性がある。中形のピットは深いものと浅いもの2種類があり、深いもの(HP-1・2・5)は配置からも主柱穴の可能性が高いが、東側では確認できなかったため上層構造は不明である。浅いピットは壁際のもの(HP-14・15)と壁際からやや離れるもの(HP-5・6)があるが、性格は不明である。小形のピット(HP-7~13)は小柱穴と考えられる。配置は北、西壁際のものほとんどだが、HP-10のみやや壁際から離れている。これらは壁際に作られた板敷きを支える杭と考えられる。ピットの覆土はⅡ・Ⅲ層が主体で、Ⅳ・Ⅴ層が混じるものが多い。色調の多くは黒褐色、暗褐色で、Ⅳ層を多く含むものには褐色のものもある。

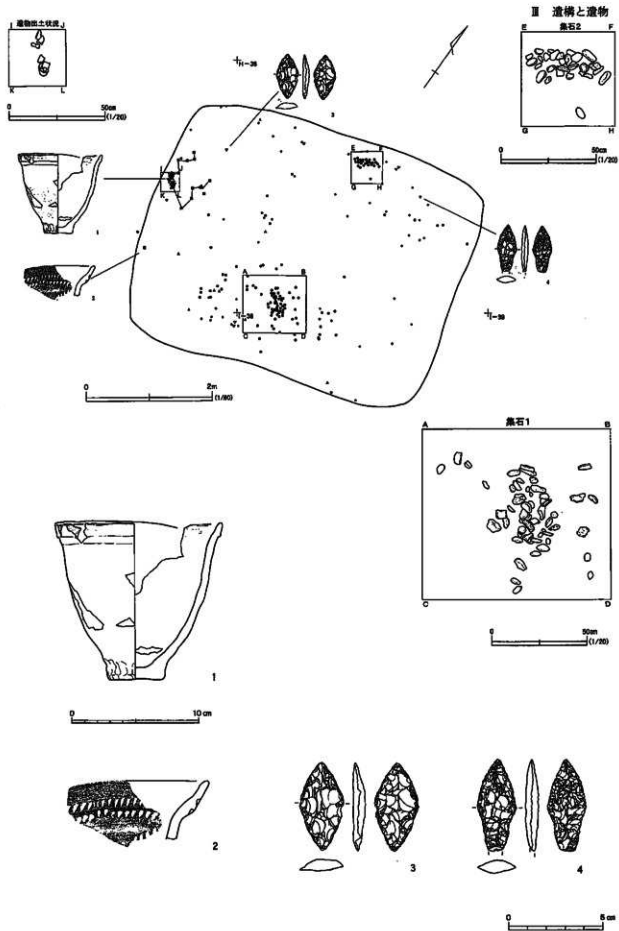
遺物

Ⅳ群土器2点、Ⅴ群土器7点、石鏃1点、石槍1点、フレイク8点、原石1点、砥石1点、礫243点の計269点出土している。量的には礫が出土遺物のほとんどを占める。層位別では床面直上出土の

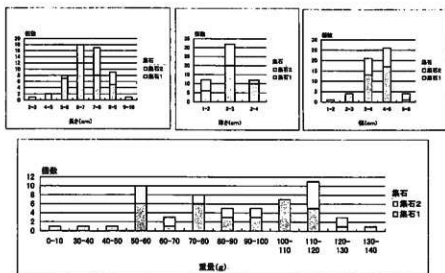
H-30



図Ⅲ-45 H-30平面図と土層、HF、HP



図四-46 H-30遺物分布図、遺物



図Ⅲ-47 H-30棒状礫グラフ

ものが大半で、覆土、床面出土のものは少ない。遺物平面分布は集石を除くとカマド付近がやや密である。遺物の接合関係は認められなかった。Ⅰ群土器は覆土から1点、床面直上から6点出土している。Ⅳ群土器、石鏃、石槍、フレイク、原石、砥石はJM-3・6からの流れ込みと考えられる。集石は床面直上～床面にかけて3ヵ所検出された。集石1は43点、集石2は44点、集石3は12点を数え、いずれも棒状礫を主体とする。集石1は壑穴の中央からやや東側の床面直上に位置し、北側にややまとまりが見られ、分布範囲は約0.6mである。集石2・3は壑穴西側に近接して位置する。集石2の検出層位は床面直上で、分布範囲は約1mである。集石3の検出層位は床面で、分布範囲は約0.5mである。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-44)。礫の点数は集石1が33点、集石2が28点、集石3が5点である。礫は集石1が長さ6～9cm、幅3～6cm、厚さ1～2cm、重さ40～100gのものが主体である。集石2は長さ6～9cm、幅3～6cm、厚さ2～3cm、重さ40～150gのものが主体である。集石3は長さ5～7cm、幅3～4cm、厚さ1～2cm、重さ40～50gのものが主体で、集石1・2の棒状礫は近似するが、集石3のものは集石1・2に比べて全体的に小形のものが多く、

1～5はⅠ群土器。1・2は同一個体である。口縁～胴上半部で口縁部はやや外反する。2本単位の沈線により、連続する菱形文様が描かれ、菱形内には沈線沿いに刺突が施される。色調は黒褐色である。3、4は口縁部片で、どちらも無文である。3は口唇部がやや内側に屈曲する。5は胴部片で、文様帯下部に横位の沈線が施されている。6は薄く加工された黒曜石製の石鏃で、覆土からの出土である。7は黒曜石製の石槍。8は凝灰質砂岩製の砥石である。9は有孔礫で、炭化物が全体に附着する。石器は6以外床面直上出土である。

時期 床面直上出土の遺物から擦文時代後期後半と考えられる。

(広田)

H-30 (図Ⅲ-45～47 図版38～39)

位置 H-37、38、I-37、38

規模 5.0×3.9/4.76×3.7/0.29m

調査

標高約12mの段丘縁部部に所在する。地表面で浅いくぼみとして確認でき、くぼみ周辺はやや小高

くなっていた。Ⅱ層調査中に本竅穴の北西角部分が検出し、長方形タイプの擦文時代の住居である可能性がでてきたため、ベルトを設定し、慎重に掘り下げた。10cm程下げたところで焼土、集石が検出したためこの面を床面とした。擦文時代の遺構はほとんどがⅣ層まで掘り込まれているが、本住居跡は縄文時代のⅣ層を主体とする盛土中（JM-4）で掘り下げをやめている。床面確認のため焼土面よりトレンチで5cm程掘り下げると、炭化材が検出し、直下に縄文時代の遺構の存在が予想された。

掘り揚げ土

非常に不明瞭ではあるが、南側に黒色土とⅣ層が混じった層がみられた。層厚は10cmにみえない。

覆土

中央部では5cm程の堆積である。南壁以外では流れ込みの三角堆積が確認できる。

形態

平面形は長方形で、壁はやや斜めに立ち上がる。掘り込みは深い所で30cm程で、床面は盛土中に形成される。南北側では壁の立ち上がりははっきりしない。盛土によりやや小高くなった場所に住居を構築したと考えられる。

付属遺構

焼土が長軸上で2ヵ所確認された（HF-1・2）。

HF-1について土壌をサンプリングし、フローテーション作業を行なった。焼土から得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、3720±40年BP（較正暦年代2210-2010BC）という結果がでている。HF-1は縄文時代の盛土に伴う焼土の可能性がある。

遺物

遺物はⅣ層群土器42点、石鎌1点、石槍3点、ナイフ類1点、スクレイパー8点、Rフレイク3点、フレイク1139点、砥石1点、たたき石5点、台石2点、礫238点である。石器に関してはほとんどが盛土に伴うものと考えられる。集石は2ヵ所で検出された。集石1は36点、集石2は20点について計測し、グラフを作成した。

1、2はⅣ層群土器である。1は小形で無文の土器である。西壁際からままとまって出土している。口縁部はやや外反し、胴部との境が段状になる。2は口縁～胴上部片で、口縁に刺突列が横位に2段巡り、胴部にも斜位の刺突列が施される。

時期 出土した擦文土器から擦文時代後期後半と考えられる。

（愛場）

H-31（図Ⅲ-48～49、図版40～42）

位置 G-35・36、H-36

規模 4.12×4.0 / (2.99) × (2.9) / 0.36m

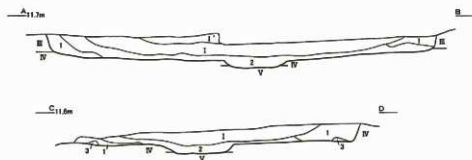
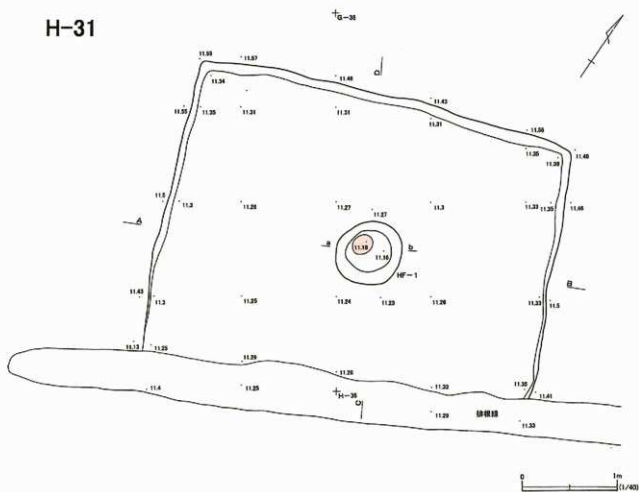
調査

台地南東側、標高約12mの平坦部に位置する。Ⅲ層の調査中に黒褐色土の長方形の落ち込みとして確認した。落ち込みの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交する土層観察用ベルトを設定し、掘り下げた。掘り込み面と考えられるⅡ層が削平されていたため、掘り揚げ土は検出できなかった。東側約6mにH-31がある。

覆土

竅穴上部は耕作土によって埋められている。Ⅰ層を除くと、壁際以外の覆土は薄く中央付近の最も浅い部分では約3～4cmですぐ床面が検出された。覆土の色調は黒褐色、暗褐色である。土層はⅡ・Ⅲ層が主体で、Ⅳ層が少量混ざる。

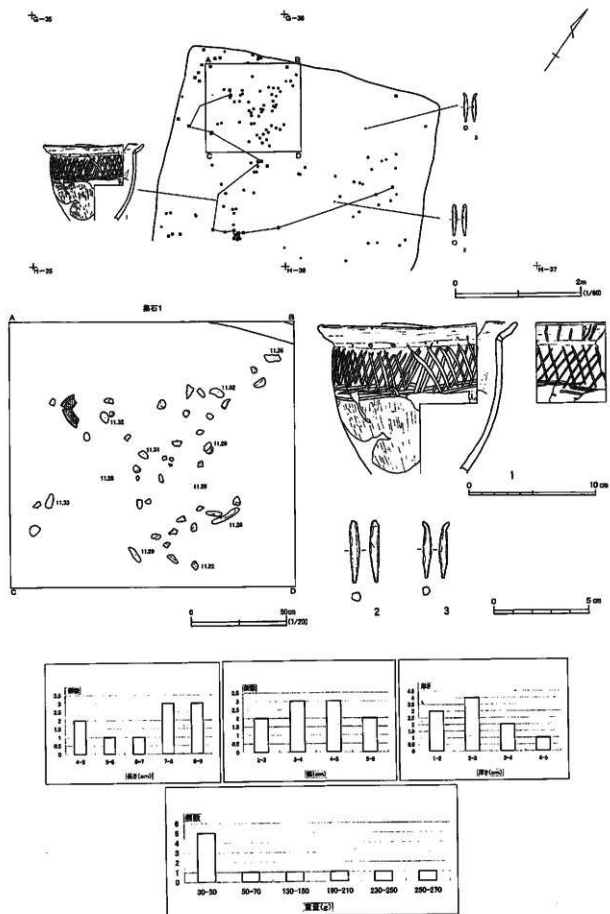
H-31



- H-31D土層
- I 表土
 - I' 押入れ土
 - 1 黒褐色土 (GVYR2/D (黒>黄>赤))
し泥り中～赤り 磁粒中～赤り
 - 2 黒色土 (GVYR2/D (黒>赤))
し泥り中～赤り 磁粒中～赤り
 - 3 暗褐色土 (GVYR2/D (赤>黒))
し泥り中～赤り 磁粒弱



図 III-48 H-31平面図と土層、HF



図Ⅲ-49 H-31遺物分布図、遺物、棒状圖グラフ

形態

南東側の壁付近は拵根線によって壊されている。平面形は長方形に近く、床はほぼ平坦である。検出できた壁はいずれも垂直に近い角度で立ち上がる。掘り込み面はⅡ層上面と考えられ、床面はⅣ層上部に構築されている。

付属遺構

炉が床面のほぼ中央で1カ所検出された(HF-1)。浅い掘り込みを有する炉で、焼土は掘り込みの西側でのみ検出された。焼け方は弱く、炭化物がわずかに検出された。検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が 920 ± 40 BP(校正暦年代1020-1210AD)という結果を得た。

遺物

Ⅳ群土器31点、Ⅴ群土器20点、フレイク11点、礫109点、鉄製品11点の計182点出土している。量的には礫が出土遺物のほとんどを占める。層別では覆土と床面直上出土のものが大半で、床面出土のものは少ない。遺物の平面分布は壑穴北側が少なく、それ以外の場所も散漫な傾向である。Ⅴ群土器は覆土から11点、床面直上から6点、床面から3点出土している。出土したⅤ群土器は全点接合した(図Ⅲ-49-1)。鉄製品は床面直上と床面から1点ずつ出土している。Ⅳ群土器、フレイクは流れ込みと考えられる。集石は床面直上西側で1カ所検出された。集石1は45点を数え、棒状礫を主体とする。範囲は径1.6m程で、分布は散漫である。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-49)。計測した礫の点数は10点で、長さ4~9cm、幅2~6cm、厚さ1~4cm、重さ30~50gのものが主体である。

1はⅤ群土器である。口縁部は外反し、口縁部には一部縦位の細い沈線が施され、胴部の文様帯には交差する斜位の沈線により格子目状の文様が描き出される。下部は2~5本単位の横位の沈線で区画される。2・3は鉄製品。断面角型の釘と考えられる。

時期 床面出土の遺物から擦文時代後期後半と考えられる。

(広田)

(2) 土坑

P-1 (図Ⅲ-50)

位置 N・O-48

規模 2.05×1.48/1.43×0.99/1.34m

調査

台地南東側縁辺部に位置し、標高約9mの緩斜面に位置する。H-21床面で長方形の黒色土の落ちこみとして検出し、長軸がH-21の土層観察用ベルトに重なっていたため土層観察からH-21より新しい土坑と判明した。H-21の覆土中から掘り込み、H-21の床面を壊して作られている。

覆土

自然堆積と考えられる。覆土上部はⅡ・Ⅲ層を主体とし、色調は黒色、黒褐色である。覆土下部はⅣ層を主体とする土層で、覆土に混じって炭化物粒がややまとまって検出された。

形態

平面形は長方形である。壑底はほぼ平坦で壁はいずれも急角度に立ち上がる。掘り込み面はH-21覆土中で、壑底はⅣ層中に構築されている。壑底東側では薄い炭化物のまとまりが検出された。

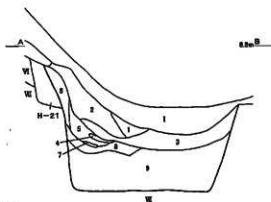
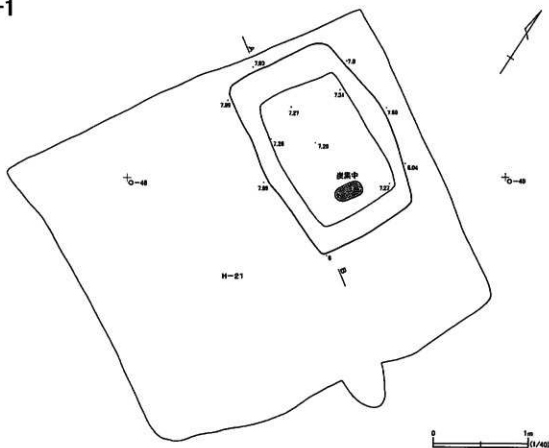
遺物

出土していない。

時期 遺構の切り合い関係から擦文時代後期後半以降と考えられる。

(広田)

P-1



P-1の土層

- | | |
|---|---|
| <p>1 黒色土 (10YR2/1) (3>#)
しまりあり 粘性あり</p> <p>2 黒色土 (10YR2/1) (3+8>#) 1より中々細かい
しまり中中あり 粘性中中あり</p> <p>3 黒色土 (10YR1.7/1) (3>#)
しまり中中あり 粘性中中あり</p> <p>4 褐色土 (10YR4/6) (8>#)
しまり中中細い 粘性中中細い</p> <p>5 黒褐色土 (10YR2/2) (3+8>#)</p> | <p>6 暗褐色土 (10YR3/3) (8>#)
しまり中中細い 粘性中中あり</p> <p>7 褐色土 (10YR2/3) (3>#)
しまり中中あり 粘性中中あり</p> <p>8 暗褐色土 (10YR3/2) (3+8>#+#)
しまり中中細い 粘性中中あり</p> <p>9 褐色土 (10YR4/6) (8>#)
しまりあり 粘性細い</p> |
|---|---|



図Ⅲ-50 P-1平面図と土層

(3) 焼土

F-5 (図Ⅲ-51、図版43)

位置 N-38

規模 0.52×0.48×0.21m

調査

風倒木痕を調査中に赤褐色の焼土粒のまとまりを確認した。周辺の精査を行ったが掘り込みなどは検出できなかった。風倒木痕からの検出のため、本来的な層位は不明である。

形態

平面形はほぼ円形である。部分的にはよく焼けているが、全体的に焼け方は弱い。投げ込まれた焼土である可能性が高い。

時期 風倒木痕中の焼土のため、時期は不明である。

(広田)

F-6 (図Ⅲ-51、図版43)

位置 H-40

規模 0.66×0.48×0.06m

調査

H-26の掘り揚げ土直下のⅡ層上面で赤褐色の焼土を検出した。周辺の精査を行ったが掘り込みなどは検出できなかった。

形態

平面形は不整の楕円形である。比較的良好に焼けている焼土で、下部の焼け方はやや漸移的である。焼土中には灰白色の灰層及び多量の炭化物が検出された。

時期 検出層位及び周辺包含層の出土の遺物から縄文時代と考えられる。

(広田)

F-7 (図Ⅲ-51)

位置 G-44

規模 0.37×0.33×0.06m

調査 H-25煙道付近のⅡ層上面で確認した。すぐそばに扁平礫がみられる。

形態 円形

時期 縄文時代後期後半のものと考えている。

(愛場)

F-8 (図Ⅲ-51、図版43)

位置 L-46

規模 0.45×0.35×0.04m

調査

H-24の掘り揚げ土直下のⅡ層上面で赤褐色の焼土を検出した。周辺の精査を行ったが掘り込みなどは検出できなかった。炭化物が少量検出された。

形態 平面形は不整の円形である。比較的良好に焼けている焼土で、下部の焼け方は漸移的である。

時期 検出層位及び周辺包含層の出土の遺物から縄文時代と考えられる。

(広田)

±N-38

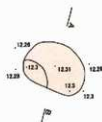
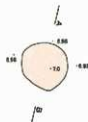
F-5



F-5の土層
 1 褐色腐植土 (SYR5/3)
 よく腐けている 炭素残渣
 2 腐植土 (SYR4/0)
 (V=8)
 しまりややあり 粘性弱い



F-6



F-6の土層
 1 にぶい赤褐色土 (SYR4/0)
 腐植質 骨片など多く含む
 しまりややあり
 2 にぶい赤褐色土 (SYR5/3)
 灰層 骨片 炭化植物茎など土
 腐植あり
 3 腐植土 (SYR4/3)
 腐けた腐植層 よく腐けている
 骨片 炭わすかに含む

±I-41

±O-38

±I-40

F-7



±II-44



F-7の土層
 1 腐植土 (SYR4/3) 腐土>8 炭状 腐土
 2 明褐色土 (SYR5/3) 腐土 しまりあり、粘性ややあり

±L-46

F-8



±M-46

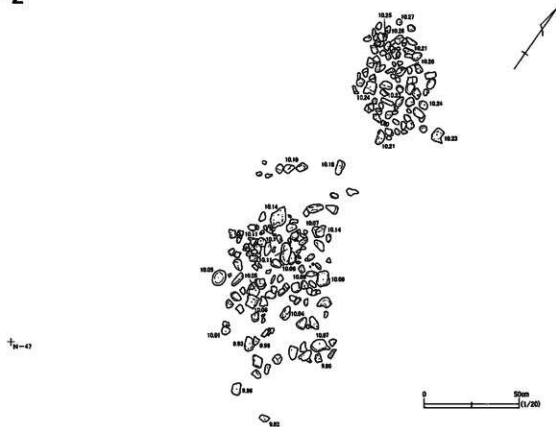


F-8の土層
 1 赤褐色土 (SYR4/5)
 腐土>8 + 腐土>V

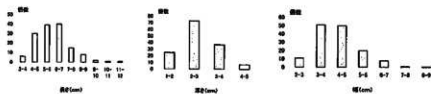
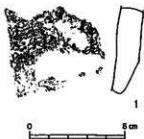


図III-51 F-5~8平面図と土層

S-2



10-47



計

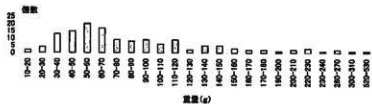


図 Ⅲ-52 S-2 平面図と棒状濺グラフ

(4) 集石

S-2 (図Ⅲ-52、図版43)

位置 L・M-47

規模 2.2×0.75m

調査

Ⅱ層調査中に近接した2ヵ所の礫のまとまりを検出した。遺構の存在を想定し、トレンチ調査を行ったが、落ち込み等は検出できなかった。礫の出土状況等は竪穴住居跡から検出される集石のものと似ており、礫は比較的よくまとまって分布している。

遺物

Ⅳ群土器1点、礫が250点出土し、礫は棒状礫を主体としている。接合関係は認められなかった。Ⅳ群土器は流れ込みと考えられる。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-52)。計測した礫の点数は142点で、長さ4~9cm、幅2~6cm、厚さ1~4cm、重さ30~50gのものが主体である。1はⅣ群土器の胴部片である。RLの斜縄文が施される。

時期

周辺の遺構の時期、検出層位から縄文時代後期後半の可能性が高い。

(広田)

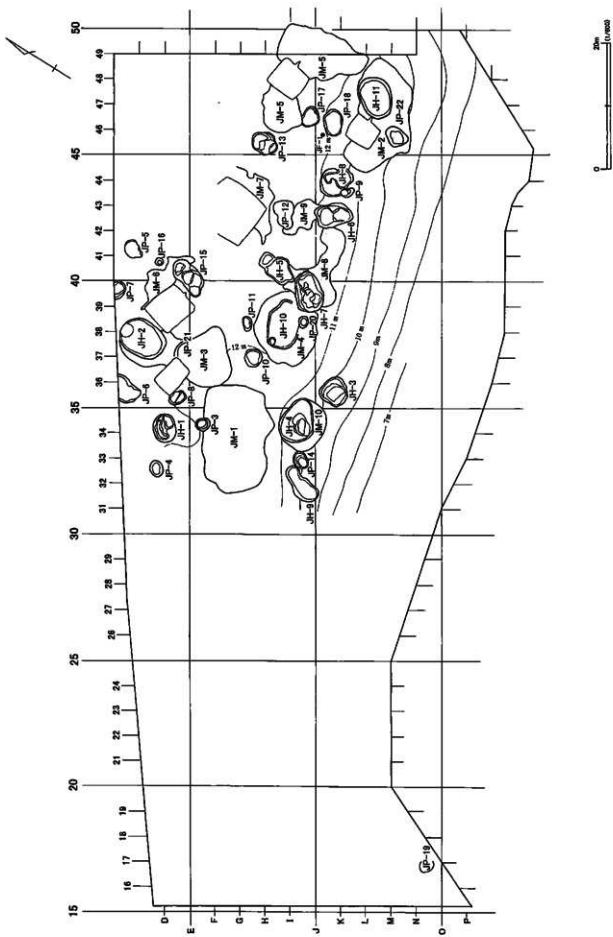


図 III-53 縄文時代の遺構位置図

2 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑20基、盛土10ヵ所、焼土1ヵ所で、主にⅢ層中から検出された。遺構の位置はほぼ縄文時代の遺構の範囲と重なっていて、台地南西部の平坦部から緩い斜面にかけて、標高9～12mに位置する。ただし、JP-19は遺構の集中する場所から離れ斜面下部に位置している。時期は縄文時代中期～後期で、主体は縄文時代後期前葉の北筒Ⅱ～Ⅲ式の時期と考えられる。竪穴住居跡は平面形が楕円形のもの和不整形のものに分かれる。また生活面が覆土中に作られるものが多い。焼失住居跡は3軒検出されている（JH-1・2・10）。土坑の中では、墓塚と考えられるもの（JP-17）が1基検出された。また、墳底に集石が見られるものもある（JP-8）。盛土は、基底面から炭化材の集中が検出されるものがあった（JP-5・6）。ほとんどの竪穴住居跡及び土坑の覆土上部で灰白色の火山灰が検出されたが、その起源は不明である（第Ⅰ章3節(2)参照）。

(1) 竪穴住居跡

JH-1（図Ⅲ-54～57、図版44～48）

位置 C-33・34、D-33・34

規模 4.45×3.76/3.5×2.76/0.87 [0.51] m

調査

台地南東側縁辺部、標高約12mの平坦部に位置する。C-34区付近でⅣ層上面を精査中、遺物と炭化物を伴った楕円形の黒色土の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、覆土上位から焼土、炭化物、覆土中位では炭化材の広がりが見出され、焼失住居であることが判明し、炭化材の検出面を当時の生活面と認定した。また、掘り込みは炭化材の広がる面の下にも続いており、一度深く掘った後に生活面を覆土中に作っていることがわかった。北側約4mにJP-6、西側約3mにJP-4、東側約2mにJP-8、南東約4mにJP-3、JM-1がある。

覆土

生活面の上位と下位で大きく分かれる。生活面より上位の土層（1～10）は大きなブロック状の堆積で、下位の土層（11～20層）は一般的な自然堆積の様相を示している。また、上位の土層は炭化物を多く含むが、下位の土層はほとんど含まない。そのため、生活面の上位と下位の土層の堆積は連続的ではなく、上位の堆積は生活面を廃棄した後の堆積と考えられる。また上位の土層は堆積状況と炭化物を多く含むことから、屋根の葺土が崩落した可能性がある。土層の色調は黒褐色、暗褐色を呈するものが多い。土はⅢ・Ⅴ層を主体とし、Ⅳ・Ⅵ層が混じるものが多い。

形態

平面形は楕円形を呈し、生活面はほぼ平坦である。また掘り方底面には大きな凹凸がみられる。覆土の堆積状況、焼土、炭化材の検出状況から考えると、床面は2段構造になっていて、最初に一度深く掘り、その後やや埋まった段階で生活面を形成したと考えられる。壁の立ち上がりはいずれも緩やかだが、中位の生活面の部分で屈曲する。上部が削平されているが、掘り込み面はⅢ層中と考えられる。また、掘り方はⅥ層中に構築されている。

付属遺構

生活面で炉と考えられる焼土が3ヵ所（HF-1～3）、ピットが4ヵ所（HP-1～4）検出されている。炉はいずれも床面中央付近で検出された。平面形はいずれも丸みを帯びた不整形で、よく焼

JH-1

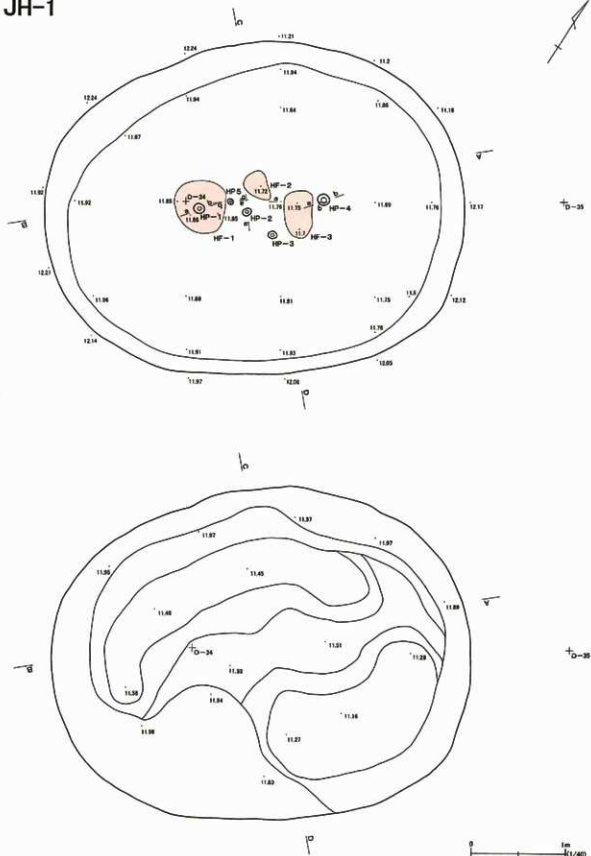
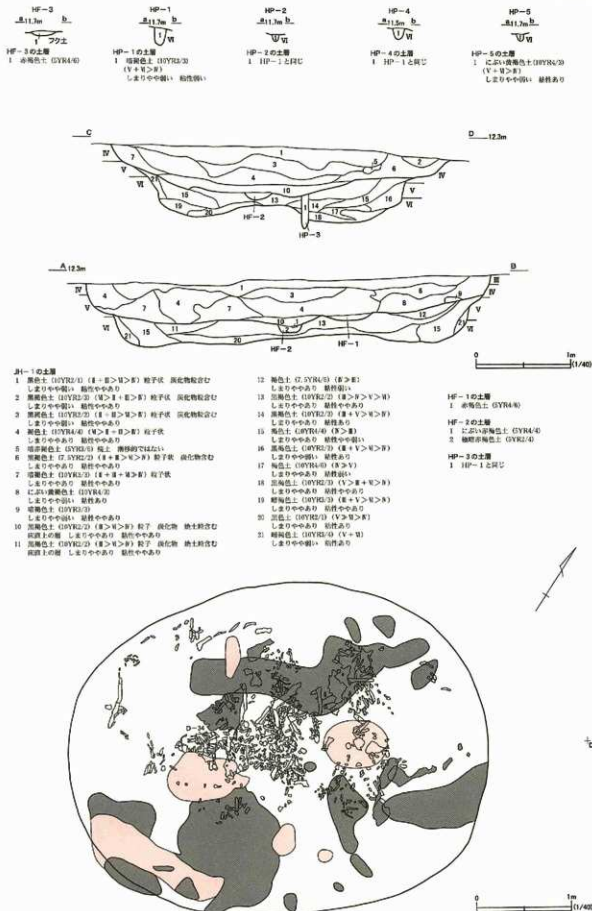
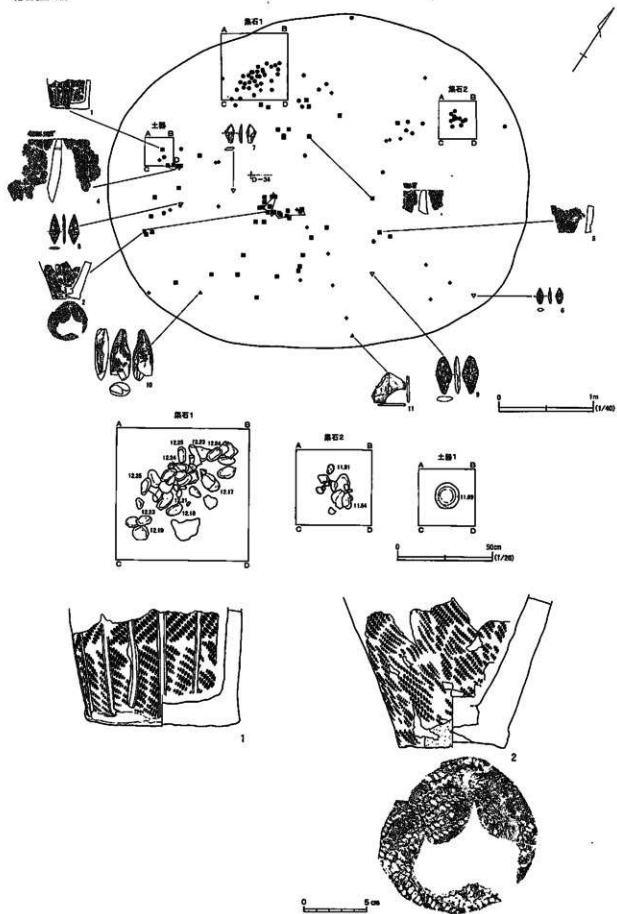


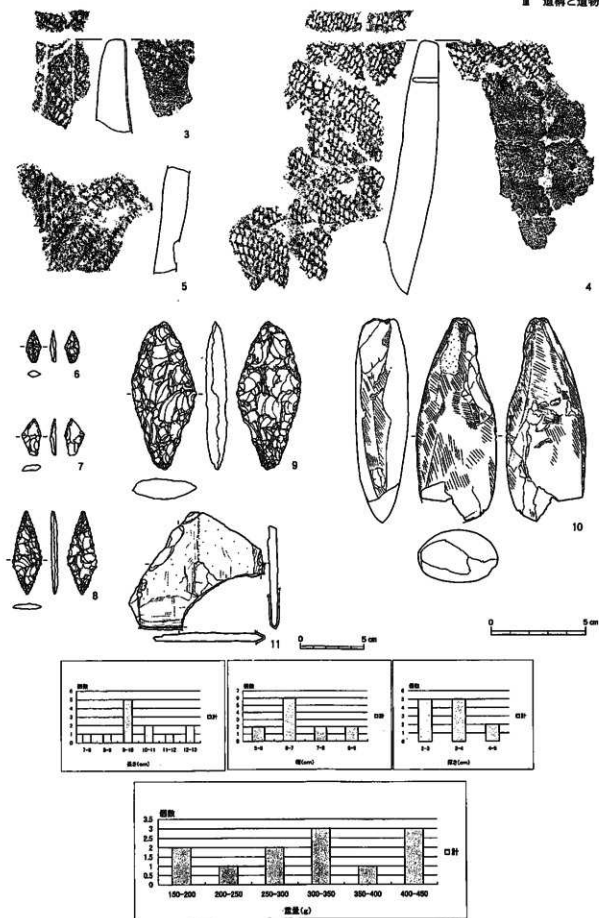
圖 III-54 JH-1 平面圖



図Ⅲ-55 JH-1土層、HP、炭化材出土状況図



圖Ⅲ-56 JH-1 遺物分布圖、遺物(1)



図Ⅲ-57 JH-1遺物(2)、礫グラフ

けている。また、下部の焼け方は漸移的である。HF-1内にHP-1が構築されているため、HF-1は焼失に伴う焼土の可能性がある。ピットはいずれも小形で、炉に近接して検出された。平面形はほぼ円形で、掘り込みは浅いものが多い。HP-3は約36cmと深いが、それ以外は10~20cm程度の深さである。性格は不明である。

炭化材出土状況

覆土上部へ生活面にかけて多量の焼土と炭化物が検出された。特に生活面及びその直上では多量の炭化材が検出された(図Ⅲ-55)。炭化材の分布は中央付近が密で、壁付近は少なく、特に規則性は認められなかった。炭化材は図化後、遺存状況の良いものに関して72点のサンプルを採取し、北海道浅井学園大学教授三野紀雄氏に樹種同定を依頼した。その結果、ハンノキ属17点(23.6%)、クルミ属11点(15.3%)、ヤナギ属8点(11.1%)、トネリコ属3点(4.2%)、コナラ属コナラ亜属コナラ節3点(4.2%)、カバノキ属2点(2.8%)、樹種不明28点(39%)という結果を得た(第V章2篇参照)。検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が3800±40年BP(較正暦年代2340~2130BC)という結果を得た。

遺物

Ⅳ群土器、石鏃、石槍、フレイク、原石、石斧等、石鏃、礫が923点出土している。量的にはⅣ群土器628点、礫258点が出土遺物のほとんどを占める。層別別では生活面上部の覆土出土の遺物が大半で、生活面の遺物は少量である。また、掘り方出土の遺物はほとんどない。平面分布は特に片寄りみられず、全体的に散漫な傾向にある。Ⅳ群土器は1カ所から同一個体の小片が出土している場合、遺物分布図のドットでは1点扱いしているため、ドットの数と点数は一致しない。接合関係は覆土出土のⅣ群土器小片62点が接合し、1個体復元された(図Ⅲ-56-2)。

Ⅳ群土器は生活面上部の覆土出土のものも多く、床面から出土したものは4点のみである。平面分布は竅穴南西側がやや多い。石鏃は生活面上部の覆土から2点、掘り方覆土から1点出土している。生活面南西側で底部が出土した(図Ⅲ-56-1)。石槍は竅穴東側の覆土から出土している。フレイクは生活面覆土出土のものも多く、床面から4点、掘り方覆土から1点、掘り方壙底から1点出土している。原石はめのう製で、生活面覆土から1点出土している。石斧は覆土中から4点まとまって出土している。

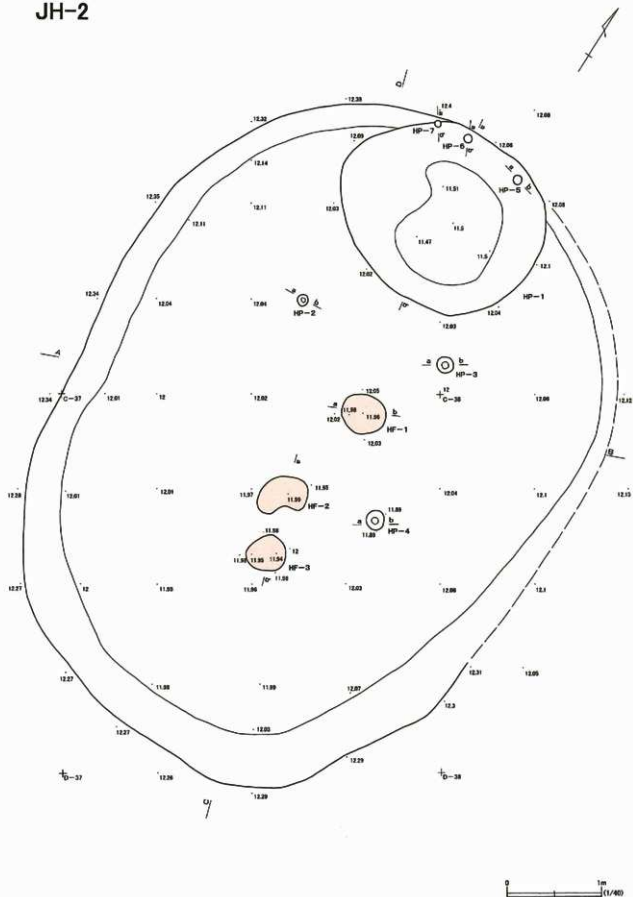
集石は床面西側で1カ所検出された(図Ⅲ-56)。集石は32点を数え、約0.7mの範囲にやや密に分布する。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-57)。計測した礫の点数は12点で、長さ9~10cm、幅6~7cm、厚さ2~4cm、重さ250~350gのものが主体である。

1~5はⅣ群土器である。1・2は胴~底部。1は平底で、胴~底部にはLRとRLの斜縄文を交互に施し、さらに縦位の太い沈線を加えている。底面は雑なナデが施される。2はやや上げ底で、内面の剥落が著しい。胴~底部にはRLの斜縄文が深く施され、底面にも縄文が施されている。胎土は砂礫を多く含み、粘土は緻密である。外面の色調はにぶい黄褐色である。3は口縁部片である。肥厚帯部分の破片で、外面にはRLの斜縄文が施された後、縦位の沈線が施される。口唇部、口縁内面上部にもRL斜縄文が施される。胎土には砂礫と繊維を含み、外面の色調は黒褐色である。4は口縁~胴部片である。外面と口唇部、内面上部にはRLの斜縄文が深く施され、外面には細く深い刺突列が横断する。胎土は砂礫を多く含み、粘土は緻密である。5は胴部片である。二次焼成のため赤化し、脆くなっており、外面にはLRの斜縄文が施された後、縦位の細い沈線が加えられている。6~8は有茎の石鏃。6・7は黒曜石製で、7は被熱により表面が発泡する。8は頁岩製で非常に薄く成形される。9は黒曜石製の石槍で、正面左側縁部には厚みが残る。10は流紋岩?製の石斧、11は砂岩製の石鏃である。

時期 床面出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JH-2



図Ⅲ-58 JH-2平面図

JH-2 (図Ⅲ-58~65、図版49~51)

位置 B-37・38、C-36~38、D-37

規模 7.25×6.58/5.37×4.75/0.33m

調査

台地南東側縁辺部、標高約12mの平坦部に位置する。B-38区の25%調査時にⅣ層上面で黒褐色土の落ち込みと共に多量の炭化材を検出した。そこで、周辺グリッドの精査を行った所、大きな楕円形の黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を基準として十字の土層観察用ベルトを設定し、掘り下げを行なった結果、覆土中から焼土、炭化物の広がりが見出され、焼失住居であることが判明した。上部は削平されている。南側は縄文時代の盛土であるJM-3と重なり、JM-3を壊して作られている。そのため、JM-3より新しい時期の遺構と考えられる。また、西側約4mにJP-6、南側約2mにJP-21、北東側約1.5mにJM-6がある。

覆土

覆土全般に炭化物粒が含まれており、特に下部の土層で多く認められる。色調は黒褐色、暗褐色を呈する土層が多い。土層はⅢ層を主体とし、Ⅳ・Ⅴ層が混じるものが多い。ただし、床面付近ではⅣ層主体の褐色の土層も少量認められる。JH-1の覆土上部同様大きくブロック状に堆積する土層が多く、屋根の葺土が崩落した可能性がある。

形態

平面形はほぼ整った楕円形で、掘り込みの浅い住居跡である。北側の壁の一部は25%調査時に誤って削平した。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかで断面は輪状を呈する。上部が削平されているが、掘り込み面はⅢ層中と考えられる。また、床面はⅣ層上面に構築されている。

付属遺構

床面で炉と考えられる焼土が3カ所(HF-1~3)、ピットが7カ所(HP-1~7)検出されている。炉は床面の中央~南側で検出された。平面形はHP-1・3が楕円形に近く、HF-2が不整形である。HF-1・3はよく焼け、HF-2は焼け方が弱い、いずれも焼土上面で炭化物粒が多く検出された。焼土下部の焼け方はいずれも漸移的である。

ピットは7カ所検出された。配置は壁際と、中央付近に位置するものがある。規模から、大形(HP-1)と、小形(HP-2~7)に分けられる。HP-1は床面北壁際に位置し、床面で検出した。平面形はほぼ楕円形で、上場は長軸約2.2m、短軸約1.9mを測る。壊底は平坦で、壁はやや急角度に立ち上がる。また、覆土上部の2層において炭化物の層が検出された。以下の層ではほとんど炭化物が検出されなかったため、床面が構築された時点で、HP-1はほぼ埋まっていたと考えられる。そのため竪穴掘削時の掘り方の可能性がある。壊底はⅣ層中に構築されている。また、HP-1の底面でHP-5~7が検出された。直径は6~10cmと小形で、HP-1の北壁に並んでいる。断面は先が細く、打ち込み杭と考えられ、JH-2の壁柱穴の可能性もある。覆土の色調は黒褐色で、土層はⅢ層を主体としⅣ層が混じる。HP-2~4は配置・規模から柱穴の可能性が高く、いずれも壁から約1.5m離れている。直径は12~18cmと小形で、深さは32~42cmを測る。

炭化材出土状況

覆土上部~生活面にかけて多量の焼土と炭化物が検出された。特に生活面及び直上では多量の炭化材が検出された(図Ⅲ-60)。炭化材の分布はほぼ床面全体に広がり、特に大形のは住居の北側で検出された。焼土は住居の南側で多く検出された。炭化材の方向は、大形のものに関しては東西方向を向くものが多く、小形のものに関しては、特に規則性はみとめられなかった。炭化材は炭化後、

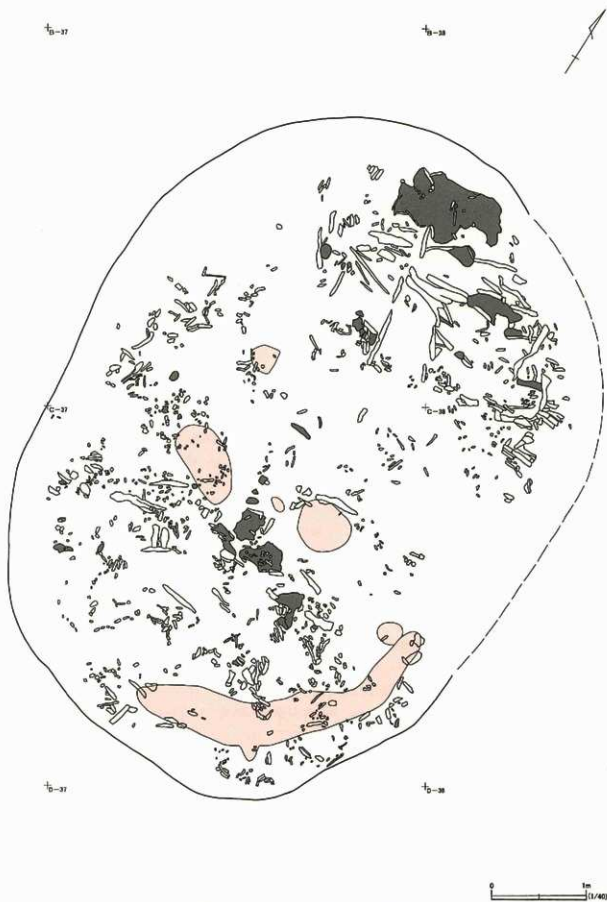


图 III-60 JH-2 炭化材出土状况图

遺存状況の良いものに関して102点のサンプルを採取し、北海道浅井学園大学教授三野紀雄氏に樹種同定を依頼した。その結果、トネリコ属19点(18.6%)、コナラ属コナラ亜属コナラ節19点(18.6%)、ハンノキ属14点(13.7%)、ヤナギ属10点(9.8%)、クルミ属3点(3.0%)、樹種不明31点(30.4%)という結果を得た(第V章2篇参照)。検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正 C14年代が3840±40年 BP(較正暦年代2340-2130BC)という結果を得た。

遺物

Ⅳ群土器、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Uフレイク、石核、フレイク、原石、石斧等、石鋸、砥石、たたき石、石皿・台石、礫が計802点出土している。量的には礫325点、Ⅳ群土器174点、フレイク146点、石皿・台石110点の順に多い。層別別では覆土出土ものと床面出土のものがほぼ半々である。平面分布は全体的に広がっているが、北側がやや少ない。接合関係はⅣ群土器と砥石、礫で認められた。砥石は遺構間の接合関係が認められ、覆土1点とJM-3盛土出土1点の計2点、覆土1点、床面1点、JM-3盛土出土1点とE-38区Ⅱ層出土1点の計4点の接合がそれぞれ認められた。

Ⅳ群土器は覆土出土のものがほとんどで、床面出土は2点である。小片が多く、竪穴中央から西側よりの覆土からややまとまって出土し、若干接合している。石槍は竪穴南壁付近床面から出土している。つまみ付きナイフは床面から1点出土している。スクレイパーは床面から3点出土している。Uフレイクは床面とHP-1の覆土から出土している。石核は床面から出土している。フレイクは床面東側からやや多く出土し、メノウ製もある。原石はメノウ製で、覆土から1点出土している。石斧等は床面から2点出土し、その内1点は未製品である。石鋸は床面から4点出土している。砥石は25点中24点が床面出土で、HP-1覆土から1点出土している。たたき石は覆土から4点、床面から1点出土している。石皿・台石は110点で、小片が多く全て床面出土である。

1～5はⅣ群土器である。1～4は口縁部で、3・4は同一個体である。外面と口唇部に斜縄文が施され、外面には細い刺突列が横環する。1・3・4はRLの斜縄文、2はLRの斜縄文が施される。また、2～4は内面上部にもRLの斜縄文が施される。刺突は、1はやや浅く2～4は深く一部内面に貫通する。また、4の刺突は縦位置がやや低くなるものがある。胎土は砂礫を含み、繊維が少量混ざる。3・4の粘土はやや緻密で、砂礫をやや多く含む。5は胴下半～底部で、3・4と同一個体の可能性がある。やや上げ底で、内面の剥落が著しい。胴部にはRLの斜縄文が施され、一部底面外側にも及んでいる。

図示した石器はすべて床面出土である。

6～10は黒曜石製石器である。6は石槍で基部先端に槌状の剥離がみられ、彫器様石器の可能性もある。7はつまみ付きナイフ、8～10はスクレイパーで、8は頂部にも原石面が残る。

11は加工痕のある礫で、表面が全面磨かれる。石質は不明であるが、濃い緑色を呈する。12は泥岩製の石斧(未成品?)で、正面上端部に潰打痕がみられる。

13～15は凝灰質砂岩製の石鋸で、14は上側縁部にも擦り痕がみられる。また14・15には炭化物が付着する。16～21は砥石で、ほぼすべてに炭化物、煤が付着する。18は比較的扁平な凝灰質砂岩の両端部に擦り痕がみられ、JM-3、包含層出土のものと広い範囲で接合した。破損後再利用した形跡はない。21は軽石製の砥石。22・23はたたき石である。22はチャート製で側縁を中心に細かな潰打痕が残る。下端は刃部状に加工され、刃部部分に潰打痕がみられる。23は淡い緑色を呈する。石質は不明である。24は粗粒玄武岩製の台石である。25は礫で煤と赤色物質がほぼ全体に付着する。26は石皿で同様に煤、炭化物が付着する。使用痕は明確でない。

時期 床面出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

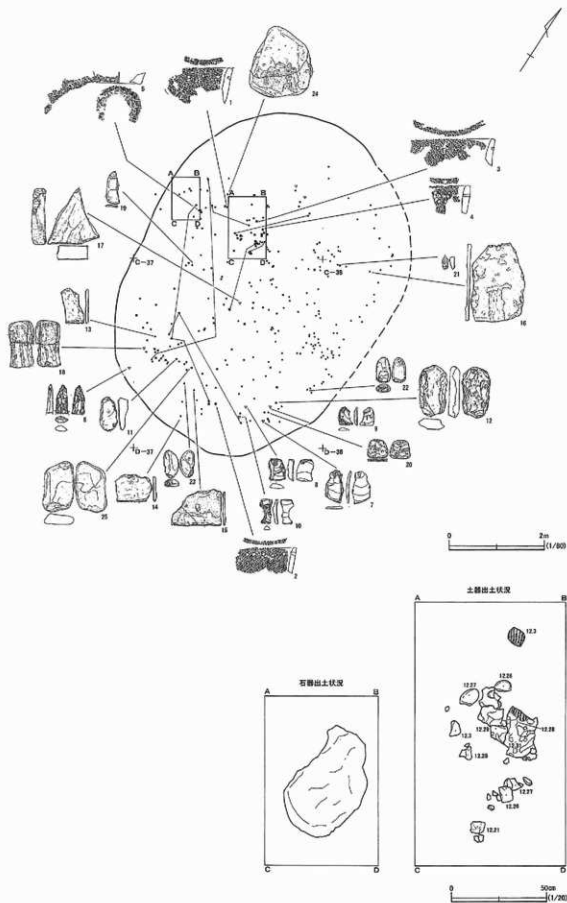


図 III-61 JH-2 遺物分布図

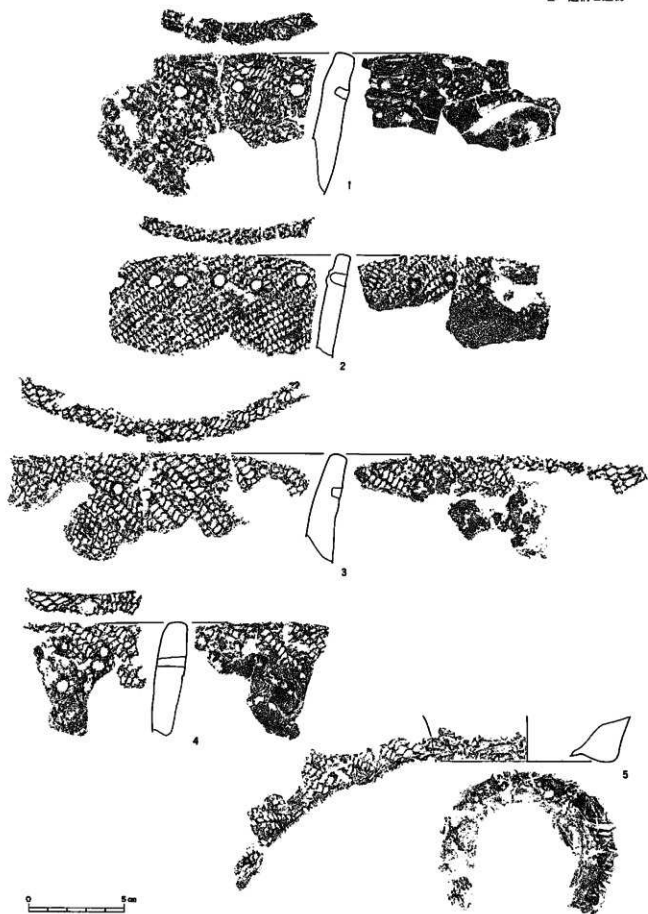
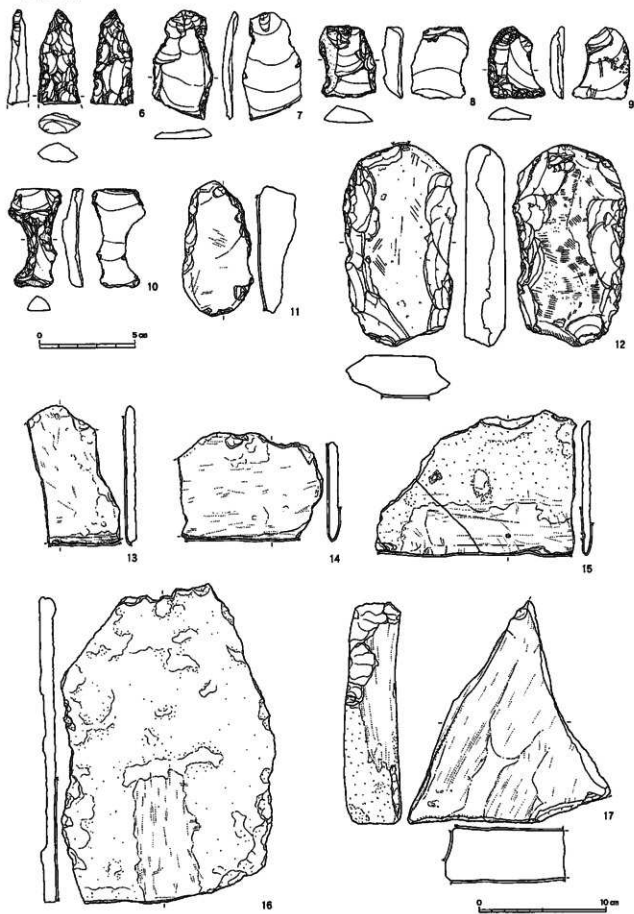


图 III-62 JH-2 遺物(1)

碧香壁穴群



圖一63 JH-2遺物(2)

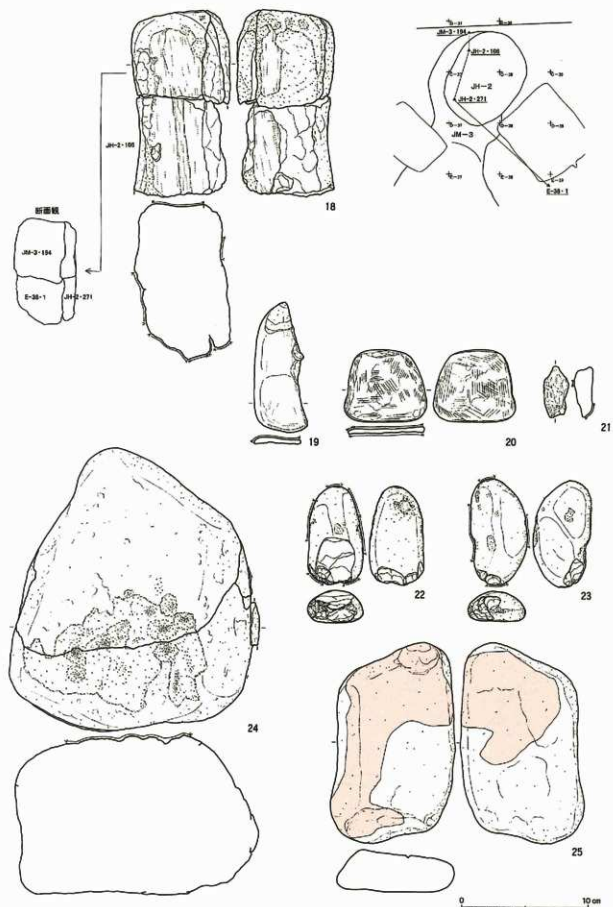
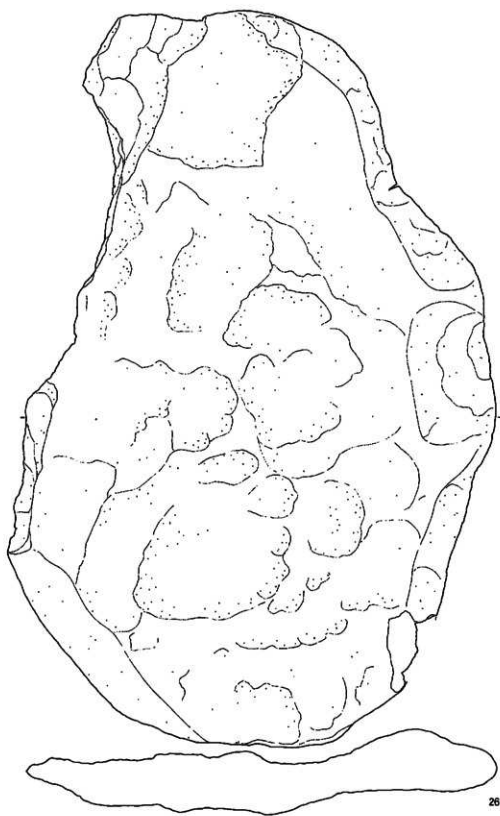


圖 III-64 JH-2 遺物(3)



圖五-65 JH-2遺物(4)

JH-3 (図Ⅲ-66~67 図版52~53)

位置 J-35、36、K-35、36

規模 4.52×4.25/3.89×3.69/1.18 [0.87生活面] m

調査

標高約10mの南への緩斜面の地表面において円形のくぼみとして確認された。南北・東西に十字に土層観察ベルトを設定し掘り下げた。掘り込み最終面からの壁高は北側で1mを超え、予想を上回る深さとなった。南側では壁の立ち上りは不明瞭であった。平坦な褐色土層面で焼土が検出され、この面を生活面と捉えた。焼土調査後、褐色土を30cm程掘り下げると掘り込みの最終面が現れた。なお住居跡周囲に掘り揚げ土は確認できなかった。

覆土

覆土15~18、25~27は埋め戻された土で、それより上は自然堆積となる。斜面上部からの流れ込みが顕著である。

形態

平面形は不整な円形で、壁は斜めに立ち上がる。掘り込みは深く、一度最終面まで掘り込んだ後、30cm程埋め戻して平坦な生活面を作り出しているようである。

遺物

いずれも覆土中より出土し、床面からの出土はない。Ⅳ群土器6点、たたき石1点、フレイク15点、礫156点が出土している。

1はたたき石。石質は砂岩で、両端部が主に利用されている。

時期 出土した土器や形態から縄文時代後期前葉と考えられる。(愛場)

JH-4 (図Ⅲ-68~69 図版54~56)

位置 H-33、34、I-33、34、35

規模 7.03×5.4/6.61×4.9/1.54 [0.96生活面] m

調査

標高約10~11mの南に緩やかに傾斜する斜面部に位置する。地表面において浅いくぼみとして確認され、十字に土層観察用ベルトを設定し、掘り下げた。覆土は黒色土を取り除くとⅥ層主体の黄褐色土、褐色土が堆積する。焼土検出面を床面としたが、中央部から南側には汚れた炭化物まじりの粘質土が不整な円形にみられ、掘り込みの最終面がさらに下に存在すると予測された。焼土検出面調査後、中央部をさらに掘り下げ、最終面を確認した。

覆土

黒色土の下からⅣ、Ⅵ層主体の黄褐色が出てきたため盛土の可能性を考えて調査した。中央部が薄く、壁際に三角堆積があること、遺物の少なさなどから自然堆積と判断したが、屋根を覆っていた土が崩落したものである可能性が考えられる。またJM-10とした盛土は本住居の掘り揚げ土の可能性がある。

形態

平面形は卵形で、壁は斜めに立ち上がり、床面は平坦である。中央部は床面からさらに60cm程掘り込まれ、不整形の土坑状になる。この部分の覆土は自然堆積でなく、柱穴が埋め戻し土中に観察できたことから、一度床面を掘り込んだ後、平坦に埋め戻し、柱を構築したものと考えている。

JH-3

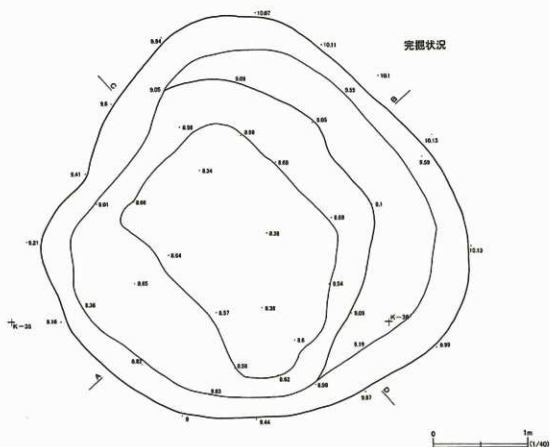
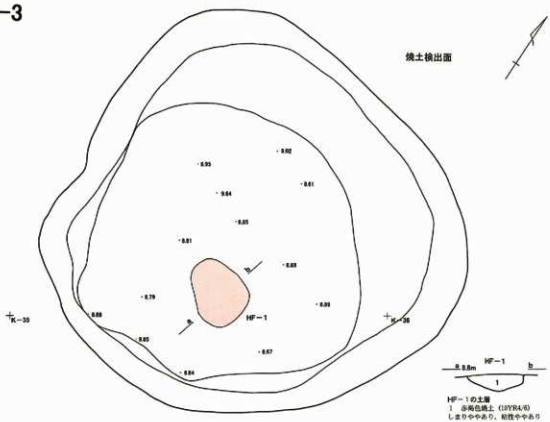
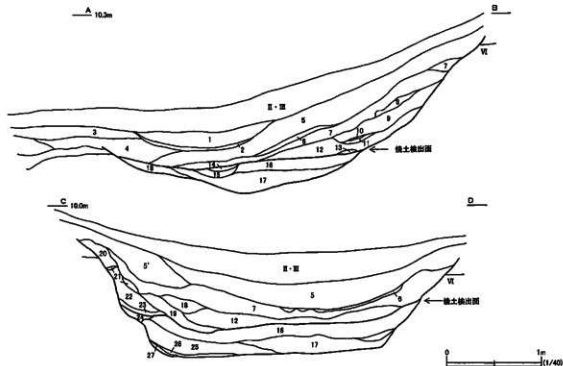


図 III-66 JH-3 平面図、HF



JH-3の土層 (断面)

- | | |
|--|---|
| <p>1 CがV黄褐色土 (0YR6/0) 火山灰 しまりあり、粘性ややあり</p> <p>2 黄褐色土 (0YR5/2) (E>I) 砂質灰に混じりしまりあり、粘性ややあり</p> <p>3 暗褐色土 (0YR2/0) 磁土? (E>F+M) 細化角礫じり しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>4 黄褐色土 (0YR2/1) ~黄褐色土 (0YR2/2) (E>F) しまりあり、粘性ややあり</p> <p>5 黄褐色土 (0YR2/2) (E>F+M) しまりあり、粘性ややあり</p> <p>5' 中砂層</p> <p>6 暗褐色土 (0YR2/2) (F>I) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>7 黄褐色土 (0YR2/2) (E・E>F) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>8 黄褐色土 (0YR2/4) (F>E) しまりややあり、粘性あり</p> <p>9 暗褐色土 (0YR3/3) (F+M+R) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>10 F</p> <p>11 黄褐色土 (0YR2/2) (E>F) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>12 暗褐色土 (0YR3/4) (E>F・M) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>13 黄褐色土 (0YR2/2) (E>F) しまりややあり、粘性あり</p> | <p>14 黄褐色土 (0YR4/6) 磁土 しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>15 黄褐色土 (0YR2/2) (E>F) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>16 黄褐色土 (0YR4/0) (F+M) しまりややあり、粘性あり</p> <p>17 黄褐色土 (0YR2/2) E+黄褐色土 (0YR2/0) の互層 しまりややあり、粘性あり</p> <p>18 黄褐色土 (0YR2/2) (E・E+M) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>19 黄褐色土 (0YR2/2) (E・E>F) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>20 F</p> <p>21 黄褐色土 (0YR2/1) (E) しまりややあり、粘性あり</p> <p>22 F+黄褐色土 (0YR2/2) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>23 黄褐色土 (0YR2/2) (F>I) しまりややあり、粘性あり</p> <p>24 F+黄褐色土 (0YR2/2) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>25 黄褐色土 (0YR2/2) (E・E>F) しまりややあり、粘性ややあり</p> <p>26 黄褐色土 (0YR2/2) (E・E>F) しまりややあり、粘性あり</p> <p>27 黄褐色土 (0YR2/2) (E・E>F+M) しまりややあり、粘性ややあり</p> |
|--|---|

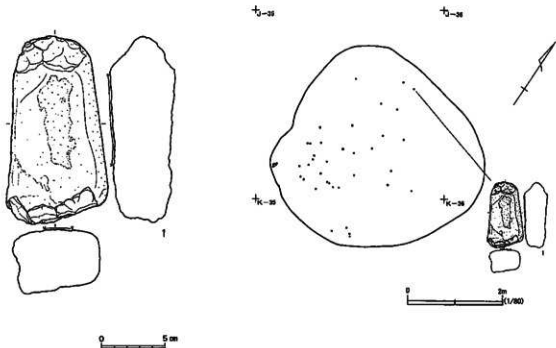
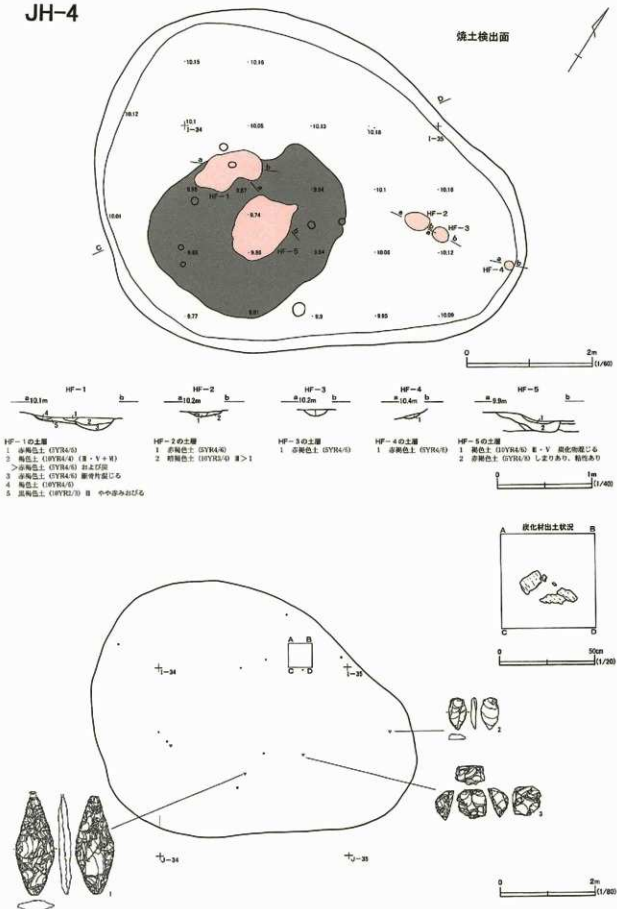


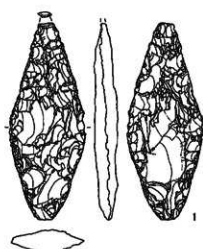
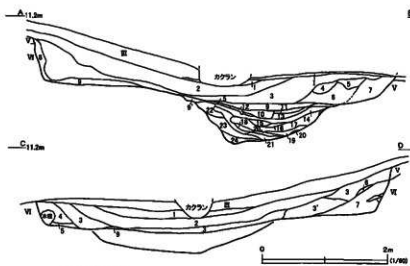
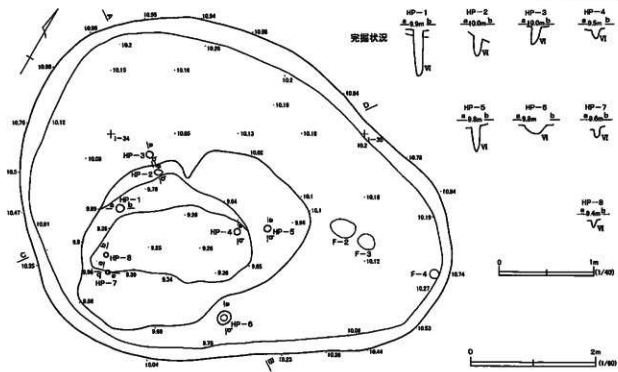
図 III-67 JH-3土層、遺物分布図、遺物

JH-4



図Ⅲ-68 JH-4平面図(1)、遺物分布図、HF

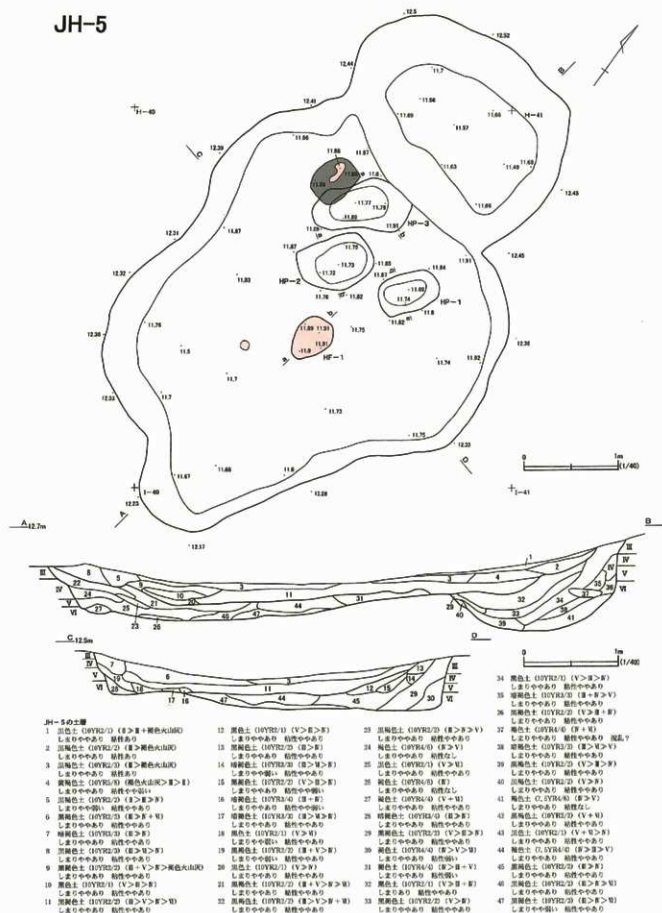
III 遺構と遺物



- JH-4の土層 (調査)
- 1 におい黄褐色土 (IYR6/0) 火山灰 しまりやあり、粘性あり
 - 2 黄褐色土 (IYR3/2) (I>II) 炭化層 しまりやあり、粘性あり
 - 3 褐色土 (IYR4/4~6) (II>III) 炭化層 しまりやあり、粘性やあり
 - 4 黄褐色土 (IYR2/1) (II) しまりやあり、粘性やあり
 - 5 褐色土 (IYR4/0) (II>III) しまりやあり、粘性やあり
 - 6 褐色土 (IYR4/4~6) (II+III) 炭化層 しまりやあり、粘性やあり
 - 7 褐色土 (IYR4/0) (II>III) しまりやあり、粘性あり
 - 8 褐色土 (IYR2/1) (II>III) しまりやあり、粘性やあり
 - 9 黄褐色土 (IYR3/0) (II>III) 炭化層・焼土混じり しまりやあり、粘性やあり
 - 10 やや褐色 焼土混じり
 - 11 黄褐色土 (IYR4/0) 焼土 混じり
 - 12 黄褐色土 (IYR2/2) (II>III) しまりやあり、粘性あり
 - 13 褐色土 (IYR5/0) (II>III) 炭化層・焼土 しまりやあり、粘性やあり
 - 14 褐色土 (IYR2/2) (II>III) しまりやあり、粘性やあり
 - 15 黄褐色土 (IYR5/0) (II) しまりやあり、粘性やあり
 - 16 褐色土 (IYR3/0) (II) しまりやあり、粘性あり
 - 17 黄褐色土 (IYR2/0) (II>III) しまりやあり、粘性やあり
 - 18 黄褐色土 (IYR4/0) (II>III) しまりやあり、粘性あり
 - 19 褐色土 (IYR4/0) (II>III) しまりやあり、粘性やあり
 - 20 褐色土 (IYR2/2) (II) しまりやあり、粘性やあり
 - 21 黄褐色土 (IYR5/0) (II) しまりやあり、粘性あり
 - 22 黄褐色土 (IYR3/0) (II>III) しまりやあり、粘性やあり
 - 23 黄褐色土 (IYR6/0) (II+III) しまりやあり、粘性やあり
 - 24 黄褐色土 (IYR6/0) (II+III) しまりやあり、粘性あり

図III-69 JH-4平面図(2)と土層、HP、遺物

JH-5



JH-5の土層

- 1 褐色土 (HVR2/1) (黒>黄+褐色火山灰)
- 2 褐色土 (HVR2/2) (黒>黄)
- 3 褐色土 (HVR2/3) (黒>褐色火山灰)
- 4 褐色土 (HVR2/4) (黒>黄)
- 5 褐色土 (HVR2/5) (黒>黄)
- 6 褐色土 (HVR2/6) (黒>黄)
- 7 褐色土 (HVR2/7) (黒>黄)
- 8 褐色土 (HVR2/8) (黒>黄)
- 9 褐色土 (HVR2/9) (黒>黄)
- 10 褐色土 (HVR2/10) (黒>黄)
- 11 褐色土 (HVR2/11) (黒>黄)

- 12 褐色土 (HVR2/12) (V>黒>黄)
- 13 褐色土 (HVR2/13) (黒>黄)
- 14 褐色土 (HVR2/14) (黒>黄)
- 15 褐色土 (HVR2/15) (黒>黄)
- 16 褐色土 (HVR2/16) (黒>黄)
- 17 褐色土 (HVR2/17) (黒>黄)
- 18 褐色土 (HVR2/18) (黒>黄)
- 19 褐色土 (HVR2/19) (黒>黄)
- 20 褐色土 (HVR2/20) (黒>黄)
- 21 褐色土 (HVR2/21) (黒>黄)
- 22 褐色土 (HVR2/22) (黒>黄)

- 23 褐色土 (HVR2/23) (黒>黄>V)
- 24 褐色土 (HVR4/0) (黒>V)
- 25 褐色土 (HVR2/1) (V>黒)
- 26 褐色土 (HVR2/2) (V>黒)
- 27 褐色土 (HVR2/3) (V>黒)
- 28 褐色土 (HVR2/4) (V>黒)
- 29 褐色土 (HVR2/5) (V>黒)
- 30 褐色土 (HVR2/6) (V>黒)
- 31 褐色土 (HVR2/7) (V>黒)
- 32 褐色土 (HVR2/8) (V>黒)
- 33 褐色土 (HVR2/9) (V>黒)

- 34 褐色土 (HVR2/10) (V>黒>黄)
- 35 褐色土 (HVR2/11) (V>黒>黄)
- 36 褐色土 (HVR2/12) (V>黒>黄)
- 37 褐色土 (HVR4/0) (黒>黄)
- 38 褐色土 (HVR2/1) (黒>黄)
- 39 褐色土 (HVR2/2) (黒>黄)
- 40 褐色土 (HVR2/3) (黒>黄)
- 41 褐色土 (HVR2/4) (黒>黄)
- 42 褐色土 (HVR2/5) (黒>黄)
- 43 褐色土 (HVR2/6) (黒>黄)
- 44 褐色土 (HVR2/7) (黒>黄)
- 45 褐色土 (HVR2/8) (黒>黄)
- 46 褐色土 (HVR2/9) (黒>黄)
- 47 褐色土 (HVR2/10) (黒>黄)

図III-70 JH-5平面図と土層

炭化材出土状況

北側の壁際床面から炭化材が出土している。放射性炭素年代測定を行なったところ、3860±40年 BP (校正暦年代2340-2130BC) という結果がでている。樹種の同定は行なっていない。

付属遺構

焼土が床面から5ヵ所検出された。HF-1では細かな骨片がみられ、HF-2～4は長軸上に並んで検出された。HF-5は床面のややくぼんだ部分に存在する。

柱穴が埋め戻し部分周辺に7ヵ所みつまっている (HP-1～7)。いずれも先端が尖っていることから打ち込み杭の痕跡とみられ、なかには深さが50cmを超えるものも確認された (HP-1)。

遺物

遺物はⅣ群土器小破片3点、石槍1点、つまみ付きナイフ1点、石核1点、フレイク2点、メノウ原石2点、礫28点である。

このうち床面から出土した石器について図示した。いずれも黒曜石製である。1は比較的大型の石槍で、厚みがある。2はつまみ付きナイフで、下端部に突出部が作出される。3は石核で、打面を変えながら小型剥片を剥離している。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。

(愛場)

JH-5 (図Ⅲ-70～72、図版57～59)

位置 G-40・41、H-39～41、I-40

規模 6.23×5.4/3.7×3.22/0.90 [0.55] m

調査

台地南東側縁辺部、標高約12mの平坦部に位置する。縄文時代の住居跡であるH-26の掘揚げ土を除去したところ、H-40グリッド周辺でⅢ層が楕円形に落ち込んでいる状況が確認された。くぼみの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、縄文時代の竪穴住居跡であることが判明した。また、覆土中位で炉と考えられる焼土及び遺物が面的に検出されたため、JH-1ほか同様、覆土中に生活面を構築していることが確認された。南側にはJM-8が隣接する。新旧関係は不明だが、JH-5の覆土中に盛土の土層が認められないため、JM-8と同時にしくは新しいと考えられる。また、南側にほぼ接する状況でJH-7があり、西側にはJH-10、JM-1がある。

覆土

大きくは生活面の上位 (1～11・16～20層) と下位 (12～15・21～47層) で分けられるが、土層の色調や主体となる土、堆積状況に大きな違いは認められない。また、覆土上部でやや褐色気味の白色の火山灰が部分的に検出された (1～4層) が、供給源は不明である (第1章3節 (2) 参照)。それ以外の土層は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層が主体でⅥ層が少量混じるものが主体である。色調は黒褐色、暗褐色、褐色を呈する。北壁際ではⅣ層の崩落土が少量認められる。

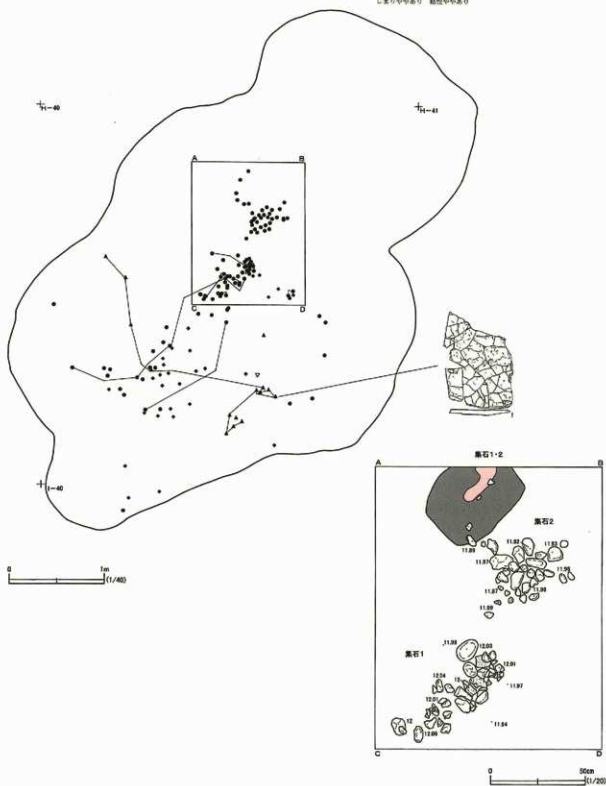
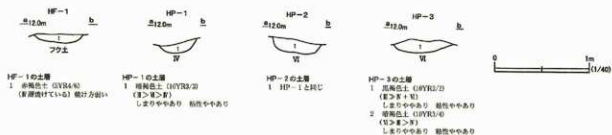
形態

平面形は上場、下場共に不整の楕円形である。掘り込みは浅く、壊底はやや凹凸があり、全体的には南西側に向かって緩やかに傾く。生活面は南側に向かって緩やかに傾く。壁の立ち上がりは北東～南西側にかけては緩やかで、南側は急角度である。掘り込み面はⅢ層中で、壊底はⅥ層中に構築されている。

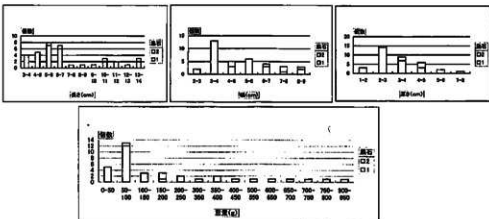
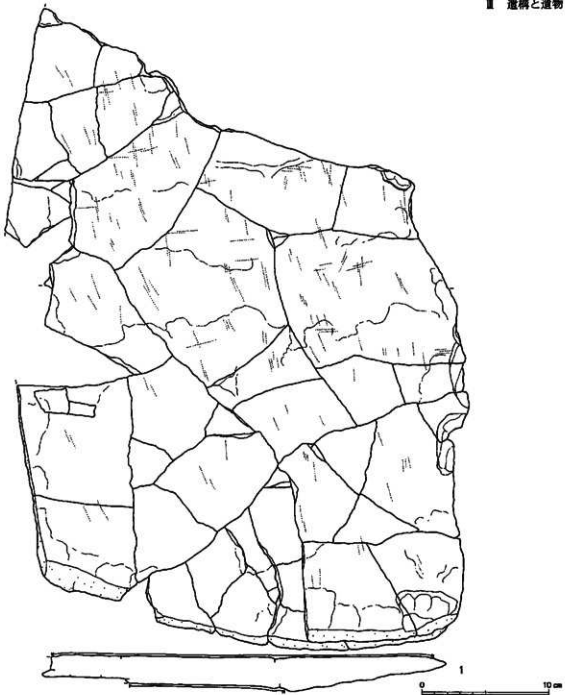
遺物

Uフレイク1点、フレイク37点、石皿・台石88点の計282点が出土している。層位別では生活面覆

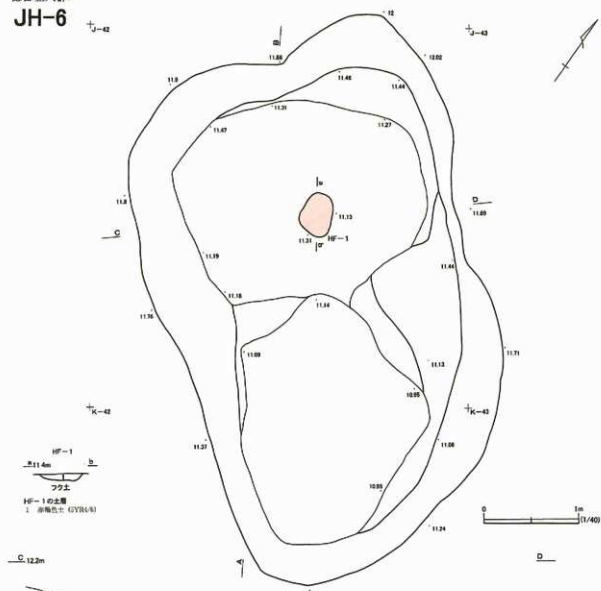
穂香野穴群



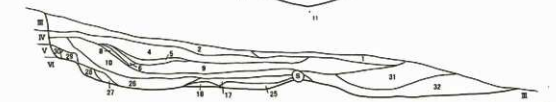
図Ⅲ-71 JH-5HF、HP、遺物分布図



図Ⅲ-72 JH-5遺物、碳グラフ



HP-1の土層
1 黒褐色土 (IYR2/5)



- JH-6の土層
- 1 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>褐色(大山)R>1+R)
 - 2 しまりやみあり 粘質やみあり
 - 3 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R)
 - 4 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R+R)
 - 5 しまりやみあり 粘質やみあり
 - 6 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R(炭化物))
 - 7 しまりやみあり 粘質やみあり
 - 8 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R)
 - 9 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R)
 - 10 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R+R>R(炭化物))
 - 11 しまりやみあり 粘質やみあり
 - 12 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R)
 - 13 黒褐色土 (IYR2/2) (黒+V>R+R)
 - 14 しまりやみあり 粘質やみあり

- 15 黒褐色土 (IYR2/2) (V>R>R+R)
- 16 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R+R)
- 17 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R)
- 18 黒褐色土 (IYR2/2) (黒+R)
- 19 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>V>R)
- 20 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R)
- 21 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R+R)
- 22 しまりやみあり 粘質やみあり
- 23 黒褐色土 (IYR2/2) (V>R>R)
- 24 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R)
- 25 黒褐色土 (IYR2/2) (V>R>R)
- 26 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>V)
- 27 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R+V)
- 28 しまりやみあり 粘質やみあり
- 29 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R)
- 30 しまりやみあり 粘質やみあり
- 31 黒褐色土 (IYR2/2) (黒>R>R)
- 32 しまりやみあり 粘質やみあり

図III-73 JH-6平面図と土層

土及び生活面のものがほとんどで、掘り方覆土は3点、掘り方底面は1点である。平面分布は竪穴中央～南側が多い。接合関係は石皿、礫で認められた。石皿は生活面覆土下部出土の53点がやや広い範囲で接合している。石皿・台石は全て生活面覆土下部出土である。Uフレイクは多くが覆土からで、生活面から少量、掘り方覆土と底面から若干出土している。

集石は生活面ほぼ中央で2ヵ所検出された(図Ⅲ-71)。集石1はHF-1やや北側に位置し、約0.6mの範囲で南北に長く分布する。集石2はさらにその北側にあり、約0.4mの範囲で分布する。集石の礫に関しては計測値のグラフ化を行った(図Ⅲ-72)。礫の点数は集石1が35点、集石2が33点である。集石1の礫は、長さ3～7cm、幅3～4cm、厚さ2～4cm、重さ50～100gが主体である。集石2の礫は、長さ・幅・厚さは特に主体が認められず、厚さは3～5cmのものがやや多く、集石1と2では礫の傾向が異なる。

1は凝灰質砂岩製の石皿で、すり面は平坦面全体となるが、明確な痕跡はない。

時 期 周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

(広田)

JH-6 (図Ⅲ-73～75、図版60～62)

位 置 I-42、J-42・43、K-42・43

規 横 6.04×5.08/3.82×2.72/0.72m

調 査

台地東側縁辺部、標高約12mの緩斜面に位置する。擦文時代の住居跡であるH-27の掘り揚げ土を除去した時点で、J-42グリッド周辺でⅢ層が楕円形にくぼんでいる状況が確認された。くぼみの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、縄文時代の竪穴住居跡であることが判明した。また、覆土中位で炉と考えられる焼土が検出されたため、JH-1ほか同様、覆土中に生活面を構築していることが確認された。北西側にはJM-9、南西側にはJM-8が接している。新旧関係は不明だが、JH-6の覆土中に盛土と考えられる土層が認められないため、JM-8・9と同時にもしくは新しいと考えられる。また、北東側約1mにJH-8、JP-9がある。

覆 土

大きくは生活面の上位(1～9・19層)と下位(10～18・20～32層)に分けられるが、土層の色調や主体となる土、堆積状況に大きな違いは認められない。また、覆土上面でやや褐色気味の白色の火山灰が部分的に検出された(1層)が、供給源は不明である(第1章3節(2)参照)。それ以外の土層は、Ⅲ・V層が主体でⅣ・Ⅵ層が少量混じるものが多い。色調は黒褐色、暗褐色を呈する。

形 態

平面形はほぼ楕円形である。掘り方はやや凹凸があり、北東側と南西側の一部ではテラス状の段構造が認められる。生活面はほぼ平坦である。南東壁の立ち上がりは明瞭に検出されなかったが、斜面下部にあたるため崩落したと考えられる。北壁は中位で屈曲し立ち上がる。それ以外の壁はやや急角度に立ち上がる。掘り込み面はⅢ層中である。掘り方はⅥ層中に構築されているが、南東側は斜面の地形のためⅢ層下部に作られている。

付属遺構

生活面において炉が1ヵ所(HF-1)検出された。HF-1は生活面中央よりやや北西側に位置し、平面形は不整の楕円形である。よく焼けており、下部は漸移的に焼けている。焼土直上及び周辺からは炭化物粒が検出された。

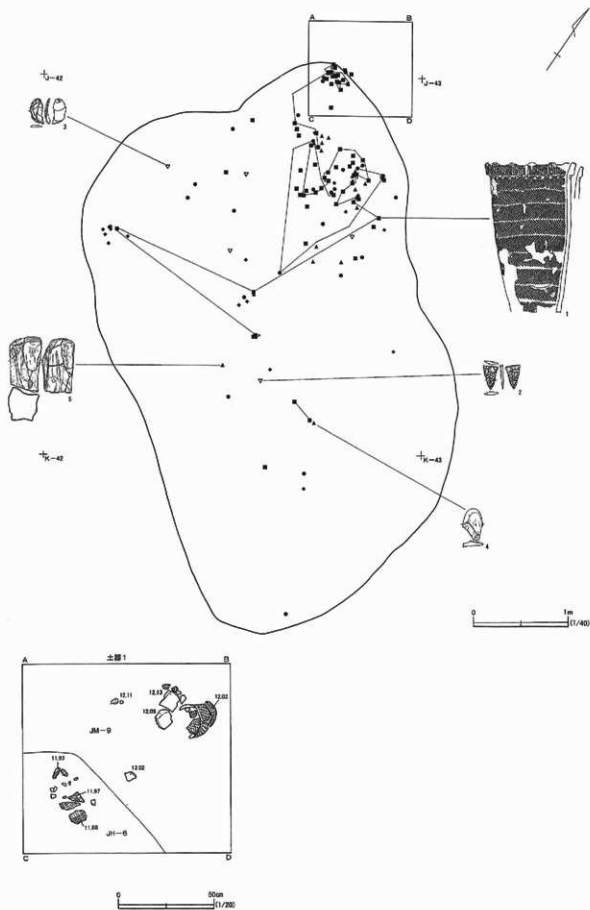


圖 III-74 JH-6 遺物分布圖

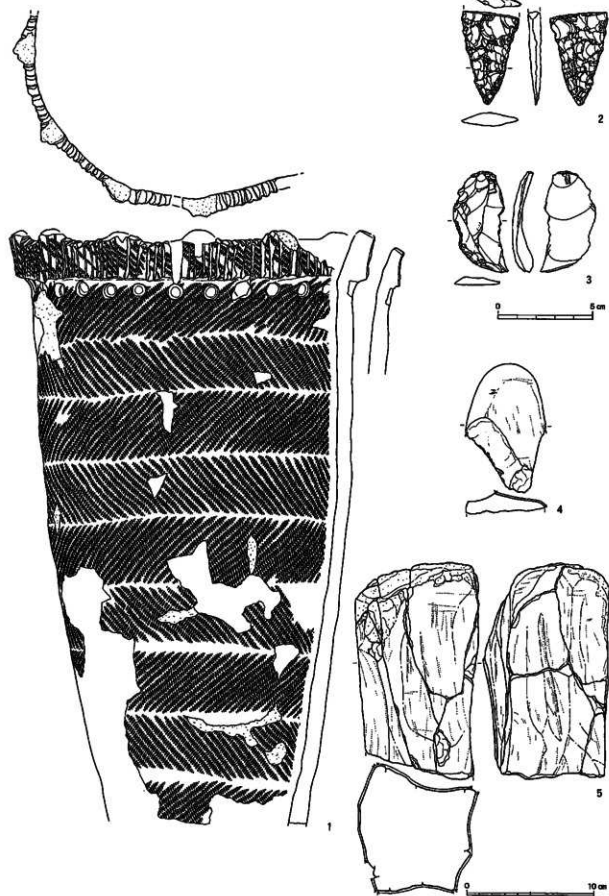
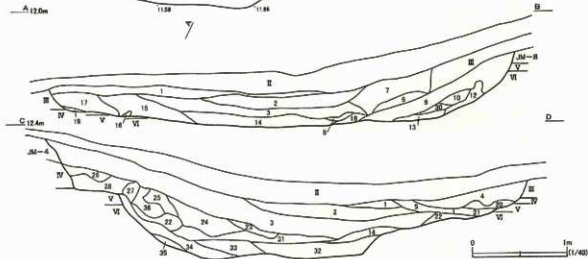
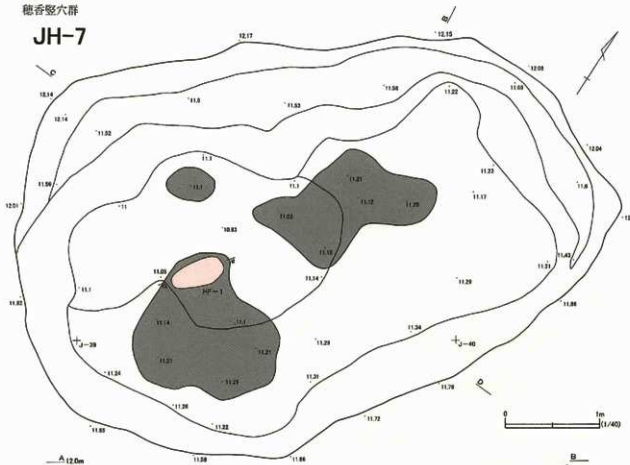


図 III-75 JH-6 遺物

JH-7



JH-7の土層

- 1 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>褐色夾山砂)
- 2 しまり中あり 粘性中あり
- 3 褐色土 (IYR2/3) (黒+褐色夾山砂)
- 4 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>褐色夾山砂)
- 5 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>褐色夾山砂)
- 6 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄)
- 7 褐色土 (IYR2/3) (黒+黄>赤)
- 8 褐色土 (IYR2/3) (黄+V)
- 9 褐色土 (IYR2/3) (黒+黄>赤)
- 10 褐色土 (IYR4/6) (黄>赤)
- 11 褐色土 (IYR3/3) (黒>黄>赤)
- 12 褐色土 (IYR4/6) (黄)

- 13 褐色土 (IYR4/6) (黒>黄>赤)
- 14 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄)
- 15 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 16 褐色土 (IYR4/6) (黄)
- 17 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 18 褐色土 (IYR2/3) (黄>赤)
- 19 褐色土 (IYR3/3) (黒+黄)
- 20 褐色土 (IYR3/3) (黒>黄>赤)
- 21 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 22 褐色土 (IYR2/3) (黒+黄>赤)
- 23 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤+黄化地鉄)
- 24 褐色土 (IYR3/3) (黒>黄>赤)

- 25 褐色土 (IYR2/3) (黒+黄>赤)
- 26 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 27 褐色土 (IYR4/6) (黄>赤)
- 28 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 29 褐色土 (IYR2/3) (黒+黄)
- 30 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 31 褐色土 (IYR2/3) (黒+黄)
- 32 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 33 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄)
- 34 褐色土 (IYR2/3) (黒>黄>赤)
- 35 褐色土 (IYR2/3) (黒+黄)

- JH-1の土層
- 1 黄色土 (IYR4/6)
 - 2 赤土 (IYR2/3) (黒+黄)
 - 3 しまり中あり 粘性中あり

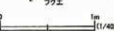


図 76 JH-7 平面図と土層、HF

遺物

Ⅳ群土器、石楡、スクレイパー、Uフレイク、フレイク、砥石、礫が245点出土している。量的には礫119点、Ⅳ群土器80点が遺物の多くを占める。層別別では生活面上部の覆土のものが多く、床面の遺物は少量である。また、掘り方出土の遺物は若干である。平面分布は竪穴北西側がやや密である。接合関係はⅣ群土器、砥石、礫で認められた。Ⅳ群土器は竪穴北側出土の37点が、JH-8覆土1点、JP-12墳底直上1点、JM-9盛土19点、H-41区Ⅲ層2点、I-42区Ⅲ層2点と接合し、1個体復元された(図Ⅲ-74、図Ⅲ-75-1)。また、覆土1点、生活面から出土した1点がJM-2等から出土したものと接合し、復元されている(図Ⅲ-112・113)。砥石は竪穴覆土内で接合している。礫は、覆土4点、生活面6点がJM-9盛土出土の3点と接合している。

Ⅳ群土器は80点出土している。生活面覆土と生活面から出土したものがほとんどで、それ以外では掘り方底面から1点出土している。平面の分布は竪穴北側から北壁付近が多い。石楡は生活面覆土から1点出土している。スクレイパーは生活面覆土から1点出土している。Uフレイクは掘り方覆土2点、掘り方底面1点の計3点出土している。フレイクは20点で、生活面覆土及び生活面からの出土がほとんどである。また、掘り方覆土から1点出土している。砥石は覆土から16点生活面から4点の計20点出土している。

1はⅣ群土器。口縁部は幅の狭い肥厚帯がめぐり、上部には山形突起が配される。突起部は貼り付けのためやや厚くなる。肥厚帯には横位の押引文が施され、肥厚帯直下には竹管状工具による円形刺突列が横環する。口唇部にも横位の押引文が施される。地文はRL、LRの縄文を交互に施文する。胎土は繊維を含み、砂粒を多く含む。2は石楡片。3はスクレイパーで明確な二次加工は少ない。4・5は砂岩製の砥石で、床面からの出土である。4は裏面も利用されている。5は大型の四面砥石で20点以上の破片が接合した。深い擦り痕が残る部分もある。

時期 掘り方底面出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JH-7 (図Ⅲ-76~77、図版63・64)

位置 I-38~40、J-38~40

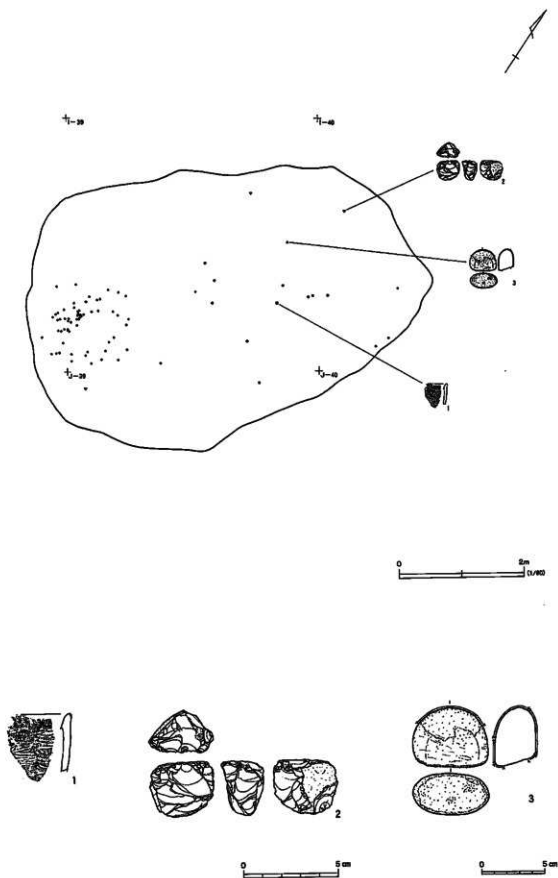
規模 6.42×5.3/4.38×3.73/1.27m

調査

台南東側縁辺部、標高約11mの緩斜面に位置する。発掘前の状況で、円形の浅い窪みとして確認した。くぼみの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、縄文時代の竪穴住居跡であることが判明した。土層の観察や遺物の出土状況からは、覆土中の生活面は確認できなかった。ただし焼土が床面より約10cm上の覆土中から検出されたため、その面が生活面であった可能性がある。JM-4・8が隣接している。新旧関係は不明だが、JH-7の覆土中に盛土と考えられる土層が認められないため、JM-4・8と同時にしくはそれより新しいと考えられる。北側にJH-5、西側約1mにJH-10、JP-20がある。

覆土

覆土上面でやや褐色気味の白色の火山灰が部分的に検出された(1~3層)が、供給源は不明である(第1章3節(2)参照)。それ以外の多くの土層は、Ⅲ・Ⅴ層が主体でⅣ・Ⅵ層が少量混じる。色調は黒褐色、暗褐色を呈するものが多い。また、北壁際にはⅢ層が入り込んでいる。隣接するJM-4・8の流れ込みは認められない。



图Ⅷ-77 JH-7 遗物分布图、遗物

形態

平面形は不整の楕円形を呈する。床面は凹凸があり、南西部はさらに一段低くなっている。北東～北西側にはテラス状の段構造が認められる。壁は比較的緩やかに立ち上がる。掘り込み面はⅢ層中で、床の構築面はⅣ層である。

付属遺構

床面よりやや浮いた状態で炉と考えられる焼土が1ヵ所(HF-1)検出された。HF-1は床面南側に位置し、平面形は不整の楕円形である。よく焼けており、下部は漸移的に焼けている。焼土直上及び周辺からは炭化物粒が検出された。

炭化物・炭化材出土状況

炭化材は検出されなかったが、床面中央付近と南側から薄い炭のまとまりが2ヵ所検出された。レベルはHF-1とほぼ同じで、南側の炭のまとまりはHF-1と重なる。

遺物

I群土器、スクレイパー、Uフレイク、石核、フレイク、原石、たたき石、礫が85点出土している。層別別では覆土のものが多く、床面出土のものは少量である。平面分布は竪穴南西部がやや密である。接合関係は認められなかった。

I群土器は覆土から2点出土している。今回の調査で出土した唯一のI群土器である。スクレイパーは床面から1点出土している。Uフレイクは覆土から1点出土している。石核は覆土から1点出土している。フレイクは20点で、全て覆土出土である。原石はメノウ製で、覆土から1点出土している。たたき石は床面から1点出土している。

1はI群土器の口縁部片である。緩やかな波状口縁で内外面に横位の条痕文が施される。口唇部には刻みが施される。焼成は良好である。2は黒曜石製の円礫素材利用の石核。3は砂岩製のたたき石で、磨り面もみられる。

時期 周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

(広田)

JH-8 (図Ⅲ-78～79 図版65～66)

位置 J-43、44、K-43、44

規模 5.35×4.53/4.64×4.15/0.62m

調査

JP-9の調査時の土層観察用ベルトに壁の立ち上がりが確認され、検出された遺構である。標高約11～12mの南へ傾斜する緩やかな斜面に位置し、非常に浅いくぼみとなっていた。焼土が検出されたため住居と判断し、その面を床面とした。土坑が切り合うような形態であったため土層をよく観察したが、重複した遺構ではなく、一体のものと考えた。

覆土

木根が入って明瞭ではないが北側斜面上部からの流入土で主に構成される。

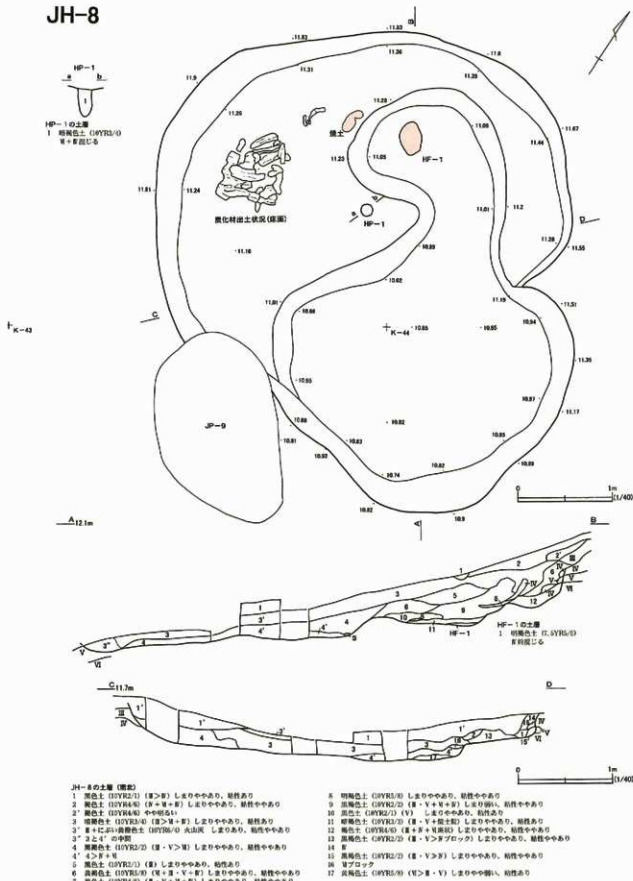
形態

平面形は不整形で、床面はⅣ層に構築され、南側が一段低い2段構造となる。南側の壁の立ち上がりは不明瞭であったが、それ以外は緩やかに立ち上がる。なお住居跡周囲に掘り揚げ土は確認できなかった。

付属遺構

焼土(HF-1)が2段構造の低位の床面から検出された。掘り込みはみられず、厚さは3cm程で

JH-8



図Ⅲ-78 JH-8平面図と土層、HF、HP

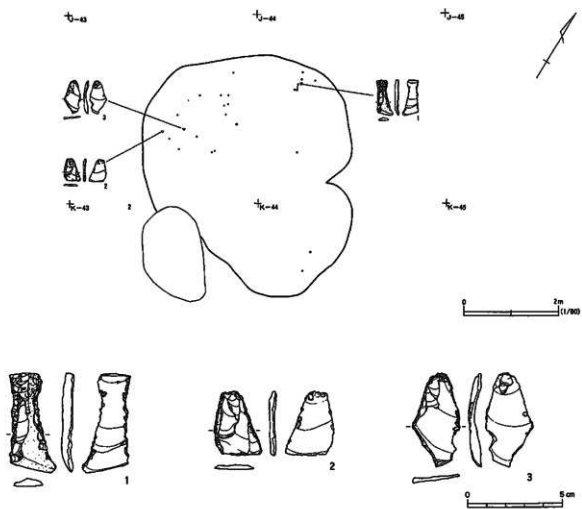
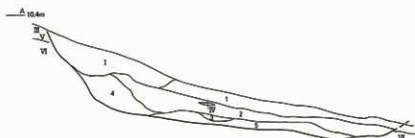
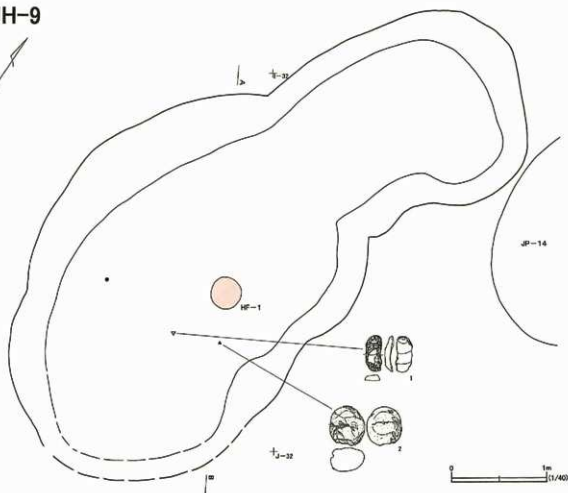


图 III-79 JH-8 遺物分布図、遺物



JH-9の土層 (層記)

- 1 灰色土 (0YR2/1) (V>R粒) しまりや中あり、粘性あり
- 2 灰色土 (0YR1.7/1) (V>Rブロック+多粒) しまりあり、粘性や中あり
- 3 褐色土 (0YR4/0) R 腐土
- 4 褐色土 (0YR4/0) (V+R)→黒褐色土 (0YR2/2) 腐物) しまりや中あり、粘性や中あり
- 5 黒褐色土 (0YR2/2) (R・V)→R+N/ブロック) しまりや中あり、粘性や中あり

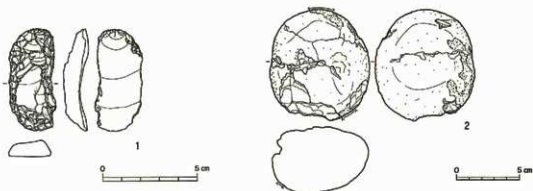


図 III-80 JH-9 平面図と土層、HF、遺物

ある。柱穴がほぼ中央に1ヵ所確認された。

炭化材出土状況

西側の床面直上で検出された。四角形に組まれた状態で、周囲には焼土もみられる。放射性炭素年代測定を行なったところ、3830±40年BP（校正暦年代2460-2200BC）という結果がでている。樹種の同定は行っていない。

遺物

遺物はⅣ群土器小破片1点、スクレイパー3点、フレイク16（床面出土12）点、礫30点である。

このうちスクレイパーについて図示した。1は床直上、2・3は床面出土である。2・3は使用痕と考えられる微細な剥離が側縁にみられる。すべて黒曜石製である。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。JP-9に切られることからJP-9より古い。（愛場）

JH-9（図Ⅲ-80 図版67）

位置 H-32、I-31、32、J-32

規模 6.45×3.18/5.69×2.15/0.97（0.88生活面）m

調査

標高約10mの南へ傾斜する緩やかな斜面において浅いくぼみとして確認された。黒褐色土上面で焼土が検出され、北側に壁の立ち上がりが見られたことから住居跡として調査した。

覆土

風倒木による攪乱があり、不明瞭だが北側壁際には三角堆積がみられる。斜面上部からの流れ込みも観察できた。

形態

平面形は土坑が連結したような不整形で、南側は壁の立ち上がりが不明瞭であった。焼土面は平坦だが、南側はやや傾斜する。焼土面から10cm程で、最終掘り込み面となる。この住居も掘り込み後、埋め戻しを行ない、生活面を作り出していると思われる。なお住居跡周囲に掘り揚げ土は確認できなかった。

付属遺構

焼土が1ヵ所検出された。円形で、Ⅳ層が焼けている。

遺物

遺物はスクレイパー1点、たたき石1点、礫1点である。いずれも覆土からの出土である。

1は黒曜石製スクレイパーで、両側縁には比較的急角度、下端部は鋭角である。2はたたき石で、石質は不明である。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。

（愛場）

JH-10（図Ⅲ-81～83 図版68～69）

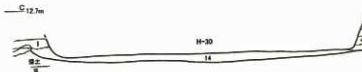
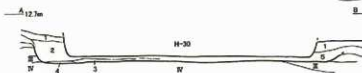
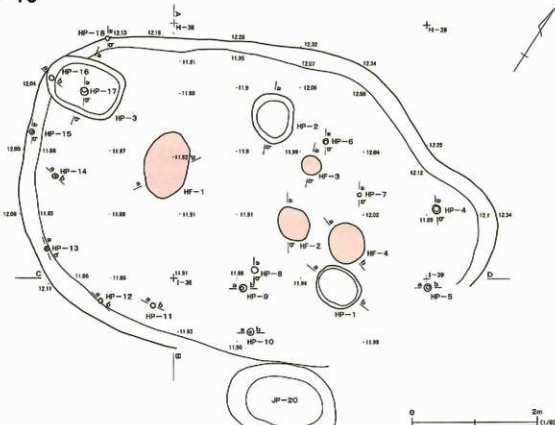
位置 H-37、38、39、I-37、38、39

規模 7.64×5.02/7.12×4.64/0.3m

調査

標高約11～12mの段丘縁辺部に所在する。H-30調査時のトレンチにより、炭化材が面的に出土する層が確認され、遺構の存在が予想された。まずは全体を掘り下げ、炭化材の広がりを押さえた。トレンチにより炭化材直下に粘質の土層が確認されたため、この面を床面とした。東西で明瞭な壁の立

JH-10



JH-10の土層 (断面)

- 1 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>黄+赤) しまりや中あり、粘性あり
- 1' 褐色土 (OYR5/4) (黄+赤+黒) しまりや中あり、粘性あり
- 2 褐色土 (OYR6/4) (黄>黄+赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 3 黄褐色土 (OYR5/4) (黄) しまりや中あり、粘性や中あり
- 4 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 5 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>赤) しまりや中あり、粘性や中あり

JH-10の土層 (断面)

- 1 黄褐色土 (OYR5/4) (黄+赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 2 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>黄+赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 3 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 4 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>黄+赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 5 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>赤) しまりや中あり、粘性あり
- 6 黄褐色土 (OYR5/4) (黄) しまりや中あり、粘性あり
- 7 黄褐色土 (OYR5/4) (黄+黄褐色) しまりや中あり、粘性や中あり

- 8 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>黄+赤) しまりや中あり、粘性あり
- 9 褐色土 (OYR6/4) (黄+赤+黒) しまりや中あり、粘性あり
- 10 黄褐色土 (OYR5/4) (黄+赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 11 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>黄+赤) しまりや中あり、粘性や中あり
- 12 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>赤) しまりや中あり、粘性あり
- 13 褐色土 (OYR6/4) (黄+赤+黒) しまりや中あり、粘性あり
- 14 褐色土 (OYR6/4) (黄+赤+黒) しまりや中あり、粘性や中あり 黄化材混じる



- HP-1の土層
- 1 赤褐色土 (OYR4/4) 粘土 しまり強い
 - 1' 明黄褐色土 (OYR6/4) しまり強い
 - 2 褐色土 (OYR2/3) (黄)
 - 3 しまりや中あり、粘性や中あり 黄化材混じる
 - 4 黄



- HP-2の土層
- 1 明褐色土 (OYR5/3) 黄粘土
 - 2 暗褐色土 (OYR3/4) (黄>赤) しまりや中あり、粘性や中あり



- HP-3の土層
- 1 褐色土 (OYR6/4) 黄>黄+赤 しまりや中あり



- HP-4の土層
- 1 黄褐色土 (OYR5/4) 粘性強い しまり強い、粘性あり
 - 2 明褐色土 (OYR5/4) 黄粘土



- HP-1の土層
- 1 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>黄+赤) 黄褐色 しまりや中あり、粘性あり
 - 2 暗褐色土 (OYR3/3) (黄+黄+赤) 黄化材混じる しまりや中あり、粘性や中あり
 - 3 黄
 - 4 褐色土 (OYR6/4) (黄+赤+黒) 黄化材混じる しまりや中あり、粘性あり



- HP-2の土層
- 1 黄褐色土 (OYR5/4) (黄>赤) しまりや中あり、粘性や中あり
 - 2 黄褐色土 (OYR5/4) (黄+黄+赤) 黄化材混じる

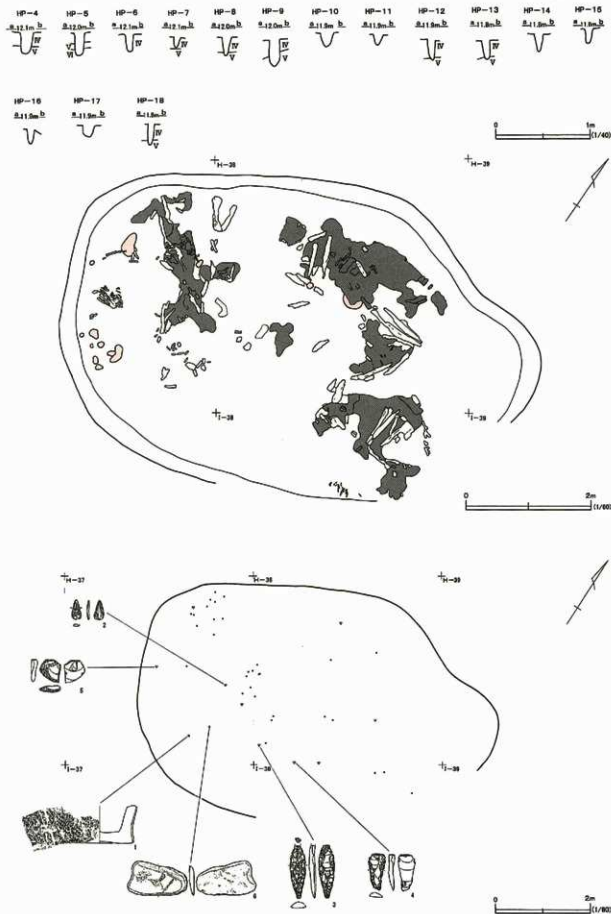


- HP-3の土層
- 1 褐色土 (OYR6/4) (黄>黄+赤) しまりや中あり、粘性あり

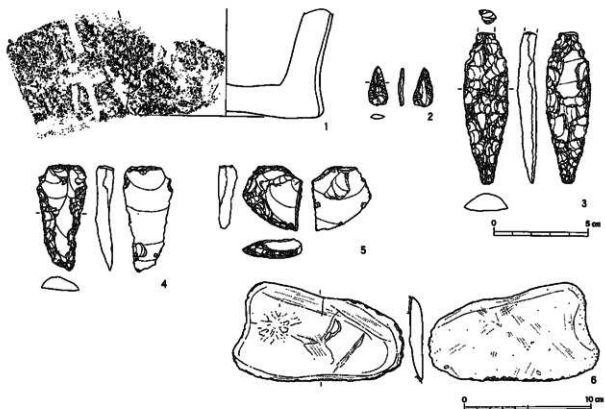


図III-81 JH-10平面図と土層、HF、HP

III 遺構と遺物



図III-82 JH-10HP、炭化材出土状況図、遺物分布図



図Ⅷ-83 JH-10遺物

ち上りを捉えたため住居跡と確定した。炭化材の分布範囲は住居跡内におさまるため、盛土ではなく本住居に伴うもので、JH-1・2同様の焼失住居として調査を進めた。柱穴については住居外についても確認を行なった。

覆土

H-30により中央部が破壊されているが、覆土の主体はⅥ層で、焼失後盛土(JM-4)により人為的に埋められている。床面直上の炭化材層では焼土が数カ所で確認された。また3 cm程の赤色物質の塊が1カ所でみられた。

炭化材出土状況

炭化材は良好に残っているものは少なく、炭化物層となる部分が多いが、中心に向かって倒れている印象を受ける。焼土が炭化物とともに数カ所でみられる。状態のよいものを樹種同定した結果、クルミ属、ニレ属、コナラ属などの樹種が同定された。

形態

南側の壁の立ち上がりがかめず平面形ははっきりしないが、楕円形に近くなりそうである。床面は平坦で、Ⅳ層中に形成されるが、西から南の壁際ではⅤ層がみられる。Ⅵ層主体の貼床がほぼ全体にみられ、掘り込みは浅い。住居跡周囲に掘り揚げ土は確認できなかった。

付属遺構

焼土4カ所、土坑3カ所、柱穴が検出された。

焼土は床面から4カ所確認され(HF-1~4)、HF-1・2・4については長軸上に並ぶ。HF-4は床面で汚れた褐色土が円形にみられ、当初は土坑として調査していたが、坑底部に焼土がみられたためHFとして取り扱った。

土坑は3カ所確認された(HP-1~3)。いずれも楕円形で床面から15cm程掘り込まれ、Ⅵ層を主体とした土で埋め戻しされている。

小柱穴は壁際を中心に15カ所で確認され(HP-4~18)、いずれも先端が尖る。

遺物

遺物はⅣ群土器底部1点、石鏝1点、石槍1点、両面調整石器3点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー1点、Uフレイク1点、フレイク36点、石錐1点、礫3点である。覆土はJM-4となるため、床面、HF、HP出土のものをJH-10の遺物として取り扱った。2以外は床面出土である。

1はⅣ群土器の底部片である。平底で、二次焼成のため非常に脆くなり、器面には剥がれが認められる。外面にはRLの斜縄文が施され、その後、縦位の太い沈線が加えられる。胎土は砂粒を含み、焼成は悪い。2は無茎の石鏝で、HF-1出土である。3は石槍としたが、両面調整のスクレイパーの可能性もある。4はつまみ付きナイフ、5はラウンドスクレイパーである。2~5は黒曜石製である。6は砂岩製の石鏝で、端部は鋸歯状に調整され、稜はあまり擦られていない。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。盛土(JM-4)に埋められる。(愛場)

JH-11 (図Ⅲ-84・85、図版70)

位置 K-46・47、L-46~48、M-46・47

規模 6.47×5.65/4.88×4.21/0.62m

調査

台地南東側縁辺部、標高約10mの緩斜面に位置する。縄文時代の盛土であるJM-2を底面付近まで掘り下げたところ、L-47区付近で暗褐色土の落ち込みが検出された。グリッドライン沿いにトレンチ調査を行ったところ、JM-2の盛土の土で埋められた竪穴住居跡であることが判明した。土層の堆積状況からJH-11はJM-2より古いと考えられる。南側約2mにJP-22がある。また、JH-11の覆土上部にはH-20がある。また、床面で薄いベンガラと考えられる赤色物質の広がりを10カ所検出した。

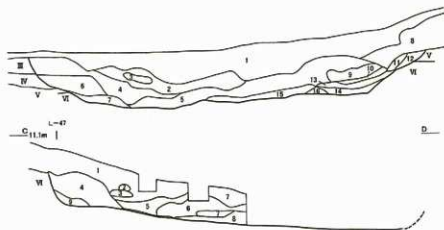
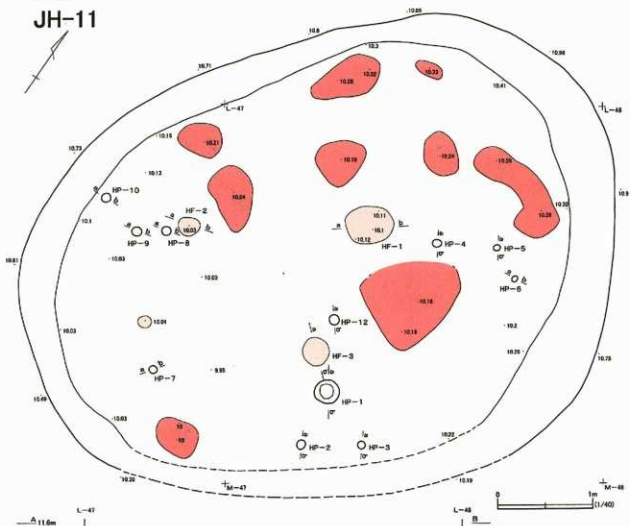
覆土

JM-2の盛土で埋められているため、基本的にはJM-2の土層と同じである。上部はⅢ層を主体とした黒褐色の土層で、下部はⅥ層を主体とした褐色の土層である。自然堆積により形成された土層がほとんど認められないため、JH-11は廃棄後まもなく、短時間でJM-2により埋められたと考えられる。

形態

平面形は不整の楕円形を呈する。南東壁付近は誤って削平したが、壁が存在していたと考えられる。

JH-11



HP-1の土層

- 1 赤褐色土 (OYR4/3) ○印) よく畑でいる
しまりあり 粘状中やあり
- 2 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまりあり 粘状中やあり
- 3 黒化した土

HP-2の土層

- 1 暗褐色土 (OYR2/0)
(黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり

HP-3の土層

- 1 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>黒>赤>黄
しまり中やあり 粘状中やあり

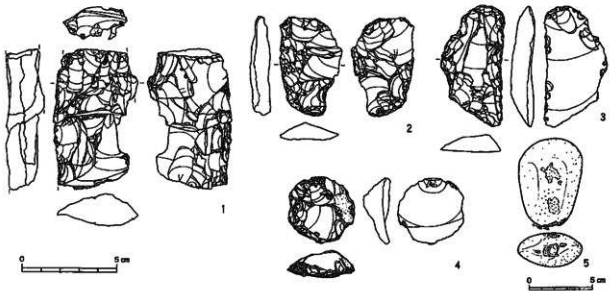
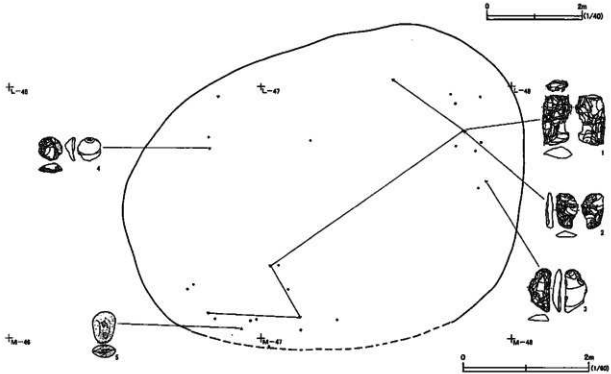
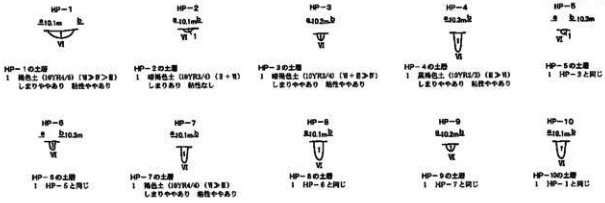
JH-11の土層

- 1 黒褐色土 (OYR2/0) (黄>黒>赤)
しまり中やあり 粘状中やあり
- 2 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>赤>黒
しまり中やあり 粘状中やあり
- 3 黒褐色土 (OYR2/0) (黄>黒>赤)
しまり中やあり 粘状中やあり
- 4 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>赤>黒
しまり中やあり 粘状中やあり
- 5 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>赤>黒
しまり中やあり 粘状中やあり
- 6 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>赤>黒
しまり中やあり 粘状中やあり
- 7 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり
- 8 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり
- 9 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>赤>黒
しまり中やあり 粘状中やあり
- 10 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり
- 11 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり
- 12 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり
- 13 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>赤>黒
しまり中やあり 粘状中やあり
- 14 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり
- 15 暗褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) 粘土
しまり中やあり 粘状中やあり
- 16 褐色土 (OYR4/0) (黄) 黄>赤>黒
しまり中やあり 粘状中やあり



図 III-84 JH-11平面図と土層、HF

Ⅲ 遺構と遺物



図Ⅲ-85 JH-11HP、遺物分布図、遺物

床面は斜面に沿って南西側にわずかに傾斜する。検出した壁はいずれも緩やかに立ち上がる。掘り込み面はⅡ層中と考えられ、床面はⅤ層中に構築されている。

付属遺構

床面で炉が3ヵ所（HF-1～3）、ピットが10ヵ所検出された。焼土の平面形はいずれも不整の楕円形である。HF-1は床面中央よりやや北側に位置する。焼土は非常によく焼け、厚さは約10cmを測る。HF-2は床面南西側に位置し、焼土の焼け方は弱く、厚さは約2cmを測る。HF-3は床面南東部に位置し、焼土はよく焼けており、厚さは約6cmを測る。いずれも焼土下部は漸移的に焼け、焼土直上及び周辺からは炭化物粒が検出された。ピットは規模から、やや大形のもの（HP-1）と小形のもの（HP-2～10）に分けられる。HP-1はHF-3のすぐ外側に位置し、掘り込みは約8cmと浅い。小形のピットは床面中央から南側にかけて分布し、径はいずれも8～10cmで深さは約4～6cmの浅いものと18cm前後の深いものがある。小形のピットは配置から柱穴の可能性がある。

遺物

Ⅳ群土器、両面調整石器、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、たたき石、礫が35点出土している。層位別では床面のものが多く、覆土出土のものは少量である。平面分布は堅穴内の外側に散漫に分布する。また両面調整石器は接合関係が認められた。覆土1点、床面4点のものがやや広い範囲で接合している。Ⅳ群土器は床面から2点出土している。スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク、たたき石は床面から1点ずつ出土している。つまみ付きナイフは覆土から1点出土している。礫は覆土から2点、床面から1点出土している。

1・2は両面調整石器で、1は粗い調整が行なわれている。2は両面加工の石器を再加工している。3・4はスクレイパーで、3は右側縁と下端部に厚みのある刃部がある。1～4はいずれも黒曜石製である。5はたたき石である。

時期 周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

（広田）

（2）土坑

JP-3（図Ⅲ-86 図版71）

位置 E-34

規模 2.29×1.95/2.12×1.87/0.62m

調査

標高約12mの段丘平坦面に所在する。牧草地耕作土を重機で除去後に、Ⅳ層上面で白色火山灰、黒褐色土が楕円形に検出したため確認された土坑である。長軸にベルトを残し調査した。覆土の上面から土器、礫が出土した。

覆土

土層3・4は盛土（JM-1）起源、それ以下の土層は自然堆積と考えられる。

形態

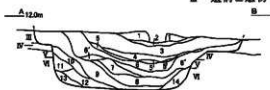
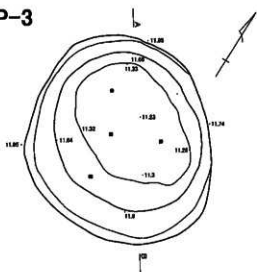
平面形は不整形（楕円形）で、浅い皿状の掘り込みと、中央部の深い掘り込みの二段構造である。坑底は平坦で、Ⅴ層まで掘り込まれる。

遺物

盛土と考えられる層から礫1点、Ⅳ群土器小片が6点出土している。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。自然堆積後、盛土（JM-1）に埋められる。（愛場）

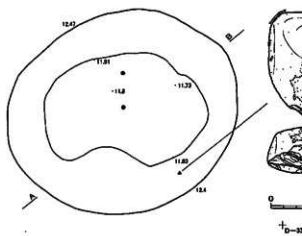
JP-3



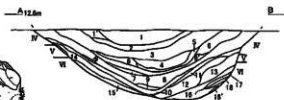
JP-3の土層

- 1 におい黄褐色土 (SYR6/A) 火山灰 しまりあり、粘性ややあり
- 2 黒褐色土 (SYR2/B) (E>I) 灰砂 しまりややあり、粘性あり
- 3 黒褐色土 (SYR2/B) (E>F) しまりややあり、粘性あり
- 4 黒褐色土 (SYR2/B) (E>V>F) しまりあり、粘性あり
- 5 F>4 しまりやや弱い、粘性あり
- 6 黒褐色土 (SYR2/B) (E>V>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 6' 中々弱い
- 7 黒褐色土 (SYR2/B) (E>V>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 8 黒土 (SYR1/7/I) (V>F) しまりややあり、粘性あり
- 9 黒土 (SYR2/B) ~ 黒褐色土 (SYR2/B) (E>V) しまりややあり、粘性ややあり
- 10 黒土 (SYR1/7/I) (E>V>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 11 黄褐色土 (SYR4/B) (F+H) しまりやや弱い、粘性ややあり
- 12 黄褐色土 (SYR4/B) (F+H) しまりややあり、粘性ややあり
- 13 黄褐色土 (SYR4/B) (F+H) しまりややあり、粘性ややあり
- 14 黒土 (SYR4/B) (F+H) しまりややあり、粘性ややあり

JP-4



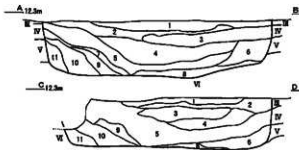
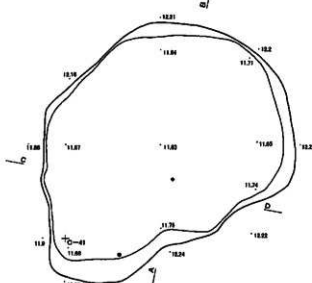
10-33



JP-4の土層

- 1 におい黄褐色土 (SYR6/A) 火山灰 しまりあり、粘性ややあり
- 1' I>II層間土
- 2 黒褐色土 (SYR2/B) (E>V>I) しまりあり、粘性ややあり
- 3 黒褐色土 (SYR2/B) (E>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 4 黒褐色土 (SYR2/B) (E>V>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 5
- 6 黄褐色土 (SYR2/B) (E+H) しまりややあり、粘性ややあり
- 6' 中々弱い
- 7 黒土 (SYR1/7/I) (V) しまりあり、粘性あり
- 8 黒土 (SYR2/B) (E>V>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 9
- 10 黒土 (SYR1/7/I) (E>V) しまりややあり、粘性あり
- 11 黄褐色土 (SYR4/B) (F+H) 黒褐色土混入 しまりやや弱い、粘性ややあり
- 12 黄褐色土 (SYR4/B) (F+H) 黒褐色土ブロック しまりやや弱い、粘性ややあり
- 13 黄褐色土 (SYR4/B) (F+H) しまりややあり、粘性ややあり
- 14 黒土 (SYR4/B) (F+H) しまりややあり、粘性ややあり
- 15 黒褐色土 (SYR2/B) (E>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 16 黒土 (SYR1/7/I) (E) しまりややあり、粘性ややあり
- 16' 上部に多少混入
- 17
- 18 黄褐色土 (SYR5/B) (F+H) しまりややあり、粘性ややあり

JP-5



JP-5の土層

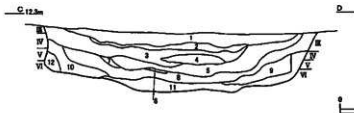
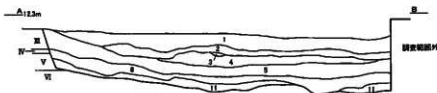
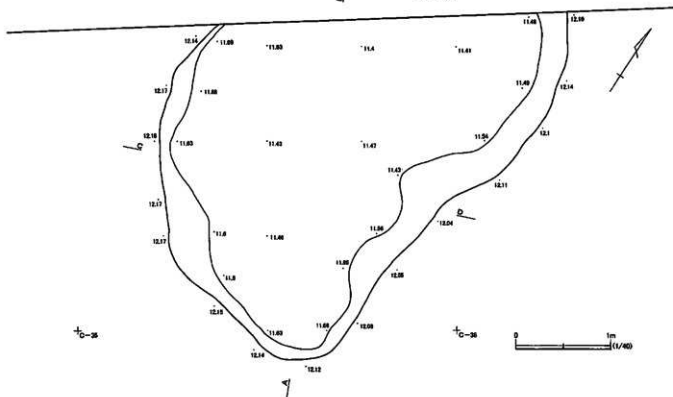
- 1 黒土 (SYR2/I) (I) 積土+火山灰 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 黄褐色土 (SYR4/B) (F) 積土+火山灰 (F) しまりややあり 粘性ややあり
- 3 におい褐色土 (SYR6/A) (火山灰) E>I) においによる堆積層混入
- 4 黄褐色土 (SYR2/B) (E>V>F) (ブロック状) 灰化層混入あり しまりややあり 粘性やや弱い
- 5 黄褐色土 (SYR2/B) (E+H) (ブロック状) (E) しまりあり 粘性ややあり
- 6 黄褐色土 (SYR2/B) (E+H) (ブロック状) (E) しまりあり 粘性ややあり
- 7 黄褐色土 (SYR2/B) (E>V>F) しまりあり 粘性ややあり
- 8 黄褐色土 (SYR4/B) (E+H) (ブロック状) しまりあり 粘性ややあり
- 9 黄褐色土 (SYR2/B) (E>V>F) (ブロック状) (E) しまりややあり 粘性あり
- 10 黒土 (SYR4/B) (F+H) しまりややあり 粘性ややあり
- 11 黒褐色土 (SYR2/B) (E>F) しまりややあり 粘性ややあり

0 1m (1/400)

図Ⅲ-86 JP-3・4・5平面図と土層、遺物

JP-6

調査範囲外



JP-6の土層

- | | |
|--|--|
| <p>1 褐色土 (IYR2/1) (E>F粒+骨粒)
しまりあり 粘性やや弱い</p> <p>2 褐色土 (IYR2/1) (E>大山炭>F粒)
大山炭を含む しまりあり 粘性やや弱い</p> <p>3 腐植土 (IYR2/2) (E+E>F>大山炭)
しまりあり 粘性やや弱い</p> <p>4 におい黄褐色土 (IYR5/4) (大山炭>E>E)
しまりややあり 粘性弱い</p> <p>5 腐植土 (IYR2/2) (E>F粒)
しまりあり 粘性ややあり</p> <p>6 褐色土 (IYR6/6) (F)
しまりややあり 粘性なし</p> | <p>7 腐植土 (IYR2/2) (E>F>炭化物)
しまりややあり 粘性ややあり</p> <p>8 腐植土 (IYR2/2) (E+E>F)
しまりあり 粘性ややあり</p> <p>9 腐植土 (IYR2/2) (V+E>F粒)
しまりあり 粘性やや弱い</p> <p>10 腐植土 (IYR2/2) (E>V>F)
しまりあり 粘性ややあり</p> <p>11 腐植土 (IYR2/2) (V+E>F)
しまりややあり 粘性ややあり</p> <p>12 褐色土 (IYR6/6) (V+E>F粒)
しまりややあり 粘性ややあり</p> |
|--|--|

図 87 JP-6 平面図と土層

JP-4 (図Ⅲ-86 図版71)

位置 C-32

規模 2.48×2.12/1.66×1.23/0.73m

調査

標高約12mの段丘平坦面に所在する。Ⅳ層上面遺構確認中に、白色火山灰、黒色土が楕円形に検出したため確認された土坑である。長軸に土層観察用のベルトを設定し、調査を行なった。

覆土

Ⅳ層とⅢ層の互層となる自然堆積である。上部は消失している。

形態

平面形は楕円形である。坑底は凸凹があるが、皿状で、Ⅵ層まで掘り込まれる。

遺物

たたき石1点、礫2点が出土している。1は砂岩製のたたき石。

時期 縄文時代後期前葉。形態などからJP-3とほぼ同時期と考えられる。(愛場)

JP-5 (図Ⅲ-86、図版71)

位置 B-40・41、C-40・41

規模 3.14×2.42/2.32×2.18/0.61m

調査

台地南東側、標高約12mの平坦部に位置する。Ⅰ層除去後、B・C-41区のⅣ層上面を精査中に不整楕円形の黒色土(Ⅱ層)と火山灰の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果土坑であることが判明した。また、上部は削平されていた。南側約2.5mにJP-16、南西側約4mにはJP-7がある。

覆土

自然堆積で、上部はⅡ層、下部はⅢ層が主体でⅣ層が混じる土層である。色調は黒褐色が多い。壁際の三角堆積ではⅣ・Ⅴ層を主体とした土層も認められる。また覆土中位よりやや上で、白色の火山灰が検出された(1~3層)が、火山灰の供給源は不明である(第1章3節(2)参照)。

形態

平面形は不整の楕円形である。坑底はほぼ平坦で、壁は全体的に急角度に立ち上がるが、南西部はやや緩やかである。上部が削平されているため掘り込み面の層位は不明だが、覆土上部にⅡ層が堆積していることからⅢ層中である可能性が高い。坑底面はⅤ層中に構築されている。

遺物 坑底から黒曜石製フレイク1点、覆土下部から礫が1点出土している。

時期 掘り込み面、覆土の堆積状況、周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(広田)

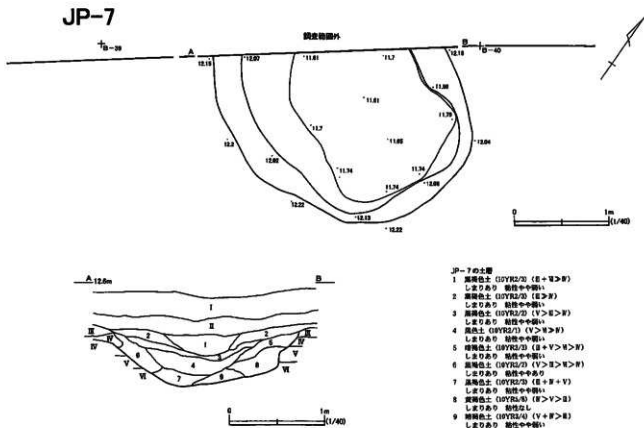
JP-6 (図Ⅲ-87、図版72)

位置 B-35・36、C-35

規模 (3.70×3.55) / (3.20) × (2.62) / (0.72) m

調査

Ⅰ層除去後、B-35・36区近辺のⅣ層上面を精査中に不整形の黒色土(Ⅱ層)の落ち込みを検出した。土層観察用の十字ベルトを設定し、掘り下げを行った結果土坑であることが判明した。北西側は



図Ⅲ-88 JP-7平面図と土層

調査区外に続いている。上部は削平されている。東側約3mにJM-3、JH-2が、南側約4mにJH-1がある。

覆土

自然堆積で、上部はⅡ層を主体とするが、それより下部はⅢ層を主体とする。色調は黒褐色、暗褐色が多い。土層の多くは扁平に堆積している。覆土中位よりやや上で、白色の火山灰が検出された(2～4層)が、火山灰の供給源は不明である(第1章3節(2)参照)。

形態

調査した範囲の平面形は上場、下場共に不整形である。壁は全体的に急角度に立ち上がるが、南東壁の一部ではオーバーハング気味になる。坑底はわずかに凹凸がみられる。上部が削平されているため掘り込み面の層位は不明だが、覆土上部にⅡ層が堆積していることから、Ⅲ層中である可能性が高い。坑底はV層下部～Ⅶ層上部に構築されている。

遺物 出土遺物はない。

時期 覆土の堆積状況、周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(広田)

JP-7 (図Ⅲ-88、図版72)

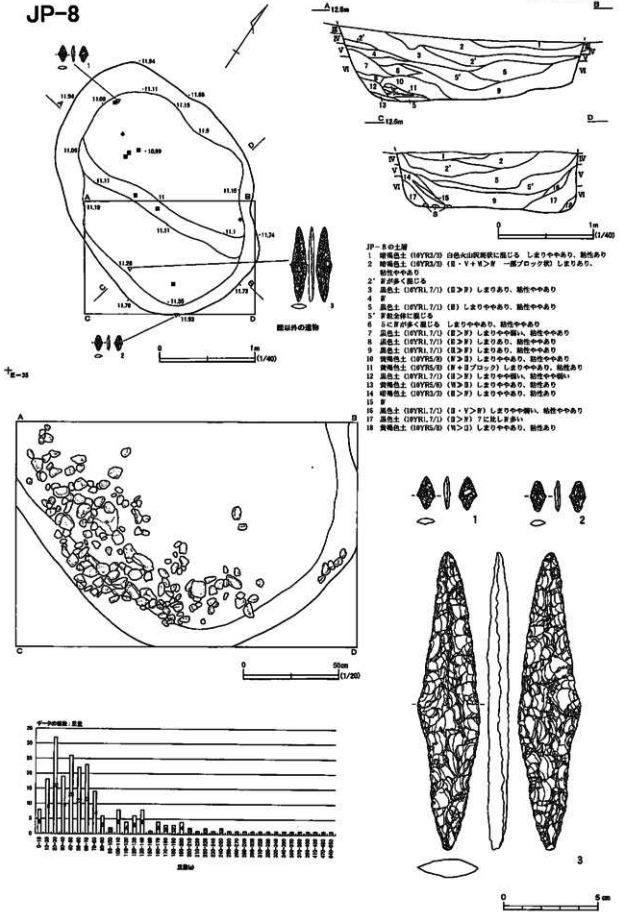
位置 B-39

規模 (1.98) × (1.75) / (2.12) × (1.78) / (0.57) m

調査

B-39・40区のⅣ層上面を精査中に、不整形の黒色土(Ⅱ層)の落ち込みを検出した。掘り下げを

JP-8



図Ⅲ-89 JP-8平面図と土層、礫出土状況図、遺物、礫グラフ

行った結果、土坑であることが判明した。北西側は調査区外に続いている。南東側約3mにJM-6、南西側約4mにJH-2、JM-3がある。

覆土

自然堆積で、土層はⅢ・Ⅴ層を主体とし、Ⅳ・Ⅵ層が混じる。色調は黒褐色、暗褐色を呈するものが多い。北東壁際の三角堆積（8層）はⅥ層を主体としている。

形態

調査した範囲の平面形は上場、下場共に楕円形である。坑底は西側に向かって緩やかに傾斜し、壁は緩やかに立ち上がり、中位でやや強く屈曲する。掘り込み面はⅢ層中で、坑底はⅥ層中に構築される。

遺物 出土遺物はない。

時期 掘り込み面、覆土の堆積状況、周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉の可能性が高い。
(広田)

JP-8 (図Ⅲ-89 図版72~73)

位置 D-35

規模 2.72×1.93/2.3×1.77/0.8m

調査

標高約12mの段丘平坦面に所在し、JH-1に近接する。Ⅲ層調査中に白色火山灰まじりの暗褐色土がみられたため、ベルトを残して掘り進めたところ、壁の立ち上りを確認した。覆土上部では大型の石槍や石鏃が出土し、底面南側には礫の集中がみられた。

覆土

主にⅢ層とⅣ・Ⅵ層の混合土が堆積する。人為的に埋め戻された可能性がある。

形態

平面形は楕円形で、壁は明瞭に立ち上がり、坑底は段差がみられる。

遺物

遺物はⅣ群土器小破片12点、石鏃2点、石槍1点、フレイク4点、礫311点である。覆土上面からⅣ群土器、石鏃、石槍、フレイクが、底面から礫が主に出土している。

礫は233点について重量を計測し、グラフに表した。礫の重量は10~80gの範囲に収まるが、20~30gのものが最も多い。

1・2は黒曜石製の有茎石鏃。3は黒曜石製の石槍で、長さは15cmを超え、どちらが基部か不明である。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。

(愛場)

JP-9 (図Ⅲ-90 図版73)

位置 K-43

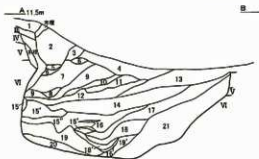
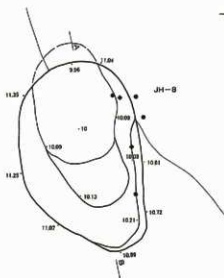
規模 2.05×1.3/1.3×0.65/1.35m

調査

標高約11mの南へ傾斜する緩斜面上に所在する。Ⅱ層調査中、斜面において楕円形のくぼみと周囲に広がる掘り揚げ土が確認された。擦文時代の遺構として調査していたが土層確認で、縄文時代の遺構と判断した。調査時の土層ベルト観察によりJH-8が検出された。非常に深く掘り込まれており、北側はオーバーハングする。

JP-9

46-43

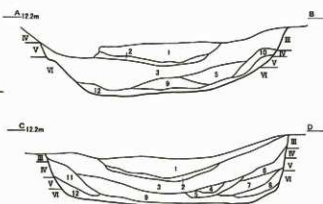
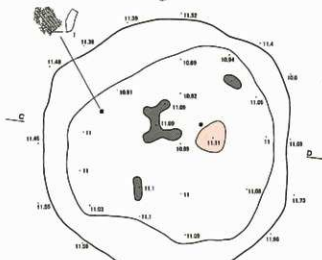


JP-9の土層

- 1 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 2 暗褐色土 (GVYR3/2) (E>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 3 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>F) まりあり、粘性やや強い
- 4 黒色土 (GVYR1.7/1) (E>F) しまりあり、粘性あり
- 5 黒土
- 6 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>V>W) しまりあり、粘性ややあり
- 7 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>V>W) しまりあり、粘性ややあり
- 8 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>V>W) しまりややあり、粘性あり
- 9 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>V>W) しまりややあり、粘性やや強い
- 10 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>W>F) しまりあり、粘性ややあり
- 11 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>V>W) しまりややあり、粘性ややあり
- 12 暗褐色土 (GVYR3/2) (E>V>W>F) しまりあり、粘性ややあり
- 13 黒色土 (GVYR1.7/1) (E>V) しまりあり、粘性ややあり
- 14 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>W) しまりややあり、粘性あり
- 15 黒褐色土 (GVYR4/2) (W>E>F) しまりややあり、粘性ややあり
- 16 黒土 (GVYR4/2) (W>E) しまりやや強い、粘性あり
- 17 黄褐色土 (GVYR4/2) やや強い
- 18 暗褐色土 (GVYR3/2) (E>W) しまりややあり、粘性ややあり
- 19 黒色土 (GVYR1.7/1) (E>W>F) しまりやや強い、粘性あり
- 20 黒褐色土 (GVYR4/2) (W>E) しまりややあり、粘性ややあり
- 21 20に13が混在している しまりあり、粘性あり

JP-10

46-37



JP-10の土層

- 1 褐色土 (GVYR4/2) (褐色土混在) E>F) しまりややあり 粘性強い
- 2 黒色土 (GVYR2/1) (E>黒色土混在) しまりややあり 粘性やや強い
- 3 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>W>F) しまりややあり 粘性やや強い
- 4 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>W>F) しまりややあり 粘性やや強い
- 5 黒色土 (GVYR1.7/1) (E>W>F) (黒土混在) しまりややあり 粘性やや強い
- 6 黒褐色土 (GVYR2/2) (V>W>V) しまりややあり 粘性やや強い
- 7 暗褐色土 (GVYR3/2) (E>W>F) (黒土混在) しまりややあり 粘性やや強い
- 8 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>W>F) しまりややあり 粘性やや強い
- 9 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>V>W) しまりややあり 粘性やや強い
- 10 暗褐色土 (GVYR3/2) (W>E) しまりややあり 粘性やや強い
- 11 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>W>F) しまりややあり 粘性やや強い
- 12 黒褐色土 (GVYR2/2) (E>W>F) しまりややあり 粘性やや強い

図 III-90 JP-9・10平面図と土層、遺物

覆土

Ⅵ・Ⅶ層の崩落土が平行に堆積することから自然堆積と考えられる。

形態

平面形は楕円形で、北側はフラスコ状にオーバーハングし、坑底は皿状となる。

遺物

遺物は出土していない。土坑の北側に比較的大型の礫が3点みられたが、関連するかは不明である。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。JH-8を切って構築される。(愛媛)

JP-10 (図Ⅲ-90、図版74・75)

位置 G-36・37

規模 2.79×2.27/2.67×2.04/0.73m

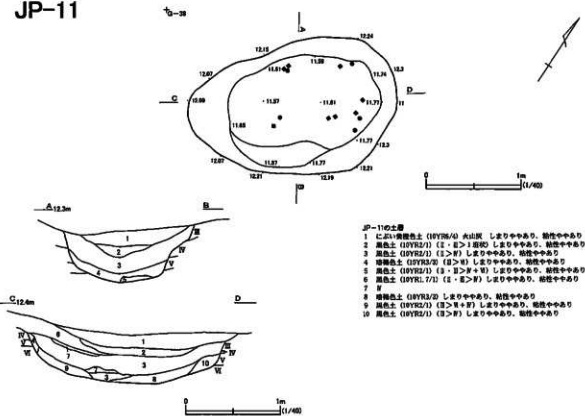
調査

G-36・37区のⅣ層上面を精査中に、円形の黒色土(Ⅱ層)と火山灰の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、土坑であることが判明した。覆土下部で焼土及び炭化物が面的に検出されている。また、東側約1mにJM-4がある。

覆土

自然堆積で、土層はⅢ層を主体とし、Ⅳ・Ⅵ層が混じる。色調は黒褐色を呈するものが多い。壁際の三角堆積(10・11層)はⅣ・Ⅵ層を主体とする。

JP-11



図Ⅲ-91 JP-11平面図と土層

形態

平面形は上場、下場共に不整の円形である。坑底はほぼ平坦だが、南西側がやや高くなっている。壁の立ち上がりは比較的緩やかだが、北東壁の一部は急角度である。坑底より約15cm上の覆土中で、焼土1カ所と薄い炭化物のまとまり3カ所が面的に検出された。焼土は中央からやや北東側で検出され、焼け方は弱く、その場で焚かれたものかどうかは不明である。

遺物

Ⅳ群土器50点、礫1点の計51点出土している。層位的には覆土中位の焼土と同じ面から出土した。Ⅳ群土器は同一個体と考えられる小片が1カ所から出土したため、遺物分布図のドットは1点で表している。

1はⅣ群土器である。胴下部～底面端の破片で内面は剥落している。外面はRLの斜縄文が深く施され、底面端まで及んでいる。胎土は砂礫を多く含み、粘土は緻密である。外面の色調は浅黄橙色である。焼成はやや不良である。

時期 覆土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JP-11 (図Ⅲ-91 図版76)

位置 G-38

規模 2.22×1.42/1.63×1.15/0.61m

調査

標高約12mの段丘平坦面に所在し、JM-4に近接する。Ⅲ層掘り下げ中に「白色火山灰」が円形に検出したため確認された土坑である。

覆土

黒色土を主体とする覆土で、自然堆積である。

形態

平面形は楕円形で、坑底は皿状となる。

遺物

Ⅳ群土器1点が出土している。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。

(愛場)

JP-12 (図Ⅲ-92 図版77)

位置 H-42、43、I-42、43

規模 4.55×3.25/4.3×3.03/0.85m

調査

H-25の掘り揚げ土除去後、楕円形のくぼみとして確認された土坑である。標高約12mの段丘縁辺部平坦面に所在し、JM-7の近くに、JM-9を切って構築される。焼土は確認されたが非常にうすく、平坦面がなかったことから土坑として取り扱ったが、形態も周辺のJH-5・6などと変わらないため、住居跡の可能性はある。

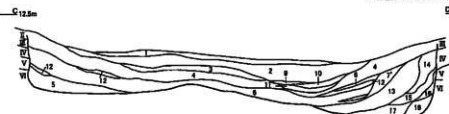
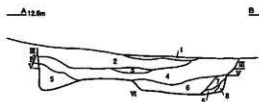
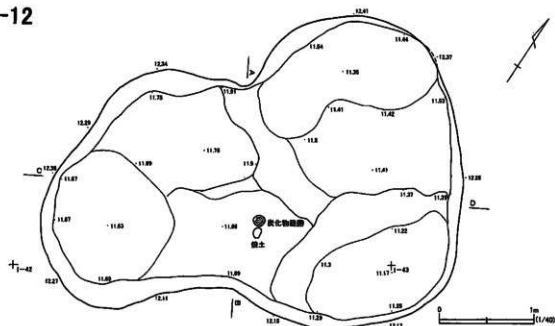
覆土

壁跡はⅥ層、Ⅴ層の崩落土がみられる。主に黒褐色土層がその上に堆積する。自然堆積と考えられる。

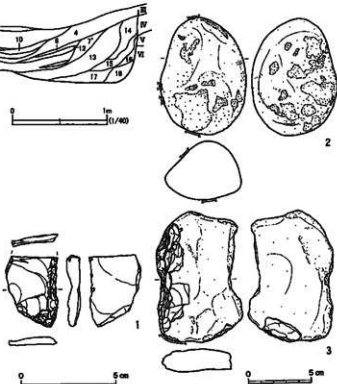
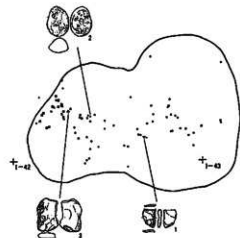
形態

平面形は土坑を連結したような不整形である。壁は明瞭に立ち上がり、坑底は凸凹があり、東側へ

JP-12



- JP-12の土層
- 1 黒色土 (18YR2/1) (B・E) しまりや中あり、粘性中やあり
 - 2 細かい黄褐色土 (18YR6/4) 穴埋蔵 しまりあり、粘性中やあり
 - 3 黒褐色土 (18YR2/2) (E>F) しまりや中あり、粘性中や
 - 4 黒褐色土 (18YR2/2) (E>F) しまりあり、粘性中やあり
 - 5 黒褐色土 (18YR2/2) (E>F) しまり強い、粘性中やあり
 - 6 黒色土 (18YR2/1) (E>F) しまりや中あり、粘性中やあり
 - 7 黒褐色土 (18YR2/2) しまりあり、粘性中やあり
 - 8 黒色土 (18YR2/1) (E>F) しまりや中あり、粘性中やあり
 - 9 黒褐色土 (18YR2/2) (E>F) 穴埋蔵跡のしまりや中強い、粘性中やあり
 - 10 黒色土 (18YR2/1) (E) 穴埋蔵物埋蔵のしまりや中あり、粘性あり
 - 11 10>2 しまりや中あり、粘性あり
 - 12 F
 - 13 黒色土 (18YR2/1) (E>F) しまりあり、粘性中やあり
 - 14 黒色土 (18YR2/1) (E>F) しまりや中あり、粘性中やあり
 - 15 黒色土 (18YR2/1) (E) しまりや中強い、粘性中やあり
 - 16 黒色土 (18YR2/1) (V) 埋蔵品ありしまりや中強い、粘性中やあり
 - 17 黒色土 (18YR2/1) (E) 穴埋蔵土ブロックらしまりや中あり、粘性中やあり
 - 18 黒色土 (18YR2/1) (E) 穴埋蔵土ブロックらしまりや中あり、粘性中やあり



図Ⅲ-92 JP-12平面図と土層、遺物分布図、遺物

向けて深くなる。一部Ⅳ層が表出する。

付属遺構

坑底中央部南側から焼土、炭化物が確認されている。どちらも直径約10cm程度で、焼土の厚さは2cmに満たない。

遺物

遺物はⅣ群土器44点、スクレイパー1点、たたき石1点、フレイク11点、原石2点、礫45点で、多くは覆土中からの出土である。

1は頁岩製のスクレイパーで、薄い緑色を呈する。2は砂岩製のたたき石で、床直上出土である。3は加工痕のある礫。石質は砂岩で、左側縁に加工がなされ、下端部には潰打痕がみられる。

時期 形態から縄文時代後期前葉の土坑と考える。(愛場)

JP-13 (図Ⅲ-93 図版78)

位置 G-45、H-45

規模 4.16×3.36/3.73×2.81/0.75m

調査

H-25の掘り揚げ土除去後、円形のくぼみとして確認された土坑である。標高約12mのJM-5近くの段丘縁辺部平坦面に構築される。くぼみ中央部直交する十字の土層観察ベルトを設定し調査した。

覆土

Ⅳ層主体の流れ込み層が壁際にみられ、黒色土がその上に堆積する。自然堆積である。

形態

平面形は円形に近い不整形で、坑底は緩やかではあるが凸凹がみられる。北側が最も深くなっている。

遺物

遺物はたたき石1点、礫15点である。礫1点が坑底で、他は覆土中の出土である。

1はたたき石で、石質は不明。正面、裏面は磨っている。

時期 形態などから縄文時代後期前葉と考えられる。(愛場)

JP-14 (図Ⅲ-93 図版76)

位置 I-32、33

規模 2.74×2.18/2.35×1.88/0.83m

調査

Ⅱ層掘り下げ中に「白色火山灰」が円形に検出したため確認された土坑である。標高約10mの南へ傾斜する緩斜面上に所在し、JH-9に近接する。

覆土

斜面上部からの流れ込みで構成される自然堆積である。

形態

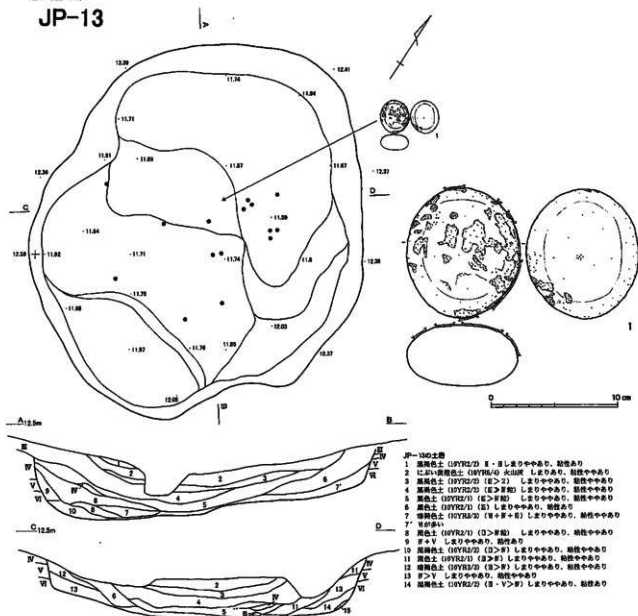
平面形は楕円形で、坑底は南側をさらに掘り込んだような二段構造になっている。

遺物

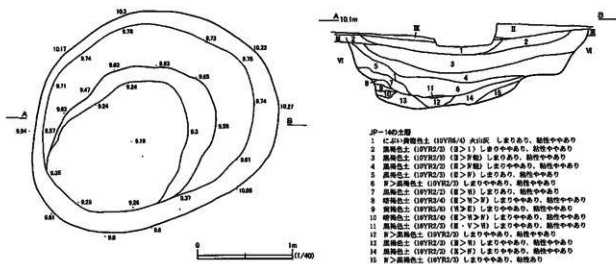
遺物は出土していない。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。(愛場)

JP-13



JP-14



図Ⅲ-93 JP-13・14平面図と土層、遺物

JP-15 (図Ⅲ-70~72、図版57~59)

位置 D-39・40、E-39・40

規模 6.30×5.56/2.97×2.18/0.93

調査

台地南東側、標高約12mの平坦部に位置する。接文時代の住居跡であるH-26・29の掘り揚げ土を除去したところ、D・E-40区周辺でⅢ層が楕円形に落ち込んでいる状況が確認された。くぼみの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、縄文時代の土坑であることが判明した。北西側にJM-6が隣接している。JP-15の覆土中に盛土と考えられる土層が認められないため、JM-6と同時にもしくは新しいと考えられる。

覆土

覆土は自然堆積である。覆土上部でやや褐色気味の火山灰が部分的に検出された(2・4層)が、供給源は不明である(第1章3節(2)参照)。他の土層は、Ⅲ・Ⅴ層が主体でⅣ・Ⅵ層が混ざるものが多い。色調は黒褐色、暗褐色を呈する。南壁際の三角堆積ではⅣ層の崩落土(19層)が少量認められる。

形態

平面形は不整形で、北側と南側が張り出す形状である。坑底は全体的に大きな凹凸が多い。張り出し部は掘り込みが深く中央付近より一段深くなっている。中央付近も皿状にくぼんでいる。壁は全体的に緩やかに立ち上がるが、東壁は部分的に中位で屈曲する。掘り込み面はⅢ層中で、坑底はⅥ層中に構築される。

遺物

Ⅳ群土器、石鏃、石錐、Uフレイク、フレイク、原石、たたき石、礫が290点出土している。量的には礫140点、フレイク139点が遺物の多くを占める。層別別では覆土のものが多く、坑底面直上の遺物が少量ある。坑底直上の遺物は全て礫で、坑底出土の遺物はない。平面分布は土坑中央付近～南側が多い。接合関係は覆土出土の礫で少数認められた。

Ⅳ群土器は覆土から8点出土している。石鏃、石錐、原石は覆土から1点ずつ出土している。原石はメノウ製である。フレイクは139点でメノウ製が多い。たたき石は覆土から2点出土している。

1はⅣ群土器の底部である。外面の剥落が著しく、文様があるかどうかは不明である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は悪い。2は黒曜石製の石錐。3は砂岩製のたたき石、下端部に集中して潰打痕がみられる。

時期 覆土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JP-16 (図Ⅲ-95、図版76)

位置 C-40

規模 1.30×0.69/1.23×0.55/0.50m

調査

台地南東側、標高約12mの平坦部に位置する。Ⅰ層除去後、C-40区のⅢ層上面を精査中に円形の黒色土(Ⅱ層)と火山灰の落ち込みを検出した。半載した結果、土坑であることが判明した。また、上部は削平されていた。南側にJP-15、JM-6、北側約2.5mにJP-5がある。

覆土

レンズ状の自然堆積である。土層はⅡ・Ⅲ層が主体でⅣ層が混じる。色調は黒褐色である。覆土上面で、白色の火山灰が検出された(1層)が、火山灰の供給源は不明である(第1章3節(2)参照)。

JP-15

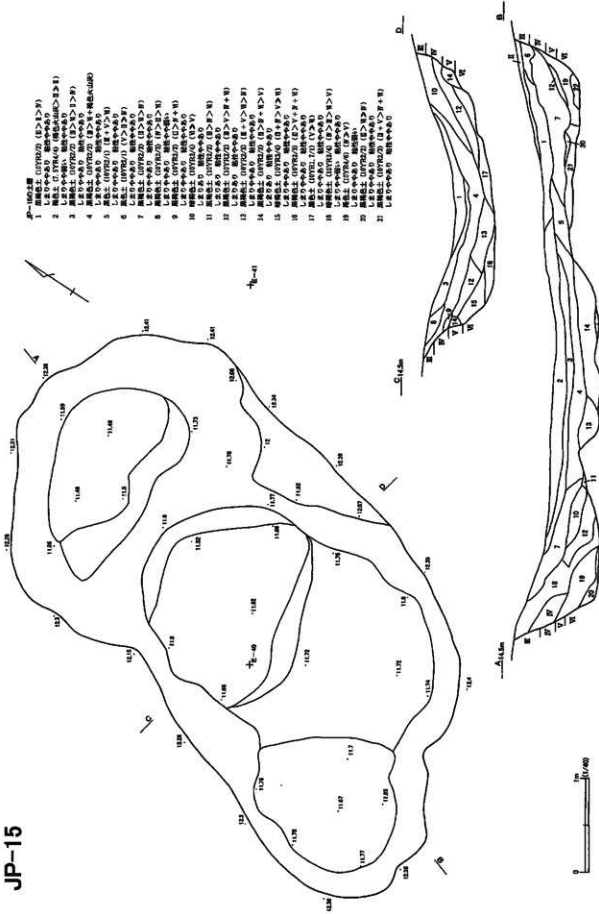
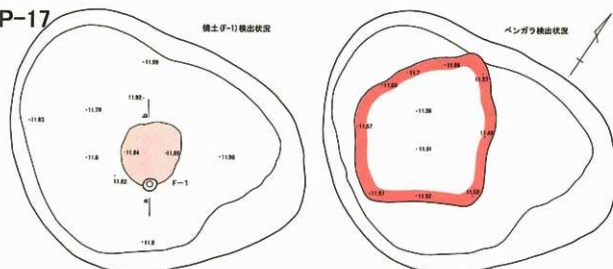


図 94 JP-15 平面図と土層

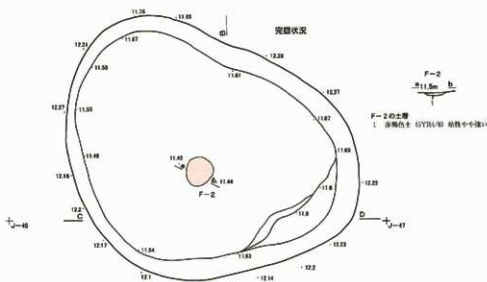
JP-17



F-1の土層

- 1 黒色土 (GYR1/7) 黒しまりや中強い、粘性ややあり
- 2 黒褐色土 (GYR2/2) 黄土全体に混じる
- 3 暗褐色土 (GYR3/3) 砂質
- 4 赤褐色土 (GYR4/3) しまりや中強い
- 5 黄土

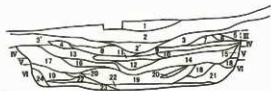
発露状況



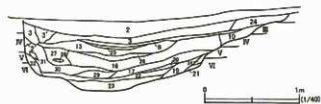
F-2の土層

- 1 赤褐色土 GYR4/3 粘性やや強い

A 12.6m



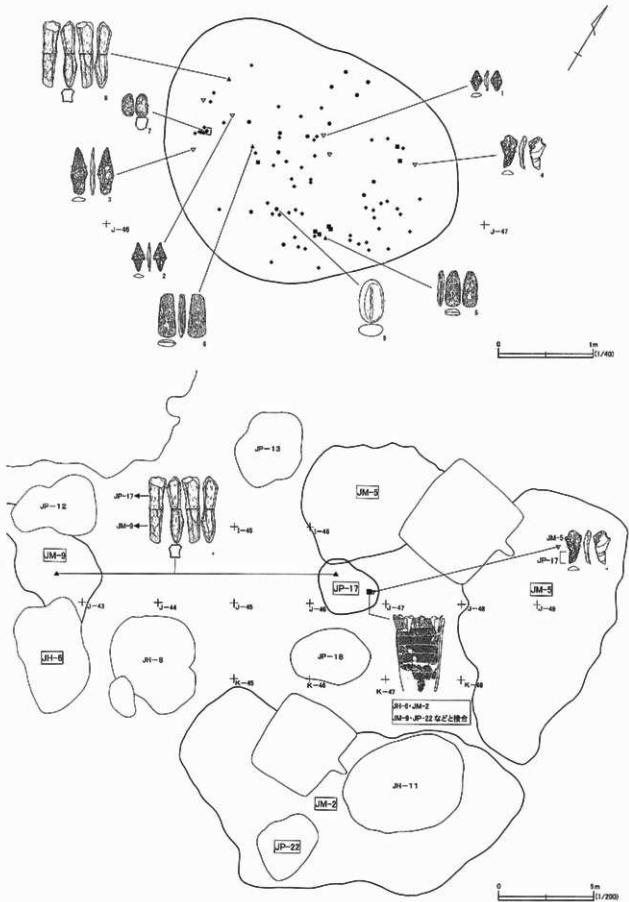
C 12.6m



JP-17の土層

- 1 濃い赤褐色土 (GYR6/3) 表正層 しまりあり、粘性ややあり
- 2 黒褐色土 (GYR2/3) (黒>黄) しまりあり、粘性あり
- 2' 中中強い
- 3 黄土 (GYR4/3) (黄+黒) 厚層部 しまりや中あり、粘性ややあり
- 3' 黄土土多し
- 4 黄土土 (GYR4/3) (黄>黒・黄) しまりや中あり、粘性あり
- 5 黒>黄 しまりや中あり、粘性ややあり
- 6 暗褐色土 (GYR3/3) (黒+褐色土+黄) しまりや中あり、粘性ややあり
- 7 暗褐色土 (GYR3/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 8 赤褐色土 (GYR3/3) (黄+黒+黄) 中や強みがあるしまりや中あり、粘性ややあり
- 9 濃い赤褐色土 GYR4/3 ベンガラ層
- 10 赤褐色土 しまりや中強い、粘性あり
- 11 暗褐色土 (GYR3/3) 黄土 しまりや中あり、粘性ややあり
- 12 黄土土 (GYR2/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 13 黄土土 (GYR2/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 14 黄
- 15 濃い赤褐色土 (GYR3/3) (黄>黒) しまりや中あり、粘性あり
- 16 黒>黄塊状 しまりや中あり、粘性あり
- 17 黄土土 (GYR2/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 18 濃い赤褐色土 GYR4/3 (黄+黒) しまりや中あり、粘性あり
- 19 黄土土 (GYR2/3) (黒) しまりや中あり、粘性あり
- 20 濃い赤褐色土 (GYR3/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 21 黒>黄 すじ状 しまりや中あり、粘性あり
- 22 濃い赤褐色土 (GYR4/3) ベンガラ層前 しまりや中あり、粘性あり
- 23 赤褐色土 しまりや中強い、粘性あり
- 24 暗褐色土 (GYR3/3) (黒+黄) しまりや中強い、粘性ややあり
- 25 黄土土 (GYR2/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 26 黄土土 (GYR2/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 27 濃い赤褐色土 (GYR3/3) (黄>黒) しまりや中あり、粘性あり
- 28 黄土土 (GYR2/3) (黒>黄) しまりや中あり、粘性あり
- 29 暗褐色土 (GYR2/3) (黒+黄) しまりや中強い、粘性ややあり
- 30 赤褐色土 (GYR2/3) (黒+黄) しまりや中強い、粘性ややあり
- 31 砂>土
- 32 暗褐色土 (GYR3/3) (黒+黄) しまりや中あり、粘性ややあり

図 III-96 JP-17平面図と土層



図Ⅲ-97 J P-17遺物分布図、遺物接合状況図

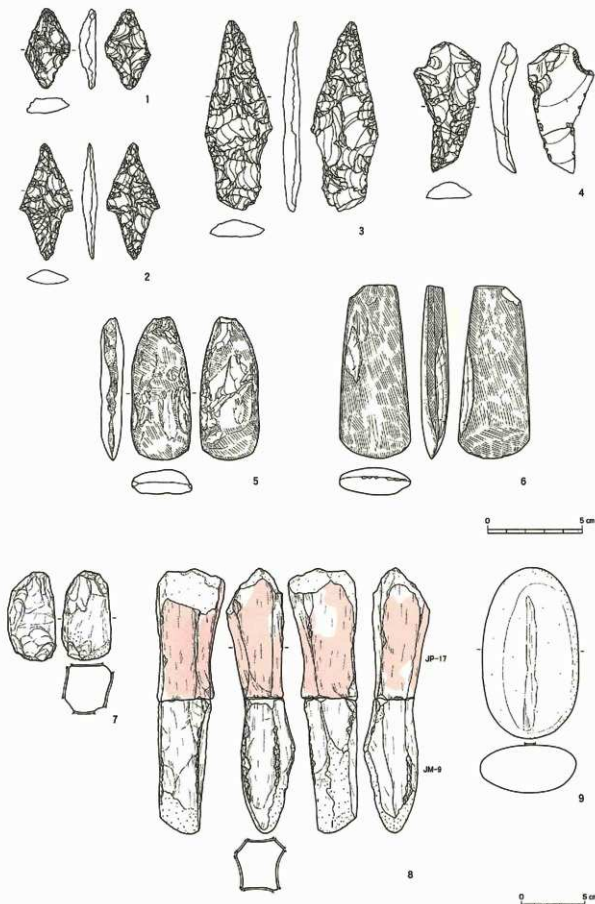


图 III-98 JP-17 遺物

形態

平面形は上場、下場共に不整の円形である。坑底はほぼ平坦で、壁は全体的にやや急角度に立ち上がる。掘り込み面はⅢ層中で、坑底面はⅤ層中に構築されている。

遺物 出土遺物はない。

時期 掘り込み面、覆土の堆積状況、周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉の可能性が高い。
(広田)

JP-17 (図Ⅲ-96~98 図版80~82)

位置 I-46、J-46

規模 3.27×2.57/2.63×2.2/0.74m

調査

標高約12mの段丘縁辺部にJM-5、JP-18に近接して所在する。Ⅲ層掘り下げ中に「白色火山灰」が円形に検出したため確認された土坑である。十字にベルトを設定して4分割して調査をおこなった。南東部の覆土16上面で土器の大型胴部片(図Ⅲ-113-1)が出土した。それとほぼ同層の中央部からは焼土が検出された。

坑底面直上では赤色物質を含んだ層がリング状にみられ、石鏃、石斧、四面砥石、フレイク、円礫などが出土した。赤色物質についてサンプリングをおこない、分析した結果、ベンガラと同定された。坑底面中央からはさらに焼土が確認された。

覆土

覆土4以下は人為的な埋め戻しの層である。覆土9は黒色土にベンガラが混じる。覆土16上面では焼土が形成される。土坑底直上の覆土22はⅣ層にベンガラが混じり、遺物が多くみられる。

形態

平面形は不整形となる。壁は明瞭に立ち上がるが東側は緩やかになる。

付属遺構

焼土が覆土中と土坑底面2カ所で検出された(HF-1・2)。HF-1では柱穴様の小ビットが断面で確認された。

遺物

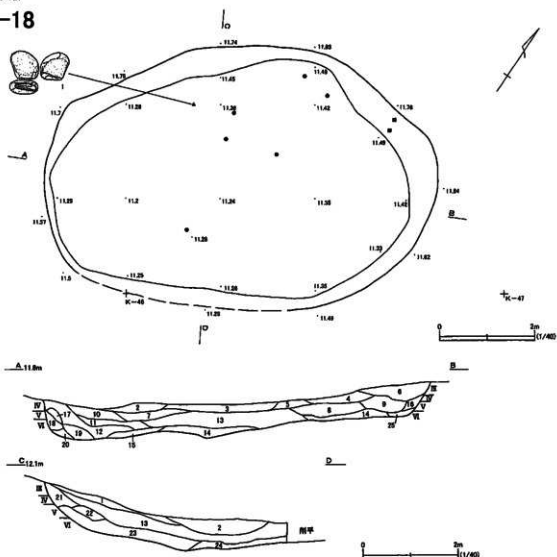
遺物はⅣ群土器片9点、石鏃2点(破片のため1点は未掲載)、石槍2点、スクレイパー1点、Rフレイク1点、フレイク63点、石斧2点、砥石2点、礫37点である。

1は石鏃未成品で、正面左側縁の厚みがとれず、加工をやめているようである。2・3は石槍、4はスクレイパーである。4はJM-5出土の下部破片と接合した。1~4は黒曜石製である。5・6はいずれも緑色泥岩製の石斧である。7・8は凝灰質砂岩製の四面砥石で、7の下端部に潰打痕がみられる。8については12m以上離れたJM-9出土の砥石と(下)と接合している。裏面のみ擦り面が一致するが、他の面では段差ができるため、折れた後それぞれ再利用されている。上部片にベンガラが付着する。9は礫で、正面中央に縄の跡のような線がみられる。

時期・性格

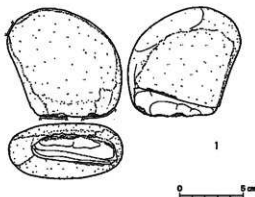
遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。JM-5より古い可能性がある。ベンガラ散布や遺物の出土状況、覆土の状況などから墓の可能性が高いと考えている。
(愛場)

JP-18



JP-18の土層

- | | | | |
|---|---|--|--|
| <p>1 黒色土 (SYR2/1) (B>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>2 暗褐色土 (SYR3/0) (E+H+褐色火山灰)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>3 褐色土 (SYR4/0) (H+褐色火山灰)>E
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>4 暗褐色土 (SYR3/0) (E>H>火山灰)
しまり中中あり 粘粒中中あり</p> <p>5 暗褐色土 (SYR3/0) (E>H>火山灰)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>6 暗褐色土 (SYR3/0) (E>H>火山灰)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>7 黒褐色土 (SYR2/0) (E>H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> | <p>8 黒褐色土 (SYR2/0) (E>H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>9 暗褐色土 (SYR3/0) (E+H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>10 暗褐色土 (SYR3/0) (E>H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>11 暗褐色土 (SYR2/0) (E>H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>12 暗褐色土 (SYR3/0) (E>H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>13 暗褐色土 (SYR3/0) (E>H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>14 暗褐色土 (SYR3/0) (E+H)
しまり中中あり 粘粒中中あり</p> | <p>15 暗褐色土 (SYR2/0) (E>H)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>16 暗褐色土 (SYR3/0) (E+H>F)
しまり中中あり 粘粒中中あり</p> <p>17 褐色土 (SYR4/0) (E>H+H)
しまり中中あり 粘粒中中あり</p> <p>18 暗褐色土 (SYR3/0) (E+H>F)
しまり中中あり 粘粒中中あり</p> <p>19 暗褐色土 (SYR3/0) (E>H>F)
しまり中中あり 粘粒中中あり</p> <p>20 褐色土 (SYR4/0) (E>H)
しまり中中あり 粘粒中中あり
全体的にしまりあり</p> | <p>21 暗褐色土 (SYR2/0) (H+H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>22 暗褐色土 (SYR3/0) (E+H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>23 暗褐色土 (SYR2/0) (E>H>F)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>24 暗褐色土 (SYR2/0) (E>H)
しまりあり 粘粒中中あり</p> <p>25 暗褐色土 (SYR2/0) (E>H)
しまりあり 粘粒中中あり</p> |
|---|---|--|--|



図Ⅲ-99 JP-18平面図と土層、遺物

JP-18 (図Ⅲ-99、図版83)

位置 J-45・46、K-46

規模 4.18×3.72 / (2.80) × (2.38) / 0.72m

調査

台地南東側縁辺部、標高約11mの緩斜面に位置する。発掘前の状況で、円形の浅い窪みとして確認した。くぼみの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、土坑であることが判明した。北西側約1mにJP-17、南東側約2mにJM-2がある。

覆土

自然堆積で、Ⅲ層が主体でⅣ・Ⅴ層が混じる土層である。色調は黒褐色、暗褐色を呈する。覆土上面で、白色の火山灰が検出された(1~6層)が、火山灰の供給源は不明である(第1章3節(2)参照)。南西壁際ではⅤ層の崩落土が少量認められる(20層)。

形態

南東壁は誤って削平している。平面形は上場、下場共に不整の円形である。坑底はやや凹凸があり、全体的には南西側に向かって緩やかに傾いている。北東~南西側の壁は比較的緩やかで、南側は急角度に立ち上がる。掘り込み面はⅢ層中で、坑底面はⅤ層中に構築されている。

遺物

Ⅳ群土器5点、たたき石1点、礫19点の計16点出土している。全て覆土出土である。平面分布は土坑中央付近~北側で散漫に出土している。

1は砂岩製のたたき石。鋭利に加工された端部に潰打痕がみられる

時期 覆土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JP-19 (図Ⅲ-100、図版83)

位置 N-16・17

規模 3.20×2.58 / (2.42) × (1.70) / 0.42m

調査

台地南東側斜面下部、標高約6mに位置する。Ⅲ層下部~Ⅳ層上部の精査中に黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を基準として、長軸及び短軸方向に直交するトレンチを設定し、掘り下げた結果、土坑であることが判明した。

覆土

自然堆積で、Ⅲ・Ⅳ層が主体でⅡ層が少量混じる土層である。

形態

南東側の壁は検出できなかった。検出できた範囲では、平面形は上場、下場共に不整の楕円形である。坑底は斜面下側の南東部に向かって緩やかに傾いている。検出した範囲の壁の立ち上がりは緩やかである。掘り込み面はⅢ層~Ⅳ層中で、坑底面はⅤ層中に構築されている。

遺物

Ⅲ群土器24点、石織3点、フレイク147点、礫19点の計193点出土している。全て覆土出土である。平面分布は東側がやや密である。今回の調査でⅢ群土器が出土している遺構はJP-19のみである。

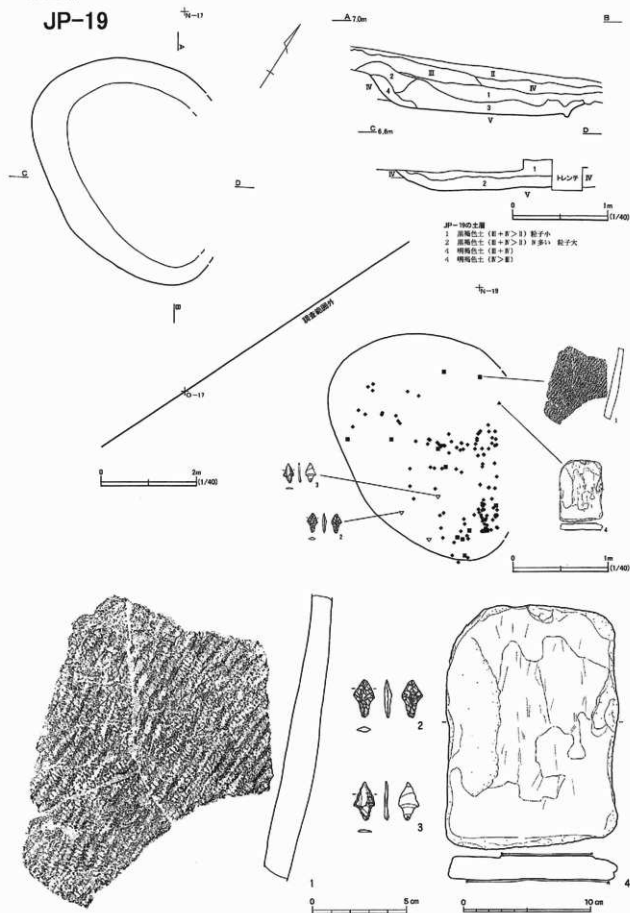
1はⅢ群土器である。胴部片で器形は緩やかに屈曲する。外面はLRの斜縄文が施される。

1・2は黒曜石製の小型有茎石織。3は砂岩製の砥石で、両面に平坦な擦り面がみられる。

時期 覆土出土の遺物から縄文時代中期後半と考えられる。

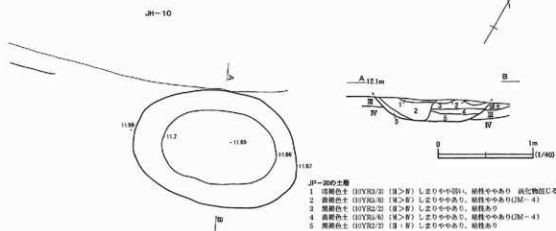
(広田)

JP-19



図III-100 JP-19平面図と土層、遺物分布図、遺物

JP-20 $\pm 1-28$



JP-21

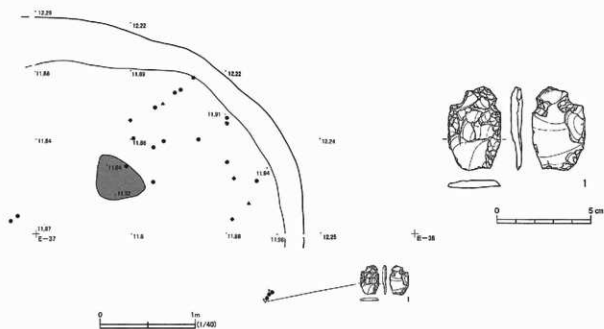
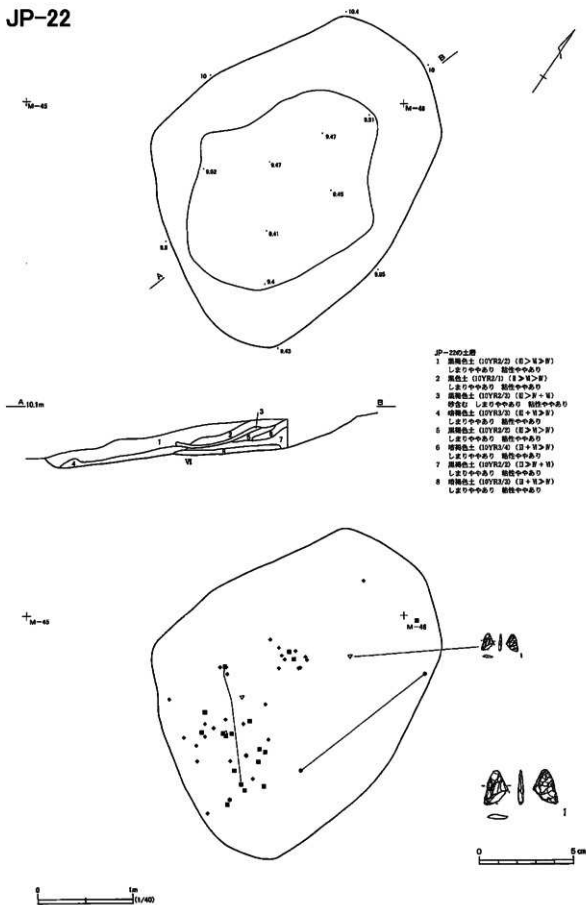


図 III-101 JP-20・21平面図と土層、遺物

JP-22



図Ⅲ-102 JP-22平面図と土層、遺物分布図、遺物

JP-20 (図Ⅲ-101 図版84)

位置 I-38

規模 1.75×1.22/1.21×0.78/0.27m

調査

JH-10調査中、Ⅶ層主体の土が楕円形に検出したため確認された土坑である。

覆土

盛土(JM-4)により埋められている。一部黒褐色土も混じるが、主体は黄褐色土である。

形態

平面形は楕円形で、坑底は皿状となる。

遺物

覆土中からフレイクが2点出土している。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。

(愛場)

JP-21 (図Ⅲ-101、図版84)

位置 D-37

規模 (2.76)×(2.56)/(2.30)×(1.82)/-m

調査

台地南東側、標高約11mの平坦面に位置する。JM-3を調査中、D-37区付近で暗褐色土と黄褐色土の落ち込みが検出された。JM-3の土層観察用ベルトで土層断面を確認したところ、北西側の壁の立ち上がりを確認できたため、JM-3の盛土で埋められた土坑と判断した。ただし、北東側以外の立ち上がりは確認できなかった。土層の堆積状況から、JP-21はJM-3より古いと考えられる。また、JP-21の南東及び南西側はすでに掘り下げていたため、正確な範囲は不明である。北西側約2mにJH-2がある。

覆土

JM-3の盛土で埋められているため、基本的にはJM-3の土層と同じであり、土層断面図は図示していない。内側にはⅢ層を主体とした黒褐色の盛土層が、外側にはⅦ層を主体とした褐色の盛土層が堆積している。小さいブロックによる人為的な堆積のため、土坑の廃棄直後にJM-3により埋められたと考えられる。

形態

北東部のみ検出できた。検出できた部分の平面形は上場、下場共に楕円形である。坑底はやや凹凸があるが、全体的には平坦である。坑底中央付近でややまとまった炭化物粒のまとまりを検出した。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。坑底面はⅣ層中に構築されている。

遺物

つまみ付きナイフ1点、フレイク3点、たたき石1点、石皿・台石1点、礫21点の計27点出土している。層位では覆土(JM-3盛土)と坑底出土に分かれる。たたき石は覆土から出土し、他の礫以外の遺物は坑底出土である。平面分布は北側がやや密である。

1は黒曜石製のつまみ付きナイフである。

時期 覆土の状況、周辺の遺構の時期から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JP-22 (図Ⅲ-102、図版84)

位置 D-37

規模 (2.76) × (2.56) / (2.30) × (1.82) / (0.32)m

調査

台地南東側縁辺部、標高約11mの緩斜面に位置する。縄文時代の盛土であるJM-2を底面付近まで掘り下げたところ、L-47グリッド付近で暗褐色土の落ち込みが検出された。落ち込みの長軸沿いにトレンチ調査を行ったところ、土坑であることが判明した。土層の堆積状況では、JP-22が埋まった上にJM-2の盛土の堆積が認められるため、JP-22はJM-2より古く、JP-22廃棄後やや時間をおいて、JM-2により埋められたと考えられる。

覆土

自然堆積で、薄い土層からなる。土層は、Ⅲ層が主体でⅣ・Ⅴ層が混ざる。色調は黒褐色、暗褐色を呈する。

形態

平面形は上場、下場共に不整の楕円形である。掘り込みは浅く、坑底は南側に向かって緩やかに傾く。掘り込み面はⅢ層中と考えられる。坑底面はⅤ層中に構築されている。

遺物

Ⅳ群土器27点、石鏃1点、Rフレイク1点、フレイク29点、礫4点の計62点出土している。全て覆土出土である。平面分布は南側がやや密である。Ⅳ群土器と礫は接合関係が認められた。覆土出土の4点がJP-12・JM-2等出土の土器と接合し、覆土出土の別の3点はJH-6・JP-17・JM-2等出土の土器に接合し(図Ⅲ-112)、それぞれ復元されている(図Ⅲ-114-2、図Ⅲ-114-2・3)。

時期 覆土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

(3) 盛土遺構

JM-1 (図Ⅲ-103~108 図版85~87)

位置 E-32, 33, 34, 35, F-31, 32, 33, 34, 35, G-31, 32, 33, 34, 35

規模 16.64 × (10.2) / 0.37m

調査

標高11~12mの段丘縁辺部にJP-3を覆って形成される。すぐ南の斜面部にはJH-4、9、JP-14カ所在する。

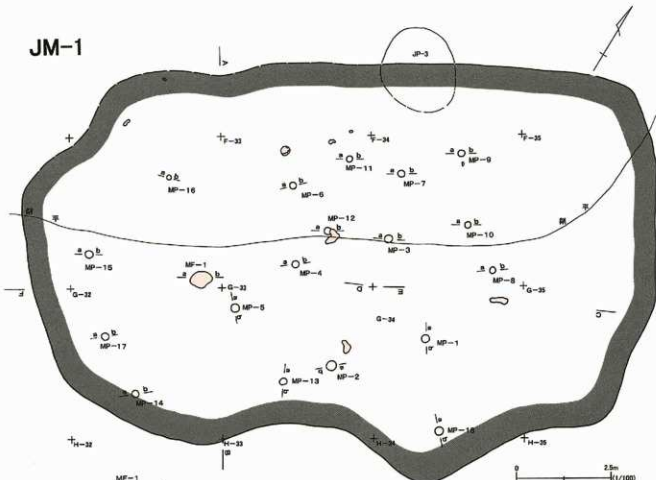
段丘平坦部の牧草地耕作土を重機で除去すると、東西方向に長い馬蹄形の黄褐色土の広がりが見られた(北側部分)。排根線部分の土層を精査した結果、Ⅱ層とⅢ層の間、一部はⅣ層まで掘り込まれた上にⅤ層を主体とする盛土、焼土が確認された。南側についてもベルトを数本設定して調査を行ない、北側と同様に周堤状に東西に長い黄褐色土の広がり確認された。焼土は数カ所で確認されたが、MP-1以外は二次堆積と判断し、平面形のみ記録した。

遺物の取り上げに際してはⅤ・Ⅳ層主体の黄褐色、褐色、暗褐色土について盛土1層、黒褐色、黒色土について盛土2層として取り扱い、細かな分層は行なわなかった。

土層・形態

北側は削平されているが、図Ⅲ-104の遺物出土状況のドットと対応する部分に、北側と南側に「こ」の字もしくは「周堤状」に盛土が厚くなされていたと考えている。盛土は厚い場所では40cm程となり、焼土が混じる。中央部はⅢ層が削平される傾向にあり、一部1m程のスポット状に黄褐色の広がりが見られる。

JM-1



MF-1の土層
1 赤褐色土 (OYR1/0) 粘粒やや多い



JM-1の土層 (A-Bライン 南壁)
1 赤褐色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりやあり、粘粒ややあり
2 黒褐色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりあり、粘粒ややあり
3 褐色土 (OYR1/0) (黄+黒+赤) しまりややあり、粘粒ややあり
4 黒褐色土 (OYR2/0) ~褐色土 (OYR1/0) しまりややあり、粘粒あり

5 灰色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりややあり、粘粒あり
6 赤褐色土 (OYR2/0) (黄+黒) しまりややあり、粘粒ややあり
7 黄褐色土 (OYR2/0) しまりややあり、粘粒ややあり
8 褐色土 (OYR2/0) しまりややあり、粘粒あり



JM-1の土層 (C-Dライン)
1 黒褐色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりややあり、粘粒ややあり
2 黒褐色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりややあり、粘粒あり
3 赤褐色土 (OYR2/0) (黄+赤) しまりややあり、粘粒あり
4 黒褐色土 (OYR2/0) (黄+赤+黒) しまりややあり、粘粒ややあり
5 黒褐色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりややあり、粘粒ややあり
6 褐色土 (OYR2/0) 塊土



JM-1の土層 (E-Fライン)
1 黒褐色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりややあり、粘粒あり
2 赤褐色土 (OYR2/0) (黄>赤) しまりややあり、粘粒あり
3 赤褐色土 (OYR2/0) (黄+赤) 粘土質に富む しまりあり、粘粒ややあり
4 黄褐色土 (OYR2/0) >黒褐色土 (OYR2/0) 一部塊状しまりややあり、粘粒あり
5 褐色土 (OYR2/0) (黄+赤) しまりややあり、粘粒ややあり

図Ⅲ-103 JM-1平面図と土層、MF

穗香堅穴群

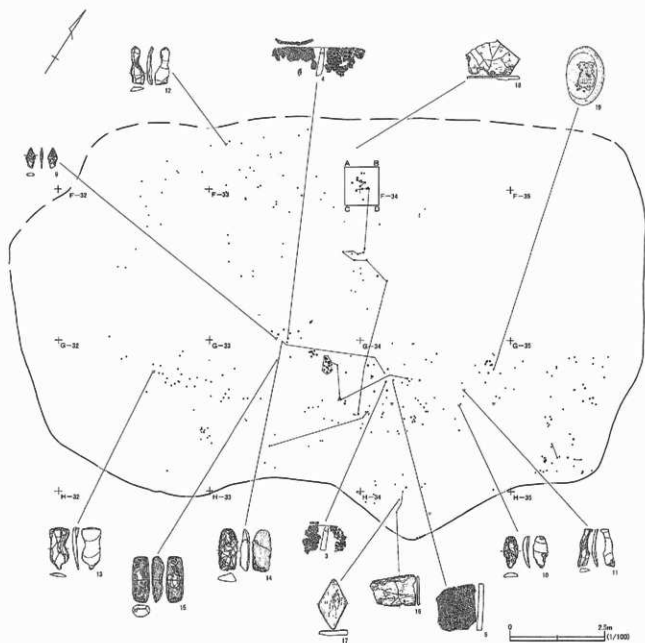
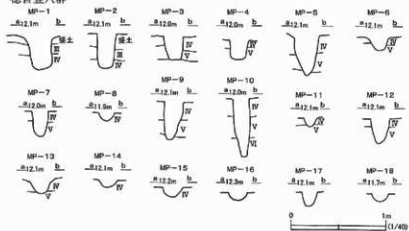
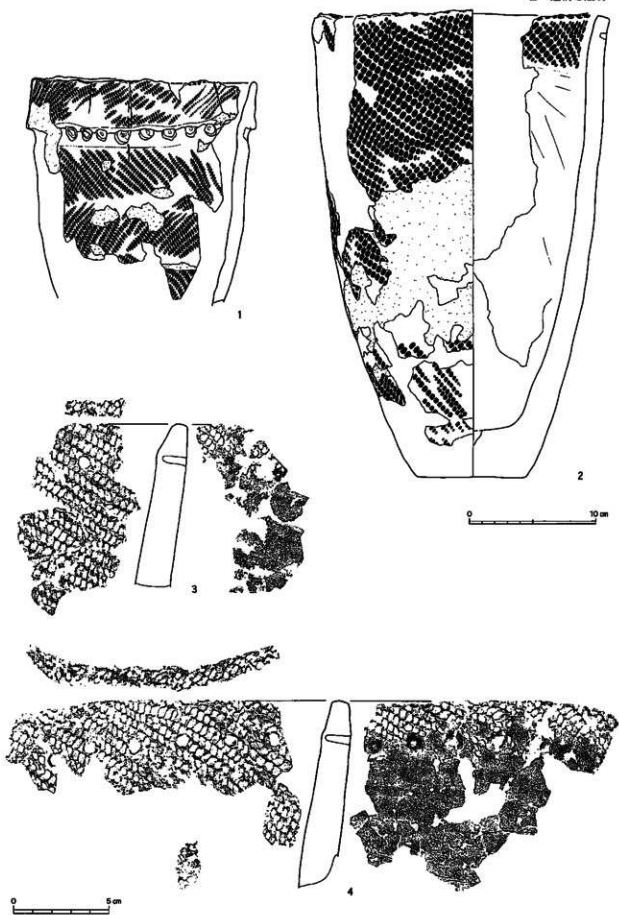


圖 III-104 JM-1MP、遺物分布圖



図Ⅱ-105 JM-1 遺物(1)

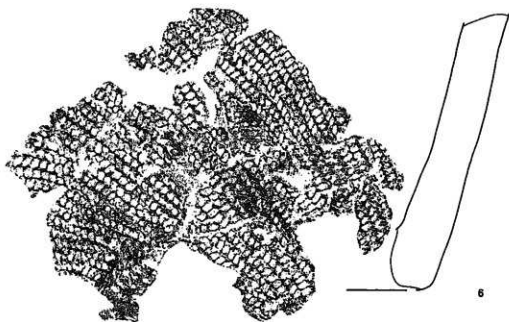
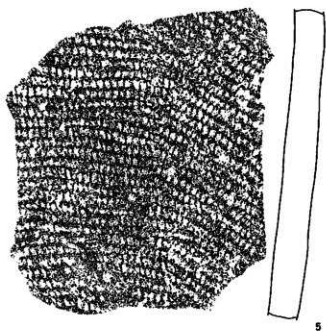
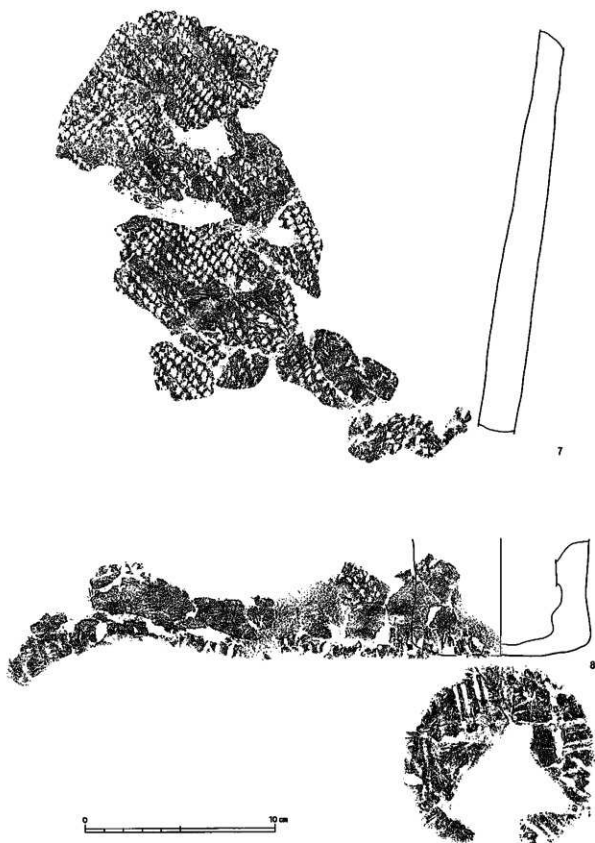


圖 III-106 JM-1 遺物(2)



図III-107 JM-1遺物(3)

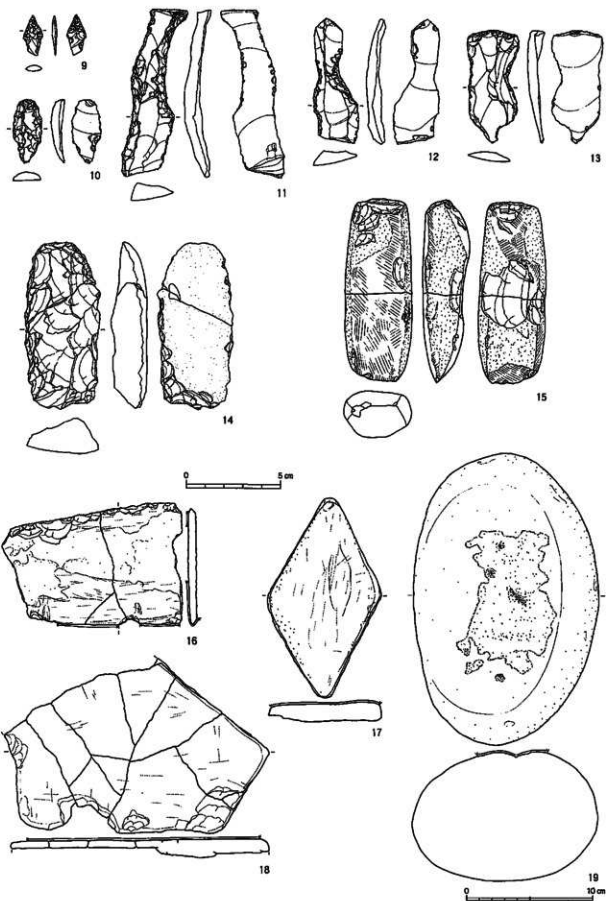


圖 III-108 JM-1 遺物(4)

みられた。南側は斜面へ流れたと考えられる土層も盛土範囲にしているが、本来の範囲は3m程北側になると思われる。

付属遺構

焼土は、MF-1としたもの以外は盛土中で検出され、すべて二次的に堆積したものである。MF-1は盛土直下のⅢ層において検出されている。

柱穴が18ヵ所で確認された(MP-1~18)。盛土上部で確認されたものもあるが(MP-1・2)、他は盛土除去後の構築面に検出したものである。

遺物

遺物はⅣ群土器が1038点、石鏃2点、石槍2点、両面調整石器7点、スクレイパー4点、Uフレイク1点、フレイク158点が出土している。Ⅳ群土器は熱を受け細かく割れているものが多い。フレイクは石器の素材となるような比較的大型のものが目立った。

1~8はⅣ群土器である。1・2は復元個体。1は口縁部~胴部で平縁である。口縁部にやや幅の広い肥厚帯がめぐられ、肥厚帯直下に無文帯を作り出し、竹管状工具による横位の円形刺突が施される。肥厚帯上には縦位の細い沈線が施される。地文はRLとLRの斜縄文を交互に施文している。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は黒褐色を呈する。2は口縁部から底部にかけて緩やかに屈曲し、底部は平底である。口縁部には小さい刺突列が横環する。地文は整ったRLの斜縄文で、口唇部、口縁内面上部にもRLの斜縄文が施文される。胴部~底部にかけて二次焼成により器面の剥落、磨耗が著しい。口縁部付近には煤が付着している。胎土は砂礫、繊維を含み、粘土は緻密である。焼成はやや不良である。3・4・6は同一個体である。3・4は平縁で、口縁部には小さい刺突列が横環する。刺突は深く一部貫通する。地文は整ったRLの斜縄文で、口唇部、口縁内面上部にもRLの斜縄文が施文される。6は胴部~底部で底面外側端にも縄文が施される。3・4・6はいずれも胎土は砂礫、繊維を含み、粘土は緻密である。焼成はやや不良で、器面が剥落している部分がある。5・7は胴部片で地文はどちらもRLの斜縄文である。7の縄文はやや粗い。胎土は砂礫、繊維を含み、粘土は緻密である。焼成はやや不良である。8は底部で、7と同一個体の可能性がある。内面は剥落が著しい。地文は粗いRL斜縄文で、底面付近には施されない。底面には沈線が施される。

9は有茎の石鏃、10~13はスクレイパーである。10は上部がへら状となり、11~13は刃部が内湾する。9~13は黒曜石製である。14は安山岩製?の石斧未成品であるが、スクレイパーの可能性もある。15は凝灰岩製の石斧で、JP-8近くのD-35グリットで出土した刃部と、JM-1から出土した基部が接合した。16は凝灰質砂岩製の石鋸で、上端は表裏交互に連続した剥離がみられる。17は砂岩製の砥石で、炭化物が付着する。18は凝灰質砂岩の砥石、19は台石である。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。

(愛場)

JM-2 (図Ⅲ-109~116、図版88~90)

位置 K-45~48、L-44~48、M-44~48

規模 17.84×8.54/(0.57)m

調査

台地南東側縁辺部、標高約10mの緩斜面に位置する。盛土範囲の平面形は不整の楕円形に近く、11の発掘区に及ぶ。長軸方向は南東-南西で、ほぼ等高線に沿う。縄文時代の住居跡であるH-24のトレンチ調査時に、南壁の立ち上がりが見出できなかったため、詳細な土層の観察を行った。その結果H-24の覆土と考えていた土層が、別の遺構の土層であることが判明した。また、H-24の床面か

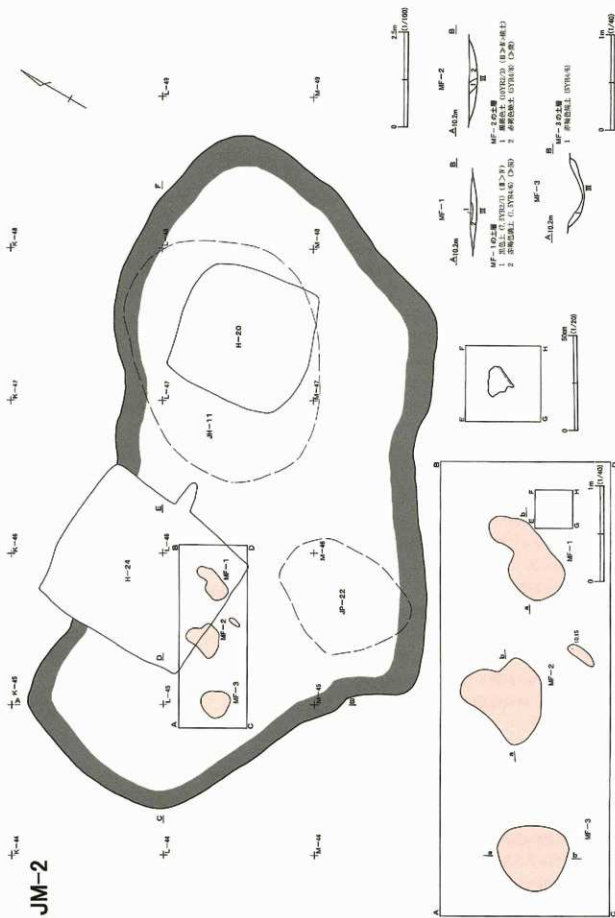
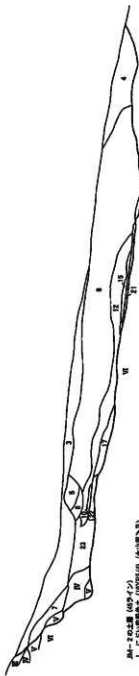


圖 III-109 JM-2 平面圖、MF

B

L-4

△11.4m

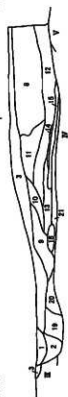


JM-2土層 (60-17)

- 1 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 2 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 3 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 4 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 5 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 6 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 7 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 8 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 9 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 10 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 11 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 12 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 13 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 14 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 15 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 16 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 17 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 18 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 19 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 20 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 21 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 22 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 23 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 24 黒土 (UV72/0) (E>N>F)

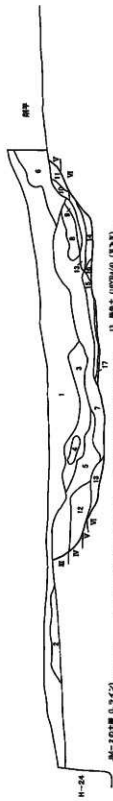
△11.4m

L-4



△11.4m

L-4



JM-24土層 (60-17)

- 1 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 2 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 3 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 4 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 5 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 6 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 7 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 8 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 9 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 10 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 11 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 12 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 13 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 14 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 15 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 16 黒土 (UV72/0) (E>N>F)
- 17 黒土 (UV72/0) (E>N>F)

11.4m

図 110 JM-2土層

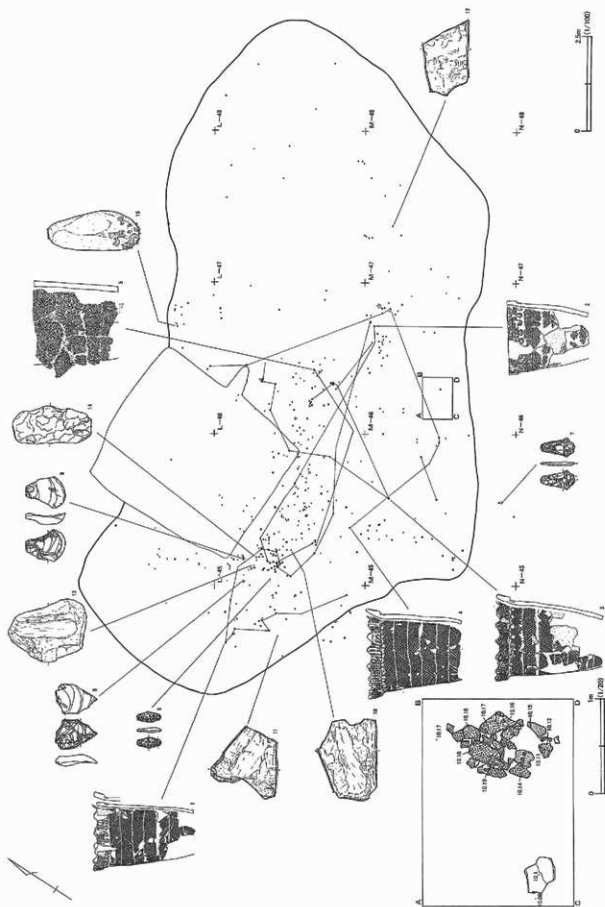


图 III-111 JM-2、遺物分布图、遺物出土状况图

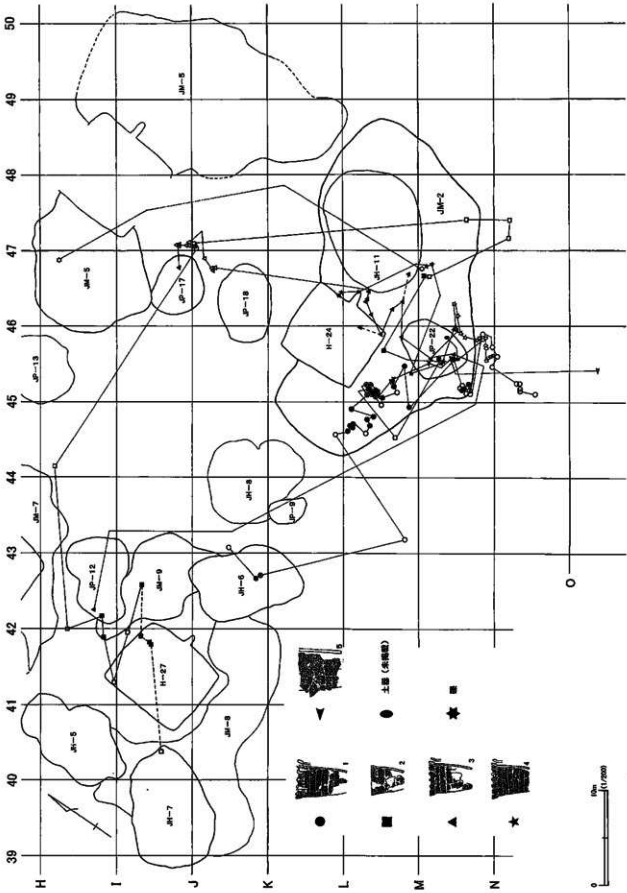


図 III-112 JM-2 遺構間遺物接合状況図 (白抜きのは包含層出土のもの)

ら検出された焼土が、H-24の範囲外に広がっていたことから、H-24の下部に別の遺構が存在し、H-24がその遺構を壊して構築されていることが確認された。その後、H-20もJM-2を壊して構築されていることがわかった。H-20・24の調査終了後にⅡ層を掘り下げ、周辺のⅢ層上面の精査を行った結果、Ⅲ層中にⅣ層を主体とした暗黄褐色土の広がりが面的に検出された。暗黄褐色土の範囲を把握するために、発掘区のラインに沿ってトレンチを設定し掘り下げ、その結果、縄文時代の盛土であることが判明した。盛土の調査は範囲確認後、平面図作成を行い、調査区のライン沿いに土層観察用ベルトを設定し掘り下げる方法をとった。JM-2は上記のように、H-20・24に一部壊されている。また、盛土の下部からはJH-11とJP-22が検出されている。どちらもJM-2の盛土で埋められているため、JM-2より古い遺構である。また、北側にJM-5が近接し、北西約2mにJP-18がある。

土層

盛土構築面はⅢ層中～Ⅳ層上面である。構築面は斜面地形のため南東側が低くなっており、全体的に弱い凹凸がある。全体的に盛土は厚く、構築面の凹凸のある部分やJH-11の掘り込み部分は土を厚く盛り、盛土上面は南東側が低いなだらかな斜面になっている。土層はⅢ層を主体とする黒褐色、暗褐色土と、Ⅳ層を主体とする褐色土に大きく分かれる。土量的にはⅢ層を主体とする黒褐色土が多く、褐色土は少ない。盛土上～中位では大きな厚みのある土層が堆積し、下部では小さな土層がブロック状に折り重なって堆積している。斜面部に形成されているためか、他の盛土に比べて厚みがある。土層断面から考えると、盛土の形成過程は特定の場所から徐々に広がっていったわけではなく、最初に盛土の範囲を決め、その部分に少量の土を置き、その後一気に盛土を形成したと考えられる。

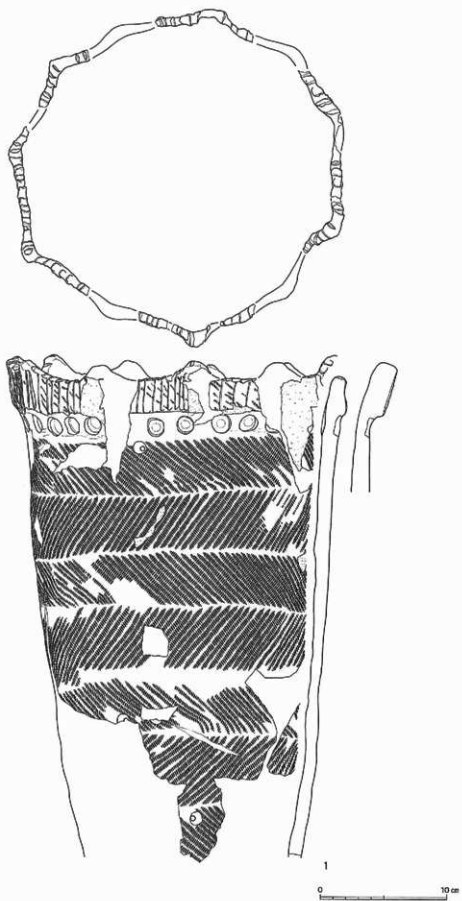
付属遺構

盛土南西部の構築面で焼土が3ヵ所(MF-1～3)近接して検出された。平面形はいずれも不整形である。焼土はよく焼け、下部の焼け方は漸移的である。焼土直上及び周辺から炭化物が検出された。MF-1の東側からは骨が検出された(図Ⅲ-109)。

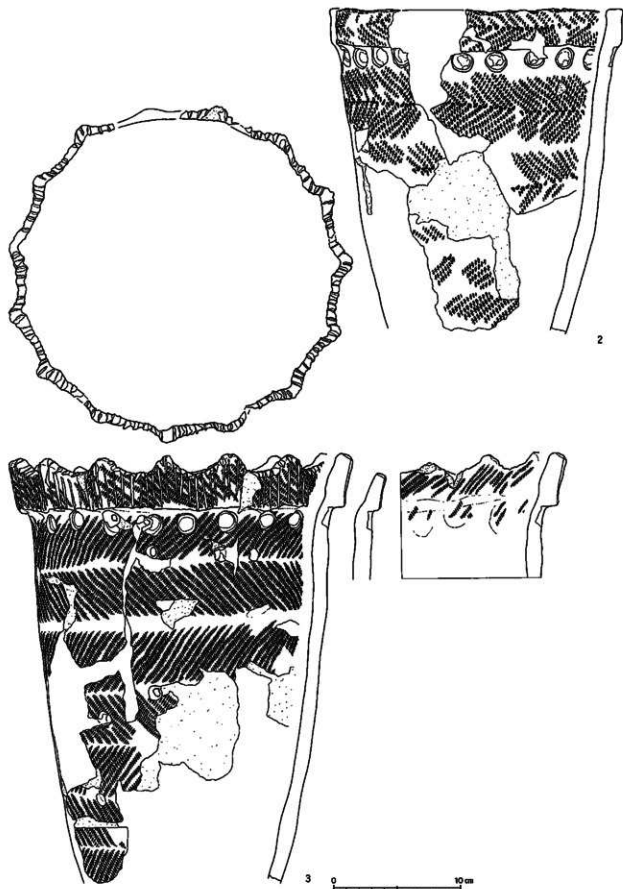
遺物

948点出土している。内訳はⅣ群土器223点、石鏝2点、石槍2点、スクレイパー2点、Rフレイク3点、Uフレイク2点、フレイク185点、石鋸6点、砥石12点、たたき石2点、石皿・台石7点、礫502点である。量的には礫、Ⅳ群土器、フレイクが出土遺物のほとんどを占める。平面分布は盛土中央付近から南西側にかけてまとまっている。細かい土層が多く、遺物の層位関係が複雑なため、遺物取上げ時には便宜的に、盛土の土層を大きく2層に分けた。Ⅳ層を主体とした褐色土層を盛土1層とし、Ⅲ層を主体とした黒褐色土層を盛土2層とした。層位別では盛土2層の遺物が多い。また、構築面からも遺物が出土した。構築面からはⅣ群土器21点、石鏝1点、スクレイパー1点、Rフレイク2点、Uフレイク1点、フレイク35点、石鋸1点、砥石4点、礫1点が出土している。また、MF-4からはⅣ群土器30点、石鏝1点、フレイク1点が出土している。

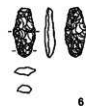
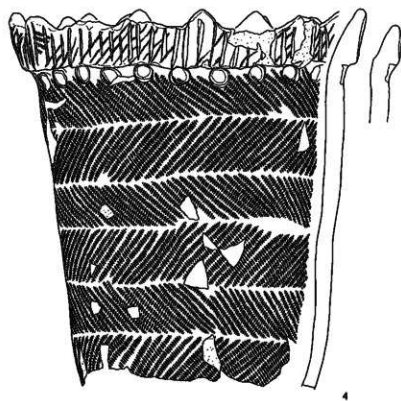
接合関係はⅣ群土器、礫で認められた。接合関係は盛土内だけでなく、他の遺構、包含層とも確認された。(図Ⅲ-111・112)。掲載したⅣ群土器はいずれも他の遺構、包含層のⅣ群土器と接合している。1は盛土1層(1点)、盛土2層(15点)、盛土構築面(10点)出土のものが、JH-6、JP-17・22、包含層のJ-43、K-44、L-43～45、M-45、N-45、P-44区出土のものと接合している。JH-6のものは床面出土で、他は全て覆土出土のものである。包含層のものはⅡ、Ⅲ層出土である。2は盛土2層出土の4点、H-27、JP-12、JM-9、包含層のH-33・41・44、I-40～42、J-47、L-44、M-46・47、N-47区出土のものと接合している。遺構のものは全て覆土出土で、包含層出



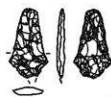
図III-113 JM-2遺物(1)



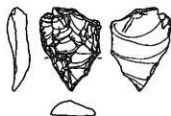
圖Ⅲ-114 JM-2遺物(2)



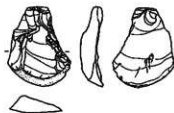
6



7



8



9



圖Ⅲ-115 JM-2 遺物(3)

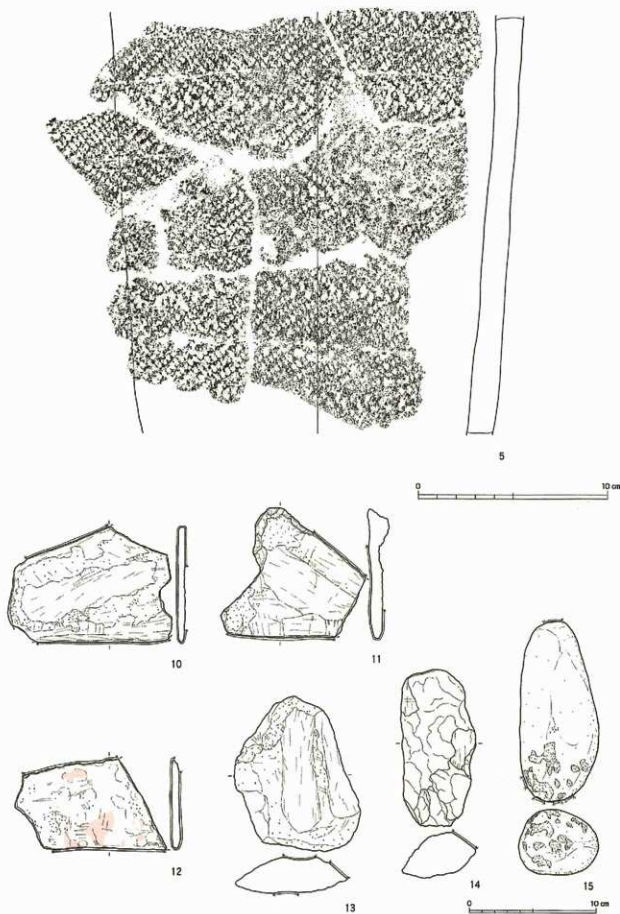


圖 III-116 JM-2 遺物(4)

土のものはⅡ、Ⅲ層のものが多く、縄文時代の掘揚げ土出土のものもある。3は盛土1層（1点）、盛土2層（8点）、盛土構築面（1点）出土のものが、H-20・24、JP-12・22、包含層のI-47、J-46、L-46、M-45・46区出土のものと接合している。H-20のものはⅠ層出土で、他の遺構は覆土出土のものである。包含層のものはⅢ層出土のものが多く、Ⅰ、Ⅱ層、縄文時代の掘揚げ土出土のものもある。4は盛土1層（2点）、盛土2層（6点）出土のものが、JP-22、包含層のM-45・46区出土のものと接合している。JP-22は覆土出土のもので、包含層のものはⅡ・Ⅲ層出土である。M-46区のⅢ層からはややまとまった状況で検出された（図Ⅲ-111）。遺物検出当初は盛土の存在に気づかなかったため、Ⅲ層としたが、Ⅲ層ではなく黒褐色の盛土層の可能性もある。5はJM-2の盛土2層（5点）、盛土構築面（1点）出土のものが、JP-22（2点）、O-45区出土のものと接合している。JP-22は覆土出土で、O-45区のものⅡ層出土である。

1～5はⅣ群土器である。1～4は復元土器で、いずれも口縁部～胴部である。1・3・4は全体的によく似ている土器で下部は二次焼成のためやや赤化し、脆くなっている。口縁部に幅の狭い肥厚帯をめぐらし、その上に突起が配される。突起部分は貼り付けのため、やや厚みがある。肥厚帯直下には竹管状工具による円形刺突が横環する。1・3は口唇部と肥厚帯上に横位の押引文が施される。4は口唇部にRLの縄文、肥厚帯上に横位の押引文が施される。3は口縁内面上部にもLRの斜縄文が施される。地文はRLとLRの斜縄文を交互に施文している。4は口縁部と胴部に補修孔が開けられている。胎土はいずれも砂粒、繊維を含み焼成は良い。2は平縁で、口縁部には幅の狭い肥厚帯をめぐらしている。肥厚帯直下には竹管状工具によるやや浅い円形刺突が横環する。地文は結束の羽状縄文である。口唇部にはLR斜縄文が施される。5は胴部片である。地文はRL・LRの斜縄文を交互に施す部分と結束の羽状縄文を施す部分に分かれる。二次焼成のためやや赤化し、非常に脆くなっている。6は石錐で下端部および下端部側縁は稜が摩滅する。7は上が基部となる石槍片、8・9はスクレイパー、6～9はいずれも黒曜石製である。10～12は石錐で、10・11には平坦面中央にややくぼんだ擦り面がある。10は砂岩製で、熱により赤化している。11は凝灰岩製、12は砂岩製で、赤色物質が両面に附着する。

13・14は砂岩製の砥石で、14は擦り面が除去される。15はたたき石で両端に潰打痕がみられる。

時 期 構築面出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

（広田）

JM-3（図Ⅲ-117～119、図版91・92）

位 置 B-36・37、C-36～38、D-36・37、E-35～38、F-35～38

規 模 18.56×9.74/0.30m

調 査

台地南東側、標高約10mの平坦面に位置する。盛土の平面形は不整のひょうたん形に近く、13の発掘区に及ぶ。長軸方向はほぼ南北である。Ⅲ層上面の精査を行ったところ、Ⅲ層中に暗黄褐色土の広がり面的に検出された。暗黄褐色土の範囲を把握するために、発掘区のラインに沿ってトレンチを設定し掘り下げた。その結果、縄文時代の盛土であることが判明した。盛土の調査は範囲確認後、平面図作成を行い、調査区のライン沿いに土層観察用ベルトを設定し掘り下げる方法をとった。北側はJH-2によって大部分が壊されている。中央付近は縄文時代の住居跡であるH-28・29によって部分的に壊されている。また、盛土の下位からはJP-21が検出された。JP-21はJM-3の盛土で埋められているため、JM-3より古い。JM-3の南端はJM-1と接し、北側にはJP-7、西側にJP-6・8、南東側にJP-10・11、北西にはJM-6がある。

穂香聚穴群



JM-3

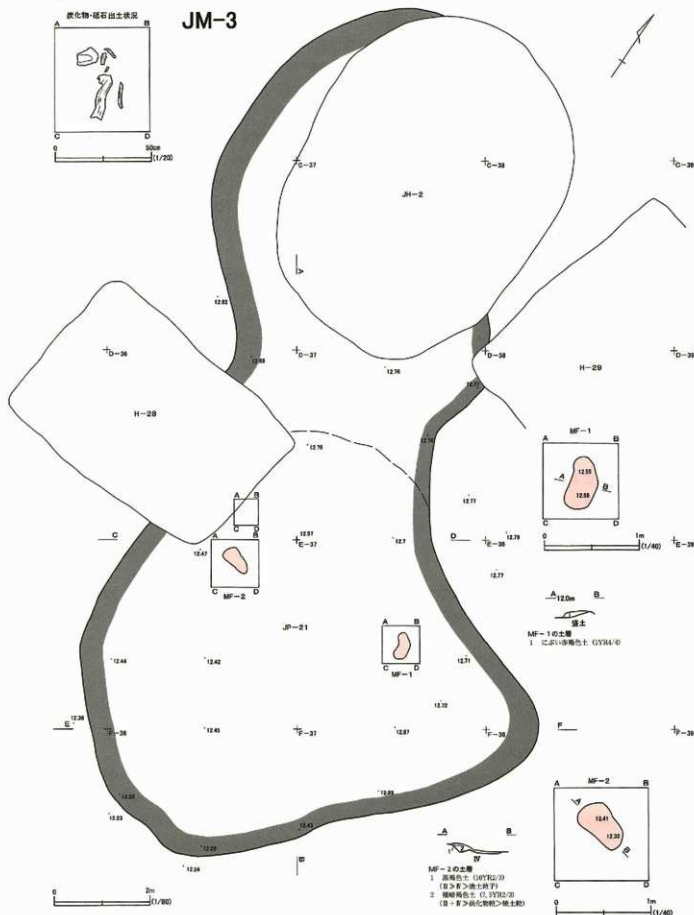
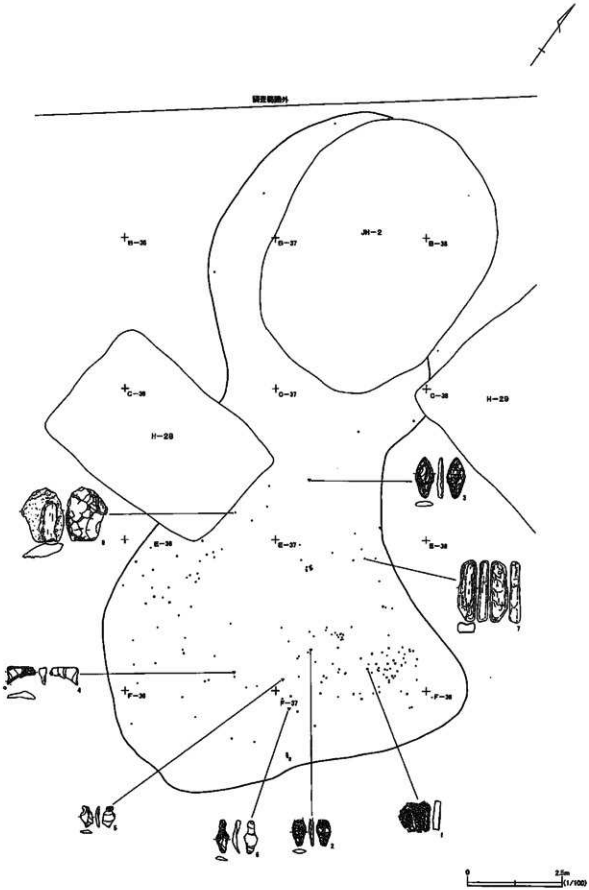
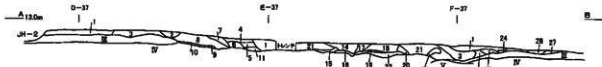


図 III-117 JM-3 平面図、MF



図Ⅲ-118 JM-3遺物分布図

穂香整六群



JM-3の土層 (D-Gライン)

- 1 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 2 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 3 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 4 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 5 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 6 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 7 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 8 暗褐色土 (OYR4/0) (E>N>F)
- 9 暗褐色土 (OYR4/0) (E>N>F)
- 10 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

- 11 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 12 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 13 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 14 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 15 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 16 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 17 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 18 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 19 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 20 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 21 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 22 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 23 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 24 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 25 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 26 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 27 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 28 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 29 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 30 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

- 31 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 32 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 33 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 34 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 35 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 36 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 37 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 38 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 39 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 40 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 41 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 42 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 43 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 44 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 45 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 46 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 47 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 48 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 49 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 50 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

E-36
13.0m



JM-3の土層 (Eライン)

- 1 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 2 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

- 3 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 4 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

- 5 暗褐色土 (OYR4/0) (E>N>F)
- 6 暗褐色土 (OYR4/0) (E>N>F)
- 7 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

E-37
12.6m

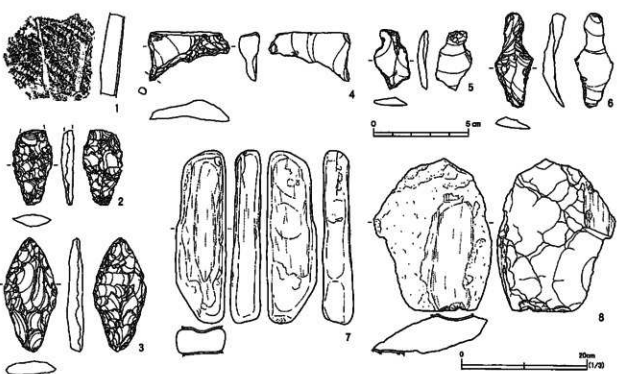


JM-3の土層 (Fライン)

- 1 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 2 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 3 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 4 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

- 5 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 6 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 7 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 8 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)

- 9 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 10 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 11 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)
- 12 暗褐色土 (OYR2/2) (E>N>F)



図四-119 JM-3土層、遺物

土 層

盛土構築面はⅢ層中～Ⅳ層上面で、やや凹凸がある。全体的に盛土は薄いが、構築面の凹凸のある部分は土を厚く盛り、盛土上面はほぼ平坦に作られている。土層はⅢ層を主体とする黒褐色土と、Ⅳ層を主体とする暗褐色、褐色土に大きく分かれる。土質的にはⅢ層を主体とする黒褐色土が多く、褐色土は少ない。E～F-37ライン付近は小さな土層がブロック状に折り重なって堆積している。また、その周辺部は薄く広がる土層が多い。

付属遺構

南東部の盛土下部で焼土が2カ所(MF-1・2)検出された。平面形はどちらも不整の楕円形で、焼け方は弱い。炭化物はほとんど検出されなかった。焼土下部の境界が明瞭なため、投げこまれた焼土と考えられる。

遺 物

519点出土している。内訳はⅣ群土器82点、石槍2点、つまみ付きナイフ1点、スクレイパー1点、Uフレイク1点、フレイク88点、メノウ製原石1点、砥石4点、たたき石1点、礫338点である。礫、Ⅳ群土器、フレイクが多い。平面分布は盛土南側がやや密である。細かい土層が多く、遺物の層位関係が複雑なため、遺物取上げ時には便宜的に、盛土の土層を大きく2層に分けた。Ⅳ層を主体とした褐色土層を盛土1層とし、Ⅲ層を主体とした黒褐色土層を盛土2層とした。層位別では盛土2層の遺物が多い。Ⅳ群土器はほとんどが小片である。砥石1点は盛土底面の炭化材付近から出土している(図Ⅲ-117左、図Ⅲ-119-8)。検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が3800±40BP(較正暦年代2330-2210BC)という結果を得た。

1はⅣ群土器の胴部片である。地文はRL斜縄文で、縦位の沈線が施される。2・3は石槍で、3には側縁全周に使用による摩滅がみられる。4は石錐で、上面に原石面を残し、機能部は二つである。5はつまみ付きナイフで両側縁に使用による微細剥離がある。6はスクレイパーで、周縁は3同様つぶれがみられる。2～6は黒曜石製である。7は砥石で、一面に深い擦り面がみられ、ほぼ全面に赤色物質が付着する。8は敲打調整後、擦り面が形成されている。

時 期 盛土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JM-4 (図Ⅲ-120～122 図版93～94)

位 置 G-37、38、39、H-36、37、38、39、I-36、37、38、39

規 模 11.08×9.8/0.56m

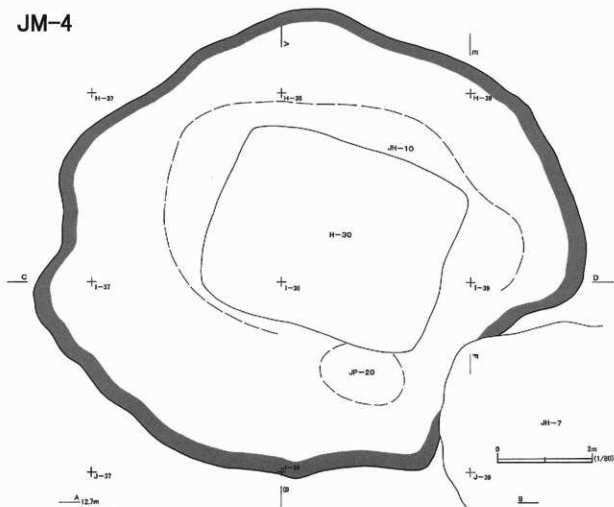
調 査

標高約11～12mの段丘縁部に所在する。I層除去後、H-30の周囲がⅣ層主体の黄褐色土により小高くなっていることから注意された盛土である。H-30の調査でJH-10の存在が予想されたため、盛土に先行して調査を行ない、その後周囲に残る盛土の調査を行なった。JM-8が近接するが、土色が明確に違う。

形態・土層

焼失住居であるJH-10と、JP-20を埋める。JH-10を中心に盛土されており、住居跡を埋めることを目的にしていると考えられる。中央部はH-30により壊されているが、層厚は60cm近くになるところもある。JM-1、2と同様にⅣ層を主体として形成されるが、JH-10を埋める部分は比較的細かく分層できる。JH-7に南側が切られる。

JM-4

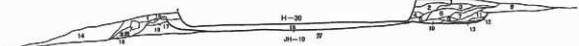


JM-4の土層 (断面A-Bライン)

- 1 黒褐色土 (OYR2/0) (黒>黄) しまりや中あり, 粘性中あり
- 2 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>黄+赤) しまりや中あり, 粘性あり
- 3 褐色土 (OYR4/0) (黒+赤+黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 3' 褐色土 (OYR4/0) (黒>黄+赤) しまりや中弱い, 粘性や中あり 炭化材含む
- 4 暗褐色土 (OYR2/0) (黒>黄) しまりや中あり, 粘性中あり
- 5 黄褐色土 (OYR5/0) (黒>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 6 黄褐色土 (OYR5/0) (黒>赤+黄アロク) しまりや中あり, 粘性中あり

- 7 暗褐色土 (OYR3/0) (黒+黄弱紅) しまりや中弱い, 粘性中あり
- 8 黄褐色土 (OYR5/0) (黄) しまりや中あり, 粘性中あり
- 9 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 10 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり 炭化材含む
- 11 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>黄アロク) しまりや中弱い, 粘性中あり
- 12 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 13 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>赤) しまりや中弱い, 粘性中あり
- 14 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>赤) しまりや中あり, 粘性中あり

12.7m



JM-4の土層 (ラインC)

- 1 暗褐色土 (OYR3/0) (黄+赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 2 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>黄+赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 3 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 4 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>黄+赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 5 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性あり
- 6 黄褐色土 (OYR5/0) (黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 7 暗褐色土 (OYR3/0) (黒+黄弱紅) しまりや中あり, 粘性中あり
- 8 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性あり
- 9 褐色土 (OYR4/0) (黒+赤+黄) しまりや中あり, 粘性あり

- 10 暗褐色土 (OYR3/0) (黄+赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 11 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 12 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中弱い, 粘性中あり
- 13 褐色土 (OYR4/0) (黒+赤+黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 14 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>黄) しまりや中あり, 粘性中あり
- 15 褐色土 (OYR4/0) (黒+黄+赤) しまりや中あり, 粘性中あり 炭化材混じる
- 16 暗褐色土 (OYR3/0) (黒)
- 17 黄褐色土 (OYR5/0) (黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 18 黄褐色土 (OYR5/0) (黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 19 褐色土 (OYR4/0) (黒>赤) しまりや中あり, 粘性中あり

12.0m



JM-4の土層 (断面E-Fライン)

- 1 暗褐色土 (OYR3/0) (黒+黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 2 褐色土 (OYR4/0) (黒+赤+黄) しまりや中あり, 粘性中あり
- 3 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 3' 黄褐色土 (OYR5/0) (黄) しまりや中あり, 粘性中あり
- 3'' 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 4 暗褐色土 (OYR3/0) (黒+黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 5 暗褐色土 (OYR3/0) (黒+黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 6 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり

- 7 暗褐色土 (OYR3/0) (赤+黄弱紅) しまりや中弱い, 粘性中あり
- 8 暗褐色土 (OYR3/0) (黒+黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 9 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 10 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり
- 11 褐色土 (OYR4/0) (黒+赤+黄) しまりや中あり, 粘性あり
- 12 暗褐色土 (OYR3/0) (黒>赤)
- 13 黄褐色土 (OYR5/0) (黄+赤)
- 14 暗褐色土 (OYR3/0) (黒+黄) しまりや中あり, 粘性中あり
- 15 黄褐色土 (OYR5/0) (黄>赤) しまりや中あり, 粘性中あり

図 III-120 JM-4 平面図、土層

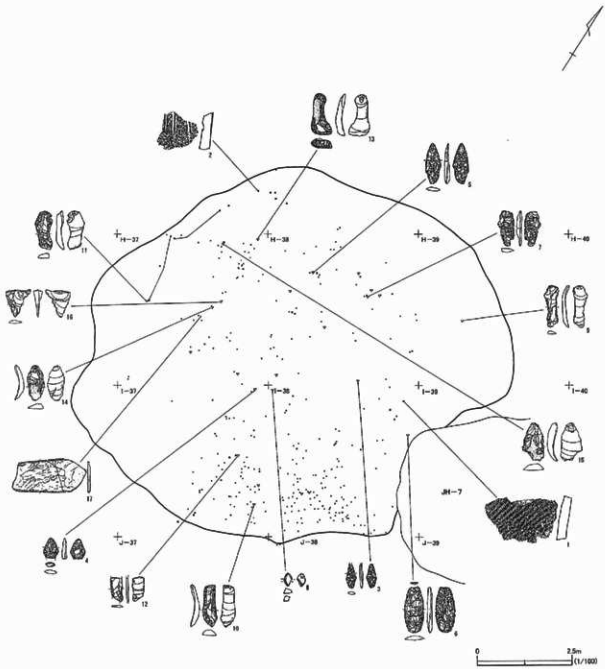


図 III-121 JM-4 遺物分布図

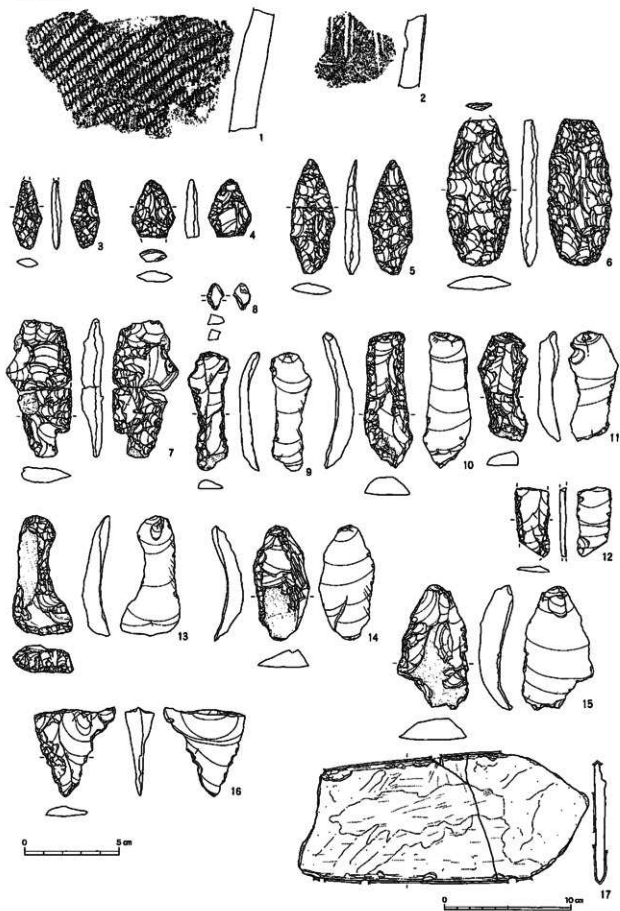


圖 III-122 JM-4 遺物

遺物

遺物はⅣ群土器35点、石鏃2点、石槍5点、両面調整石器2点、石錐1点、スクレイパー12点、Rフレイク4点、Uフレイク2点、フレイク468点、原石3点、石斧2点、石鋸2点、礫116点である。南側においてフレイクが多く出土した。

1・2はⅣ群土器の胴部片で、二次焼成のためやや赤化し、脆くなっている。1はLRの斜縄文が地文である。2はRLの斜縄文が地文で、半截竹管状工具による縦位の沈線が施される。

3～7・9～16は黒曜石製石器である。3・4は有茎の石鏃、5は石槍である。5はH-26、29の掘り揚げ土(D-40区)から出土した先端部、H-30掘り揚げ土(I-38区)から出土した中間部、JM-4から出土した基部がそれぞれ接合した。6・7は両面調整石器、6はへら状石器に形態は似るが、機能部がなく、両側縁は鋸歯状となる。7は石器の未成品の可能性があり、大型の球顆部分で割れ、その後も加工が行なわれている。8はメノウ製の石錐である。9～16はスクレイパーで、多くは縦長の剥片を利用し、側縁に刃部がみられる。12はつまみ付きナイフの可能性があり、17は砂岩製の石鋸で、両端とも明瞭なV字型の機能部断面となる。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。JH-10、JP-20を覆い、JH-7に切られる。(愛場)

JM-5 (図Ⅲ-123～128、図版95～98)

位置 G-46・47、H-45～50、I-46～50、J-47～50、K-48・49、L-48

規模 17.80×13.20/0.36m

調査

台地南東側、標高約10mの平坦部～緩斜面にかけて位置する。昨年度の調査時には縄文時代の住居跡であるH-19の掘り揚げ土としていたが、今年度の調査の結果、縄文時代の盛土であることが判明した。H-19により北西側が部分的に壊され、東側部分と西側部分に分かれているが、本来は一体のものと考えられる。盛土範囲の平面形は不整形で、西側部分は斜面に沿って南東側に伸びる形状をしている。その広がりは20の発掘区に及ぶ。H-19周辺のⅢ層上面の精査を行ったところ、Ⅲ層中に暗黄褐色土の広がりが面的に検出された。暗黄褐色土の範囲を把握するために、発掘区のラインに沿ってトレンチを設定し掘り下げた。その結果、縄文時代の盛土であることが判明した。盛土の調査は範囲確認後、平面図作成を行い、調査区のライン沿いに土層観察用ベルトを設定し掘り下げる方法をとった。盛土を掘り下げたところ、中位から焼土と炭化物粒が検出され、基底面付近でも焼土と炭化材がややまとまって出土した。JM-5の南端はJP-17、JM-2と近接し、南西側約1mにはJP-13がある。

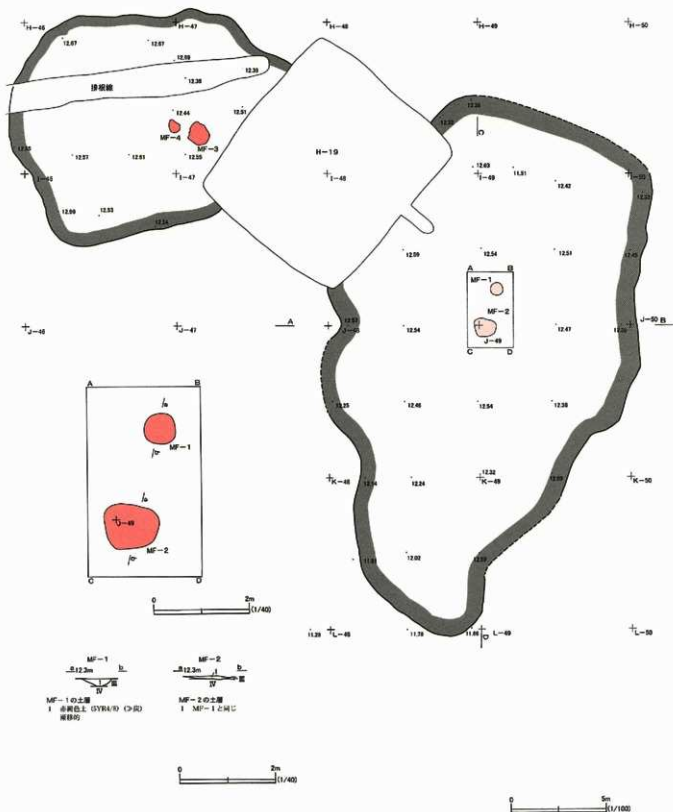
土層

盛土構築面はⅢ層中～Ⅳ層上面で、やや凹凸がある。全体的に盛土は薄いが、基底面の凹凸のある部分は土が厚く盛られ、盛土上面はほぼ平坦である。土層はⅢ層を主体とする黒褐色、暗褐色土と、Ⅵ層を主体とする暗褐色、褐色土に大きく分かれる。量的にはⅢ層を主体とする黒褐色土が多く、褐色土は少ない。土層の堆積状況は、小さな土層がブロック状に折り重なる部分と、薄い土層が広がる部分に分かれる。また、一部わずかに白色火山灰が含まれる土層がある(Jライン13層)。

付属遺構

焼土が盛土底面東側で2カ所(MF-1・2)、西側で2カ所(MF-3・4)の計4カ所検出された。平面形はMF-1・2が不整の円形で、MF-3・4は不整形である。いずれもよく焼けており、下部は漸移的である。焼土直上及び周辺からは炭化物が検出された。

JM-5



図三-123 JM-5平面図、MF

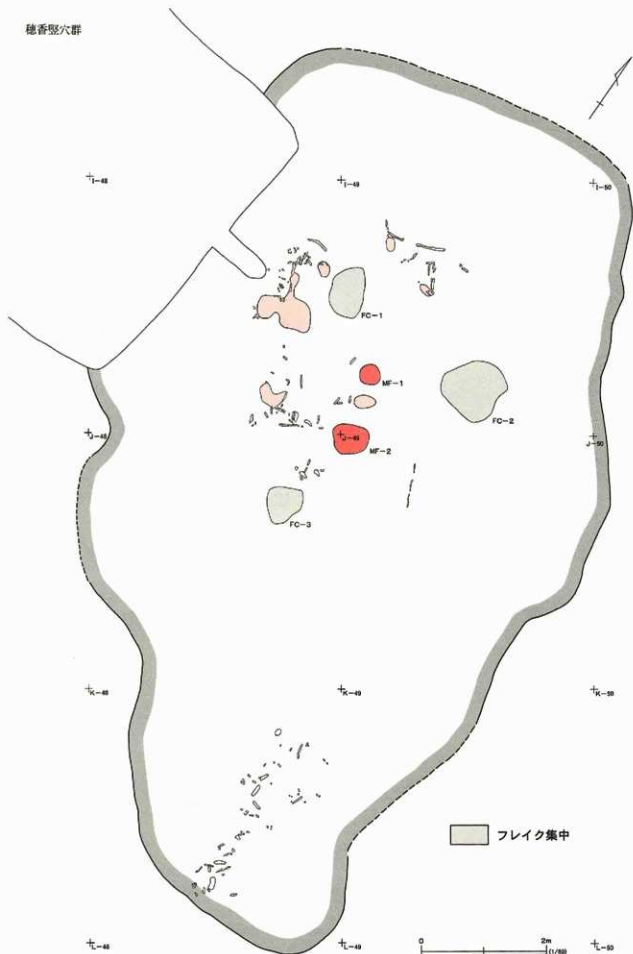


図 III-125 JM-5 炭化材出土状況図(2)

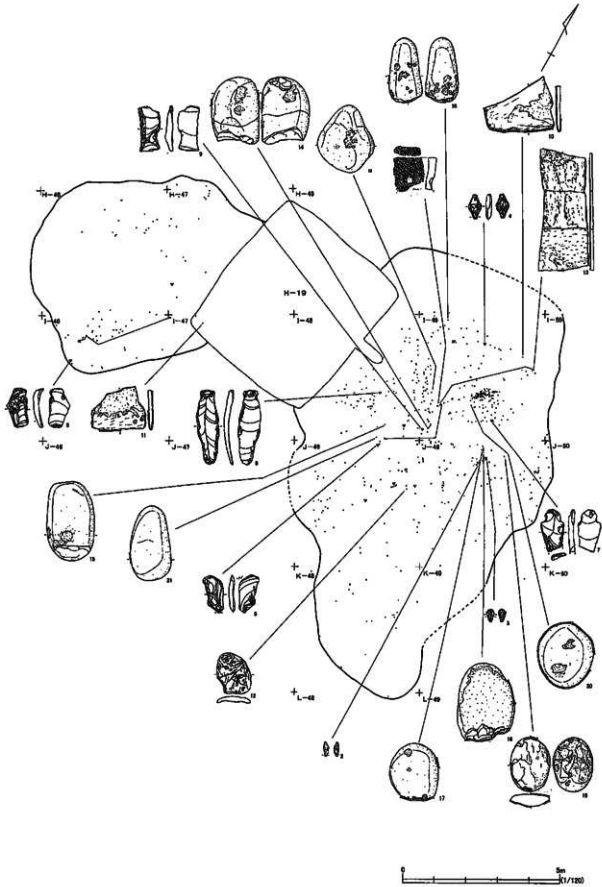
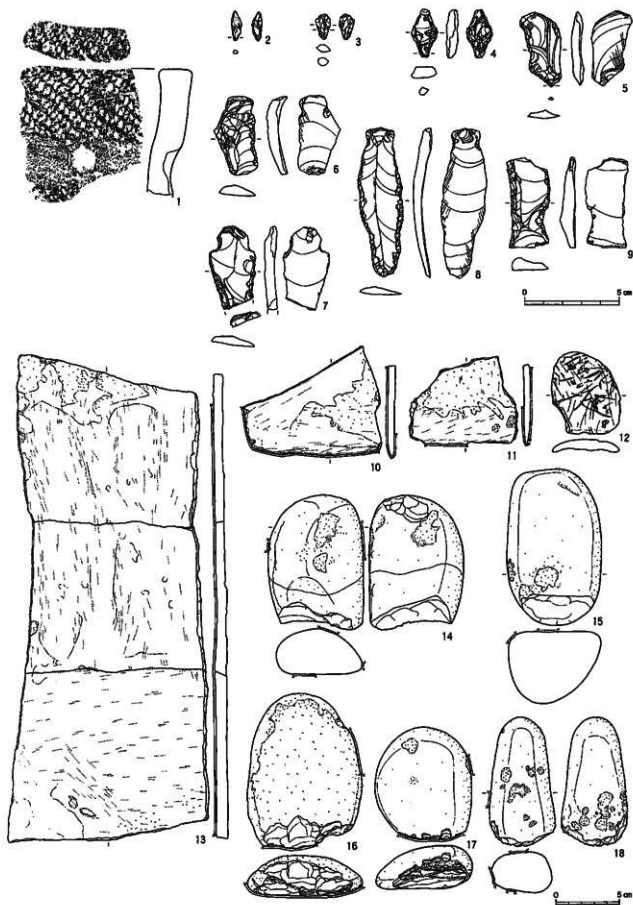
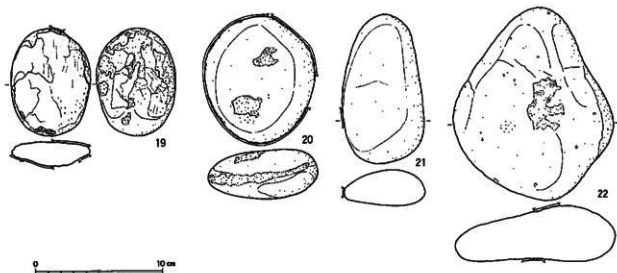


图 II-126 JM-5 遺物分布图



圖三—127 JM—5遺物(1)



図Ⅱ-128 JM-5遺物(2)

炭化材出土状況

盛土中位～基底面にかけて焼土と炭化物が検出された。盛土中位では焼土と炭化物粒が面的に広がり、その下の盛土基底面及びその直上では炭化材がややまとまった状態で検出された(図Ⅲ-124・125)。炭化材は盛土西側と東側にそれぞれまとまりが認められる。西側に比べ東側の炭化材は少量である。盛土西側の炭化材の分布は中央付近がやや密で、周辺部はほとんど認められない。炭化材は細長いものが多い、南北方向と東西方向を向くものが多い。また、他の遺構で出土した炭化材よりも堅く締まったものが多い。盛土東側の炭化材の分布は北と南の2カ所が認められる。炭化材は小形で細長いものが多い。炭化材は図化後、遺存状況の良いものに関して36点のサンプルを採取し、北海道浅井学園大学教授三野紀雄氏に樹種同定を依頼した。その結果、コナラ属コナラ亜属コナラ節12点(33.3%)、トネリコ属11点(30.6%)、シナノキ属4点(11.1%)、ハンノキ属2点(5.8%)、クルミ属1点(2.8%)、ヤナギ属1点(2.8%)、カバノキ属1点(2.8%)、ニレ属1点(2.8%)、樹種不明3点(8.3%)という結果を得た(第V章2篇参照)。検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正C14年代が3720±40BP(校正暦年代2210-2010BC)という結果を得た。

遺物

3,421点出土している。内訳はⅣ群土器11点、石鏃2点、石槍3点、石錐5点、つまみ付きナイフ4点、スクレイパー2点、Rフレイク2点、Uフレイク2点、フレイク2,467点、メノウ製原石1点、石鏃3点、砥石8点、たたき石10点、石皿・台石2点、礫899点である。フレイク、礫が大半を占める。平面分布は全体に広がっている。細かい土層が多く、遺物の層位関係が複雑なため、遺物取上げ時には便宜的に、盛土の土層を大きく2層に分けた。Ⅱ層を主体とした褐色土層を盛土1層とし、Ⅲ層を主体とした黒褐色土層を盛土2層とした。盛土2層の遺物がほとんどである。接合関係は砥石と礫で認められた。砥石は盛土1層1点、盛土2層2点が接合している。また、盛土2層出土の礫とJM-2出土の礫が接合している。東側の盛土中から、フレイク集中が3カ所(FC-1～3)検出された。FC-1は約0.8mの範囲から175点、FC-2は約1mの範囲から546点、FC-3は約0.6mの範囲から1280点出土している。

1はⅣ群土器の口縁部片である。口縁部は肥厚帯がめぐり、肥厚帯直下には無文部が作り出されている。また、無文部には刺突が施され、さらに垂下して太い沈線が施される。地文はRL斜縄文で、口唇部にもRLの縄文が施される。

2・3はメノウ製、4・5は黒曜石製の石鏃である。2・3は角柱状の素材を利用し、4は機能部側縁が摩滅する。6～8はつまみ付きナイフ、9はスクレイパーである。2・3以外はすべて黒曜石製である。

10・11は砂岩製の石鏃で、いずれも6mm程の薄い機能部がみられる。10には炭化物が付着し、11は熱を受け、やや赤みがかかる。12は砂岩製の砥石で先が尖った対象物による、線状痕、敲打痕が残る。13は板状の砂岩製の砥石で、三つに分かれて出土した。上部の二つはすり面が一致する。14～21はたたき石で、14～17は長軸端部が刃状に加工され、石斧同様の使用が推測される。22は台石である。

時期 盛土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JM-6 (図Ⅲ-129～130、図版99・100)

位置 C-38～40、D-39・40、E-40

規模 (11.66) × (3.90) / (0.38)m

JM-6

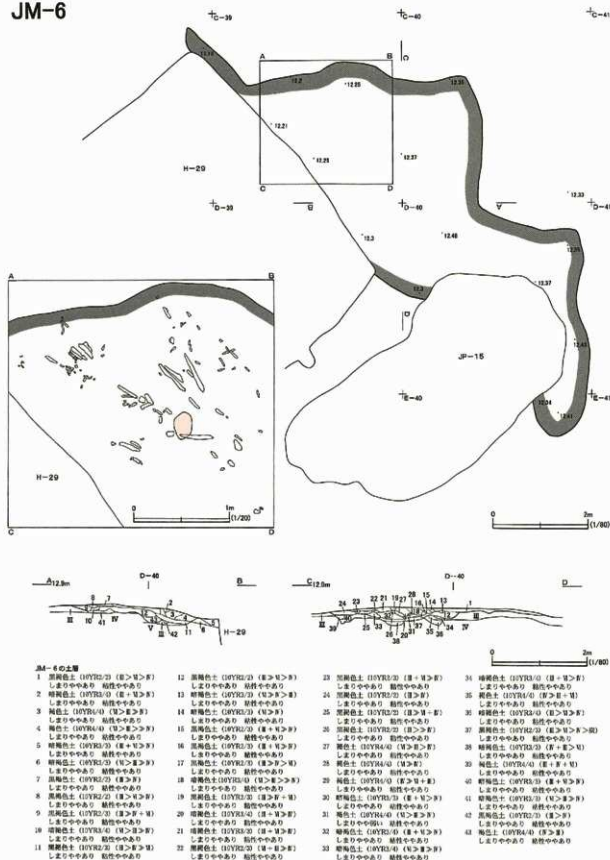


図 III-129 JM-6 平面図と土層、炭化材出土状況図

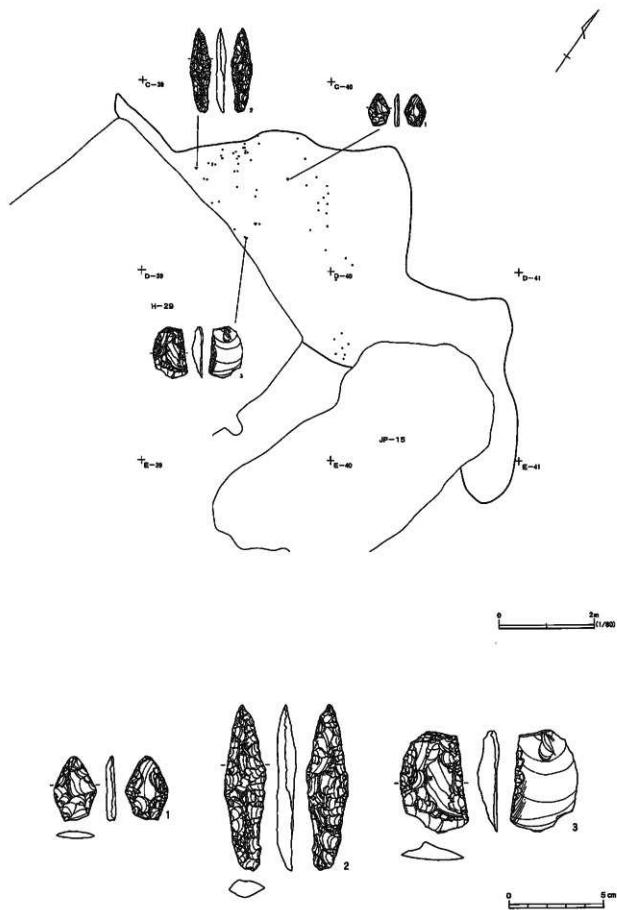


圖 III-130 JM-6 遺物分布圖、遺物

調 査

台地南東側、標高約12mの平坦面に位置する。南西側を縄文時代の住居跡であるH-29に、南東側をJP-15に一部壊されている。平面形は不整形で、6カ所の発掘区に及ぶ。長軸方向はほぼ南北である。H-26周辺のⅢ層上面の精査を行ったところ、Ⅲ層中に暗黄褐色土の広がり面的に検出された。暗黄褐色土の範囲を把握するために、発掘区のCライン、40ラインに沿ってトレンチを設定し掘り下げた。その結果、縄文時代の盛土であることが判明した。盛土の調査は範囲確認後、平面図作成を行い、調査区のライン沿いに土層観察用ベルトを設定し掘り下げる方法をとった。盛土を掘り下げたところ、中位から焼土と炭化物粒が検出され、基底面付近では炭化材がややまとまって出土した。北西側はJP-15に接する。北側約3mにJP-5、北西側約3mにJP-7、南西側約2mにJM-3がある。JM-6とJM-3の間はH-29により壊されている。また、JP-15の覆土内にJM-6の盛土の流れ込みが認められないため、JM-6はJP-15と同時に、それ以前の遺構と考えられる。

土 層

盛土構築面はⅢ層～Ⅳ層中、一部はⅤ層中で、構築面にはやや凹凸がある。全体的に盛土は薄い。基底面の凹凸のある部分は土が厚く盛られ、盛土上面はほぼ平坦である。土層はⅢ層を主体とする黒褐色、暗褐色土と、Ⅳ・Ⅴ層を主体とする暗褐色、褐色土に大きく分かれる。量的にはⅢ層を主体とする黒褐色土が多く、褐色土は少ない。全体的に小さな土層がブロック状に折り重なって堆積している。

炭化物・炭化材出土状況

盛土中位～構築面にかけて焼土と炭化物が検出された。盛土中位では焼土と炭化物粒が面的に広がり、その下の構築面及びその直上では炭化材が検出された。炭化材は構築面の東側でややまとまって検出されている。炭化材は小形で細長いものが多く、ほとんどが東西方向を向く。炭化材は図化後、遺存状況の良いものに関して10点のサンプルを採取し、北海道浅井学園大学教授三野紀雄氏に樹種同定を依頼した。その結果、カエデ属3点(30%)、トネリコ属2点(20%)、樹種不明5点(50%)という結果を得た(第Ⅴ章2篇参照)。検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行なったところ、補正C14年代が 3790 ± 40 BP(校正暦年代2330-2130、2080-2060BC)という結果を得た。

遺 物

156点出土している。内訳は石鏃1点、石槍2点、スクレイパー1点、Uフレイク1点、フレイク113点、メノウ製原石1点、砥石4点、たたき石6点、礫32点である。フレイク、礫が大半を占める。平面分布は盛土西側が多い。細かい土層が多いため、遺物取り上げ時は便宜的に、盛土の土層を大きく2層に分けた。Ⅳ層を主体とした褐色土層を盛土1層とし、Ⅲ層を主体とした黒褐色土層を盛土2層とした。遺物は全て盛土2層出土である。

1は形態から石鏃としたが、未成品である。2は石槍、3はスクレイパーで、すべて黒曜石製である。

時 期 周辺の遺構の時期、周辺包含層出土の遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(広田)

JM-7 (図Ⅲ-131、図版101)

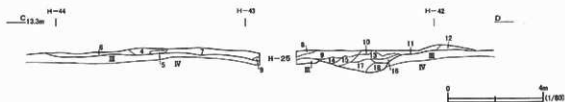
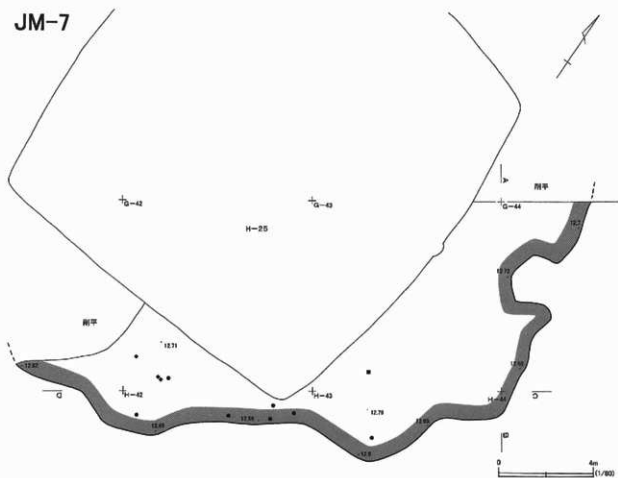
位 置 G-41~44、H-41~44

規 模 (12.64) × (3.88) / (0.46)m

調 査

台地南東側、標高約12mの平坦面に位置する。北西側の一部を縄文時代の住居跡であるH-25に

JM-7



JM-7の土層

- 1 灰褐色土 (10YR2/2) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 2 暗褐色土 (10YR3/2) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 4 灰褐色土 (10YR2/2) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 5 灰褐色土 (10YR2/3) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 6 暗褐色土 (10YR3/2) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 7 灰褐色土 (10YR2/3) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 8 褐色土 (10YR3/1) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 9 暗褐色土 (10YR3/4) (黒>黄+赤)>黄
しまりややあり 粘粒ややあり

- 10 灰褐色土 (10YR2/3) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 11 褐色土 (10YR3/4) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 12 暗褐色土 (10YR3/3) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 13 暗褐色土 (10YR3/4) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 14 灰褐色土 (10YR2/3) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 15 灰褐色土 (10YR2/2) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 16 暗褐色土 (10YR3/2) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 17 暗褐色土 (10YR3/4) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり
- 18 暗褐色土 (10YR2/3) (黒>黄+赤)
しまりややあり 粘粒ややあり

図Ⅲ-131 JM-7平面図と土層

壊され、さらに北西側は削って削平した。確認できた平面形は不整形で、その広がりには6ヵ所の発掘区に及ぶ。Ⅲ層上面の精査を行ったところ、H-25の南東側で、Ⅲ層中に暗黄褐色土の広がりが面的に検出された。暗黄褐色土の範囲を把握するために、発掘区のHライン、44ラインに沿ってトレンチを設定し掘り下げた。その結果、縄文時代の盛土であることが判明した。盛土の調査は範囲確認後、平面図作成を行い、調査区のライン沿いに土層観察用ベルトを設定し掘り下げる方法をとった。南西側約1mにJP-12、北東側約3mにJP-13、南西側約2mにはJH-5がある。

土 層

盛土構築面はⅢ層～Ⅳ層中で、やや凹凸がある。全体的に盛土は薄いが、構築面の凹凸のある部分は土が厚く盛られ、盛土上面はほぼ平坦に作られている。土層はⅢ層を主体とする黒褐色、暗褐色土と、Ⅳ・Ⅴ層を主体とする褐色、暗褐色土に大きく分かれる。土量的にはⅢ層を主体とする黒褐色土が多く、褐色土はわずかである。深い部分は小さな土層がブロック状に折り重なって、厚く堆積している。

遺 物

Ⅳ群土器1点、フレイク3点、礫7点の計11点である。平面分布は盛土南西側が多い。便宜上、Ⅳ層を主体とした褐色土層を1層とし、Ⅲ層を主体とした黒褐色土層を盛土2層とした。遺物は盛土1層から礫が1点出土し、他は全て盛土2層出土である。

時 期 盛土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田 良成)

JM-8 (図Ⅲ-132、図版102)

位 置 H-39・40、J-39～42、K-41・42

規 模 (12.50) × (9.10) / (0.18)m

調 査

台地南東側、標高約11mの平坦面～緩斜面にかけて位置する。盛土範囲の平面形は東西に長い不整形で、JH-5・6・7にかけて広がっている。広がりには9ヵ所の発掘区に及ぶ。JH-6・7周辺のⅢ層上面の精査を行ったところ、Ⅲ層中に褐色土の広がりが面的に検出された。盛土の調査は範囲確認後、平面図作成を行い、調査区のKライン、42ライン沿いに土層観察用ベルトを設定し掘り下げる方法をとった。北西側はJH-5、北東側はJH-6、南西部はJH-7、JM-4と接する。JH-5・6・7の覆土内にJM-8の盛土の流れ込みが認められないため、JM-8はJH-5・6・7と同時に、それ以前の遺構と考えられる。JM-4との新旧関係は不明である。

土 層

盛土構築面はⅢ層中で、斜面の地形のため南東側が低くなっている。全体的に盛土は薄く、盛土上面もほぼ斜面に沿っている。土層はⅣ層を主体とし、Ⅲ・Ⅴ層が混ざる褐色土である。

遺 物

スクレイパー2点、フレイク42点、砥石2点の計46点出土している。平面分布は北側に散漫に認められる。層位は全て盛土1層出土である。

1・2は黒曜石製のスクレイパーで、1は非常に厚い刃部を持つ。3は砂岩製の砥石で、縁がV字となる部分があり、石鏝の可能性が高い。

時 期 周辺の遺構の時期、周辺包含層出土の遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(広田)

JM-8

†K-38

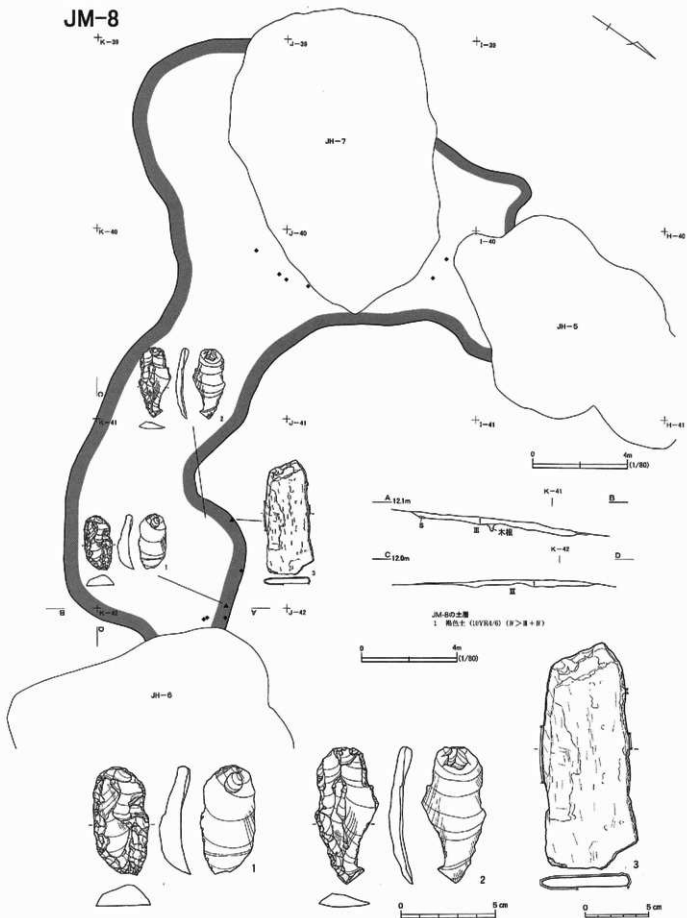
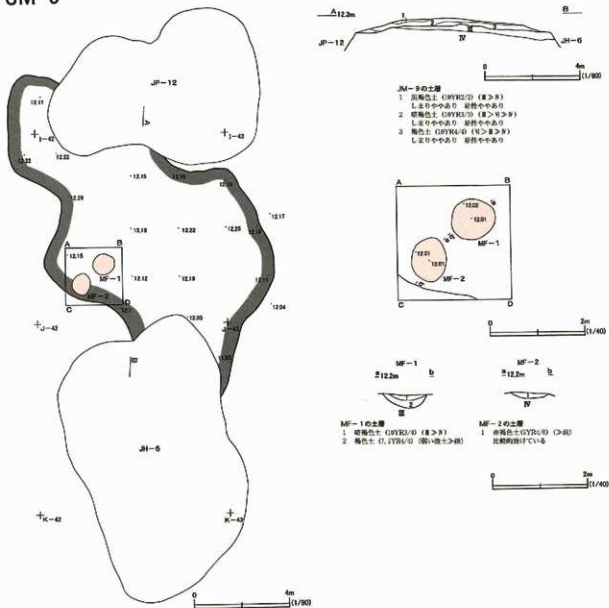


図 III-132 JM-8 平面図と土層、遺物

JM-9



図Ⅲ-133 JM-9平面図と土層、MF

JM-9 (図Ⅲ-133・134、図版103)

位置 H-41・42、I-42・43、J-42・43

規模 7.20×4.00/(0.14)m

調査

台地南東側、標高約12mの平坦部～緩斜面にかけて位置する。盛土範囲の平面形は東西に長い不整形で、JH-6とJP-12の間にかけて広がり、9ヵ所の発掘区に及ぶ。JH-6、JP-12周辺のⅢ層上面の精査を行ったところ、Ⅲ層中で褐色土と暗褐色土の広がりが面的に検出された。盛土の調査は範囲確認後、平面図の作成を行い、土層観察用ベルトを設定し掘り下げる方法をとった。北東側はJP-12、南西側はJH-6接する。JH-6、JP-12の覆土内にJM-9の盛土の流れ込みが認められないため、JM-9はJH-6、JP-12と同時か、それ以前の遺構と考えられる。

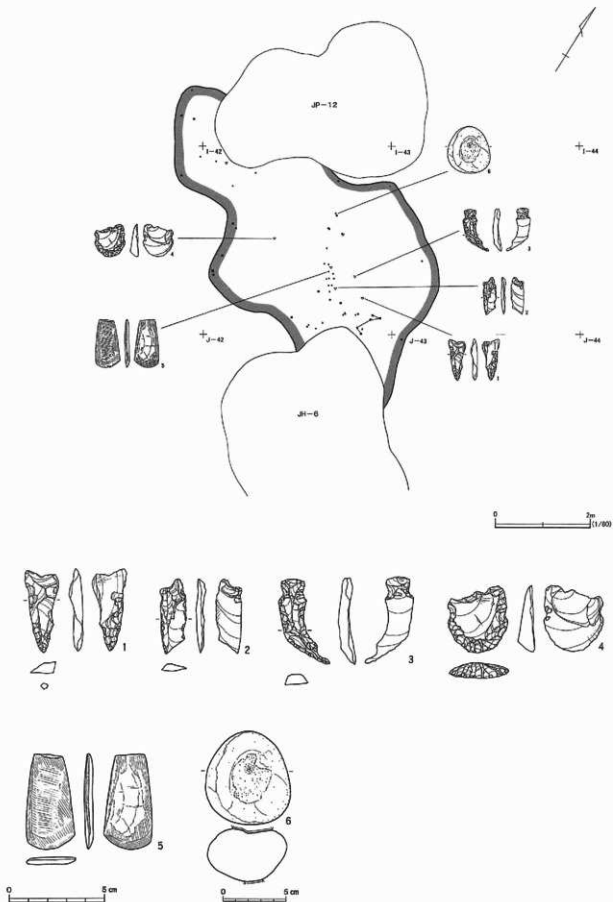


圖 III-134 JM-9 遺物分布圖、遺物

JM-10

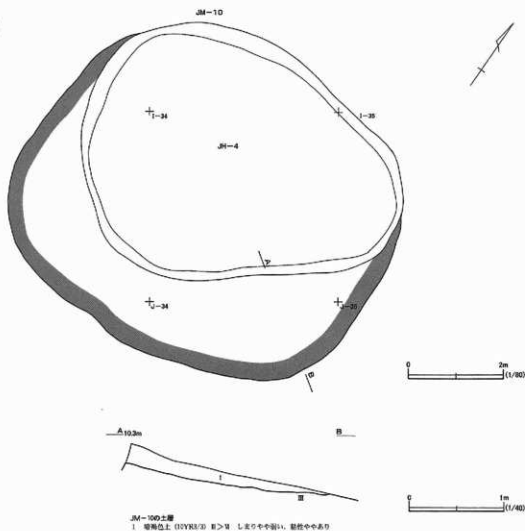


図 III-135 JM-10平面図と土層

土層

構築面はⅢ層中～Ⅳ層上面で、盛土は全体的に薄い。土層はⅢ層を主体とする黒褐色、暗褐色土、Ⅳ層を主体とする褐色土が薄く広がる土層である。

付属遺構

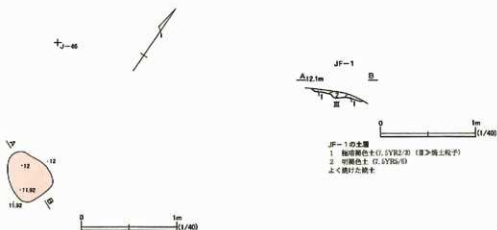
盛土構築面南側で焼土が2ヵ所(MF-1・2)検出された。平面形はMF-1が不整の円形で、MF-2はほぼ楕円形である。いずれもよく焼けており、焼土下部は漸移的である。焼土及び周辺からは炭化物が検出された。

遺物

Ⅳ群土器39点、石槍1点、石錐1点、つまみ付きナイフ2点、スクレイパー1点、Rフレイク1点、Uフレイク1点、フレイク24点、石斧等1点、砥石17点、たたき石1点、石皿・台石1点、礫10点の計100点出土している。平面分布は全体に散漫に広がっている。層位は盛土2層出土がほとんどで、フレイク1点と礫1点が盛土1層から出土している。

1は石錐で先端部は摩滅し、機能部側縁は潰れる。2・3はつまみ付きナイフで、3は先端部が細く加工される。4はラウンドスクレイパーで、1～4は黒曜石製である。5は粘板岩製の石斧、6は

JF-1



図Ⅲ-136 JF-1 平面図と土層

凝灰岩製のたたき石で炭化物が付着する。

時期 盛土出土の遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

(広田)

JM-10 (図Ⅲ-135)

位置 H-33, I-33, 34, 35, J-33, 34, 35

規模 7.8×(3.66)／0.2m

調査

標高約10mの南緩斜面に所在する。JH-4調査中に南側にⅥ層主体の土層がみられたため盛土として取り扱った。

形態・土層

Ⅵ層を主体とする。JH-4の南側に形成される。

遺物 フレイク1点。

時期 縄文時代後期前葉と考えられる。JH-4の掘り揚げ土の可能性ある。

(愛場)

(4) 焼土

JF-1 (図Ⅲ-136, 図版104)

位置 J-45

規模 0.57×0.43／0.07m

調査

Ⅲ層の調査を行っていたところ、J-45区付近で赤褐色の焼土を検出した。周辺の精査を行ったが掘り込みなどは検出できなかった。周辺には北西側にJP-17、東側にJP-18がある。

形態

平面形は不整の楕円形である。比較的よく焼けている焼土で、下部の焼け方はやや漸的である。

時期 検出層位及び周辺包含層の出土の遺物から縄文時代と考えられる。

(広田)

第Ⅳ章 包含層の遺物

1 土器 (図Ⅳ-1~3、図版10-2・3、11)

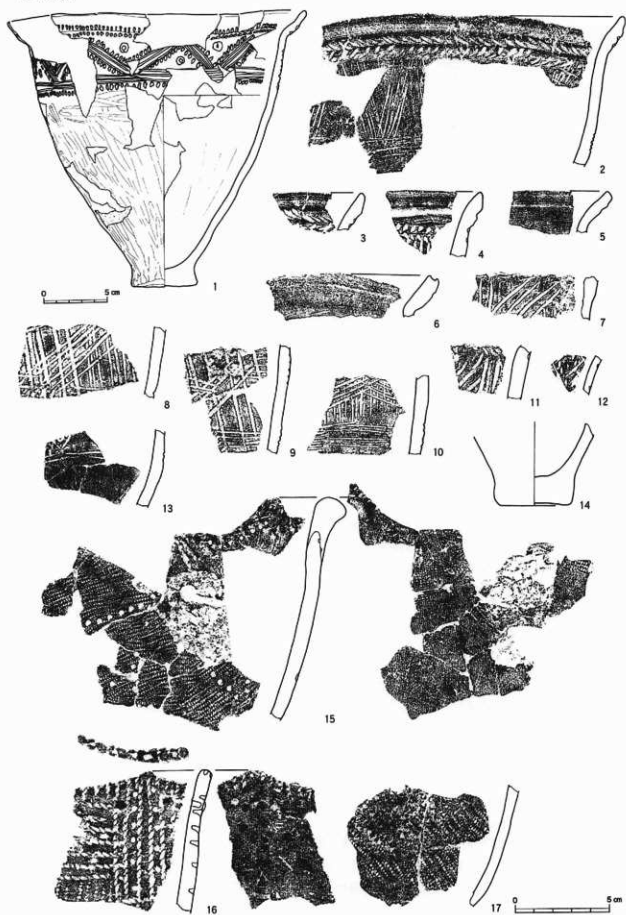
今年度の調査では包含層から土器が1,604点出土している。内訳はⅡ群土器725点、Ⅲ群土器54点、Ⅳ群土器825点である。Ⅱ群・Ⅲ群土器は主にⅡ層から、Ⅳ群土器は主にⅢ層から出土している。

Ⅱ群土器は擦文土器で、器種はいずれも深鉢である。時期は全て擦文時代後期後半で、今回検出した擦文時代の遺構と同時期と考えられる。平面分布は擦文時代の遺構の分布とほぼ重なる。包含層出土のⅡ群土器は全体的に小片が多く、まとまった出土状況はあまり検出されなかったが、Ⅰ-36区近辺からややまとまって出土した(図Ⅳ-1-1)。ただし、土器片の大部分はⅠ層出土である。Ⅰ-43、Ⅱ-46区周辺でもややまとまって出土したが、土器は小片である。Ⅲ群土器は縄文時代の土器で、台地平坦部と斜面から少量出土している。今回の調査では縄文時代の遺構は検出していない。Ⅳ群土器は縄文時代後期前葉の土器群で、今回検出した縄文時代の遺構と同時期と考えられる。平面分布は縄文時代の遺構の分布とほぼ重なる。Ⅰ-43区のⅢ層中からややまとまって出土した(図Ⅳ-2-1)。他にはⅡ-3区周辺でややまとまって出土している。

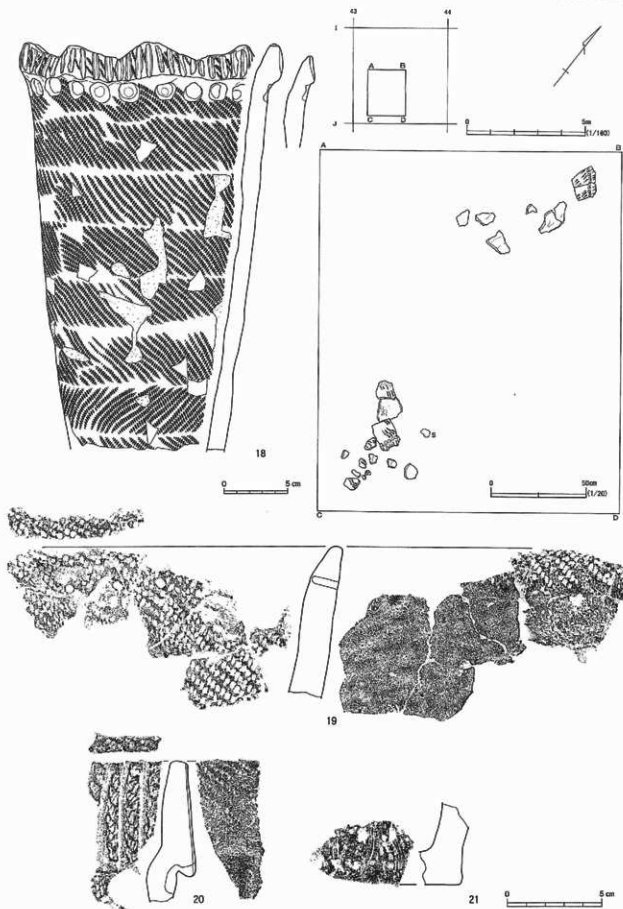
1~14はⅡ群土器。1は復元土器で、包含層出土のもので唯一復元できた。口縁部はやや外反し、胴部~底部にかけて大きくすぼまる器形で、底部はやや張り出す。口縁部~胴上半部の文様帯は上端2段、下端1段の横位の列点により区画される。文様帯内には3本単位の斜位の沈線により山形文様が描き出され、下部には3本単位の横位の沈線が施される。文様内には円形の押圧が加えられる。2は口縁~胴上半部である。口縁部はやや外反し、胴部は緩やかに屈曲する。文様帯上端は2段の短刻線が羽状に施され、下端は3~4本単位の横位の沈線で区画される。文様帯内は斜位の沈線により山形の文様が描き出される。3~6は口縁部。3は2段の短刻線が羽状に施される。4は太い沈線が横走し、その下には2段の刺突列と縦位の沈線が施される。5・6は無文である。7~13は胴部で、いずれも沈線が施されている。6・8・9は同一個体で、口縁端がわずかに内湾し、胴部には縦位の沈線と斜位の沈線で文様が描かれ、下位には横走沈線が施される。7はハケ目をわずかに残す。10は縦位の沈線を地とし斜位の沈線が加えられている。下位には4~6本単位の横走沈線が施される。11は上部に短刻線が施され、下部に縦位と斜位の沈線が施文される。12・13はⅡ-29出土の土器(図Ⅲ-44-1・2)と同一個体である。斜格子状に沈線が施され、沈線沿いには小さな列点加えられる。文様帯下端は2~3本単位の横走沈線で区画される。14は底部。小形で、外面は丁寧な縦位のミガキで調整される。

15~17はⅢ群土器の深鉢である。15は下田の沢Ⅱ式土器でⅡ-23出土のもの(図Ⅲ-20-1)と同一個体である。16は興津式土器である。口縁部端の内外面に縄の押圧が加えられ、口縁部には突瘤文が施文される。外面には縦位と横位の縄線文が施文され、口唇部と縄線文間には細く深い刺突が施される。17は胴部でRLの斜縄文がやや粗く施される。

18~21はⅣ群土器で水筒式土器である。18は口縁~胴部で下部は二次焼成のため、脆くなっている。口縁部に幅の狭い肥厚帯をめぐらし、その上に突起が配される。肥厚帯直下には浅い円形刺突が横環する。地文はRLの斜縄文で肥厚帯上には縦位の沈線が施される。19は口縁~胴部で地文はRLの斜縄文である。口唇部と口縁内面上部にもRLの斜縄文が施される。口縁部には細く深い円形刺突が横環する。胎土は繊維と砂粒を含む。20は口縁部で、口唇部、肥厚帯上、口縁内面上部にRLの斜縄文

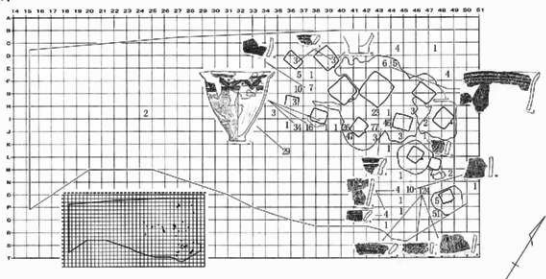


図Ⅳ-1 包含層の土器(1)

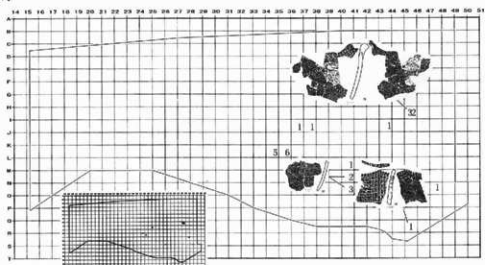


図IV-2 包含層の土器(2)

VII群



VI群



IV群

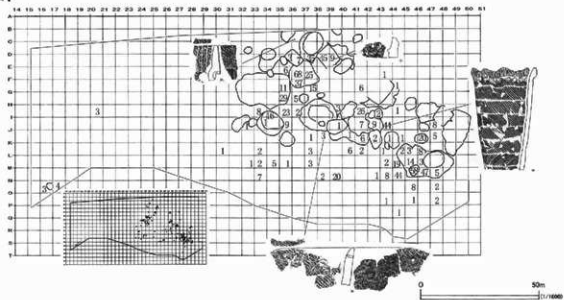


圖 IV-3 土器分布圖

が施される。肥厚帯には横位の押引文が加えられ、肥厚帯直下には円形刺突がみられる。21は底部で、外面には縦位の浅い沈線が施される。焼成はやや不良である。181は水筒Ⅱ式トコロ6類、20は水筒Ⅱ式トコロ5類である。
(広田)

2 石器等 (図Ⅳ-4~7、図版121~122)

石器は18,885点出土した。遺構出土が14,810点、包含層出土が4,072点である。そのうち礫が遺構、包含層合せて10,328点、フレイクが7,710点である。

縄文時代の石器として確実なものは竪穴から出土した棒状礫、袖石などと、砥石の一部である。また統縄文初頭にみられるナイフ状石器が1点出土している。それ以外は縄文時代後期初頭の石器で、石鏃、石槍、石錐、スクレイパー、石鋸、砥石が目立って出土している。

剥片石器については石質の記載のないものはすべて黒曜石製である。

石鏃 (1~3)

遺構から25点、包含層から20点出土している。破片以外ほぼ図示した。4cm未満で薄いものを石鏃とし、4cm以上を石槍とした。有茎のものが多い。

1・2は有茎、3は無茎である。1は下部が尖端部となる可能性がある。

石槍 (4~15)

遺構から29点、包含層から15点出土している。両面加工で尖端部が作出され、4cm以上のものを石槍としている。

4~6はひし形を呈する。7~13は「かえし」がある、いわゆる石銛状のもの。14・15は8cmを超える比較的大型のものである。

ナイフ状石器 (16)

統縄文初頭にみられるような柄をもつナイフ状石器が1点出土している。

石錐 (17・18)

遺構から8点、包含層から2点出土している。遺構では小型のメノウ製錐がJM-4・5で出土した。メノウの角柱状フレイクや原石、フレイクチップがJH-2・7・JM-4・5・6・JP-15でまとまてみられた。

17は機能部の他、下から $\frac{2}{3}$ 程の側縁、稜線に摩滅がみられる。

つまみ付きナイフ (19~24)

遺構から16点、包含層から4点出土している。中央に稜をもつ縦長剥片を素材とし、つまみ部「ノッチ」が不明瞭のものが多い。

20は頁岩製である。

スクレイパー (25~32)

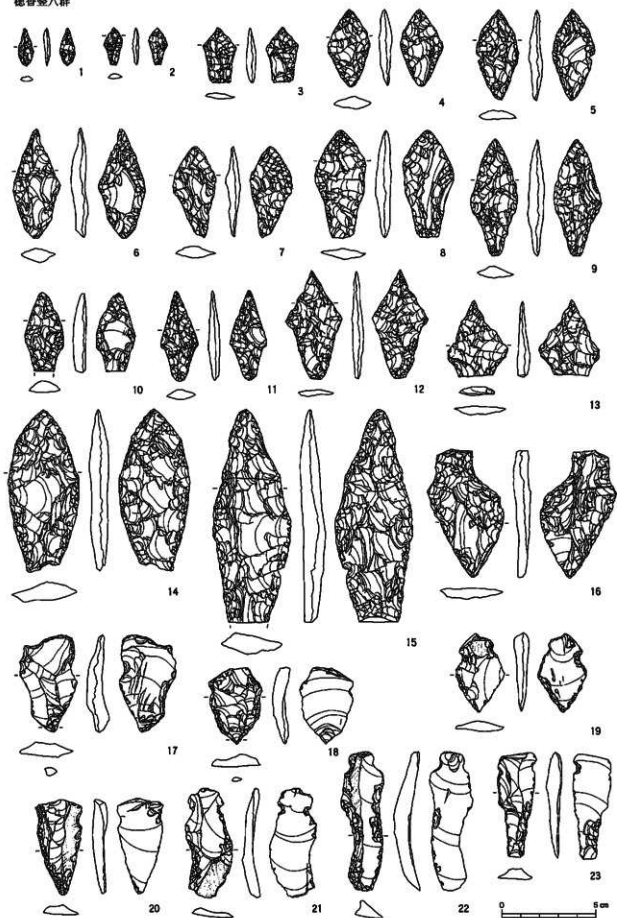
遺構から46点、包含層から15点出土している。縦長剥片の側縁に簡易な加工が施されるもの、内湾する刃部をもつもの、急角度のラウンドする刃部をもつものが特徴的にみられる。

25~27・31・32は側縁に刃部をもつ。28~30はラウンドスクレイパー。29は明確な刃部はない。

31・32は縦長の石刃状の素材が利用される。V層出土で、縄文時代早期のものと考えられる。

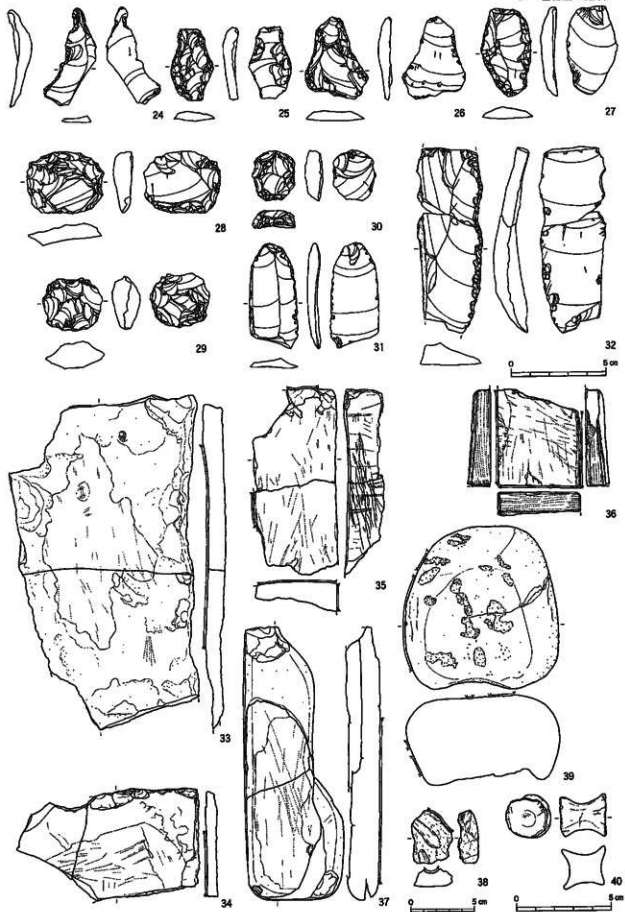
砥石 (33~38)

遺構から141点、包含層から19点出土している。遺構からは四面砥石が数点出土している。板状の砂岩、泥岩製の砥石が多い。



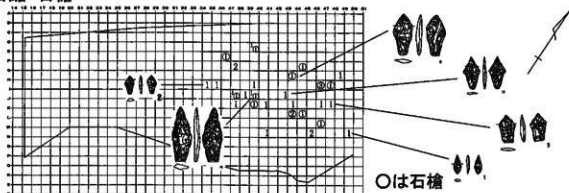
図Ⅳ-4 包含層の石器(1)

IV 包含層の遺物

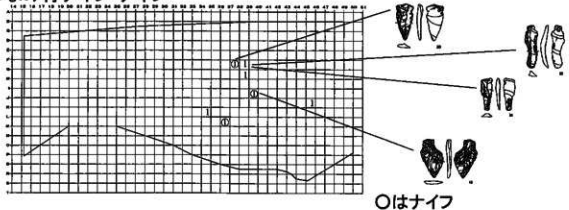


図IV-5 包含層の石器(2)

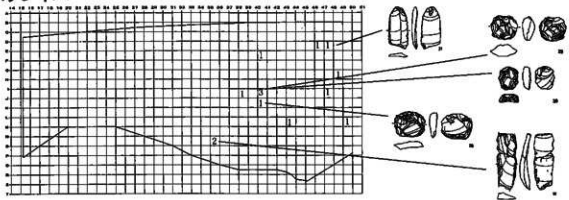
石鏃・石槍



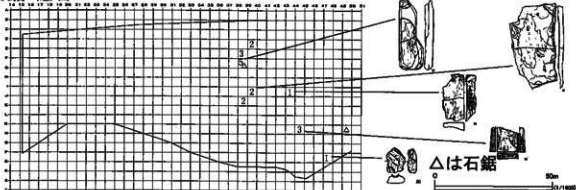
つまみ付ナイフ・ナイフ



スクレイパー

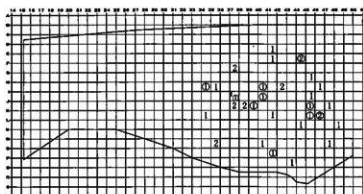


石鏃・砥石



図Ⅳ-6 石器分布図(1)

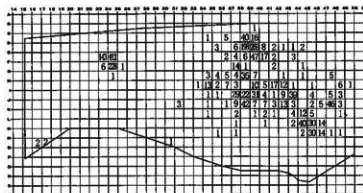
Rフレイク・Uフレイク



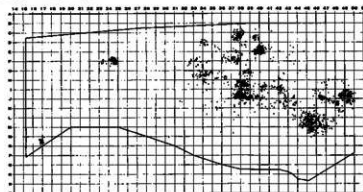
IV 包含層の遺物



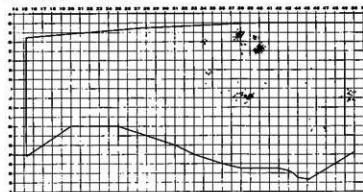
フレイク



フレイク(遺構・包含層)



メノウフレイク(遺構・包含層)



図IV-7 石器分布図(2)

33・34・36は泥岩製で、33は熱を受け、煤が付着する。36は正面、側縁に非常に平滑なすり面があり、縄文時代以降の遺物の可能性がある。37は砂岩製で、7点の破片が接合している。38は凝灰角礫岩製で、3ヵ所に溝状のすり痕がみられる。溝の幅は8mm程である。

石類

包含層からは破片2点のみで図示していない。遺構からの出土が顕著で、焼失住居であるJH-1・2・10、盛土においてみられる。板状の砂岩が主に利用され、厚さは0.6～10mm程で、側縁のほか片面平坦部にまで、すり痕を残すものが多い。

台石(39)

台石・石皿は遺構から215点、包含層から3点出土している。遺構では砂岩製石皿の破片により数が増えている。

39は黄褐色と緑色が混じる色調で、表面は固い。石質は不明である。

土製品(40)

石製品は有孔礫が縄文時代の竪穴から4点、包含層から1点出土している。土製品は包含層から土製の耳飾りが1点のみ出土している。

40は土製耳飾りで、爪あとがみられ、胎土は均質できめ細かい。北筒式土器の胎土とは異なり、この時期のものではない可能性が高い。

第V章 自然科学的分析等

1 放射性炭素年代測定結果

(株) 地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

- 14C age (y BP)** : 14C 年代 "measured radiocarbon age"
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期はリビーの5568年を用いた。
- 校正14C age (y BP)** : 校正 14C 年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の 13C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。
- δ 13C (permil)** : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)_{\text{試料}} - (13C/12C)_{\text{標準}}}{(13C/12C)_{\text{標準}}} \times 1000$$

ここで、13C/12C[標準] = 0.0112372である。

- 暦年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14Cの測定、サンゴのU-Th年代と14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon data, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低温度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
Extended Counting : Radiometricによる測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

表3 放射性炭素年代測定試料一覧

試料番号	試料種類	測定法	採取過程	採取位置	重量(g)	備考	C14年代	補正C14年代	校正暦年代(95%)
HNO2-1	炭化物(材)	AMS	H-19	聖穴住居カマド・伊内出土	1.2	フローテーション試料	890±/±40	880±/±40	1030-1250 AD
HNO2-2	炭化物(材)	AMS	H-20	聖穴住居床面伊内出土	0.9	フローテーション試料	950±/±40	930±/±40	1020-1200 AD
HNO2-3	炭化物(材)	AMS	H-21	聖穴住居カマド・伊内出土	1.2	フローテーション試料	940±/±40	900±/±40	1030-1230 AD
HNO2-4	炭化物(材)	AMS	H-22	聖穴住居床面伊内出土	0.8	フローテーション試料	1030±/±40	1010±/±40	980-1050,1100-1140 AD
HNO2-5	炭化物(材)	AMS	H-23	聖穴住居床面伊内出土	0.8	フローテーション試料	910±/±40	920±/±40	1020-1210 AD
HNO2-6	炭化物(材)	AMS	H-24	聖穴住居カマド・伊内出土	1.2	フローテーション試料	960±/±40	950±/±40	1010-1180 AD
HNO2-7	炭化物(材)	AMS	H-25	聖穴住居カマド・伊内出土	1.1	フローテーション試料	930±/±40	900±/±40	1030-1230 AD
HNO2-8	炭化物(材)	AMS	H-26	聖穴住居カマド・伊内出土	1.1	フローテーション試料	850±/±40	950±/±40	1010-1180 AD
HNO2-9	炭化物(材)	AMS	H-27	聖穴住居カマド・伊内出土	0.8	フローテーション試料	900±/±40	890±/±40	1030-1240 AD
HNO2-10	炭化物(材)	AMS	H-28	聖穴住居床面伊内出土	0.8	フローテーション試料	870±/±40	880±/±40	1030-1250 AD
HNO2-11	炭化物(材)	AMS	H-29	聖穴住居床面伊内出土	0.8	フローテーション試料	980±/±40	950±/±40	1010-1180 AD
HNO2-12	炭化物(材)	AMS	H-30	聖穴住居床面伊内出土	0.5	フローテーション試料	3760±/±40	3720±/±40	2210-2010 BC
HNO2-13	炭化物(材)	AMS	H-31	聖穴住居床面伊内出土	0.4	フローテーション試料	930±/±40	920±/±40	1020-1210 AD
HNO2-14	炭化物(材)	AMS	JH-1	聖穴住居(焼失)床面出土	1.1		3800±/±40	3800±/±40	2340-2130 BC
HNO2-15	炭化物(材)	AMS	JH-2	聖穴住居(焼失)床面出土	1.1		3840±/±40	3800±/±40	2340-2130 BC
HNO2-16	炭化物(材)	AMS	JH-4	聖穴住居(焼失)床面出土	0.9		3870±/±40	3880±/±40	2340-2130 BC
HNO2-17	炭化物(材)	AMS	JH-6	聖穴住居床面出土	0.7		3850±/±40	3830±/±40	2460-2200 BC
HNO2-18	炭化物(材)	AMS	JM-3	竈土底面出土	1.0		3830±/±40	3800±/±40	2330-2210 BC
HNO2-19	炭化物(材)	AMS	JM-5	竈土底面出土	1.1		3720±/±40	3720±/±40	2210-2010 BC
HNO2-20	炭化物(材)	AMS	JM-6	竈土底面出土	1.0		3840±/±40	3790±/±40	2330-2130,2080-2060 BC

C14年代測定結果

財団法人北海道埋蔵文化財センター 様 No.1092

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	δ 13C(permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 174495	890 ± 40	-25.4	880 ± 40
試料名 (21701) HNO2-1			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 174496	950 ± 40	-26.4	930 ± 40
試料名 (21702) HNO2-2			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 174497	940 ± 40	-27.2	900 ± 40
試料名 (21703) HNO2-3			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

(株)地球科学研究所 〒468 名古屋市長白区植田本町1-606 TEL052-802-0703

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}C$ (permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 174498	1030 \pm 40	-26.2	1010 \pm 40
試料名 (21704) HNO2-4			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174499	910 \pm 40	-24.4	920 \pm 40
試料名 (21705) HNO2-5			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174500	960 \pm 40	-25.9	950 \pm 40
試料名 (21706) HNO2-6			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174501	930 \pm 40	-27.0	900 \pm 40
試料名 (21707) HNO2-7			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174502	950 \pm 40	-25.3	950 \pm 40
試料名 (21708) HNO2-8			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174503	900 \pm 40	-25.6	890 \pm 40
試料名 (21709) HNO2-9			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

(株)地球科学研究所 〒468 名古屋市天白区植田本町1-608 TEL052-802-0703

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}C$ (permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 174504	870 \pm 40	-24.4	880 \pm 40
試料名 (21710) HNO2-10			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174505	960 \pm 40	-25.4	950 \pm 40
試料名 (21711) HNO2-11			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174506	3760 \pm 40	-27.7	3720 \pm 40
試料名 (21712) HNO2-12			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174507	930 \pm 40	-25.6	920 \pm 40
試料名 (21713) HNO2-13			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174508	3800 \pm 40	-25.3	3800 \pm 40
試料名 (21714) HNO2-14			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174509	3840 \pm 40	-27.2	3800 \pm 40
試料名 (21715) HNO2-15			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。			
(株)地球科学研究所 〒468 名古屋市中白区植田本町1-608 TEL052-802-0703			

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	δ 13C(permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 174510	3870 \pm 40	-25.8	3860 \pm 40
試料名 (21716) HNO2-16			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174511	3850 \pm 40	-26.1	3830 \pm 40
試料名 (21717) HNO2-17			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174512	3830 \pm 40	-27.0	3800 \pm 40
試料名 (21718) HNO2-18			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174513	3720 \pm 40	-25.0	3720 \pm 40
試料名 (21719) HNO2-19			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	
Beta- 174514	3840 \pm 40	-28.3	3790 \pm 40
試料名 (21720) HNO2-20			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material	acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビークの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

(株)地球科学研究所 〒468 名古屋市天白区植田本町1-608 TEL052-802-0703

2 堅穴住居址から出土した炭化材の樹種同定

三野 紀雄 (北海道浅井学園大学)

昨年に引き続いて、根室市穂香堅穴群の縄文文化中期後葉から後期前葉の堅穴住居址及び盛土遺構から出土した住居材料について樹種の同定を行った。

1. 試料

試料は縄文時代の焼失家屋である第1住居址、第2住居址、第10住居址から出土した住居の炭化した建造材料、さらに盛土遺構のそれぞれから出土した炭化した木材である。樹種同定を行った試料点数は JH-1 住居址が72点、JH-2 住居址が102点、JH-10住居址が11点、盛土 JM-3 からの2点、同 JM-5 からの36点、同 JM-6 からの10点である。なお、それぞれ1本の炭化木材から一片の木片を採取し検鏡試料としている。

2. 方法

十分に乾燥した試料を3片に分割し、それぞれ木口面、板目面、柀目面を安全剃刀で調整し、試料台にドータイト D-550 で接着し、オート・ファイン・コーター (JEOL JFC-1600) で金をコーティングした後に、走査電子顕微鏡 (JEOL JSM-5400) を用い加速電圧15kVの下で木材組織を観察し樹種同定を行った。樹種同定にあたっては記載文献と現世の木材組織標本を参照した^{1) 2) 3) 4)}。

3. 樹種同定の結果

各堅穴住居址及び盛土から出土した炭化木材の樹種同定結果を第1表に、またそれぞれの住居址、盛土における炭化木材の樹種構成については第2表に示している。JH-1 住居址の炭化材72点のうちハンノキ属が17点、クルミ属が11点、ヤナギ属が8点、トネリコ属とコナラ属コナラ亜属コナラ節がそれぞれ3点、カバノキ属が2点、樹種不明が28点、JH-2 住居址の102点のうちトネリコ属とコナラ節がともに19点、ハンノキ属14点、ヤナギ属が10点、ニレ属が4点、クルミ属が3点、樹種不明が31点、JH-10住居址の11点のうちクルミ属が6点、コナラ節とニレ属がともに1点、樹種不明が3点である。

また、盛土 JM-3 の2点の炭化材はともにコナラ節、同 JM-5 の36点のうちコナラ節が12点、トネリコ属が11点、シナノキ属が4点、ハンノキ属が2点、ヤナギ属、クルミ属、ニレ属、カバノキ属がそれぞれ1点、樹種不明が3点、同 JM-6 の10点のうちカエデ属が3点、トネリコ属が2点、樹種不明が5点である。

(樹種の特徴)

ヤナギ属 *Salix* sp.: 散孔材、導管は小型で散在状に分布する。年輪の最内部に導管が断続的にあるいはかなり長く円弧状に連なって配列している。導管の形は円形からやや多角形、単穿孔。放射組織は単列で異性。

ハンノキ属 *Alnus* sp.: 散孔材、導管はほぼ平等に分布する。2~3個が半径方向に連なって放射複合環孔を呈する。導管は階段穿孔。小型で円形の対列壁孔が見られる。放射組織は同性で単列。また集合放射組織がみられる。今回の検鏡試料は小さいために、集合放射組織があるものとならないものがみられる。

トネリコ属 *Fraxinus* sp.: 環孔材、孔圏内の導管の配列は1ないし多列、孔圏外では疎らに散在し2個融合することが多い、導管は単穿孔、射出線は同性で、1ないし2列あるいは3列。

クルミ属 *Juglans* sp.: 放射孔材、導管はやや大形で放射方向に配列し2ないし3個集合する、導管の大きさは春材から夏材へと緩やかに減じる、導管は単穿孔、射出線は1ないし2ないし3列。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* sp.: 環孔材、孔圏部の幅が広く1ないし数列、孔圏外で急に導管の大きさを減じる、孔圏部の大導管は円形あるいは楕円形で大体単独、孔圏外の小導管は単独あるいは2~3個集まって半径方向に火炎状に配列する。大導管、小導管ともに単穿孔。放射組織は同性、単列、また典型的な広放射組織をもつ。

カバノキ属 *Betula* sp.: 散孔材、導管は数個集合し放射方向に配列する、導管は階段穿孔、射出線は同性、1列ないし2列ないし3列。

シナノキ属 *Tilia* sp.: 散孔材、導管は放射方向に2ないし数個集合し複合管孔を呈する、導管の大きさは春材から夏材へとゆっくり減じる、導管は単穿孔、導管壁に傾斜角のゆるい螺旋肥厚が見られる。放射組織は同性で、細胞列は1列から3~4列。

ニレ属 *Ulmus* sp.: 環孔材、孔圏部の幅が広く1ないし2ないし3列、孔圏外で急に導管の大きさを減じる、孔圏部の大導管は円形あるいは楕円形で、単独。孔圏外の小導管は複数集まって接線状に配列する。道管は単穿孔、小導管には螺旋肥厚がある。放射組織は同性、単列あるいは多列。

カエデ属 *Acer* sp.: 散孔材、導管は2個あるいは3個集合し放射方向に配列し、その大きさは春材から夏材へ向かって緩やかに減じる。導管は単穿孔で細い螺旋肥厚をもつ。射出線は同性で1列ないし多列。

4. 考察

北海道の縄文文化における竪穴住居の建造に用いられる樹木の違いを地域的にみると、次のとおり大きく4地域に区分される。主としてクリ材を用いる渡島半島東部地域、トネリコ材を用いる日本海沿岸地域、コナラ属コナラ亜属コナラ節材を用いる太平洋沿岸地域、針葉樹材あるいはコナラ節材を用いるオホーツク海沿岸地域である^{5) 6) 7)}。

穂香竪穴群の縄文文化に属する竪穴住居では、住居の建造にはヤナギ属やハンノキ属、トネリコ属、ニレ属など河畔や河畔沿いのやや湿った沖積地に生育する樹木と、クルミ属、カエデ属、カバノキ属、シナノキ属、コナラ節などといった段丘斜面や段丘上に生育する樹木とが混用されている。JH-2住居ではハンノキ属、トネリコ属、コナラ節の樹木が、またJH-1及ではハンノキ属が、JH-10住居ではクルミ属の樹木がそれぞれ多用されている。使用される樹種の差異は竪穴住居の建造場所や建造時期の違いによって生じであろうと予想される。しかし、本遺跡では竪穴住居が建造された時期の前後の関係が明らかでないこと、またそれらが段丘上に近接して建造されていることなどから、何によって使用樹木の種類に差異が生じたのかは判然としない。ただ、本遺跡の縄文文化のJH-2住居と檜文文化のH-10住居ではともにハンノキ属とコナラ節が多用され⁸⁾、それらの樹木に加えてJH-2住居ではさらにトネリコ属が、H-10住居ではモミ属の樹木が加わる。これらのことは、河畔の適潤林や段丘斜面や段丘上の二次林的要素をもつ林には変化のみられなかったことを示しているのかもしれない。ただ、使い勝手のよいトネリコ属の樹木がしだいに減少したことと、縄文文化中期以降の気候の寒冷化にともなってトドマツの分布域が拡大したことを示しているのかもしれない。

盛土からは、JM-3とJM-5ではトネリコ属とコナラ節の、またJM-6ではトネリコ属とカエデ属の樹木の炭化材が多数検出されるが、盛土と住居址との関係や盛土の新旧関係が明らかではないため、それらの使用樹種がもつ意味についても同様に不明である。

謝 辞

本遺跡の出土木質遺物の樹種同定の機会を与えてくださった北海道埋蔵文化財センター第1調査部第3調査課の皆様感謝申し上げます。また、炭化木材の樹種同定にあたって、検鏡試料の作成のお手伝いをいただいた浅井学園大学4年生の工藤祐美子、清水裕子、山下梨の3氏に感謝いたします。

文 献

- 1) 林 弥一 1957 「本邦における針葉樹材のカード式識別法」『林業試験場研究報告 第98号』国立林業試験場編
- 2) 須藤彰司 1959 「本邦広葉樹材の識別」『林業試験場報告 第118号』国立林業試験場編
- 3) 佐伯 浩 1982 『走査電子顕微鏡図説 木材の構造』日本林業技術協会
- 4) 島地 謙、伊東隆夫 1992 『図説 木材組織』地球社
- 5) 三野紀雄 2000b 「先史時代における木材利用(3)」『北海道開拓記念館研究紀要第28号』北海道開拓記念館編
- 6) 三野紀雄 2000c 「先史時代における木材利用(4) - 針葉樹材について -」『「北の文化交流史研究事業」研究報告』北海道開拓記念館編
- 7) 三野紀雄 2001 「先史時代における木材利用(5) - クリ材について -」『北海道開拓記念館研究紀要第29号』北海道開拓記念館編
- 8) 三野紀雄 2002 「竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定」北理調報170『根室市穂香竪穴群(1)』(北海道埋蔵文化財センター編)

JH-10

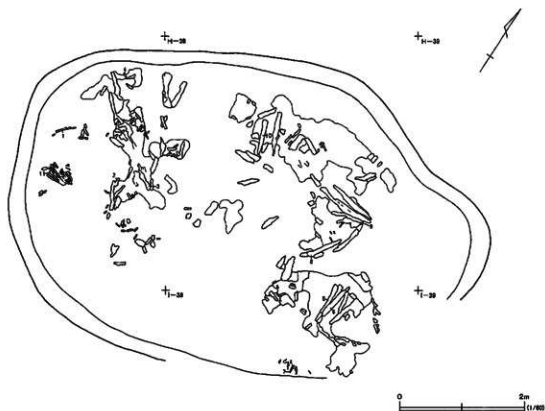


図 V-1 JH-10炭化材出土状況図

表 4 JH-10の炭化木材の樹種同定結果

No	樹 種	No	樹 種
1	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	7	広葉樹環孔材 (試料 4 と同じ)
2	ニレ属 <i>Ulmus</i> sp.	8	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?
3	ルミ属 <i>Juglans</i> sp.	9	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
4	広葉樹環孔材	10	樹種不明 (樹皮)
5	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	11	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?
6	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.		



JH-1

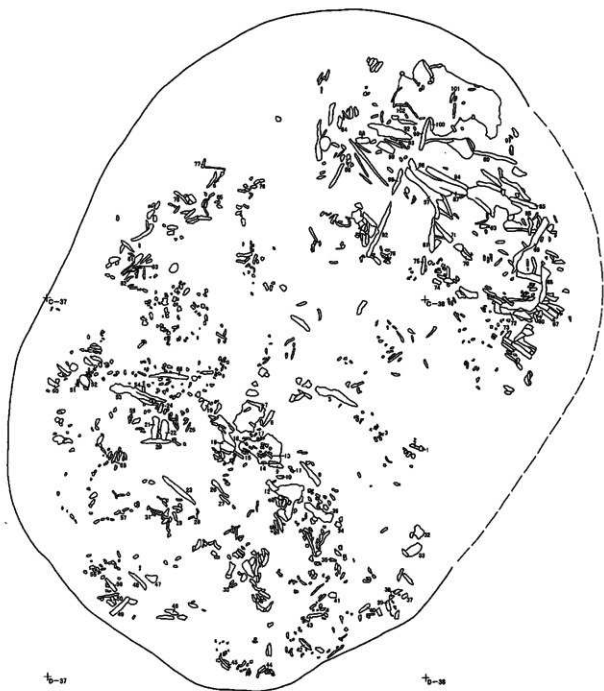
図V-2 JH-1炭化材出土状況図 (68~71は中央付近の炭化材集中部の下にあるため図示していない)

表5 JH-1出土の炭化木材の樹種同定結果

No	樹種	No	樹種
1	試料微細のため検鏡不能	37	試料微細のため検鏡不能
2	試料微細のため検鏡不能	38	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
3	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	39	試料微細のため検鏡不能
4	試料微細のため検鏡不能	40	試料微細のため検鏡不能
5	試料微細のため検鏡不能	41	試料微細のため検鏡不能
6	試料微細のため検鏡不能	42	試料微細のため検鏡不能
7	試料微細のため検鏡不能	43	試料微細のため検鏡不能
8	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	44	試料微細のため検鏡不能
9	試料微細のため検鏡不能	45	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
10	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	46	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
11	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	47	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.
12	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	48	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
13	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	49	試料微細のため検鏡不能
14	試料微細のため検鏡不能	50	試料微細のため検鏡不能
15	試料微細のため検鏡不能	51	カバノキ属 <i>Betula</i> sp.
16	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	52	カバノキ属 <i>Betula</i> sp.
17	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	53	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
18	試料微細のため検鏡不能	54	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
19	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	55	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
20	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	56	試料微細のため検鏡不能
21	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	57	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
22	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	58	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
23	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?	59	試料微細のため検鏡不能
24	試料微細のため検鏡不能	60	試料微細のため検鏡不能
25	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	61	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
26	広葉樹散孔材	62	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
27	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	63	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
28	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	64	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
29	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	65	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
30	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	66	試料微細のため検鏡不能
31	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	67	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
32	試料微細のため検鏡不能	68	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.
33	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	69	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
34	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	70	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.
35	試料微細のため検鏡不能	71	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.
36	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	72	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.

7-21
JH-2

7-22

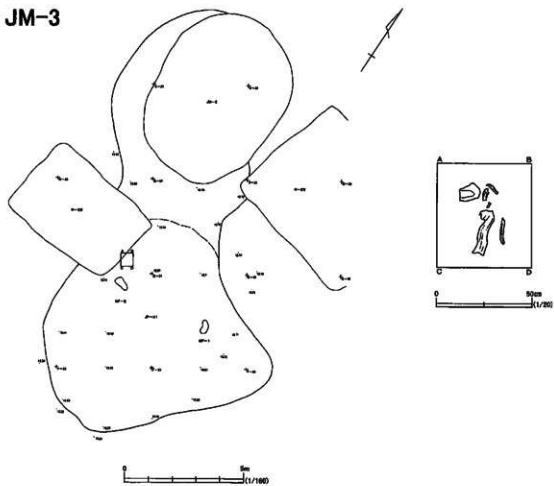


圖V-3 JH-2炭化材出土狀況圖

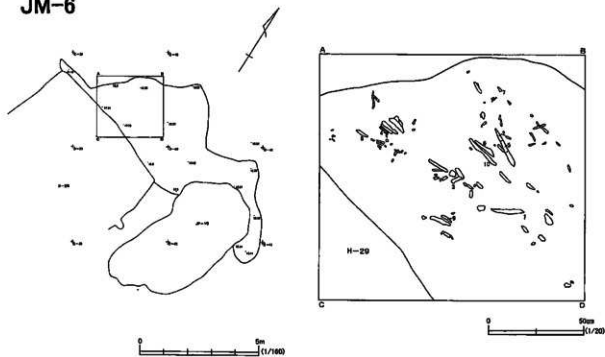
表6 JH-2の炭化木材の樹種同定結果

No	樹種	No	樹種
1	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	52	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
2	試料微細のため検鏡不能	53	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
3	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	54	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
4	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	55	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
5	広葉樹環孔材	56	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
6	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	57	試料微細のため検鏡不能
7	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	58	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
8	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	59	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
9	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp. ?	60	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
10	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp. ?	61	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
11	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	62	試料微細のため検鏡不能
12	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	63	広葉樹環孔材
13	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	64	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?
14	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	65	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
15	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	66	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
16	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	67	試料微細のため検鏡不能
17	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	68	クルミ属 <i>Juglans</i> sp. ?
18	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	69	ニレ属 <i>Ulmus</i> sp.
19	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	70	試料微細のため検鏡不能
20	試料微細のため検鏡不能	71	試料微細のため検鏡不能
21	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	72	試料微細のため検鏡不能
22	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	73	試料微細のため検鏡不能
23	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	74	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
24	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.	75	カエデ属 <i>Acer</i> sp.
25	試料微細のため検鏡不能	76	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
26	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	77	ニレ属 <i>Ulmus</i> sp.
27	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	78	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
28	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	79	試料微細のため検鏡不能
29	試料微細のため検鏡不能	80	試料微細のため検鏡不能
30	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	81	試料微細のため検鏡不能
31	試料微細のため検鏡不能	82	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
32	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	83	試料微細のため検鏡不能
33	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	84	試料微細のため検鏡不能
34	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	85	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
35	試料微細のため検鏡不能	86	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
36	試料微細のため検鏡不能	87	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
37	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	88	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
38	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	89	ラ節 <i>Quercus</i> sp.
39	試料微細のため検鏡不能	90	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
40	試料微細のため検鏡不能	91	試料微細のため検鏡不能
41	試料微細のため検鏡不能	92	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
42	試料微細のため検鏡不能	93	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
43	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	94	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
44	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	95	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.
45	試料微細のため検鏡不能	96	ニレ属 <i>Ulmus</i> sp.
46	ニレ属 <i>Ulmus</i> sp.	97	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
47	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	98	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
48	試料微細のため検鏡不能	99	試料微細のため検鏡不能
49	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	100	試料微細のため検鏡不能
50	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.	101	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
51	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	102	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.

JM-3



JM-6



図V-4 JM-3・6炭化材出土状況図

表7 JM-3の炭化木材の樹種同定結果

No.	樹種	No.	樹種
1	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	2	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.

表8 JM-5の炭化木材の樹種同定結果

No.	樹種	No.	樹種
1	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	19	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
2	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	20	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
3	クルミ属 <i>Juglans</i> sp.	21	カバノキ属 <i>Betula</i> sp.
4	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	22	シナノキ属 <i>Tilia</i> sp.
5	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	23	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
6	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	24	シナノキ属 <i>Tilia</i> sp.
7	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	25	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
8	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	26	ヤナギ属 <i>Salix</i> sp.
9	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	27	シナノキ属 <i>Tilia</i> sp.
10	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	28	ニレ属 <i>Ulmus</i> sp.
11	試料微細のため検鏡不能	29	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
12	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	30	シナノキ属 <i>Tilia</i> sp.
13	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	31	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.
14	試料微細のため検鏡不能	32	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
15	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	33	ハンノキ属 <i>Alnus</i> sp.
16	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	34	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
17	コナラ節 <i>Quercus</i> sp.	35	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
18	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	36	試料微細のため検鏡不能

表9 JM-6の炭化木材の樹種同定結果

No.	樹種	No.	樹種
1	広葉樹散孔材	6	カエデ属 <i>Acer</i> sp.
2	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.	7	広葉樹散孔材 (試料1と同じ)
3	カエデ属 <i>Acer</i> sp.	8	トネリコ属 <i>Fraxinus</i> sp.
4	カエデ属 <i>Acer</i> sp.	9	広葉樹散孔材 (試料1と同じ)
5	試料微細のため検鏡不能	10	試料微細のため検鏡不能

表10 炭化木材の樹種構成

<第1住居址 JH-1>

ヤナギ属	ハンノキ属	トネリコ属	クルミ属	コナラ節	ニレ属	カバノキ属	不明	計
8	17	3	11	3		2	28	72
11.1%	23.6%	4.2%	15.3%	4.2%		2.8%	38.9%	

<第2住居址 JH-2>

ヤナギ属	ハンノキ属	トネリコ属	クルミ属	コナラ節	ニレ属	カバノキ属	不明	計
10	14	19	3	19	4		31	102
9.8%	13.7%	18.6%	3.0%	18.6%	3.9%		30.4%	

<第10住居址 JH-10>

ヤナギ属	ハンノキ属	トネリコ属	クルミ属	コナラ節	ニレ属	カバノキ属	不明	計
			6	1	1		3	11
			54.5%	8.1%	9.1%		27.3%	

<第3盛土 JM-3>

ヤナギ属	ハンノキ属	トネリコ属	クルミ属	コナラ節	ニレ属	カバノキ属	不明	計
				2				2
					100%			

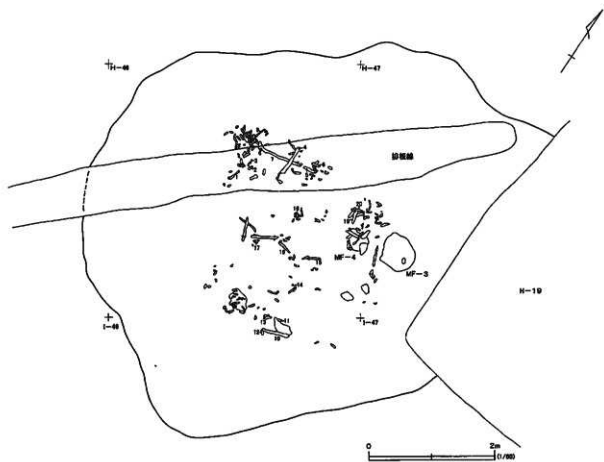
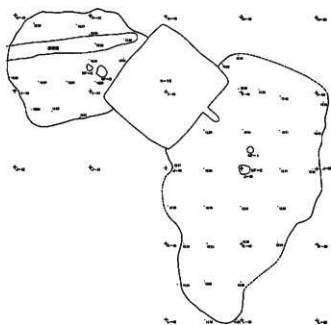
<第5盛土 JM-5>

ヤナギ属	ハンノキ属	トネリコ属	クルミ属	コナラ節	ニレ属	カバノキ属	シナノキ属	不明	計
1	2	11	1	12	1	1	4	3	36
2.8%	5.6%	30.6%	2.8%	33.3%	2.8%	2.8%	11.1%	8.3%	

<第6盛土 JM-6>

ヤナギ属	ハンノキ属	トネリコ属	クルミ属	コナラ節	ニレ属	カバノキ属	カエデ属	不明	計
		2					3	5	10
		20%					30%	50%	

JM-5



図V-5 JM-5炭化材出土状況図①

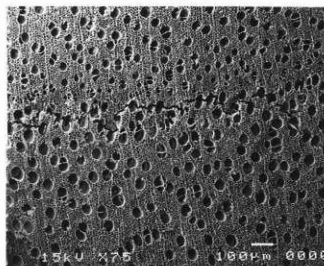
JM-5



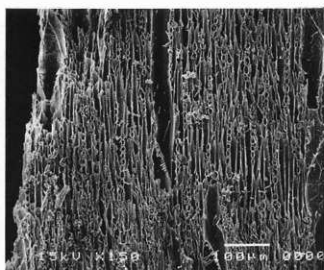
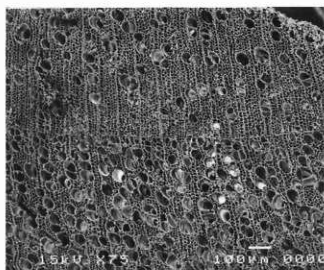
图 V-6 JM-5 炭化材出土状况图②

木口面

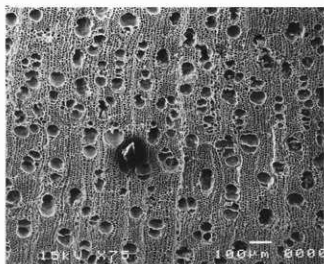
板目面



ヤナギ属 *Salix* sp. (JM-5、試料 No25)



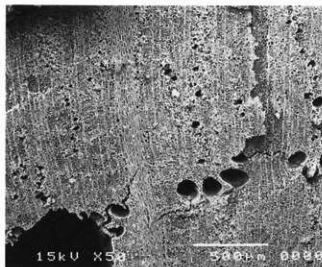
ハンノキ属 *Alnus* sp. (JM-5、試料 No32)



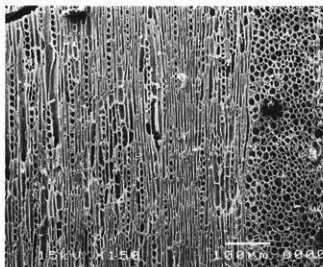
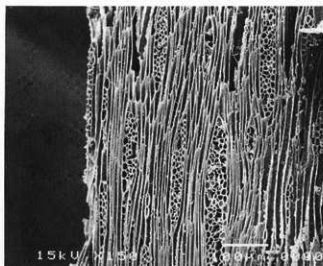
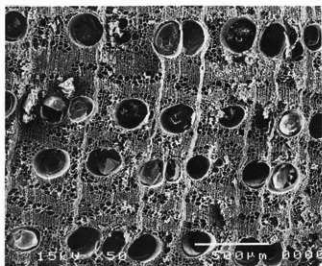
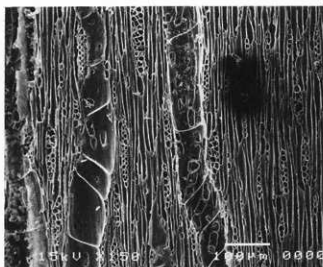
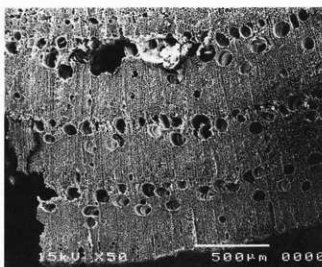
カバノキ属 *Betula* sp. (JM-5 試料 No21)

写真図版 1 炭化木材の組織 (1)

木口面



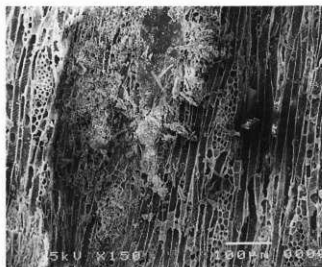
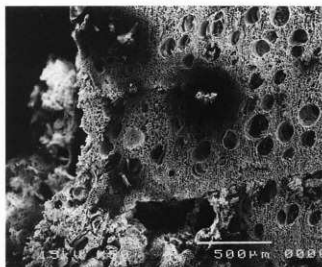
板目面

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* sp. (JM-5、試料 No.4)ニレ属 *Ulmus* sp. (JM-5、試料 No.28)トネリコ属 *Fraxinus* sp. (JM-5、試料 No.10)

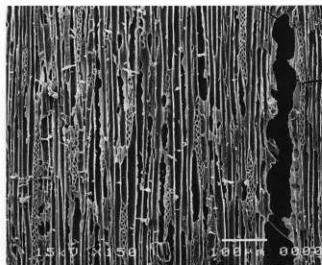
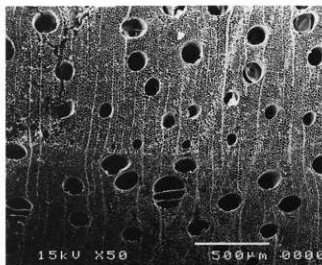
写真図版 2 炭化木材の組織 (2)

木口面

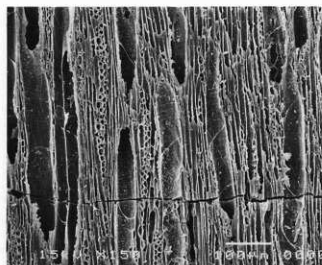
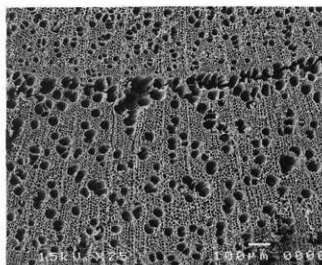
板目面



カエデ属 *Acer sp.* (JM-6、試料 No3)



クルミ属 *Juglans sp.* (JM-10、試料 No6)



シナノキ属 *Tilia sp.* (JM-5、試料 No30)

写真図版3 炭化木材の組織(3)

3 穂香堅穴群出土の黒曜石製石器の原材産地分析

藤科 哲男 (京都大学原子炉実験所)

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている^{1) 2) 3)}。石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成が一致すれば必要条件を満たし、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、他の露頭から原石が流れて来ないことが証明されて、十分条件を満たし、ただ1カ所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。遺物の産地分析では『遺物とある産地の原石組成が一致する必要はあるが、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、その産地のものと言いきれない。従って、他の産地に一致しない証明も同時に必要である。一致しなかった産地との交流がなかったと証明され、考古学資料として非常に有用と思われる』。考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調合素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にすると産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満足しても、原材産地と出土遺物の間に地質的関連性がないため、十分条件の移動ルートを自然の法則に従って地形学で証明できず、その石器原材がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないと証拠がないために、A産地だと言いきれない。B産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはB産地と交流がなかったと言いきれる。ここで、十分条件として、可能なかぎり地球上の全ての原産地(A、B、C、D……)の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何か所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合(マハラノビスの距離)を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数

の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある原石遺物素材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に1個みられ、B産地では1万個中に1個、C産地では100万個中に1個、D産地では…1個と各産地毎に求められるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。今回分析した遺物は根室市に位置する穂香堅穴群遺跡出土の黒曜石製剥片20個で、産地分析の結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr, Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊状試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K, Ti/K, Mn/Zr, Fe/Zr, Rb/Zr, Sr/Zr, Y/Zr, Nb/Zrの比量を産地を区別する指標をしてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成によってこれら原石を分類し表1に示す。この原石群に原石産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると225個の原石群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転搬として黒曜石が採取できる。赤石山の産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群（旧白滝第1群）にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った（旧白滝第2群）、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転搬は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢よりの転搬の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸地域産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取された原石の元素組成は置戸・所山群にまとまり、また同町の秋田林道で採取される原石は置戸山群にまとまる。留辺蘂町のケショマップ川一帯で採取される原石はケショマップ第1および第2群に分類される。また、白滝地域、ケショマップ、置戸地域産原石は、湧別川および常呂川に通じる流域にあり、両河川の流域で黒曜石の円礫が採取され、湧別川下流域から採取した黒曜石円礫247個の組成分類結果を表2に示し、中ノ島、北見大橋間の常呂川から採取した37個の円礫の中には、独特の組成の原石も見られ、新しい原石群を追加し分類結果を表3に示した。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿泊町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜

石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第1群に、また12%は名寄第2群にそれぞれなる。旭川市の近文台、台場、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第1群、69%が近文台第2群、11%が近文台第3群それぞれ分類され、台場の砂礫採取場からは近文台諸群に一致するもの以外に、黒、灰色系円礫も見られ、台場第1、2群を作った。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとなり、21%が近文台第2、3群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況とか礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第1群は滝川第1群に組成が一致し、第2群も滝川第2群に一致しさらに近文台第2群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえない原石で赤井川第1群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第1、2群の2群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。また、青森県教育庁の斉藤岳氏提供の奥尻島幌内川産黒曜石の原石群が確立されている。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸側より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鯉ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鯉ヶ坂および西津軽郡森田村鯉ヶ坂地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群を、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第2群である。戸門第1群、成田群、浪岡町県民の森地区より産出の大釈迦群(旧浪岡群)は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石織が作れる大きさがみられる程度であるが、鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石中では5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。産地分析は、日本、近隣国を含めた産地の合計225個の原石群と比較し、必要条件と十分条件を求めて遺物の原石産地を同定する。

結果と考察

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。黒曜石製の石器で、水和層の影響を考慮するとすれば、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値には多少の不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。また、安山岩製の遺物は、白っぽく表面が風化しているために、アルミナ粉末を風化面に吹き付け、新鮮面を出して分析している。今回分析した穂香堅六群遺跡出土黒曜石製遺物の分析結果を表4に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの1変量だけを考えて、表4の試料番号88214番の遺物ではRb/Zrの値は0.783で、所山群の[平均値]

土 [標準偏差値] は、 0.824 ± 0.034 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.2σ 離れている。ところで所山群原産地から100個の原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.2\sigma$ のずれより大きいものが23個ある。すなわち、この遺物が、所山群の原石から作られていたと仮定しても、 1.2σ 以上離れる確率は23%であると言える。だから、所山群の平均値から 1.2σ しか離れていないときには、この遺物が所山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を赤石山に比較すると、赤石山の平均値からの隔たりは、約 9σ である。これを確率の言葉で表現すると、赤石山の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 9σ 以上離れている確率は、十億分の1であると言える。このように、十億個に1個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、赤石山の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は所山群に23%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから所山産原石が使用されいと同定され、さらに赤石山に1千万分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから赤石山の原石でないと同定される」。遺物が1ヵ所の産地(所山産地)と一致したからと言って、例え所山群と赤石山の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(所山産地)に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の225個すべての原石群について行ない十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて所山産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一つの変量だけでなく、前述した8つの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば、A原産地のA群でCa元素とRb元素との間に相関がありCaの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT₂乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{41) 5)}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では225個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち所山産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を表5に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地(確率)の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D₂乗の値を記した。この遺物については、記入されたD₂乗の値が原石群の中で最も小さなD₂乗値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えては間違いのないと

判断されたものである。今回分析した穂香壑穴群遺跡出土の黒曜石製剥片20個の中で、信頼限界の0.1%に達した遺物は19個で、分析番号88226番の黒曜石は表1の、NI29遺物群以外の224個の何処群にも同定されなかった。産地分析で産地が特定できなかった理由は、(1)遺物が異常に風化し元素組成の変化が非常に激しい場合、(2)遺物の厚さが非常に薄いとき、特に遺物の平均厚さが1.5mm以下の薄い試料では、Mn/Zr、Fe/Zrの比値が大きくなり分析され、1mm厚でFe/Zr比は約15%程度大きく分析される。しかし、1mm厚あればRb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrについては分析誤差範囲で産地分析結果への影響は小さく、Mn/Zr、Fe/Zrの影響で推定確率は低くなるが原産地の同定は可能と思われる。(3)未発見の原石を使用している場合などが考えられる。88226番の原石様剥片は厚さがあり、光沢も良く風化した様子は見られないことから、未発見の原産地の原石を使用していると判定し、この遺物の分析場所を変えて含有元素の部分変動を求めて、他の遺跡で同じ元素組成の黒曜石製遺物が使用されている場合、同定できる様にNI29遺物群と名付けて、表1の黒曜石原石・遺物群に登録した。また、所山群、置戸山群に一致する組成の原石は置戸地域の所山、置戸山地区からの角礫原石以外に北見市常呂川流域でも円礫原石が採取される。穂香壑穴群遺跡に、置戸地域産か、常呂川流域産の何れかの産地から伝播したかを推測するには、多数の遺物を分析して、各産地群に同定される頻度を求め、常呂川採取黒曜石原石の頻度分布と比較して決定される。水と層の影響を受けた黒曜石製剥片では、成分組成が似た所山群、常呂川第4群には同時に同定され、両群の何れかを区別できない。また、滝川第2群の原石は大きなもので親指大で小さな石礫しか作れず、今回分析した剥片はできない。穂香壑穴群遺跡の遺物について、常呂川流域産(表3)採取を考慮すると、分析番号88214、88218、88220番の3個は角礫の自然面をもち所山産原石と判定される。88227番は円礫で常呂川流域産と判定された。置戸山群に同定された遺物を常呂川流域産と考えて、判定された所山、常呂川第4群を採取する可能性のある個数を推測すると、表3では、置戸山群8個に対して所山群が21個であることから、比例配分すると、常呂川流域で採取される所山群は $21 \div 8 = 2.6$ 個になり、所山・常呂川と判定した10個から2.6個を引いた約7個は所山産地から伝播したと推測される。また、ケショマップ第1群は常呂川流域から確認されず、ケショマップ産地から伝播したと推測される。穂香壑穴群遺跡出土遺物の中で常呂川流域から採取された可能性の原石は約20%程度と推測した。今回分析した剥片20個について各産地別原石使用頻度を求めると、最も多く使用された原石は、所山+常呂川産で70%(14個)、次いでケショマップ産で15%(13個)で、NI29遺物群が10%(2個)、置戸山産は5%(1個)であった。遺跡で使用頻度高い原産地と交流・交易がより活発であったと推測すると、今回の分析で、所置戸地域との交流が活発で、十勝地域、白滝地域との交流がないと確認されたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。今回は剥片分析であるが、石器が伝播した場合も同じような交流になるのか、石器の分析が必要と思われる。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅱ)。考古学
と自然科学、8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産
地推定 (Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学、10、11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信 (1980)、考古学と物理化学。学生社

表11-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地原石群名	分析 標数	元素比										
		Ca/K	Th/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sm/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Sr/K	
高尾山	名神第一群	114	0.475 ± 0.011	0.131 ± 0.005	0.605 ± 0.007	0.911 ± 0.053	0.614 ± 0.033	0.574 ± 0.022	0.103 ± 0.017	0.024 ± 0.016	0.633 ± 0.030	0.414 ± 0.010
	名神第二群	35	0.369 ± 0.015	0.107 ± 0.003	0.921 ± 0.026	1.774 ± 0.053	0.538 ± 0.044	0.501 ± 0.023	0.038 ± 0.020	0.028 ± 0.017	0.636 ± 0.037	0.361 ± 0.019
	奥石山	130	0.173 ± 0.014	0.061 ± 0.003	0.679 ± 0.013	2.714 ± 0.142	1.340 ± 0.050	0.383 ± 0.013	0.341 ± 0.030	0.073 ± 0.020	0.026 ± 0.020	0.374 ± 0.010
	赤石山	27	0.138 ± 0.004	0.027 ± 0.002	0.180 ± 0.011	0.949 ± 0.181	0.853 ± 0.083	0.897 ± 0.018	0.483 ± 0.029	0.187 ± 0.019	0.027 ± 0.023	0.388 ± 0.005
	八戸沢	6	0.138 ± 0.018	0.023 ± 0.002	0.180 ± 0.017	1.123 ± 0.127	1.848 ± 0.053	0.105 ± 0.013	0.475 ± 0.048	0.078 ± 0.040	0.027 ± 0.028	0.399 ± 0.042
	鶴巻沢	23	0.139 ± 0.009	0.025 ± 0.001	0.098 ± 0.015	0.975 ± 0.192	1.794 ± 0.077	0.156 ± 0.010	0.475 ± 0.027	0.183 ± 0.027	0.027 ± 0.040	0.382 ± 0.007
	あじヶ谷	29	0.143 ± 0.019	0.029 ± 0.001	0.191 ± 0.014	0.038 ± 0.151	1.797 ± 0.076	0.115 ± 0.011	0.487 ± 0.030	0.078 ± 0.044	0.027 ± 0.045	0.395 ± 0.011
	飯文野第一群	39	0.139 ± 0.013	0.026 ± 0.002	0.037 ± 0.013	1.266 ± 0.117	1.624 ± 0.031	0.941 ± 0.029	0.165 ± 0.020	0.039 ± 0.018	0.039 ± 0.041	0.457 ± 0.003
	飯文野第二群	107	0.117 ± 0.011	0.029 ± 0.005	0.267 ± 0.009	0.775 ± 0.097	1.812 ± 0.077	0.213 ± 0.034	0.197 ± 0.024	0.041 ± 0.019	0.035 ± 0.007	0.442 ± 0.020
	飯文野第三群	47	0.129 ± 0.014	0.026 ± 0.002	0.048 ± 0.011	1.748 ± 0.262	0.838 ± 0.161	0.798 ± 0.061	0.228 ± 0.043	0.032 ± 0.021	0.036 ± 0.044	0.413 ± 0.014
奥羽	1	0.616 ± 0.012	0.142 ± 0.005	0.972 ± 0.011	0.912 ± 0.117	0.911 ± 0.230	0.678 ± 0.056	0.138 ± 0.022	0.022 ± 0.017	0.517 ± 0.014	0.404 ± 0.005	0.517 ± 0.014
	2	0.610 ± 0.020	0.125 ± 0.006	0.594 ± 0.017	0.548 ± 0.183	0.759 ± 0.544	0.549 ± 0.043	0.204 ± 0.032	0.003 ± 0.016	0.018 ± 0.044	0.414 ± 0.013	
	3	0.569 ± 0.017	0.037 ± 0.002	0.078 ± 0.011	0.614 ± 0.088	0.956 ± 0.327	0.458 ± 0.023	0.358 ± 0.024	0.023 ± 0.021	0.071 ± 0.004	0.334 ± 0.013	
	4	0.519 ± 0.018	0.027 ± 0.005	0.061 ± 0.018	1.706 ± 0.125	0.814 ± 0.334	0.789 ± 0.043	0.254 ± 0.025	0.032 ± 0.016	0.037 ± 0.003	0.417 ± 0.016	
	5	0.553 ± 0.016	0.122 ± 0.008	0.077 ± 0.020	0.913 ± 0.090	0.917 ± 0.545	0.499 ± 0.235	0.233 ± 0.029	0.038 ± 0.018	0.005 ± 0.020	0.370 ± 0.025	
	6	0.684 ± 0.077	0.103 ± 0.011	0.066 ± 0.018	0.688 ± 0.294	0.828 ± 0.81	0.752 ± 0.388	0.208 ± 0.033	0.041 ± 0.019	0.038 ± 0.004	0.414 ± 0.023	
	7	0.238 ± 0.028	0.139 ± 0.005	0.945 ± 0.020	0.913 ± 0.062	0.425 ± 0.394	0.494 ± 0.220	0.179 ± 0.023	0.044 ± 0.010	0.009 ± 0.003	0.456 ± 0.019	
	8	0.346 ± 0.010	0.073 ± 0.003	0.089 ± 0.018	0.277 ± 0.063	0.879 ± 0.045	0.428 ± 0.023	0.243 ± 0.021	0.021 ± 0.029	0.035 ± 0.027	0.371 ± 0.017	
	9	0.548 ± 0.023	0.145 ± 0.007	0.407 ± 0.027	0.981 ± 0.124	1.390 ± 0.024	0.499 ± 0.220	0.120 ± 0.015	0.031 ± 0.012	0.039 ± 0.004	0.477 ± 0.019	
	10	0.399 ± 0.011	0.037 ± 0.002	0.038 ± 0.006	0.510 ± 0.059	0.972 ± 0.018	0.238 ± 0.014	0.179 ± 0.019	0.029 ± 0.015	0.028 ± 0.004	0.414 ± 0.011	
奥州	1	0.281 ± 0.017	0.109 ± 0.006	0.910 ± 0.013	0.913 ± 0.068	0.897 ± 0.441	0.445 ± 0.233	0.192 ± 0.023	0.034 ± 0.015	0.601 ± 0.023	0.382 ± 0.023	
	2	0.575 ± 0.050	0.127 ± 0.011	0.051 ± 0.011	0.558 ± 0.065	0.595 ± 0.055	0.630 ± 0.027	0.187 ± 0.027	0.071 ± 0.027	0.609 ± 0.023	0.397 ± 0.013	
	3	0.676 ± 0.011	0.145 ± 0.005	0.056 ± 0.014	0.631 ± 0.136	0.606 ± 0.030	0.712 ± 0.032	0.170 ± 0.028	0.006 ± 0.013	0.030 ± 0.013	0.393 ± 0.010	
	4	0.256 ± 0.018	0.074 ± 0.003	0.068 ± 0.018	0.281 ± 0.087	1.997 ± 0.065	0.434 ± 0.023	0.234 ± 0.023	0.064 ± 0.025	0.029 ± 0.022	0.393 ± 0.013	
	5	0.499 ± 0.020	0.144 ± 0.007	0.052 ± 0.018	0.935 ± 0.181	0.887 ± 0.081	0.797 ± 0.044	0.199 ± 0.023	0.039 ± 0.023	0.033 ± 0.023	0.442 ± 0.015	
	6	0.583 ± 0.008	0.126 ± 0.012	0.058 ± 0.019	0.038 ± 0.251	1.703 ± 0.090	0.764 ± 0.051	0.187 ± 0.028	0.038 ± 0.022	0.034 ± 0.022	0.469 ± 0.019	
	7	0.254 ± 0.029	0.129 ± 0.004	0.096 ± 0.019	0.213 ± 0.104	0.909 ± 0.020	0.429 ± 0.017	0.249 ± 0.024	0.068 ± 0.023	0.030 ± 0.023	0.466 ± 0.019	
	8	0.582 ± 0.025	0.073 ± 0.003	0.089 ± 0.018	0.277 ± 0.063	0.879 ± 0.045	0.428 ± 0.023	0.243 ± 0.021	0.021 ± 0.029	0.035 ± 0.027	0.371 ± 0.017	
	9	0.473 ± 0.019	0.079 ± 0.007	0.060 ± 0.015	1.764 ± 0.072	0.438 ± 0.027	0.497 ± 0.028	0.173 ± 0.022	0.028 ± 0.017	0.023 ± 0.022	0.469 ± 0.013	
	10	0.377 ± 0.009	0.133 ± 0.006	0.055 ± 0.008	0.723 ± 0.064	0.510 ± 0.019	0.513 ± 0.015	0.177 ± 0.016	0.007 ± 0.013	0.030 ± 0.005	0.431 ± 0.010	
関東	1	0.653 ± 0.025	0.187 ± 0.005	0.193 ± 0.032	0.534 ± 0.182	2.045 ± 0.224	1.479 ± 0.207	0.286 ± 0.068	0.055 ± 0.021	0.021 ± 0.044	0.347 ± 0.011	
	2	0.190 ± 0.015	0.075 ± 0.003	0.049 ± 0.006	0.578 ± 0.058	1.241 ± 0.048	0.318 ± 0.014	0.141 ± 0.023	0.076 ± 0.021	0.044 ± 0.005	0.488 ± 0.010	
	3	0.136 ± 0.022	0.132 ± 0.007	0.231 ± 0.019	0.268 ± 0.085	0.865 ± 0.041	1.105 ± 0.058	0.399 ± 0.038	0.179 ± 0.021	0.028 ± 0.003	0.399 ± 0.013	
	4	0.089 ± 0.008	0.097 ± 0.011	0.613 ± 0.020	0.697 ± 0.021	0.128 ± 0.008	0.805 ± 0.027	0.064 ± 0.027	0.033 ± 0.004	0.006 ± 0.022	0.379 ± 0.010	
	5	0.877 ± 0.085	0.188 ± 0.003	0.613 ± 0.002	0.791 ± 0.018	0.134 ± 0.005	0.927 ± 0.027	0.107 ± 0.005	0.034 ± 0.008	0.027 ± 0.006	0.346 ± 0.009	
	6	0.750 ± 0.024	0.089 ± 0.003	0.085 ± 0.012	0.268 ± 0.257	1.089 ± 0.025	0.521 ± 0.005	0.277 ± 0.065	0.078 ± 0.028	0.028 ± 0.020	0.363 ± 0.015	
	7	0.194 ± 0.005	0.113 ± 0.002	0.091 ± 0.023	0.691 ± 0.021	0.112 ± 0.004	0.625 ± 0.027	0.028 ± 0.027	0.033 ± 0.005	0.033 ± 0.005	0.462 ± 0.018	
	8	0.244 ± 0.027	0.122 ± 0.002	0.232 ± 0.022	0.811 ± 0.032	0.311 ± 0.032	0.811 ± 0.032	0.302 ± 0.029	0.186 ± 0.027	0.037 ± 0.022	0.465 ± 0.018	
	9	0.232 ± 0.017	0.088 ± 0.009	0.079 ± 0.023	0.548 ± 0.131	1.49 ± 0.029	0.586 ± 0.128	0.288 ± 0.077	0.045 ± 0.020	0.028 ± 0.004	0.383 ± 0.010	
	10	0.672 ± 0.479	0.267 ± 0.149	1.267 ± 0.217	0.448 ± 0.520	0.060 ± 0.221	1.708 ± 0.252	0.158 ± 0.015	0.163 ± 0.021	0.035 ± 0.042	0.383 ± 0.080	
山梨	1	0.253 ± 0.018	0.067 ± 0.008	0.077 ± 0.029	0.829 ± 0.148	1.147 ± 0.063	0.528 ± 0.087	0.288 ± 0.035	0.047 ± 0.040	0.038 ± 0.021	0.385 ± 0.011	
	2	0.505 ± 0.243	0.284 ± 0.005	0.181 ± 0.018	0.570 ± 0.336	0.668 ± 0.014	1.621 ± 0.063	0.244 ± 0.027	0.027 ± 0.014	0.124 ± 0.014	0.489 ± 0.044	
	3	0.294 ± 0.029	0.087 ± 0.004	0.230 ± 0.018	0.644 ± 0.081	1.495 ± 0.081	0.930 ± 0.043	0.287 ± 0.029	0.098 ± 0.049	0.032 ± 0.022	0.388 ± 0.020	
	4	0.736 ± 0.008	0.087 ± 0.004	0.212 ± 0.017	0.671 ± 0.077	1.629 ± 0.077	0.929 ± 0.054	0.288 ± 0.045	0.189 ± 0.034	0.028 ± 0.007	0.387 ± 0.009	
	5	0.255 ± 0.011	0.123 ± 0.007	0.182 ± 0.016	0.908 ± 0.096	0.966 ± 0.061	1.622 ± 0.071	0.278 ± 0.036	0.119 ± 0.033	0.023 ± 0.040	0.443 ± 0.014	
	6	0.286 ± 0.008	0.118 ± 0.005	0.049 ± 0.017	0.698 ± 0.054	0.885 ± 0.021	0.441 ± 0.019	0.213 ± 0.019	0.050 ± 0.015	0.033 ± 0.005	0.460 ± 0.011	
	7	0.636 ± 0.023	0.187 ± 0.012	0.262 ± 0.027	0.749 ± 0.051	0.305 ± 0.010	0.433 ± 0.021	0.229 ± 0.018	0.045 ± 0.014	0.041 ± 0.003	0.394 ± 0.014	
	8	0.389 ± 0.046	0.177 ± 0.018	0.066 ± 0.020	1.742 ± 0.072	0.314 ± 0.019	0.429 ± 0.023	0.230 ± 0.016	0.044 ± 0.012	0.041 ± 0.003	0.384 ± 0.005	
	9	2.174 ± 0.083	0.349 ± 0.017	0.857 ± 0.051	0.546 ± 0.149	0.116 ± 0.020	0.633 ± 0.024	0.138 ± 0.015	0.029 ± 0.013	0.072 ± 0.003	0.585 ± 0.040	
	10	0.183 ± 0.017	0.179 ± 0.014	0.179 ± 0.014	1.362 ± 0.150	0.188 ± 0.011	1.288 ± 0.018	0.037 ± 0.018	0.077 ± 0.002	0.020 ± 0.002	0.720 ± 0.023	
群馬	1	0.728 ± 0.027	0.220 ± 0.019	0.044 ± 0.027	0.915 ± 0.110	0.381 ± 0.025	0.585 ± 0.238	0.190 ± 0.027	0.023 ± 0.014	0.006 ± 0.022	0.516 ± 0.012	
	2	0.381 ± 0.014	0.136 ± 0.005	0.103 ± 0.011	1.729 ± 0.079	0.471 ± 0.027	0.683 ± 0.027	0.247 ± 0.021	0.039 ± 0.026	0.036 ± 0.023	0.404 ± 0.012	
	3	0.317 ± 0.016	0.120 ± 0.008	0.114 ± 0.014	1.832 ± 0.069	0.615 ± 0.029	0.639 ± 0.020	0.308 ± 0.034	0.027 ± 0.028	0.032 ± 0.027	0.471 ± 0.009	
	4	0.518 ± 0.120	0.113 ± 0.005	0.118 ± 0.014	1.868 ± 0.098	0.614 ± 0.028	0.948 ± 0.040	0.256 ± 0.029	0.033 ± 0.026	0.040 ± 0.028	0.476 ± 0.012	
	5	0.765 ± 0.264	0.219 ± 0.027	0.228 ± 0.019	0.282 ± 0.422	0.848 ± 0.021	1.797 ± 0.061	0.282 ± 0.021	0.029 ± 0.019	0.149 ± 0.058	1.235 ± 0.046	
	6	0.296 ± 0.024	0.039 ± 0.010	0.075 ± 0.027	0.913 ± 0.104	0.903 ± 0.007	0.680 ± 0.029	0.292 ± 0.011	0.011 ± 0.010	0.060 ± 0.029	1.139 ± 0.021	
	7	0.682 ± 0.021	0.058 ± 0.007	0.139 ± 0.027	0.877 ± 0.028	0.823 ± 0.029	1.164 ± 0.020	0.011 ± 0.010	0.007 ± 0.026	0.045 ± 0.008	0.584 ± 0.028	
	8	0.225 ± 0.149	0.508 ± 0.215	0.042 ± 0.009	1.228 ± 0.164	0.265 ± 0.025	0.737 ± 0.020	0.138 ± 0.013	0.027 ± 0.007	0.017 ± 0.006	0.805 ± 0.033	
	9	1.330 ± 0.079	0.294 ± 0.018	0.041 ± 0.005	0.677 ± 0.068	0.887 ± 0.029	0.851 ± 0.023	0.138 ± 0.011	0.010 ± 0.009	0.009 ± 0.004	0.816 ± 0.018	
	10	2.133 ± 0.164	0.014 ± 0.003	0.491 ± 0.044	0.899 ± 0.167	0.113 ± 0.027	0.391 ± 0.022	0.143 ± 0.027	0.009 ± 0.020	0.047 ± 0.004	0.863 ± 0.020	
栃木	1	0.110 ± 0.008	0.025 ± 0.004	0.297 ± 0.038	0.211 ± 0.319	0.829 ± 0.089	0.154 ± 0.038	0.547 ± 0.064	0.087 ± 0.037	0.005 ± 0.014	0.497 ± 0.016	
	2	0.278 ± 0.012	0.065 ± 0.003									

表11-2 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地原石群名	分析数	元素比										
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Nb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
新潟県	佐渡第一群	34	0.728±0.033	0.975±0.006	0.820±0.005	1.492±0.079	0.721±0.047	0.268±0.018	0.481±0.018	0.949±0.017	0.804±0.004	0.338±0.013
	佐渡第二群	12	0.263±0.032	0.987±0.016	0.803±0.006	1.581±0.053	0.817±0.106	0.308±0.039	0.061±0.022	0.946±0.015	0.338±0.002	0.338±0.009
	上石川	45	0.321±0.007	0.970±0.023	0.869±0.011	2.051±0.079	0.981±0.042	0.772±0.034	0.182±0.023	0.938±0.027	0.908±0.007	0.358±0.009
	1	46	0.232±0.011	0.988±0.023	0.859±0.017	2.118±0.119	1.772±0.098	0.738±0.046	0.374±0.047	0.154±0.034	0.927±0.022	0.363±0.009
	大石川	22	0.589±0.012	0.149±0.007	0.853±0.005	0.989±0.049	0.261±0.012	0.303±0.017	0.158±0.011	0.833±0.011	0.368±0.005	0.401±0.014
	金野	48	0.331±0.011	0.997±0.027	0.859±0.007	1.711±0.065	0.818±0.027	0.238±0.012	0.161±0.018	0.985±0.018	0.978±0.027	0.462±0.012
	高野川	95	0.143±0.019	0.953±0.025	0.999±0.011	1.254±0.048	1.818±0.083	0.868±0.012	0.309±0.018	0.989±0.028	0.337±0.007	0.341±0.020
	石川原	17	0.376±0.014	0.987±0.004	0.952±0.009	2.699±0.167	0.639±0.276	0.584±0.023	0.172±0.028	0.823±0.018	0.732±0.040	0.796±0.017
	安曇	21	0.497±0.007	0.603±0.006	0.938±0.006	1.437±0.041	0.643±0.043	0.675±0.038	0.133±0.020	0.811±0.018	0.332±0.002	0.456±0.015
	坂内川	31	0.356±0.018	0.123±0.006	0.926±0.006	1.941±0.081	0.682±0.031	0.739±0.029	0.469±0.050	0.602±0.013	0.728±0.007	0.801±0.008
兵庫県	香住第一群	20	0.216±0.005	0.923±0.002	0.945±0.007	1.028±0.034	0.883±0.034	0.265±0.012	0.947±0.021	0.139±0.018	0.924±0.007	0.365±0.008
	香住第二群	40	0.278±0.013	0.180±0.004	0.948±0.009	1.784±0.036	0.813±0.045	0.397±0.038	0.112±0.028	0.189±0.024	0.928±0.012	0.446±0.012
	阿波(複数群)	48	0.123±0.004	0.960±0.002	0.983±0.012	1.987±0.081	1.171±0.038	0.187±0.013	0.183±0.014	0.221±0.011	0.288±0.005	0.748±0.006
	加賀	20	0.186±0.006	0.935±0.006	0.914±0.003	0.899±0.031	0.278±0.017	0.609±0.068	0.061±0.013	0.154±0.019	0.239±0.011	0.349±0.018
	津子	20	0.161±0.009	0.923±0.182	0.915±0.003	0.949±0.041	0.201±0.014	0.125±0.006	0.162±0.013	0.144±0.009	0.039±0.002	0.448±0.008
	大石	21	0.142±0.008	0.984±0.003	0.931±0.004	0.869±0.033	0.369±0.013	0.907±0.063	0.109±0.011	0.238±0.011	0.023±0.002	0.215±0.006
	島	48	0.269±0.020	0.976±0.063	0.977±0.018	1.827±0.181	0.721±0.112	0.803±0.069	0.548±0.051	0.283±0.020	0.521±0.024	0.387±0.009
	高島第一群	81	0.302±0.077	0.141±0.010	0.923±0.008	0.136±0.176	0.638±0.055	0.358±0.083	0.028±0.026	0.865±0.019	0.041±0.024	0.207±0.011
	高島第二群	50	0.545±0.126	0.144±0.010	0.935±0.007	2.869±0.190	0.423±0.068	0.844±0.077	0.034±0.019	0.542±0.013	0.945±0.004	0.507±0.013
	越前	58	0.243±0.081	0.994±0.011	0.935±0.012	0.138±0.182	0.649±0.070	0.336±0.061	0.023±0.017	0.061±0.020	0.941±0.003	0.500±0.012
静岡県	神奈川	53	1.066±0.057	0.143±0.006	0.938±0.012	0.322±0.183	0.707±0.061	1.286±0.068	0.039±0.025	0.973±0.011	0.941±0.006	0.600±0.014
	大浜(複数群)	29	0.216±0.120	0.783±0.023	0.942±0.009	0.125±0.179	0.494±0.080	0.091±0.073	0.038±0.025	0.047±0.013	0.041±0.003	0.487±0.016
	大浜(複数群)	24	0.118±0.043	0.118±0.012	0.943±0.014	0.325±0.199	0.828±0.048	0.238±0.050	0.028±0.020	0.972±0.018	0.938±0.004	0.476±0.012
	八丈町(複数群)	58	0.161±0.010	0.912±0.007	0.933±0.003	0.738±0.027	0.328±0.013	0.283±0.015	0.107±0.009	0.034±0.008	0.045±0.006	0.279±0.013
	中野第一群	29	0.287±0.007	0.987±0.003	0.957±0.006	1.819±0.068	0.628±0.028	0.348±0.015	0.189±0.011	0.975±0.018	0.923±0.007	0.821±0.011
	中野第二群	49	0.345±0.007	0.104±0.003	0.935±0.009	0.657±0.016	0.653±0.017	0.397±0.015	0.069±0.010	0.969±0.014	0.968±0.006	0.268±0.008
	島田	29	0.637±0.014	0.922±0.006	0.971±0.013	1.739±0.025	1.948±0.062	1.302±0.028	1.084±0.020	0.389±0.017	0.928±0.002	0.945±0.009
	新島	41	0.211±0.006	0.931±0.005	0.975±0.019	2.572±0.122	1.688±0.066	0.941±0.042	0.311±0.046	0.266±0.043	0.935±0.002	0.235±0.028
	新島	59	0.414±0.009	0.971±0.003	0.911±0.017	2.947±0.142	2.532±0.081	0.715±0.091	0.247±0.035	0.255±0.040	0.938±0.007	0.388±0.009
	新島第一群	40	0.606±0.007	0.153±0.029	0.915±0.018	4.892±0.389	1.779±0.114	0.233±0.122	0.171±0.032	0.258±0.027	0.922±0.005	0.376±0.028
新島第二群	40	0.635±0.027	0.973±0.010	0.936±0.013	6.665±0.342	0.836±0.079	1.907±0.119	0.147±0.020	0.194±0.028	0.932±0.008	0.338±0.010	
新島第三群	42	0.223±0.010	0.946±0.006	0.929±0.006	6.991±0.078	0.866±0.027	0.661±0.021	0.344±0.007	0.579±0.028	0.939±0.005	0.408±0.011	
新島第四群	51	0.238±0.011	0.985±0.009	0.911±0.006	6.743±0.020	1.948±0.280	1.533±0.250	0.233±0.087	0.600±0.144	0.938±0.004	0.611±0.012	
大分県	阿蘇第一群	50	0.449±0.044	0.141±0.010	0.985±0.006	4.305±0.683	0.610±0.096	0.107±0.040	0.143±0.034	0.186±0.006	0.941±0.004	0.422±0.014
	阿蘇第二群	48	0.683±0.010	0.211±0.004	0.919±0.007	3.817±0.017	0.311±0.066	0.738±0.068	0.058±0.037	0.942±0.007	0.462±0.013	
	大分川	50	0.659±0.143	0.214±0.009	0.939±0.043	2.898±1.025	0.365±0.188	0.909±1.083	0.118±0.042	0.907±0.016	0.449±0.019	
	大分	46	0.606±0.016	0.145±0.013	0.958±0.027	4.787±0.178	0.313±0.066	1.088±0.072	0.147±0.044	0.136±0.020	0.941±0.005	0.481±0.013
	大分	30	0.312±0.023	0.927±0.009	0.965±0.010	1.489±0.124	0.590±0.061	0.686±0.082	0.175±0.018	0.102±0.020	0.928±0.027	0.312±0.009
	総合	50	0.185±0.042	0.870±0.013	0.995±0.008	5.689±0.309	0.384±0.021	0.588±0.083	0.027±0.016	0.032±0.014	0.823±0.005	0.303±0.011
	地方予備群	64	0.813±0.036	0.920±0.015	0.961±0.008	1.381±0.085	0.300±0.010	0.712±0.043	0.089±0.013	0.958±0.021	0.913±0.010	0.388±0.018
	久津ノ辻	37	0.172±0.007	0.965±0.002	0.930±0.005	1.176±0.043	0.385±0.013	0.611±0.044	0.139±0.018	0.354±0.014	0.923±0.021	0.275±0.007
	伊予	28	0.174±0.007	0.965±0.002	0.933±0.006	1.174±0.036	0.389±0.013	0.613±0.055	0.129±0.014	0.356±0.012	0.923±0.003	0.275±0.008
	角尾	28	0.149±0.009	0.938±0.002	0.959±0.009	1.691±0.180	0.728±0.085	0.636±0.060	0.344±0.040	0.717±0.047	0.923±0.002	0.328±0.010
長門県	萩第一群	41	0.186±0.009	0.937±0.002	0.960±0.009	1.746±0.073	0.834±0.064	0.607±0.013	0.383±0.048	0.714±0.040	0.811±0.009	0.339±0.016
	萩第二群	23	0.215±0.010	0.932±0.008	0.973±0.010	0.554±0.181	0.584±0.176	0.429±0.038	0.271±0.054	0.354±0.040	0.295±0.002	0.340±0.006
	萩第三群	17	0.142±0.011	0.931±0.009	0.971±0.014	2.399±0.079	0.623±0.183	0.269±0.081	0.344±0.074	0.394±0.049	0.923±0.002	0.219±0.010
	萩第四群	16	0.249±0.023	0.982±0.008	0.981±0.010	1.236±0.023	0.866±0.112	0.456±0.040	0.148±0.021	0.198±0.013	0.235±0.002	0.332±0.014
	萩第五群	22	0.384±0.027	0.986±0.008	0.945±0.012	1.899±0.137	0.774±0.179	0.454±0.036	0.238±0.044	0.132±0.038	0.736±0.002	0.343±0.015
	萩第六群	44	0.534±0.014	0.920±0.004	0.944±0.009	1.744±0.049	0.623±0.036	0.485±0.029	0.894±0.021	0.119±0.017	0.927±0.002	0.363±0.011
	中野第一群	25	0.243±0.019	0.959±0.007	0.957±0.015	1.849±0.104	0.811±0.080	0.398±0.028	0.136±0.033	0.147±0.025	0.926±0.003	0.345±0.020
	中野第二群	17	0.322±0.004	0.981±0.015	0.945±0.011	1.789±0.108	0.634±0.085	0.485±0.042	0.135±0.035	0.069±0.010	0.926±0.002	0.338±0.015
	吉野第一群	40	0.262±0.012	0.929±0.004	0.976±0.018	2.628±0.214	0.686±0.146	0.403±0.060	0.319±0.073	0.233±0.074	0.930±0.003	0.342±0.011
	吉野第二群	40	0.429±0.016	0.975±0.007	0.983±0.017	2.787±0.274	1.488±0.183	0.814±0.192	0.103±0.060	0.208±0.063	0.934±0.003	0.367±0.008
熊本県	石巻第三群	41	0.385±0.007	0.964±0.009	0.948±0.010	1.981±0.143	0.799±0.118	0.433±0.049	0.127±0.041	0.134±0.044	0.921±0.003	0.347±0.013
	若菜	43	0.194±0.009	0.934±0.005	0.949±0.008	1.886±0.114	0.823±0.085	0.251±0.025	0.199±0.030	0.139±0.029	0.918±0.011	0.301±0.017
	大津	14	0.136±0.012	0.952±0.006	0.941±0.013	1.739±0.081	0.918±0.069	0.181±0.021	0.302±0.020	0.133±0.049	0.923±0.005	0.219±0.010
	小国	30	0.317±0.023	0.127±0.005	0.983±0.007	1.441±0.078	0.617±0.022	0.760±0.044	0.175±0.023	0.297±0.017	0.823±0.002	0.328±0.007
	小国	30	0.361±0.016	0.214±0.007	0.934±0.003	0.738±0.033	0.328±0.017	0.278±0.015	0.263±0.012	0.231±0.009	0.951±0.002	0.343±0.008
	大津	44	0.258±0.009	0.214±0.002	0.933±0.006	0.794±0.078	0.329±0.014	0.225±0.010	0.046±0.011	0.233±0.009	0.920±0.002	0.363±0.010
	島	53	0.534±0.139	0.955±0.035	0.973±0.028	4.494±0.480	0.347±0.014	0.238±0.002	0.100±0.018	0.941±0.013	0.930±0.013	0.292±0.010
	阿蘇	21	0.961±0.017	0.212±0.006	0.932±0.010	0.780±0.038	0.334±0.011	0.279±0.011	0.064±0.011	0.037±0.008	0.925±0.002	0.277±0.009
	阿蘇	27	0.189±0.082	0.938±0.004	0.985±0.014	0.685±0.018	0.358±0.018	0.164±0.053	0.013±0.014	0.047±0.013	0.927±0.004	0.347±0.016
	石巻	54	0.7									

表12 湧別川河口域の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
赤石山群	90個	36%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	120個	49%	割れ面が梨肌の黒曜石
あじさい滝群、槻加沢	31個	13%	割れ面が梨肌でないもの
ケショマップ第2群	5個	2%	
KS3遺物群	1個	0.04%	

注：八号沢、白土沢、あじさい滝、槻加沢の一部は組成が酷似し、分類は割れ面の梨肌か否かで区別した。

表13 常呂川（中ノ島～北見大橋）から採取した37個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
所山群	21個	57%	
蘆戸山群	8個	22%	HS2遺物群に似る
ケショマップ第2群	1個	3%	FR1、FR2遺物群に似る
八号沢群	1個	3%	割れ面梨肌
常呂川第1群	1個	3%	
常呂川第2群	2個	5%	
常呂川第3群	1個	3%	
常呂川第4群	2個	5%	KS1遺物群、所山群に似る

注：常呂川第1～2群は分析場所を変えて複数回測定して作る。

表14 穂香堅穴群出土黒曜石製剥片の元素比分析結果

遺物番号	元 素 比									
	Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K
88214	0.326	0.121	0.038	1.749	0.783	0.417	0.193	0.013	0.039	0.393
88215	0.337	0.126	0.050	1.651	0.763	0.423	0.179	0.018	0.031	0.387
88216	0.301	0.113	0.043	1.752	0.801	0.422	0.169	0.017	0.033	0.364
88217	0.549	0.102	0.041	2.667	0.678	0.681	0.166	0.016	0.042	0.423
88218	0.328	0.120	0.054	1.985	0.847	0.480	0.225	0.033	0.036	0.402
88219	0.636	0.124	0.051	2.735	0.498	0.665	0.143	0.028	0.041	0.428
88220	0.332	0.121	0.046	1.828	0.778	0.424	0.146	0.039	0.033	0.380
88221	0.339	0.126	0.039	1.788	0.785	0.442	0.207	0.018	0.031	0.405
88222	0.325	0.123	0.029	1.726	0.790	0.435	0.226	0.008	0.031	0.390
88223	0.316	0.117	0.034	1.793	0.809	0.455	0.148	0.015	0.035	0.389
88224	0.329	0.124	0.033	1.818	0.825	0.472	0.193	0.046	0.031	0.388
88225	0.329	0.128	0.057	1.997	0.846	0.442	0.152	0.047	0.032	0.388
88226	5.287	2.209	0.261	17.009	0.146	2.268	0.213	0.016	0.079	0.645
88227	0.326	0.121	0.043	1.685	0.789	0.457	0.194	0.042	0.035	0.372
88228	0.303	0.122	0.065	1.942	0.839	0.456	0.190	0.012	0.030	0.373
88229	0.330	0.127	0.036	1.688	0.764	0.401	0.174	0.009	0.029	0.390
88230	0.552	0.108	0.054	2.616	0.639	0.683	0.206	0.030	0.033	0.386
88231	0.488	0.129	0.047	1.869	0.469	0.408	0.144	0.000	0.035	0.449
88232	0.328	0.117	0.057	1.872	0.791	0.432	0.188	0.000	0.032	0.413
88233	5.473	2.221	0.231	14.422	0.129	1.949	0.205	0.000	0.067	0.647
JG-1	0.788	0.215	0.065	3.435	0.855	1.152	0.250	0.085	0.028	0.319

JG-1: 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192 (1974)

表15 平成14年度穂香堅穴群出土黒曜石製遺物の原産地分析結果

分析番号	試料番号	出土位置	遺物番号	層位	遺物名	時期	原石産地(確率)	判定結果	自然標本
88214	61	JH-1	253	床面	フリイク	縄文時代	常呂川第4群(48%)、所山(27%)、滝川第2群(2%)	所山	角礫
88215	62	JH-1	259	床面	フリイク	縄文時代	常呂川第4群(37%)、所山(6%)、滝川第2群(3%)	所山・常呂川	
88216	63	JH-2	208	床面	フリイク	縄文時代	常呂川第4群(32%)、所山(3%)、KS1遺物群(8%)、滝川第2群(2%)	所山・常呂川	
88217	64	JH-2	224	床面	フリイク	縄文時代	クショマップ第1群(6%)、FR2遺物群(10%)、滝川第2群(6%)、近文物群(2%)	クショマップ	
88218	65	JH-2	241	床面	フリイク	縄文時代	所山(21%)、滝川第2群(21%)、常呂川第4群(9%)	所山	角礫
88219	66	JH-2	291	床面	フリイク	縄文時代	FR2遺物群(11%)、クショマップ第1群(8%)、FR1遺物群(3%)	クショマップ	
88220	67	JH-5	173	覆土7	フリイク	縄文時代	所山(48%)、常呂川第4群(36%)、滝川第2群(1%)	所山	角礫
88221	68	JH-8	24	床面	フリイク	縄文時代	所山(32%)、常呂川第4群(20%)、滝川第2群(7%)	所山・常呂川	
88222	69	JH-10	8	床面	フリイク	縄文時代	常呂川第4群(36%)、所山(6%)、滝川第2群(4%)	所山・常呂川	
88223	70	JH-10	5	床面	フリイク	縄文時代	常呂川第4群(42%)、所山(30%)、滝川第2群(2%)	所山・常呂川	
88224	71	JP-5	2	床面	フリイク	縄文時代	所山(72%)、常呂川第4群(34%)、滝川第2群(13%)	所山・常呂川	
88225	72	JP-17	101	覆土8	フリイク	縄文時代	所山(11%)、常呂川第4群(0.6%)、滝川第2群(0.7%)	所山・常呂川	
88226	73	JP-22	29	覆土	Rフリイク	縄文時代	NI29遺物群(12%)	NI29遺物群	
88227	74	JM-1	198	盛土2	フリイク	縄文時代	常呂川第4群(69%)、所山(38%)、滝川第2群(14%)	常呂川	円礫
88228	75	JM-1	233	盛土2	フリイク	縄文時代	所山(5%)、常呂川第4群(6%)、滝川第2群(3%)	所山・常呂川	
88229	76	JM-4	236	盛土1	フリイク	縄文時代	常呂川第4群(38%)、所山(21%)、滝川第2群(0.8%)	所山・常呂川	
88230	77	JM-4	282	盛土1	フリイク	縄文時代	近文物群(3%)、クショマップ第1群(6%)、FR2遺物群(10%)、FR1遺物群(2%)	クショマップ	
88231	78	JM-5	660	盛土1	フリイク	縄文時代	豊戸山(8%)、HS2遺物群(0.9%)	豊戸山・常呂川	
88232	79	F-24	200	Ⅱ	フリイク	縄文時代	所山(5%)、常呂川第4群(6%)、滝川第2群(1%)	所山・常呂川	
88233	80	M-46	18	Ⅱ	フリイク	縄文時代	HK73遺物群(38%)	HK73遺物群	

4 北海道根室市穂香竪穴群から出土した炭化植物種子

吉崎 昌一*・椿坂 恭代**

1) 遺跡と調査の概要

遺跡の名称：穂香竪穴群 (N-01-34)

遺跡の所在：北海道根室市穂香市175番地ほか

調査の機関：財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査担当者：越田雅司、村田 大、愛場和人、広田良成

調査面積：平成13年度8,000㎡、平成14年度7,150㎡

調査期間：平成13年(2001年)5月7日～10月26日

：平成14年(2002年)5月7日～10月31日

遺跡の立地：遺跡は根室市中心部から西南へ約5km、穂香川左岸の西から東へ張り出した標高9m～13mの舌状台地上に位置する。

検出遺構と年代：縄文時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡、土壇、盛土、焼土など

縄文時代の竪穴住居跡、土壇、焼土、集石など

これらの詳細については本文を参照いただきたい。

2) 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、平成13年度、平成14年度に発掘調査が実施された地区から得られたものである。この調査で縄文時代の終わりと考えられている竪穴住居跡から土壇が採取された。これをフローテーション法で処理後、第一次選別を経て炭化植物のみが送付されてきた。これらの資料について、実体顕微鏡で観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土表は表16、17に示しておいた。

3) 竪穴住居跡から検出された種子

オオムギ *Hordeum vulgare* L. (図版V-4-1a, b : 竪穴住居跡(H-008)の炉1から出土)

竪穴住居跡(H-008)の炉1から破損した状態で1片出土している。果実は長楕円形の約 $\frac{1}{3}$ しか残存していなかった。背面に胚がある部分は破損のため確認できなかったが、腹面には縦溝が確認できた。これらの特徴からオオムギと判断される。しかし、出土資料は破損が著しいため、詳細な分類は出来なかった(椿坂1998)。破損のため計測はしていない。

アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図版V-4-3a, b, c 4a, b, c, : 竪穴住居跡(H-013)の炉1から出土)

竪穴住居跡(H-013)の炉1から2粒出土。穎果はやや球形。背面には果長の $\frac{2}{3}$ ほどの胚があり、その反対側の腹面には、小さなヘラ型のヘソがある(椿坂1993)。いずれも資料の保存状態は悪いが、写真3aの資料は外穎部分が残存して出土。その表面には乳頭突起の組織が観察できた。また、4aに示す資料は内穎の一部が残存して出土。計測値は3a : 長さ1.45mm、幅1.35mm、厚さ1.20mm、4a : 長さ1.60mm、幅1.45mm、厚さ1.00mm

キビ *Panicum miliaceum* L.(図版1-5a, b, c 6a, b, c: 堅穴住居跡(H-013)の炉1から出土)

堅穴住居跡(H-013)の炉1から3粒と堅穴住居跡(H-015)の炉1から1粒、堅穴住居跡(H-026)の焼土3から1粒、堅穴住居跡(H-028)の焼土1から1粒、総数6粒出土している。穎果はやや球形または広卵形。背面には果長の $\frac{1}{2}$ ほどの胚があり、その反対側の腹面にはヘラ型状のヘソがある(椿坂1993)。

検出された資料は、内外穎が付いた状態のもの(写真資料5a)、また、写真6aに示した内外穎のとれた状態のものと同様に混在して出土。計測値は5a:長さ2.30mm、幅1.65mm、厚さ1.50mm、6a:長さ1.85mm、幅1.90mm、厚さ1.10mm

シソ属 *Perilla* L.(図版1-2a, b: 堅穴住居跡(H-026)の焼土3から出土)

堅穴住居跡(H-008)の炉1から7粒、堅穴住居跡(H-014)の炉3から2粒、堅穴住居跡(H-024)のカマドから1粒、堅穴住居跡(H-024)の炭化物集中から1粒、堅穴住居跡(H-026)のカマドから4粒、堅穴住居跡(H-026)の焼土3から19粒、堅穴住居跡(H-029)のカマドから2粒と総数36粒出土している。種子は扁平球形で種子の表面に大きな網目状の模様がある。エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica* かシソ *Perilla frutescens* var. *japonica* のいずれであるかは、両者とも形態と表皮の構造が類似している部分が多く、また、炭化によるダメージが大きいため分類は困難である。計測値は長さ1.80mm、幅1.50mm、厚さ1.35mm。

タデ科 POLYGONACEAE (図版1-7: 堅穴住居跡(H-013)の炉1から出土)

堅穴住居跡(H-011)から1粒と堅穴住居跡(H-013)の炉1から4粒出土。瘦果は三角状紡錘形で稜は鋭くギシギシ属 *Rumex* L.の特徴を示す。しかしタデ科種子は形態の類似した種類が多いため、詳細な分類は困難である。計測値は長さ2.30mm、幅1.50mm

ナス科 SOLANACEAE (図版1-8: 堅穴住居跡(H-014)のカマド煙道から出土)

堅穴住居跡(H-014)のカマド煙道から1粒出土している。種子は扁平広楕円形で種皮表面の網状模様がわずかに観察できた。資料の保存状態は悪いうえ、1粒の資料からは属レベルの分類は不可能であった。計測値は長さ1.30mm、幅1.25mm、厚さ0.40mm

アカザ属 *Chenopodium* L.(図版1-9: 堅穴住居跡(H-020)の焼土1から出土)

堅穴住居跡(H-020)の焼土1から1粒出土。種子は扁平球形。側面には嘴状に突出したヘソがある(写真資料の左側)。計測値は長さ1.05mm、幅1.25mm、厚さ0.60mm

キイチゴ属 *Rubus* L.(図版1-10: 堅穴住居跡(H-008)の炉1から出土)

堅穴住居跡(H-008)の炉1から1粒出土。種子は半横広卵形。種子の全面に大きな網状の凹凸がある。しかし、キイチゴ属種子は形態と種子表面の構造の類似したものが多くので種までの分類は困難である。計測値は長さ2.10mm、幅1.30mm、厚さ1.20mm。

ニワトコ属 *Sambucus* L.(図版1-11: 竪穴住居跡(H-008)の炉1から出土)

竪穴住居跡(H-008)の炉1から2粒と竪穴住居跡(H-014)の炉1から1粒出土。種子は狭楕円形。背面は円みがあり、腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L.と判断される。ただし、日本では本州北部から北海道の林中にエゾニワトコ *S.buergeriana* var.*miquelii* (Nakai) Hara が分布するといふ。計測値は長さ2.10mm、幅1.15mm、厚さ0.70mm。

ブドウ科 *VITIDACEAE* (図版1-12a, b: 竪穴住居跡(H-020)の焼土1から出土)

竪穴住居跡(H-020)の焼土1から破片1が出土。堅果の破片は腹面の一部で稜の片側の凹みが観察できたが、破片のため詳細な分類は不可能である。

冬芽(図版1-13: 竪穴住居跡(H-025)の炉1から出土)

竪穴住居跡(H-025)の炉1から1個出土しているが比較資料がないので詳細な分類が出来ない。計測値は長さ1.20mm、幅0.85mm。

不明1(図版1-14: 竪穴住居跡(H-027)の炉2から出土。1-15a, b, c: 竪穴住居跡(H-024)のカマドから出土)

現生の比較資料がないため分類できなかった資料を図示しておいた。計測値は14:長さ1.40mm、幅0.95mm、厚さ0.65mm、15a:長さ2.80mm、幅2.10mm、厚さ1.80mm

その他、資料の保存状態がきわめて悪いため、分類できなかった資料を不明2として扱った。

4) コメント

栽培植物としてはアワ、キビ、オオムギが検出されている。オオムギは1片しか検出されていないので、その性格が分からない。通常、北海道東部のオオムギは裸性であるが、この資料だけからでは決定できないと思う。シソ属種子については問題が残る。シソ属自体はヒマラヤ周辺が原産地であるといわれ、これが栽培化されたのは中国、韓半島、日本列島だと考えられている。その目的としては、種子の食用をはじめハーブや薬用あるいは油脂植物としての利用が考えられる(A. C. Zeven and J. M. J. de Wet, p.40)。北海道では動物油脂の利用が卓越していたであろうから、食用かハーブにでも使われていたのであろうか。

遺跡から発掘された擦文式土器は、この時期の末期のものであるという。擦文文化は、本州東北部的な文化的背景の基に存在していたと考えられているが、北海道東部においてはオホーツク文化との交流もあった、といわれている。したがって、栽培植物や鉄製品などの性格は、出土物質文化の詳細な検討が終了しない限り、その影響の度合いは分からない。

引用文献

梅坂恭代

1998: オオムギについて 「道を辿る」245-246、石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会、札幌

1993: アワ・ヒエ・キビの同定 吉崎昌一先生還暦記念論文集「先史時代と関連科学」261-281

A. C. Zeven and J. M. J. de Wet

1982: Dictionary of cultivated plants and their regions of diversity. 263p.

Centre for Agricultural Publishing and Documentation, Wageningen.

* 札幌国際大学地域総合研究センター客員研究員

** 札幌国際大学地域総合研究センター客員研究員

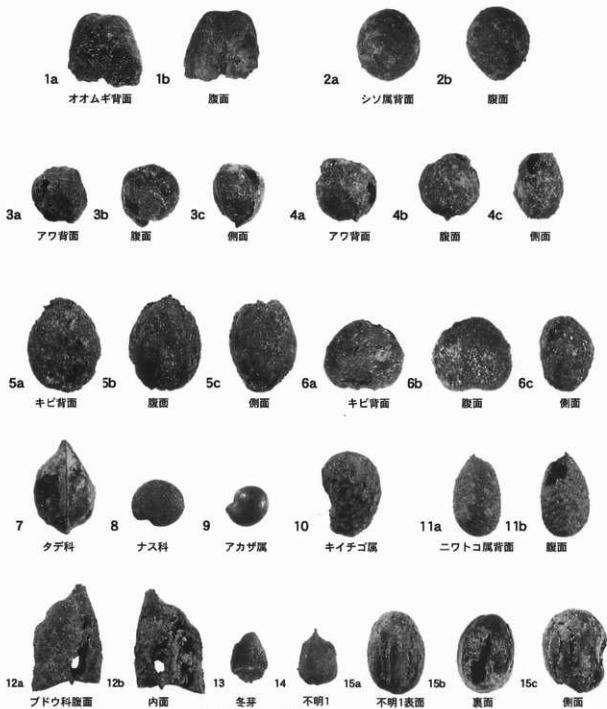
表16 穂香壑穴群炭化植物種子一覽(1)(平成13年度分)

資料 番号	遺構名	採取位置	時期	オオムギ (研)	アワ (殻)	キビ (殻)	シソ属 (殻)	タデ科 (殻)	ナス科 (殻)	アザミ (殻)	キリン (殻)	ニホ (殻)	ブドウ (殻)	冬芽 (殻)	不明1 (殻)	不明2 (研)	
1	H-6	東カマド	縄文時代後期後半													1	
2	H-6	西カマド周辺	*													1	蒴核
3	H-6	炉周辺	*													1	蒴核
4	H-6	炉1	*														蒴核
5	H-6	炉2	*														蒴核
6	H-7	炉1	*													2	
7	H-8	炉1	*	1			7				1	2				4	
8	H-10	炉1	*													2	蒴核
9	H-11	カマド	*														蒴核
10	H-11	炉1	*														蒴核
11	H-11	炉2	*														蒴核
12	H-11	炉3	*														蒴核
13	H-11	南西壁	*					1									蒴核
14	H-13	カマド	*														蒴核
15	H-13	炉の土	*													1	
16	H-13	炉1	*		2	3	4										
17	H-13	炉2	*														蒴核
18	H-14	炉1	*								1					4	蒴核
19	H-14	カマド粘土	*														蒴核
20	H-14	カマド(覆土)	*													1	蒴核
21	H-14	カマド燃焼部	*													1	蒴核
22	H-14	炉3	*				2										蒴核
23	H-14	カマド煙道	*						1								蒴核
24	H-15	炉1	*			1											蒴核
25	H-16	炉1	*													1	蒴核
26	H-17	炉1	*														
27	H-18	カマド	*													1	蒴核

表17 穂香聖穴群炭化植物種子一覧(2)(平成14年度分)

資料番号	遺構名	採取位置	時期	オオムギ(粒)	アワ(粒)	キビ(粒)	シソ属(粒)	タデ科(粒)	ナス科(粒)	アガリ科(粒)	サトウ(粒)	ゴトコ(粒)	アブ(粒)	冬芽(個)	不明1(粒)	不明2(粒)		
1	H-19	カマド	縄文時代後期後半														菌核	
2	H-19	HF-2	*														菌核	
3	H-19	HF-2	*													1	菌核	
6	H-20	HF-2	*							1			1			1	菌核	
7	H-19	炭化物集中	*														菌核	
8	H-20	カマド	*													1	菌核	
9	H-21	HF-2	*														菌核	
10	H-21	HF-2	*															
11	H-21	HF-3	*													1		
12	H-21	HF-4	*													1		
13	H-21	炭化物集中	*													1	菌核	
14	H-22	HF-2	*													1	菌核	
15	H-22	HF-2	*														菌核	
16	H-22	HF-3	*														菌核	
17	H-23	HF-2	*													1	菌核	
18	H-24	カマド	*				1								1	6	菌核	
19	H-24	HF-2	*													5		
20	H-24	HF-2	*													1		
22	H-24	炭化物集中	*				1									3	菌核	
23	H-25	カマド	*														菌核	
25	H-25	HF-2	*													1	菌核	
26	H-25	HF-3	*													1		
29	H-25	炉1	*											1			菌核	
30	H-26	カマド	*				4										13	菌核
31	H-26	HF-2	*													1		
32	H-26	HF-2	*													1	菌核	
33	H-26	HF-3	*			1	19										*	
34	H-26	HF-4	*														菌核	
36	H-26	炭化物集中 1	*														菌核	
37	H-26	カマド黄色粘土	*														菌核	
38	H-26	炭1	*														菌核	
39	H-26	炭2	*														14	菌核
40	H-27	カマド	*														3	菌核
43	H-27	HF-2	*														4	
44	H-27	HF-3	*														3	菌核
45	H-27	炉1	*														2	菌核
46	H-27	炉2	*													1	2	菌核
47	H-28	HF-2	*			1											10	
48	H-29	カマド	*				2										1	菌核
49	H-29	HF-2	*														3	菌核
50	H-29	HF-2	*														3	菌核
53	H-29	炭1	*														1	菌核
54	H-30	焼土1	*															菌核
55	H-30	焼土2	*														1	
合 計					1	2	6	36	5	1	1	1	3	1	1	2	107	

*炭化物多数(0.1g)



写真図版1 穂香堅穴群出土の炭化種子

5 穂香竪穴群から出土した赤色細粒のX線回折分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

穂香竪穴群は、根室湾に面した台地上に位置する。今回の発掘調査により、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡、土坑、盛土遺構、擦土時代末の竪穴住居跡等の遺構が検出されている。

今回の分析調査では、縄文時代中期～後期の土坑および盛土遺構から出土した赤色細粒のX線回折分析を行い、その材質を明らかにする。

1. 試料

試料は、縄文時代中期～後期の土坑 (JP-17) の赤色層より採取された赤色細粒1点 (試料番号1) と、同時期の盛土遺構 (JM-2) の盛土2層から採取された赤色細粒1点 (試料番号2) の合計2点である。

2. 分析方法

試料を105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で粉砕した。この粉砕品をアセトンでスライドグラスに塗布し、X線回折測定試料を作成した。このX線回折測定試料について、以下の条件で測定を実施した (足立, 1980; 日本粘土学会, 1987)。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装置: 理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit: 1°
Target: Cu(K α)	Scattering Slit: 1°
Monochrometer: Graphite 湾曲	Receiving Slit: 0.3mm
Voltage: 40KV	Scanning Speed: 2°/min
Current: 40mA	Scanning Mode: 連続法
Detector: SC	Sampling Range: 0.02°
Calculation Mode: cps	Scanning Range: 3~45°

3. 結果

X線回折図を図1に示す。試料番号1は、鈍い赤色を呈した試料であり、代表鉱物として赤鉄鉱 (hematite) の回折線が明瞭に認められていることから、いわゆるベンガラと考えられる。一方、試料番号2は、鈍い赤褐色を呈するが、赤鉄鉱 (hematite) の他、石英 (quartz)、曹長石 (albite)、磁赤鉄鉱 (maghemite)、イライト (illite) などの鉱物も相当量検出される。試料が赤色化している原因は、赤鉄鉱、磁赤鉄鉱と判断されるが、随伴鉱物が多いためにベンガラと断定するには至らない。

4. 考察

土坑と盛土から出土した赤色細粒は、いずれも赤鉄鉱や磁赤鉄鉱等の鉄に由来していることが明らかとなった。このうち、試料番号1では赤鉄鉱の回折線が明瞭に認められ、いわゆるベンガラであることが指摘できた。一方、試料番号2については、分析値等を考慮すればベンガラの可能性があるが、随伴鉱物が多く断定はできなかった。

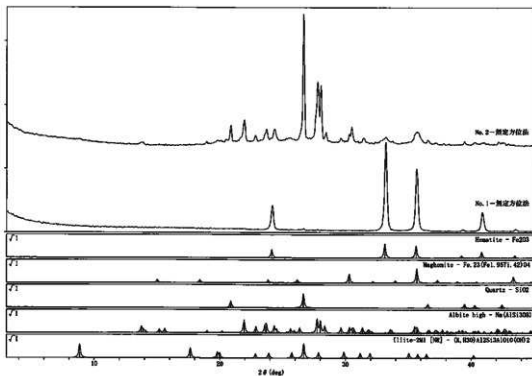
北海道では、縄文時代の土坑墓への埋葬時にベンガラを施朱していたことが知られている（市毛，1998）。本遺跡でも、こうした施朱等にベンガラが用いられていた可能性がある。

引用文献

足立吟也（1980）粉末X線回折法。「機器分析のてびき3」. p.64-76, 化学同人.

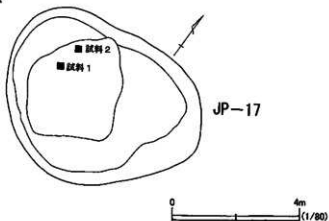
市毛 勲（1998）新版 朱の考古学. 296p., 雄山閣.

日本粘土学会編（1987）粘土ハンドブック 第二版. 1289p., 技報堂出版.



赤色顔料のX線回折図

サンプル採取地点



図V-8 赤色顔料のX線回折図とサンプル採取地点

第VI章 成果と課題

今回検出された擦文時代の遺構は、竪穴住居跡13軒、土坑1基、集石1ヵ所、焼土4ヶ所である。縄文時代の遺構は竪穴住居跡11軒、土坑20基、盛土10ヵ所、焼土1ヵ所である。遺物は土器、石器などが約23,000点出土している。平成13年度分及び平成5年度に根室市教育委員会が調査した分を合わせると、擦文時代の遺構は竪穴住居跡31軒、土坑1基、集石1ヵ所、焼土4ヵ所となり、穂香竪穴群において地表から確認できた竪穴状くぼみの半分以上を調査したことになる。縄文時代の遺構・遺物はほとんどのものが縄文時代後期前葉北筒Ⅱ～Ⅲ式期のものだが、JH-7から縄文時代早期の土器（I群）が、また、V層から黒曜石製の石器が若干出土している。また、H-23覆土と包含層からは純縄文時代の土器（Ⅱ群）が若干出土した。ここでは今回の調査を中心として、今までの成果を中心に簡潔に述べる。

擦文時代の竪穴住居跡は、標高約6～13m、台地東側の平坦部から第二ホニオイ川に向かう斜面にかけて分布している。その中では、①北側にやや張り出す地形の部分（H-1～5・17・18）、②東側にやや張り出す地形の部分（H-6ほか）、③南側にやや張り出す部分から西側の台地縁辺部（H-7～31ほか）、の大きく3ヵ所に分けられる。今年度の調査区は③にあたり、未調査の竪穴もほぼこの場所に位置する。また、この場所は縄文時代の遺構の分布とほぼ重なるが、切り合い関係は、盛土以外は認められず、擦文時代の住居は意図的に竪穴のくぼみを避けて作っていたことが窺える。

竪穴住居は大きく分けると方形でカマドと炉のある住居、方形で炉のみの住居、長方形で炉のみの住居となる。カマドと炉のある住居は一辺6mを超える大形のもの、一辺5m前後の中形のもの、一辺4m以下の小形のものに分けられる。調査した竪穴住居跡で最も大きな住居跡は、昨年度調査したH-6で一辺約10mを測る。今回調査した竪穴住居跡ではH-25が一辺約8mと最も大きく、次いでH-26が大きい。中形はH-19・24・27・29、小形はH-21が該当する。方形で炉のみの住居は小形で、掘り込みも浅い。今回の調査ではH-20が該当する。長方形の住居はH-29を除き、いずれもカマドがみられず、炉のみである。今回の調査では7軒検出された（H-22・23・28～31）。ほとんどのものは炉が1ヵ所だが、H-22は2ヵ所みられた。

カマドの構造は全て作りつけのカマドで、袖石を用い、その上に粘土を貼り付けて作っている。粘土の残りは全体的によくはない。粘土には灰白色粘土が用いられるが、一部黄褐色粘土を使用するカマドも認められた（H-26・29）。黄褐色粘土は煙道部分には用いられず、焚口周辺にのみ用いられている。煙道はいわゆる斜道で燃焼部から斜めに立ち上がるタイプで短い点が特徴的である。煙道の傾斜角は45°前後のものが多いが、H-24のみ30°と緩い。炉はカマドの有無に関わらず、いずれも床面のほぼ中央に作られ、カマドと炉の使い分けが想定される。また、カマドのある住居跡では複数の炉が認められ、カマド反対側の柱穴の内側に小規模な炉があるものが多い。ただし、中央の炉以外は掘り込みをもつものが多く、焼土は覆土に混ざる程度のももあり、中央の炉との性格の違いが考えられる。柱穴は大形の住居では4本主柱穴のものが主体で、小形のものでは検出できなかったものが多い。また、H-26・29では床面の角の部分でいわゆる「隅穴」が認められた。同様の例は西月ヶ岡遺跡の同時期の竪穴住居跡でも検出されている。H-23で確認された周溝は、昨年度調査したH-17でも検出されている。掘り揚げ土は多くの竪穴住居跡で検出され、H-25周辺では掘り揚げ土の切り合い関係が認められ、H-22・23・(27?)→H-25→H-26という変遷が考えられ、東側から西側への住居の変遷が考えられる。また、竪穴住居跡のカマド、炉から検出された炭化物の放射性炭素年

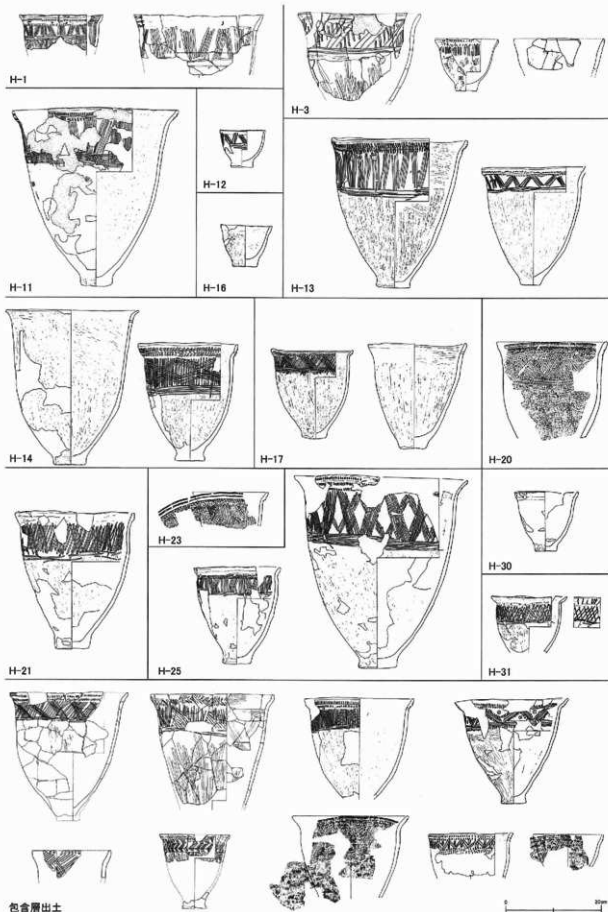


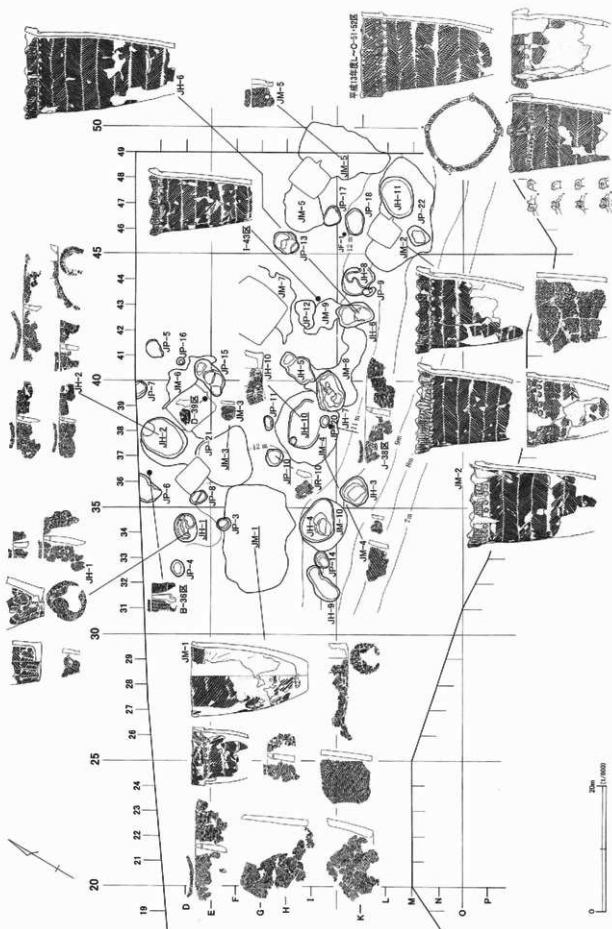
図 VI-1 穂香堅穴群出土の擦文土器集成図

代測定を行ったところ、いずれも1,000～1,250A. D. という結果を得た。C¹⁴補正年代は、平成5・13・14年度いずれも900yBP前後の値がでており、住居群に大きな時期差はないと考えられる。

遺物は遺構の数に比べて少量である。土器は竪穴住居跡内を中心に少量出土し、破片数の割に比較的多くの復元個体を得た。時期は過年度調査分も含め全て縄文時代後期後半で、佐藤編年Ⅳ₁～Ⅳ₄、藤本編年のk～lに比定される。ほぼ西月ヶ岡遺跡の土器の時期と同様と考えられる。ただし、西月ヶ岡遺跡第7号住居跡からは内耳土器が出土しているが本遺跡からは出土していない。器形は全て深鉢（甕）で、文様が施されるものと無文のものがある。中～大形のはカマドのある住居から出土し、炉のみの住居から出土する深鉢はいずれも小形である。文様は全般的に粗雑で、文様帯は上端が列点、下端は横走沈線と区画されるものが多い。中の文様は斜位の沈線が山形、格子目状に施されるものが主体で、中に列点等が施されるものもある。ミガキは比較的丁寧に施され、ハケ目を残すものはわずかである。他の遺物としては、鉄製品、礫などがある。昨年度の調査ではH-11の床面からガラス玉、青銅製の金属製品、ヒスイの勾玉64点がまとまった状態で検出されたが、今回の調査では検出されなかった。また、住居跡のカマド、炉の土壌からは、フローテーションの結果、炭化植物種子として昨年度分も含めると、アワ・オオムギ・キビ・シソなどが検出されている。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡11軒、土坑20基、盛土10ヵ所、焼土1ヵ所が検出された。竪穴住居跡は平面が楕円形、もしくは不整形で、掘り方には大きな凹凸がみられ、生活面を覆土中に形成する住居が多い。柱穴が判然としないうものも多く、遺物は全体的に少ない。JH-1・4・10は焼失住居で多量の炭化材が検出された。樹種同定を行なったが、クルミ属、コナラ属、ニレ属など、多様な樹種で構成されていた。土坑は大形のものも多く、竪穴住居の可能性のあるもの（JP-12・13・15・18）もある。また、小形の土坑では覆土中に焼土が認められるもの（JP-10）もあり、これも住居跡の可能性もある。また、JP-17は墳底付近でベンガラが面的に検出されているため、墓塚と考えられる。また、その上位と下位からは焼土が検出され、覆土中からは副葬品と考えられる石器が出土している。盛土は掘り掘げ土を竪穴住居周辺に置いたと考えられるもの（JM-8・10）と場所を決めて意図的に構築したもの（JM-1・2など）に分けられる。盛土は基底面の凹凸を埋め、盛土上面は平坦に作られている。JM-1・2・4・10は縄文時代の遺構を盛土の土で埋めており、古い遺構を整地する意図もあったと考えられる。JM-1では盛土中及び基底面で小柱穴が検出されているため、何らかの構造物があった可能性が高い。ただし、小柱穴の配置には特に規則性は認められない。また、JM-3・5・6では盛土基底面から、焼失住居と同様な炭化材のまとまりが検出された。JM-5では周辺から焼土も検出されている。いずれも小柱穴等は認められないため、構造物があったかどうかは不明であるが、意図的に構築した盛土については、構築以前に何らかの行為があったと考えられる。同様の盛土の例は釧路市大栗毛Ⅰ遺跡、標茶町茅沼遺跡第2地点でもみられる。JH-1・2・4・8、JM-3・5・6出土炭化材のC¹⁴炭素年代測定の結果では、いずれも補正年代で3800yBP前後の値が出ている。土器は縄文時代北筒Ⅱ式トコロ6類・5類、北筒Ⅲ式がある。また、JH-1、JH-2、JM-1から平縁で円形刺突列が施される土器群が出土している。特徴的には、北筒Ⅴ式に相当するが、JM-1でトコロ5類と共に出土しているため、正確な位置付けは不明である。JM-2周辺の遺構からはトコロ6類が、JM-1、JH-2周辺からは北筒Ⅱ式トコロ5類ほか、JM-5から去年の調査区であるL~O-51・52区からは北筒Ⅲ式土器が分布している。以上の様に大きく3つの地区に分けられ、遺構の時期もJH-5、JM-2ほか→JH-2、JM-1ほか→JM-5ほか、という変遷が想定できる。

(広田)



図VI-2 縄文時代の土器分布図 (土器実測図はS=1/6)

表18 遠構一覽

観測番号	時期	位置	平面形	長さ (m)		幅 (m)		傾き (m)	備考
				上層	下層	上層	下層		
H-18	観測時代	H-47/H-48/1-47/1-48	方形	5.28	4.96	4.8	4.49	0.75	カマド1・伊1・隼土3・ベンチ?
H-20	観測時代	L-46/L-47/M-47	方形	3.58	3.38	3.48	3.27	0.5	伊1
H-21	観測時代	N-47/N-48/G-47/G-48	方形	3.80	3.77	3.55	3.36	0.88	カマド1・伊1
H-22	観測時代	F-47/F-48/F-47/G-47/G-48/G-47	長方形	5.91	5.68	5.5	5.26	0.59	伊1
H-23	観測時代	H-44/H-45/1-44/1-45	長方形	3.59	3.43	3.55	3.4	0.49	伊1・岡部
H-24	観測時代	K-45/K-46/L-45/L-46	方形	4.53	4.4	3.97	3.3	0.68	カマド1・伊1
H-25	観測時代	E-42/E-43/F-41/F-42/F-43/F-44/G-41/G-42/G-43	方形	8.86	8.64	8.48	8.08	0.82	カマド1・伊1・隼土3・ベンチ?
H-26	観測時代	E-38/E-40/F-38/F-40/F-41/G-38/G-40/G-41	方形	7.04	6.86	6.7	6.46	0.81	カマド1・伊4
H-27	観測時代	H-41/1-40/1-41/1-42/1-41	方形	4.86	4.55	4.12	3.87	0.71	カマド1・伊1・隼土3・ベンチ?
H-28	観測時代	C-35/C-36/D-35/D-36/E-35	長方形	5.23	5.04	3.52	3.38	0.53	伊1
H-29	観測時代	C-35/C-36/D-37/D-38/D-39/E-38/E-39	長方形	6.43	6.3	5.29	5.2	0.65	カマド1・伊3
H-30	観測時代	H-37/H-38/1-37/1-38	長方形	2	4.76	3.9	3.7	0.29	伊2?
H-31	観測時代	G-35/G-36	長方形	4.12	4	0.993	0.9	0.36	伊1
F-1	観測時代	N-42/G-42	長方形	2.05	1.49	1.43	0.99	0.34	
F-5	観測時代	N-38		6.52		6.48		1.21	
F-6	観測時代	H-40		6.66		6.48		0.06	
F-7	観測時代	G-44		6.37		6.33		0.06	
F-8	観測時代	L-46		6.45		6.35		0.04	
JH-1	観測時代	C-33/C-34/D-33/D-34	横形形	4.45	3.78	2.5	2.76	0.87(0.81)	伊3
JH-2	観測時代	B-37/B-38/C-36/C-37/C-38/D-37	横形形	7.25	6.38	5.37	4.75	0.33	伊3
JH-3	観測時代	J-35/1-36/K-36/K-36	不整形(横形形)	4.52	3.89	4.25	3.69	1.18(0.87)	伊1
JH-4	観測時代	H-40/H-34/1-33/1-34/1-35	舟形	7.03	6.61	5.4	4.9	1.64(0.96)	伊1
JH-5	観測時代	G-40/G-41/H-39/H-40/H-41/1-40	不整形	6.23	5.4	3.7	3.22	0.95(0.56)	伊1
JH-6	観測時代	1-42/1-43/1-43/K-42/K-43	不整形	6.04	5.66	3.82	3.72	0.72	伊1
JH-7	観測時代	1-38/1-39/1-40/1-39/1-38/1-40	不整形	6.42	5.3	4.28	3.78	1.37	伊1
JH-8	観測時代	J-43/1-44/K-43/K-44	不整形	5.35	4.64	4.53	4.15	0.62	伊1
JH-9	観測時代	H-32/1-31/1-32/1-31	不整形	6.45	5.69	3.18	2.15	0.97(0.88)	伊1
JH-10	観測時代	H-37/H-38/H-35/1-37/1-38/1-39	横形形	7.64	7.12	6.02	4.64	0.3	隼土4, 土筑3
JH-11	観測時代	K-46/K-47/L-46/L-47/L-48	横形形	6.47	5.65	4.88	4.21	0.62	伊3
JP-3	観測時代	E-34	横形形	3.29	2.12	1.95	1.87	0.62	
JP-4	観測時代	C-32	横形形	3.48	1.66	2.12	1.23	0.73	
JP-5	観測時代	B-40/B-41/C-40/C-41	不整形	3.14	2.42	2.32	2.18	0.61	
JP-6	観測時代	B-39/B-38/C-35	不整形	0.77	0.55	3.2	2.62	0.72	
JP-7	観測時代	B-39	不整形	0.96	0.78	0.23	0.78	0.57	
JP-8	観測時代	D-35	横形形	3.72	2.3	1.93	1.77	0.8	基石
JP-9	観測時代	K-43	不整形(横形形)	2.05	1.19	1.3	0.65	1.35	
JP-10	観測時代	G-38/G-37	不整形(横形形)	3.79	2.27	2.67	2.04	0.73	
JP-11	観測時代	G-38	横形形	2.22	1.63	1.42	1.15	0.61	
JP-12	観測時代	H-42/H-43/1-42/1-43	不整形	4.55	4.3	3.35	3.03	0.95	
JP-13	観測時代	G-45/H-45	不整形	4.16	3.72	3.26	2.81	0.75	
JP-14	観測時代	1-35/1-35	横形形	3.74	2.35	2.18	1.88	0.83	
JP-15	観測時代	D-38/D-42/E-38/E-40	不整形	3.3	5.56	2.97	2.18	0.83	
JP-16	観測時代	C-40	舟形	1.3	0.69	1.23	0.56	0.3	
JP-17	観測時代	1-46/1-46	不整形	3.27	2.63	2.57	2.2	0.74	ベンガラ
JP-18	観測時代	J-45/1-46/K-46	不整形(横形形)	4.18	3.72	0.8	0.36	0.73	
JP-19	観測時代	N-38/N-37	不整形(横形形)	2.3	2.58	0.43	0.7	0.42	
JP-20	観測時代	1-38	横形形	1.75	1.21	1.22	0.78	0.37	
JP-21	観測時代	D-37	不形	0.76	0.53	0.2	0.22		
JP-22	観測時代	L-45/L-46/M-45/M-46	不整形	2.63	2.25	2.77	1.93	0.54	
JM-1	観測時代	E-32/E-33/E-34/E-35/F-31/F-32/F-33/F-34/F-35/G-31/G-32/G-33/G-34/G-35		16.64		10.25		0.37	隼土, 小柱穴群
JM-2	観測時代	K-44/K-45/K-46/K-47/K-48/L-44/L-45/L-46/L-47/L-48/M-44/M-45/M-46/M-47/M-48		17.84		8.54		0.57	隼土3
JM-3	観測時代	B-36/B-37/C-35/C-37/C-38/D-36/D-37/D-38/E-35/E-36/E-37/E-38/F-35/F-36/F-37/F-38		18.56		9.74		0.3	隼土2
JM-4	観測時代	G-37/G-38/G-39/H-38/H-37/H-38/H-39/1-38/1-37/1-38/1-39		11.08		8.8		0.51	
JM-5	観測時代	G-42/G-43/H-45/H-46/H-47/H-48/H-49/H-50/1-45/1-47/1-48/1-49/1-50/1-47/1-48/1-49/K-45/K-46/L-45		17.8		13.2		0.36	隼土4・顕化材
JM-6	観測時代	G-38/G-39/G-40/D-38/D-40/E-40		11.66		0.9		0.38	
JM-7	観測時代	G-41/G-42/G-43/G-44/H-41/H-42/H-43		0.64		0.83		0.26	
JM-8	観測時代	H-39/H-40/1-39/1-40/1-39/1-40/1-41/1-42/K-41/K-42		0.53		0.1		0.18	
JM-9	観測時代	H-41/H-42/1-41/1-42/1-43/1-42/1-43		7.2		4		0.14	隼土4
JM-10	観測時代	H-33/1-32/1-34/1-35/33/34/35		7.8		0.63		0.2	
JP-1	観測時代	J-45		0.57		6.43		0.07	

表20 遺構出土掘載復元土器一覽

発掘番号	発掘 番号	出土遺構 (層位・点別)	層位(点別)	総合発掘出土位置 (層位・点別)	発掘合併片 出土位置	部 位	総合 発掘片 数	全額 合計 枚数	量			助 土	焼成	そ の 他	
									口数	底数	底高				
調査一 13	1	100-1	H-21	床面(D) カマド(D) 壁土(D)	M47 (1-0) P47 (壁土)7、8、 20	H-21(壁面)13、カマ ド11、H-24(壁土) 20、M44(1-1)、M47 (1-2)、M46(1-2)、 O47(壁土)0、P47 (1-2)	口縁部~底面	55	24	3.5	5.8	24.4	砂物多 く含む	真	
時 期 部 位															
文 様															
内 装															
色 調															
そ の 他															
内 装															
色 調															
そ の 他															
遺文時代 前期後半	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面
調査一 19	1	100-2	H-25	床面(D) 壁土(D) 壁土(D)	H42(0-2、壁土)0-20、 H43(1-24、8-11、壁 土)0、H43(1-4、 1-20)、H44(1-2)	H-25(床面)16、壁土 1、壁土13、壁土 4-20、H42(1-4、壁 土)0-20、H43(1-17、 7-5、壁土)0、H43 (1-25、8-70、壁土)0	口縁部~底面	208	166	30.0	7.9	30.7	砂物多 く含む	真	
時 期 部 位															
文 様															
内 装															
色 調															
そ の 他															
内 装															
色 調															
そ の 他															
遺文時代 前期後半	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面
調査一 20	1	100-3	H-25	床面(D) カマド(D) 壁土(D)	H-25(壁土)0、H43 (1-1、壁土)0、J47 (1-1)	H-25(床面)5、壁土 2、壁土1-2、壁土2-6、 壁土1-0、J-0(1-1)	口縁部~底面	48	19	16.1	5.9	16.2	粘土質物 物を含む	真	
時 期 部 位															
文 様															
内 装															
色 調															
そ の 他															
内 装															
色 調															
そ の 他															
遺文時代 前期後半	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面
調査一 46	1	100-4	H-29	床面(D) 壁土(D)	H-29(壁土)1-10	H-29(壁土)1-10	口縁部~底面	22	19	13.1	4.2	12.3	砂物多 く含む	真	
時 期 部 位															
文 様															
内 装															
色 調															
そ の 他															
内 装															
色 調															
そ の 他															
遺文時代 前期後半	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面
調査一 48	1	100-5	H-31	床面(D) 床面(D) 壁土(D)	H34(1-2) G35(1-1)	H-31(壁土)1-10	口縁部~胴下部	24		13.7	-	(11.4)	砂物含む	真	口縁下部縁部孔状あり
時 期 部 位															
文 様															
内 装															
色 調															
そ の 他															
内 装															
色 調															
そ の 他															
遺文時代 前期後半	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面	口縁部 口縁部 胴部 胴部 底面

穂香整六群

群別番号	期成番号	期成番号	出土遺物 (年代・地域)	部位(産地)	組合群片出土位置 (形状・点数)	本群・合群片 出土位置	部位	組合 群片数	本群 群片数	口徑			口徑	底径	深さ	出土	構成	その他															
										口徑	底径	深さ																					
群目-56	1	107-1	JH-1	高麗(I)			新下半部-底部	1		-	12.1	(1.0)	砂粒多く含む	中々不具																			
																			内														
																			時期	群別	部位	文			色	その他	内			出土	構成	その他	
縄文時代 前期	中々上げ集	同一-高麗	R.L. 新縄文			褐色		一部二次焼成による割れあり			ナズ	褐色																					
群目-57	2	107-2	JH-1	新土(50)		JH-1 (層土・20A, 層土・1)	新下半部-底部	2	20	-	3.3	(1.0)	砂粒多く含む	中々不具																			
																			内														
																			時期	群別	部位	文			色	その他	内			出土	構成	その他	
縄文時代 前期	中々上げ集	同一-高麗	R.L. 新縄文			褐色		一部二次焼成による割れあり			ナズ	褐色																					
群目-75	1	107-3	JH-8 JH-8 JP-12 JM-9	高麗(10), 新土(11), 新土(407), 層土(3), 新土(1), 新土(1), 新土(1)	JH8(8・2), JH8(8・2)	JH-8 (高麗-15, 層土(4-8, 層土11-4, 層土2), JM-9(層土1-10), JH(8・4))	口縁部-胴部	42	53	18.7	-	(4.0)	砂粒多く含む	中々不具																			
																			内														
																			時期	群別	部位	文			色	その他	内			出土	構成	その他	
縄文時代 前期	山形県 鶴岡市(山形県) 鶴岡市(山形県) 鶴岡市(山形県)	口縁部 口縁部 口縁部 胴部	仲文 肥厚層上 R.L. 新縄文-一位仲文 肥厚層上 R.L. 新縄文-一位仲文 R.L. 新縄文の交互層文による特異文			褐色 褐色 褐色		一部割れあり			ナズ	褐色																					
群目-105	1	107-4	JM-1 JM-4	新土(3) 新土(1)	JH8(8・5, 8・1), JH8(8・1), JM(8・3), JM9(新土-1), JM9(1), JM9(1), JM9(1)	JM-1(新土-5), JH8(1・2)	口縁部-胴部	18	7	17.7	-	(17.0)	砂粒多く含む	中々不具																			
																			内														
																			時期	群別	部位	文			色	その他	内			出土	構成	その他	
縄文時代 前期	鶴岡市(山形県) 鶴岡市(山形県)	口縁部 口縁部 胴部	一部 R.L. 新縄文 肥厚層上 R.L. 新縄文-一位 R.L. 新縄文 肥厚層以下に層文を帯びだし一位の円形割れ文(中々小割)			褐色 褐色 褐色		一部割れあり			ナズ	褐色																					
群目-106	2	107-5	JM-1	新土(100)		JM-1(新土・1, 新土・7, 新土・4)	口縁部-底部	10	16	23.5	4.3	36.7	新土層を砂粒多く含む	中々不具																			
																			内														
																			時期	群別	部位	文			色	その他	内			出土	構成	その他	
縄文時代 前期	鶴岡市(山形県) 鶴岡市(山形県)	口縁部 口縁部 底部	R.L. 新縄文 R.L. 新縄文 割れの内形割れ文(小割)			褐色 褐色 褐色		一部割れあり 下部二次焼成による割れが著しい			ナズ	褐色																					

発掘番号	調査番号	調査年度	出土遺物 (種別・数量)	組合鏡片出土位置 (種別・数量)	本器合鏡片 出土位置	部 位	組合 鏡片 枚数	余鏡 片数	透 視			新 土	焼成	そ の 他	
									口縁	底縁	器底				
国B-113	1	198-1	JM-2 鏡土(1) 鏡土(2) 鏡土(3)	J40(1-2), J44(1-2), 土-1, L43(1-1), L 44(1-2), L45(1-1), M45(1-2, 1-1), M 45(1-1), P41(1-1)	JM-2(鏡土底層-1), JM-2M7-4(鏡土- 1)	口縁部~胴部	99	23	28.7	-	23.0	伊吹・藤原 含む	真		
時 期	形 状	部 位	内 容			透 視			内 容			透 視			
縄文時代 後期前期	山の裏に 埋め込まれた (山形県最北に 属する)	口縁部 口縁部 (2ヶ所) 胴部	押引文 L.R. 斜線文 肥厚層下に鏡土の内部斜線文 L.R. 斜線文の交互層文による斜線鏡文	色 調 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	そ の 他 粘着土に膠着 一部割れ 粘着土に膠着 下部第二次焼成による磨耗・割れ 一部磨耗	透 視 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ
国B-114	3	198-2	JM-2 鏡土250 JM-9 鏡土210 JP-12 鏡土10 H-27 鏡土10	H41(1-2), H44(1- 1), H43(1-1), H41(1- 1), H42(1-1), H42(1-1), J47(1-1), L44(1-1), M46(1-1), M47(1-1), M47(1-1)	JM2(1-1)	口縁部~胴部	25	1	22.2	-	23.0	伊吹・藤原 含む	真		
時 期	形 状	部 位	内 容			透 視			内 容			透 視			
縄文時代 後期前期	山の裏に 埋め込まれた (山形県最北に 属する)	口縁部 口縁部 (2ヶ所) 胴部	L.R. 斜線文 L.R. 斜線文 肥厚層下に鏡土の内部斜線文 L.R. 斜線文の交互層文による斜線鏡文	色 調 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	そ の 他 粘着土に膠着 一部割れ 下部第二次焼成による磨耗・割れ 一部磨耗	透 視 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ
国B-114	3	198-3	JM-2 鏡土(1), 鏡土 2(0), 鏡土3(1) JP-12 鏡土(1) JP-22 鏡土(1) H-28 1(0) H-24 鏡土(1)	J47(1-1, 1-2), J48(1-1), L46(1-1), M45(1-1), M46(1-1), M46(1-1)	JM-2(鏡土上3-10), 鏡 土3(1), JP-22(鏡土- 1), JM-9(鏡土3-1), J42(1-1), J47(1- 1), L43(1-1), L44 (1-1), M-46(1-1), J-1, 鏡土3-1, J47 (1-1)	口縁部~胴部	37	21	27.1	-	23.0	伊吹・藤原 含む	真		
時 期	形 状	部 位	内 容			透 視			内 容			透 視			
縄文時代 後期前期	山の裏に 埋め込まれた (山形県最北に 属する)	口縁部 口縁部 (2ヶ所) 胴部	押引文 L.R. 斜線文 肥厚層下に鏡土の内部斜線文 L.R. 斜線文の交互層文による斜線鏡文	色 調 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	そ の 他 粘着土に膠着 一部割れ 下部第二次焼成による磨耗・割れ 一部磨耗	透 視 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ
国B-115	4	198-4	JM-2 鏡土100 鏡土200	M45(1-1), M45(1-2)	M46(1-1)	口縁部~胴部	24	3	22.4	-	23.0	伊吹・藤原 含む	真		
時 期	形 状	部 位	内 容			透 視			内 容			透 視			
縄文時代 後期前期	山の裏に 埋め込まれた (山形県最北に 属する)	口縁部 口縁部 (2ヶ所) 胴部	押引文 L.R. 斜線文 肥厚層下に鏡土の内部斜線文 L.R. 斜線文の交互層文による斜線鏡文	色 調 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	そ の 他 粘着土に膠着 一部割れ 下部第二次焼成による磨耗・割れ 一部磨耗	透 視 茶褐色~褐色 黒褐色~暗褐色 褐色~黒褐色	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ	透 視 ナデ

表22 遺構出土の掲載石器等一覧

図番号	器種名	遺構	層位	遺物番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	材質	備考
図目-8-2	有孔鏃	H-20	床面	125	5.0×3.8×1.2	37.3	不明	
図目-8-3	有孔鏃	H-20	床面	124	5.2×5.5×1.5	48.6	砂岩	
図目-30-5	石鏃	H-25	覆土1	10	1.95×1.3×0.5	0.9	黒曜石	
図目-30-6	有孔鏃	H-25	床面	381	11.9×10.3×3.2	262.4	砂岩	
図目-30-7	台石	H-25	床面	185	38.3×28.4×6.4	6500	凝灰質砂岩	
図目-44-6	石鏃	H-29	覆土3	6	3.96×1.65×0.35	2.1	黒曜石	
図目-44-7	石鏃	H-29	床面上	28	7.8×2.5×0.9	14.3	黒曜石	
図目-44-8	砥石	H-29	床直	79	6.12×6.03×1.24	45.4	凝灰質砂岩	
図目-44-9	有孔鏃	H-29	床直	70	6.85×5.6×2	86.8	砂岩	
図目-46-3	石鏃	H-30	覆土1	1	4.7×2.35×0.6	5.5	黒曜石	
図目-46-4	石鏃	H-30	覆土1	43	4.9×2.0×0.7	5.6	黒曜石	
図目-57-6	石鏃	JH-1	覆土1	214	1.6×0.75×0.3	0.2	黒曜石	
図目-57-7	石鏃	JH-1	覆土2	164	1.95×1.0×0.3	0.5	黒曜石	被熱
図目-57-8	石鏃	JH-1	覆土12	260	4.35×1.55×0.8	1.6	頁岩	
図目-57-9	石鏃	JH-1	覆土2	57	7.8×3.4×1.06	28.3	黒曜石	
図目-57-10	石斧	JH-1	覆土3	217	10.75×4.25×2.8	156.2	凝灰岩?	
図目-57-11	石鏃	JH-1	覆土3	255	9.0×10.5×0.7	60.5	砂岩	
図目-63-6	石鏃	JH-2	床面	328	5.0×2.25×1.1	10	黒曜石	彫磨?
図目-63-7	つまみ付きナイフ	JH-2	床面	325	5.7×3.15×0.8	9	黒曜石	
図目-63-8	スクレイパー	JH-2	床面	258	3.8×3.0×0.9	11	黒曜石	
図目-63-9	スクレイパー	JH-2	床面	314	3.8×3.0×0.7	6.2	黒曜石	
図目-63-10	スクレイパー	JH-2	床面	312	5.2×2.75×0.75	7.4	黒曜石	
図目-63-11	加工痕のある鏃	JH-2	床面	279	7.0×3.75×1.9	62.3	不明	
図目-63-12	石斧未製品	JH-2		315	10.9×6.0×2.1	186.3	褐色泥岩	
図目-63-13	石鏃	JH-2	床面	269	10.8×7.2×0.8	61.9	凝灰質砂岩	
図目-63-14	石鏃	JH-2	床面	333	8.4×11.35×0.8	112.3	凝灰質砂岩	
図目-63-15	石鏃	JH-2	床面	282	11.4×15.7×0.75	136.8	凝灰質砂岩	
図目-63-16	砥石	JH-2	床面	306	16.8×25.1×1.15	659.2	砂岩	
図目-63-17	砥石	JH-2	床面	265	17.4×16.0×4.5	1203.7	砂岩	
図目-64-18	砥石	JH-2	床面	106・271	12.3×8.3×7.0	909.3	凝灰質砂岩	M-3・M-2-2と番号
図目-64-19	砥石	JH-2	床面	264	10.2×4.2×0.7	26.6	砂岩	
図目-64-20	砥石	JH-2	床面	323	5.5×6.4×0.5	16.5	砂岩	
図目-64-21	砥石	JH-2	床面	258	3.45×1.9×1.45	2.9	砥石	
図目-63-22	たたき石	JH-2	床面	318	7.7×4.3×2.5	117.1	チャート	
図目-64-23	たたき石	JH-2	床面	281	8.4×4.5×2.3	125.8	凝灰岩?	
図目-64-24	台石	JH-2	床面	294	22.2×19.6×12.55	7500	粗粒玄武岩	
図目-64-25	れき	JH-2	床面	329	15.8×8.8×3.3	762.6	粗粒玄武岩	赤色物質付着
図目-65-26	石鏃	JH-2	床面	295	57.5×36.8×6.5	11500	凝灰質砂岩	
図目-67-1	たたき石	JH-3	覆土	4	14.8×8.05×5.1	777.7	砂岩	
図目-69-1	石鏃	JH-4	床面	10	10.4×4.0×1.25	40.5	黒曜石	
図目-69-2	つまみ付きナイフ	JH-4	床面	6	3.4×1.9×0.6	3.3	黒曜石	
図目-69-3	石鏃	JH-4	床面	8	3.0×3.0×2.0	15.5	黒曜石	
図目-72-1	石鏃	JH-5	床面	45塚か	55.0×36.5×2.9	3500	凝灰質砂岩	

穂香堅穴群

図番号	器種名	遺構	層位	遺物番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	材質	備考
図目-75-2	石楯	JH-6	覆土11	31	4.9×3.0×0.7	7.7	黒曜石	
図目-75-3	スクレイパー	JH-6	覆土4	22	5.3×2.8×0.45	7.7	黒曜石	
図目-75-4	砥石	JH-6	床面	99	10.0×6.3×1.6	62.1	砂岩	
図目-75-5	砥石	JH-6	床面	132	17.0×8.9×0.9	154.9	砂岩	四面鏡石
図目-77-2	石楯	JH-7	覆土1	3	2.9×3.4×2.25	18.5	黒曜石	
図目-77-3	たたき石	JH-7	床面	90	6.0×4.7×3.3	132.8	砂岩	
図目-79-1	スクレイパー	JH-8	床底	15	5.25×2.45×0.4	5.6	黒曜石	
図目-79-2	スクレイパー	JH-8	床面	17	3.4×2.5×0.25	2.7	黒曜石	
図目-79-3	ヒフレイク	JH-8	床面	25	4.9×2.5×0.45	3.4	黒曜石	
図目-80-1	スクレイパー	JH-9	覆土	3	5.4×2.45×0.9	14.9	黒曜石	
図目-80-2	たたき石	JH-9	覆土	2	8.7×7.8×5.2	479	不明	
図目-83-2	石楯	JH-10	鏡土	32	2.1×1.0×0.3	0.5	黒曜石	
図目-83-3	石楯	JH-10		2	8.0×2.3×0.9	16	黒曜石	
図目-83-4	つまみ付きナイフ	JH-10	床面	4	5.5×2.6×0.7	10.2	黒曜石	
図目-83-5	スクレイパー	JH-10	床面	25	3.4×3.0×1.0	8.1	黒曜石	
図目-83-6	石楯	JH-10	床面	6	7.6×13.4×1.0	98.4	砂岩	
図目-85-1	両面調整石器	JH-11	床面	10・13・17・23	7.5×4.4×2	57.1	黒曜石	
図目-85-2	両面調整石器	JH-11	床面	13	5.2×3.3×0.9	13.1	黒曜石	
図目-85-3	つまみ付きナイフ	JH-11	覆土	7	6.4×3.35×0.95	21.5	黒曜石	
図目-85-4	スクレイパー	JH-11	床面	26	3.5×3.5×1.4	12.3	黒曜石	
図目-85-5	たたき石	JH-11	床面	21	7.0×5.0×2.6	122.5	砂岩	
図目-86-1	たたき石	JP-4	覆土3	1	8.4×6.2×3.6	232	砂岩	
図目-89-1	石楯	JP-8	覆土	2	1.7×0.9×0.3	0.3	黒曜石	
図目-89-2	石楯	JP-8	覆土上部	22	1.55×0.8×0.25	0.3	黒曜石	
図目-89-3	石楯	JP-8	覆土上部	28	15.75×3.3×1.0	46.3	黒曜石	
図目-92-1	スクレイパー	JP-12	底面	52	2.8×2.7×0.45	6.9	頁岩	
図目-92-2	たたき石	JP-12	底面直上	60	9.2×6.75×4.55	346.4	砂岩?	
図目-92-3	加工痕のある鏡	JP-12	覆土	16	10.4×6.7×1.8	186.4	砂岩	
図目-93-1	たたき石	JP-13	覆土7	5	10.1×8.8×4.8	649.3	不明	
図目-95-2	石楯	JP-15	覆土	121	3.5×2.7×0.5	4.2	黒曜石	
図目-95-3	たたき石	JP-15	覆土	51	8.8×8.4×5.6	577.5	砂岩	
図目-98-1	石楯未製品	JP-17	覆土	39	4.2×2.35×0.8	5.9	黒曜石	
図目-98-2	石楯	JP-17	覆土	25	6.1×2.8×0.8	7.1	黒曜石	
図目-98-3	石楯	JP-17	覆土4	73	10.0×3.6×0.95	26.5	黒曜石	
図目-98-4	スクレイパー	JP-17・JM-5	覆土4	JP-17・83	6.9×3.5×1.5	19	黒曜石	遺構間接合
図目-98-5	石弁	JP-17	覆土4	80	7.5×3.05×1.35	41	緑色凝岩	
図目-98-6	石弁	JP-17	覆土8	87	8.1×3.8×1.5	89.2	緑色凝岩	
図目-98-7	砥石	JP-17	覆土8	85	7.0×3.8×3.7	125.7	凝灰質砂岩	
図目-98-8	砥石	JP-17	覆土4	75	20.9×6.4×5.3	431.6	凝灰質砂岩	四面・遺構間接合
図目-98-9	れき	JP-17	底面	94	13.4×7.6×3.75	568.2	不明	隅めと?
図目-99-1	たたき石	JP-18	覆土	10	8.5×8.9×4.3	430.9	砂岩	
図目-100-3	石楯	JP-19	覆土	23	2.0×1.1×0.25	0.3	黒曜石	
図目-100-2	石楯	JP-19	覆土	38	2.0×1.1×0.4	0.5	黒曜石	

図番号	図名	産地	層位	産物番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石質	備考
図1-100-4	磁石	JP-19	礫土	159	19.1×13.5×2.0	881.3	凝灰質砂岩	
図1-101-1	つまみ付きナイフ	JP-21	底面	23	4.4×2.8×0.6	6.5	黒曜石	
図1-102-1	石楯	JP-22	礫土	41	1.8×1.3×0.3	0.4	黒曜石	
図1-107-9	石楯	JM-1	凝土1	85	2.1×1.0×0.3	0.4	黒曜石	
図1-107-10	スクレイパー	JM-1	凝土2	227	3.4×1.5×0.45	2.6	黒曜石	
図1-107-11	スクレイパー	JM-1	凝土2	230	8.9×3.4×0.9	16	黒曜石	
図1-107-12	スクレイパー	JM-1	凝土1	25	6.6×2.4×0.75	9.5	黒曜石	
図1-107-13	スクレイパー	JM-1	凝土2	244	5.95×2.7×0.5	8	黒曜石	
図1-107-14	石斧未成品	JM-1	凝土2	411・417	8.8×4.0×1.95	83.8	泥岩	接合
図1-107-15	石斧	JM-1	凝土2	170	9.65×3.6×2.5	139.8	凝灰岩?	D-35・18と接合
図1-107-16	石楯	JM-1	凝土2	338・404	9.65×14.2×0.65	149.7	凝灰質砂岩	
図1-107-17	磁石	JM-1	凝土2	339	15.65×9.0×1.6	192.1	砂岩	
図1-107-18	磁石	JM-1	凝土1	33	13.75×20.8×1.5	256.7	凝灰質砂岩	
図1-107-19	台石	JM-1	凝土2	237	22.0×14.6×10.2	5000	不明	
図1-114-6	石楯	JM-2・HF-4	礫土	27	2.6×1.15×0.55	1.5	黒曜石	
図1-114-7	石楯	JM-2	凝土2	162	3.6×2.0×0.4	2.3	黒曜石	
図1-114-8	スクレイパー	JM-2	凝土2	402	4.4×3.2×1.2	12.2	黒曜石	
図1-114-9	スクレイパー	JM-2	凝土底	310	4.2×3.35×1.2	10.2	黒曜石	
図1-115-10	石楯	JM-2	凝土2	251	9.15×12.85×0.6	90.5	砂岩	
図1-115-11	石楯	JM-2	凝土1	192	16.1×11.4×1.75	129.8	凝灰岩	
図1-115-12	石楯	JM-2	凝土2	62	7.2×11.9×0.5	84.7	砂岩	赤色物質付着
図1-115-13	磁石	JM-2	凝土底	313	12.2×9.95×2.9	326.8	砂岩	
図1-115-14	磁石	JM-2	凝土底	315	12.3×9.9×3.6	228.1	砂岩	
図1-115-15	たたき石	JM-2	凝土2	12	14.2×6.2×5.15	629.9	不明	
図1-118-2	石楯	JM-3	凝土2	44	3.95×2.05×0.6	4.6	黒曜石	
図1-118-3	石楯	JM-3	凝土2	186	6.1×2.8×0.9	12.8	黒曜石	
図1-118-4	石楯	JM-3	凝土2	106	2.6×4.3×1.1	7.3	黒曜石	
図1-118-5	つまみ付きナイフ	JM-3	凝土2	153	3.15×1.9×0.4	1.9	黒曜石	
図1-118-6	スクレイパー	JM-3	凝土2	181	4.95×2.0×1.2	4.1	黒曜石	
図1-118-7	磁石	JM-3	凝土2	143	13.6×3.9×2.4	147.9	凝灰岩?	赤色物質付着
図1-118-8	磁石	JM-3	凝土2	169	12.0×9.3×3.0	291.9	砂岩	
図1-122-3	石楯	JM-4	凝土1	329	3.6×1.5×0.5	2.4	黒曜石	
図1-122-4	石楯	JM-4	凝土1	294	3.0×2.25×0.7	4.3	黒曜石	
図1-122-5	石楯	JM-4	凝土1	244	6.0×2.35×0.8	8.9	黒曜石	D-40・11-18-4と結合
図1-122-6	両面磨削石楯	JM-4	凝土1	306	7.7×3.45×1.9	25.6	黒曜石	
図1-122-7	両面磨削石楯	JM-4	礫土	371	7.2×3.45×1.1	22.2	黒曜石	
図1-122-8	石楯	JM-4	凝土1	238	1.4×0.9×0.5	0.6	メノウ	
図1-122-9	スクレイパー	JM-4	凝土2	356	6.2×2.2×1.0	7.2	黒曜石	
図1-122-10	スクレイパー	JM-4	凝土2	146	7.2×2.5×1.5	19	黒曜石	
図1-122-11	スクレイパー	JM-4	凝土2	370	5.6×2.65×0.6	14.9	黒曜石	
図1-122-12	スクレイパー	JM-4	凝土1	17	7.2×3.45×1.1	22.3	黒曜石	
図1-122-13	スクレイパー	JM-4	凝土1	258	6.3×3.15×1.5	15.6	黒曜石	
図1-122-14	スクレイパー	JM-4	凝土2	351	6.0×2.95×1.5	15.1	黒曜石	

穂香堅穴群

図番号	器種名	遺構	層位	遺物番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石質	備考
図Ⅲ-122-15	スクレイパー	JM-4	盛土2	341	6.5×3.8×1.8	31	黒曜石	
図Ⅲ-122-16	スクレイパー	JM-4	盛土2	350	4.7×4.25×1.5	11.9	黒曜石	
図Ⅲ-122-17	石鏃	JM-4	盛土1	213	10.2×22.9×0.9	273.4	砂岩	
図Ⅲ-127-2	石鏃	JM-5	盛土2	243	1.55×0.58×0.5	0.5	メノウ	
図Ⅲ-127-3	石鏃	JM-5	盛土2	144	1.35×0.8×0.45	0.4	メノウ	
図Ⅲ-127-4	石鏃	JM-5	盛土2	129	2.55×1.35×0.6	2	黒曜石	
図Ⅲ-127-5	石鏃	JM-5	盛土2	433	3.95×2.2×0.65	4	黒曜石	
図Ⅲ-127-6	つまみ付きナイフ	JM-5	盛土2	621	4.2×2.3×1.1	6	黒曜石	
図Ⅲ-127-7	つまみ付きナイフ	JM-5	盛土2	269	4.35×2.4×0.5	5.2	黒曜石	
図Ⅲ-127-8	つまみ付きナイフ	JM-5	盛土2	518	7.85×2.4×1.0	8.6	黒曜石	
図Ⅲ-127-9	スクレイパー	JM-5	盛土2	97	4.7×2.3×0.8	7.1	黒曜石	
図Ⅲ-127-10	石鏃	JM-5	盛土2	306	8.6×10.8×0.6	71.5	砂岩	
図Ⅲ-127-11	石鏃	JM-5	盛土2	630	5.9×8.5×0.6	43.3	砂岩	
図Ⅲ-127-12	砥石	JM-5	盛土2	377	6.4×5.5×1.0	29.9	砂岩	
図Ⅲ-127-13	砥石	JM-5	盛土2	2・34・555	38.0×15.7×1.0	899.2	砂岩	
図Ⅲ-127-14	たたき石	JM-5	盛土2	124	10.5×7.5×3.6	484.3	砂岩	
図Ⅲ-127-15	たたき石	JM-5	盛土2	41	12.3×7.45×5.7	722.2	砂岩	
図Ⅲ-127-16	たたき石	JM-5	盛土1	517	12.2×9.0×3.2	489.5	片麻岩?	
図Ⅲ-127-17	たたき石	JM-5	盛土2	253	8.8×7.65×3.4	324.4	砂岩	
図Ⅲ-127-18	たたき石	JM-5	盛土2	319	10.1×5.2×3.2	265.2	不明	
図Ⅲ-128-19	たたき石	JM-5	盛土2	238	8.4×6.3×1.9	147	砂岩	
図Ⅲ-128-20	たたき石	JM-5	盛土2	261	9.9×8.7×3.9	473.4	砂岩	
図Ⅲ-128-21	たたき石	JM-5	盛土2	554	11.6×6.5×2.85	326.7	砂岩	
図Ⅲ-128-22	台石	JM-5	盛土2	120	15.0×12.6×4.35	986.1	粗粒玄武岩	
図Ⅲ-130-1	石鏃	JM-6	盛土2	33	3.4×2.25×0.5	3.7	黒曜石	
図Ⅲ-130-2	石鏃	JM-6	盛土2	63	8.8×2.2×1.05	16.7	黒曜石	
図Ⅲ-130-3	スクレイパー	JM-6	盛土2	28	5.4×3.6×1.15	14.3	黒曜石	
図Ⅲ-132-1	スクレイパー	JM-8	盛土2	9	5.7×2.9×1.5	19.4	黒曜石	
図Ⅲ-132-2	スクレイパー	JM-8	盛土2	13	7.2×3.4×1.2	14.2	黒曜石	
図Ⅲ-132-3	砥石	JM-8	盛土2	12	17.8×7.5×1.0	175.3	砂岩	
図Ⅲ-134-1	石鏃	JM-9	盛土2	29	4.3×1.8×0.6	3.7	黒曜石	
図Ⅲ-134-2	つまみ付きナイフ	JM-9	盛土2	36	3.9×1.4×0.5	1.7	黒曜石	
図Ⅲ-134-3	つまみ付きナイフ	JM-9	盛土2	39	4.45×2.65×0.8	4.3	黒曜石	
図Ⅲ-134-4	スクレイパー	JM-9	盛土2	63	3.5×3.2×0.9	7.8	黒曜石	
図Ⅲ-134-5	石斧	JM-9	盛土2	41	5.05×2.6×0.45	9.9	粘板岩	
図Ⅲ-134-6	たたき石	JM-9	盛土2	52	7.3×6.75×4.2	231.1	凝灰岩	

表23 遺構出土の掲載鉄製品一覧

図番号	器種名	遺構	層位	遺物番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	備考
図Ⅲ-49-2	鉄製品	H-31	床直	109	3.3×0.5×0.5	0.8	
図Ⅲ-49-3	鉄製品	H-31	床直	128	3×0.45×0.45	0.4	

表26 包含層出土の掲載石器等一覧

図番号	器種名	グリット・遺構	層位	遺物番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
図層-4-1	石鏃	M-49	Ⅲ	枕	2.0×0.8×0.3	0.3	黒曜石	
図層-4-2	石鏃	H-34	Ⅲ	25	1.95×1.0×0.3	0.5	黒曜石	
図層-4-3	石鏃	J-47	Ⅲ	44	2.9×1.75×0.55	2	黒曜石	
図層-4-4	石槍	F-37	Ⅲ	24	4.0×2.2×0.7	4.6	黒曜石	
図層-4-5	石槍	J-37	Ⅲ	4	4.7×2.3×0.75	5.1	黒曜石	
図層-4-6	石槍	M-45	Ⅲ	4	5.7×2.5×0.9	8.8	黒曜石	
図層-4-7	石槍	H-35	Ⅲ	5	4.7×2.3×0.75	4.7	黒曜石	
図層-4-8	石槍	G-43	Ⅲ	5	5.6×2.7×0.8	9.3	黒曜石	
図層-4-9	石槍	J-43	Ⅲ	4	6.1×2.5×0.9	8.8	黒曜石	
図層-4-10	石槍	H-39	Ⅲ	3	4.1×2.0×0.7	5.5	黒曜石	
図層-4-11	石槍	F-37	Ⅲ	23	4.7×1.95×0.6	3.5	黒曜石	
図層-4-12	石槍	I-42	Ⅲ	1	5.7×3.0×0.6	5.7	黒曜石	
図層-4-13	石槍	M-40	Ⅲ	1	4.0×3.2×0.7	5.2	黒曜石	
図層-4-14	石槍	I-37	層上土	4	8.5×3.75×1.05	28.9	黒曜石	
図層-4-15	石槍	I-39	I	1	11.2×4.15×1.3	48.2	黒曜石	
図層-4-16	ナイフ	L-36	Ⅲ	1	6.7×4.1×0.95	17.1	黒曜石	
図層-4-17	石鏃	I-40	Ⅲ	9	5.05×3.0×1.2	11.9	黒曜石	
図層-4-18	石鏃	H-45	層上土	13	4.0×2.8×0.95	7.8	黒曜石	
図層-4-19	つまみ付きナイフ	J-45	Ⅲ	6	4.1×2.5×0.75	5.4	黒曜石	
図層-4-20	つまみ付きナイフ	F-37	Ⅲ	2	5.05×2.5×0.8	8.1	頁岩	
図層-4-21	つまみ付きナイフ	I-41	Ⅲ	3	5.8×2.5×0.95	7.2	黒曜石	
図層-4-22	つまみ付きナイフ	F-38	Ⅲ	1	7.4×2.3×1.35	11.4	黒曜石	
図層-4-23	つまみ付きナイフ	F-38	Ⅲ	4	5.55×2.05×0.85	6.5	黒曜石	
図層-4-24	つまみ付きナイフ	I-39	Ⅲ	28	5.1×2.8×1.2	4.5	黒曜石	
図層-4-25	スクレイパー	I-46	Ⅲ	4	3.8×2.3×0.8	5.6	黒曜石	
図層-4-26	スクレイパー	D-45	Ⅲ	1	4.3×3.35×0.7	7.3	黒曜石	
図層-4-27	スクレイパー	G-47	Ⅲ	7	4×3.3×0.6	7.3	黒曜石	
図層-4-28	スクレイパー	J-39	Ⅲ	4	3.2×4.1×1.1	14.2	黒曜石	
図層-4-29	スクレイパー?	I-39	Ⅲ	15	2.8×3.15×1.45	11.5	黒曜石	
図層-4-30	スクレイパー	I-39	Ⅲ	54	2.6×2.3×0.9	6	黒曜石	
図層-4-31	スクレイパー	D-46	V	2	5.5×2.6×0.65	7.8	黒曜石	
図層-4-32	スクレイパー	N-34	V	3・4	9.7×3.5×1.8	40.2	黒曜石	
図層-4-33	砥石	I-39	I	7,8	14.8×26.2×1.7	744.9	泥岩	
図層-4-34	砥石	D-39	I	一筋	14.25×8.8×0.9	149.6	泥岩	
図層-4-35	砥石	I-43	I	一筋	14.5×6.6×2.3	306.7	凝灰岩	
図層-4-36	砥石	M-44	Ⅲ	1	6.5×7.5×1.8	138.6	泥岩	
図層-4-37	砥石	F-38	Ⅲ	11・21	21.5×7.75×3.1	450.7	砂岩	
図層-4-38	砥石	P-47	Ⅲ	18	4.2×3.2×1.4	13.3	凝灰角礫岩	
図層-4-39	台石	D-45	層上土	1	14.25×8.8×0.9	149.6	不明	

土製品

図番号	器種名	グリット・遺構	層位	遺物番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	備考
図層-4-40	耳栓	K-43	Ⅲ	7	2.3×2.45×2.3	7.8	

引用参考文献

- 伊藤初太郎 1935 『考古学上の根室の遺物と遺跡』 安曇写真製版所
- 伊藤初太郎 1938 「根室半島に存在せるチャシ」『考古学雑誌第28巻7号』
- 岩崎卓也ほか 1980 『北海道東部地区の遺跡研究』 筑波大学歴史・人類学系
- 川上 淳ほか 1983 『根室市西月ヶ岡遺跡発掘調査報告書』 根室市教育委員会
- 川上 淳ほか 1994 『根室市穂香壑六群発掘調査報告書』 根室市教育委員会
- 東京大学文学部考古学研究室 1973 『常呂』 東京大学文学部
- 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室・常呂研究室 1995 『ライトコロ右岸遺跡』
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
- 豊原照司 1979 『茅沼遺跡群』 標茶町教育委員会
- 豊原照司 1980 『茅沼遺跡群Ⅱ』 標茶町教育委員会
- 西 幸隆 1989 『材木町5遺跡調査報告書』 釧路考古学研究会
- 藤本 強ほか 1982 『岐阜第二遺跡』 北海道常呂町
- 北地文化研究会 1974 『根室市域分布調査報告書』 根室市教育委員会
- 松田 猛・石川 朗 1992 『釧路市北斗遺跡Ⅱ』 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
- 松田 猛 1993 『釧路市北斗遺跡Ⅲ』 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
- 松田 猛・石川 朗 2001 『釧路市大栗毛1遺跡調査報告書Ⅰ』 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
- 松田 猛・石川 朗 2002 『釧路市大栗毛1遺跡調査報告書Ⅱ』 北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
- 八幡一郎ほか 1966 『北海道根室の先史遺跡』 根室市教育委員会
- 勝井義雄・横山 泉・岡田 弘・西田泰典・松本佳久・川上則明 (1986) : 「北海道における火山に関する研究報告書第10編 アトサヌプリ・摩周 (カムイヌプリ) —火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策—」。北海道防災会議、104p。
- 佐々木龍男編 (1979) : 「北海道の火山灰と土壌断面集(1)根室・釧路編—摩周・カムイヌプリ・雌阿寒岳・雄阿寒岳・アトサヌプリ—」。北海道火山灰命名委員会、68p。
- 徳井由美 (1989) : 「北海道における17世紀以降の火山噴火とその人文環境への影響。お茶の水地理、30、27-33。
- 北海道火山灰命名委員会 (1979) : 「北海道の火山灰分布図」。
- 三谷勝利・藤原哲夫・長谷川 潔 (1958) : 「5万分の1地質図幅説明書「根室南部」。北海道地下資源調査所、40p。
- 北海道埋蔵文化財センター 2002 『千歳市ウサクマイN遺跡』 北埋調報156
- 北海道埋蔵文化財センター 2002 『根室市穂香壑六群』 北埋調報170
- 北海道埋蔵文化財センター 2003 『恵庭市西島松9遺跡』 北埋調報

報告書抄録

ふりがな	ねむろし ほにおいたてあなくん(2)							
書名	樺室市 穂香壑六群(2)							
副書名	一般国道44号樺室道路工事に伴う穂香壑六群遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北壇調報)							
シリーズ番号	第184集							
編著者名	越田雅司、愛場和人、広田良成							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野橋685-1 TEL.011-386-3231							
発行年月日	2003/3/31							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺物番号					
ほにおいたてあなくん 穂香壑六群	ほっかいどう 北海道 ねむろし ほにおい 樺室市 穂香 びんも 175番地ほか	01223	N-01-34	43° 18' 21"	145° 32' 28"	20010507~ 20011031	7,150m ²	道路建設に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
穂香壑六群	集落跡	縄文時代	壑六住居 13軒 焼土 5ヶ所 集石 1ヶ所 土坑 1基		埴土土器、磁石、台石、金 属製品			
		縄文時代	壑六住居 11軒 土坑 20基 盛土遺構 10ヶ所 焼土 1ヶ所		縄文土器(北筒式)、石楯、 石楯、石弁、磁石		北筒式期の盛土、 ベンガラ検出の土 壙墓	

北海道埋蔵文化財センター調査報告書第184集

根室市

穂香^{ほか}堅穴^{かたい}群(2)

—一般国道44号根室道路建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成15年3月31日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野側685番地1

TEL (011) 386-3231 (代表)

FAX (011) 386-3238

印刷 株式会社 広報社印刷

〒064-0808 札幌市中央区南8条西10丁目石黒ビル

TEL (011) 532-8160 (代表)

FAX (011) 532-9060
